

美方郡新温泉町

タルガ山遺跡・対田清水谷古墳群 小坂谷古墳群・浅谷下山古墳群

— (国) 178号浜坂道路地域連携推進(道路改築)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



平成29(2017)年3月

兵庫県教育委員会

タルガ山遺跡・対田清水谷古墳群 小坂谷古墳群・浅谷下山古墳群

— (国) 178号浜坂道路地域連携推進(道路改築)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成29(2017)年3月

兵庫県教育委員会



岸田川河口からのぞむ遺跡群の立地



遺跡群の立地(東から)



タルガ山遺跡遠景(東上空から)



タルガ山遺跡調査区全景(北西上空から)



タルガ山遺跡 SX-1 内石組(北東から)



タルガ山遺跡 SX-1 完掘状況(北東から)



1号墳から見た1区と流域(東から)



3号墳標石(東から)



5号墳全景(西から)



15号墳墓横断面の状況(北から)



対田清水谷経塚の小石室遺物出土状況(西から)



出土和鏡

M2



小坂谷古墳群(北から)

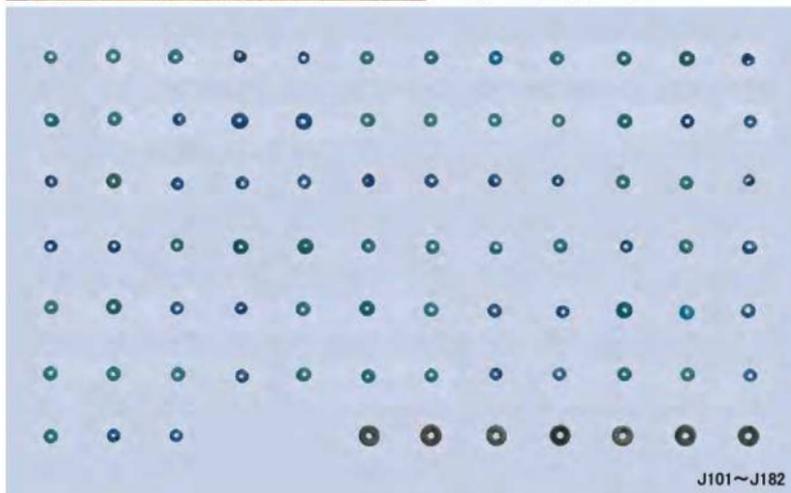


小坂谷古墳群(北東から)



1号墳出土内行花文鏡

1号墳主体部遺物出土状況



1号墳出土ガラス小玉・白玉



調査区全景



1区 7号墳全景(南東から)



7号墳第1主体部底土坑内遺物出土状態

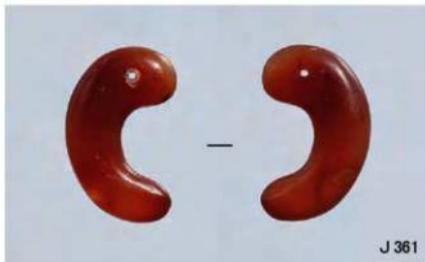


M202



201

7号墳出土遺物



J 361

6号墳出土勾玉

例 言

- 1 本書は、兵庫県美方郡新温泉町に所在するタルガ山遺跡、対田清水谷古墳群、小坂谷古墳群、浅谷下山古墳群の発掘調査報告書である。
 - 2 本調査は、(国)178号浜坂道路地域連携推進(道路改築)事業に伴うもので兵庫県但馬県民局新温泉土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
 - 3 本書の執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 岸本一宏、別府洋二、兵庫県立考古博物館 山上雅弘、上田健太郎が担当し、九州国立博物館 志賀智史、バリノ・サーヴェイ株式会社には資料の分析をお願いした。編集は別府が友久伸子の協力を得て実施した。
 - 4 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会(兵庫県立考古博物館)で保管している。
- ・ 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
 - ・ 発掘調査にあたっては、桐井理揮(現京都府教育庁文化財保護課)、上田直弥(大阪大学大学院)、田村清一郎、塩川香織、大江奈徳の諸氏(敬称略、順不同)の参加を得た。
 - ・ また、発掘調査・報告書作成に当たっては、
川夏晴夫、田中弘樹(美方郡新温泉町教育委員会)
谷本 勇(新温泉町山陰海岸ジオパーク館)
潮崎 誠(豊岡市教育委員会)
石松 崇(美方郡香美町教育委員会)
濱田竜彦、河合 章(鳥取県埋蔵文化財センター)
松井 潔(財団法人鳥取県教育文化財団)
谷口恭子、神谷伊鈴(財団法人鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財センター)
中川 寧(島根県立古代出雲歴史博物館)
肥後弘幸(公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)
福島孝行、藤井 整(京都府教育庁文化財保護課)
加藤晴彦(京都府与謝野町教育委員会)
石井智大(三重県教育委員会)
志賀智史(九州国立博物館)
辻本 裕也、矢作 健二、石岡 智武(バリノ・サーヴェイ株式会社)
以上の方々(敬称略、順不同、所属は当時)のご教示、ご協力を得た。

目次

巻首カラー図版 1	遺跡群の立地	巻首カラー図版 2	タルガ山遺跡全景
巻首カラー図版 3	タルガ山遺跡 SX-1	巻首カラー図版 4	対田清水谷古墳群 1 区
巻首カラー図版 5	対田清水谷古墳群 2 区	巻首カラー図版 6	対田清水谷古墳群 経塚
巻首カラー図版 7	小坂谷古墳群全景	巻首カラー図版 8	小坂谷古墳群 1 号墳
巻首カラー図版 9	浅谷下山古墳群全景	巻首カラー図版 10	浅谷下山古墳群 7 号墳
第 1 章	周辺の環境……………	(別府洋二)……………	1
第 1 節	地理的環境……………		1
第 2 節	歴史的環境……………		1
第 2 章	調査に至る経緯と経過……………	(別府)……………	5
第 1 節	調査に至る経緯……………		5
第 2 節	調査の経過……………		5
第 3 章	タルガ山遺跡……………	(岸本一宏)……………	13
第 1 節	調査の概要……………		13
第 2 節	遺構……………		14
第 3 節	遺物……………		16
第 4 節	タルガ山遺跡小結……………		16
第 4 章	対田清水谷古墳群……………		21
第 1 節	調査の概要……………	(別府)……………	21
第 2 節	1 区の調査……………	(上田健太郎)……………	21
第 3 節	2 区の調査……………	(上田・別府)……………	27
第 4 節	対田清水谷古墳群小結……………	(別府)……………	47
第 5 章	小坂谷古墳群……………	(山上雅弘)……………	93
第 1 節	調査の概要……………		93
第 2 節	遺構……………		93
第 3 節	遺物……………		95
第 4 節	小坂谷古墳群小結……………		97
第 6 章	浅谷下山古墳群……………	(別府)……………	109
第 1 節	調査の概要……………		109
第 2 節	1 区の調査……………		109
第 3 節	2 区の調査……………		115
第 4 節	浅谷下山古墳群小結……………		118
第 7 章	自然科学的分析……………		141
第 1 節	対田清水谷古墳群出土の石椁に付着する赤色顔料について……………	(志賀智史)……………	141
第 2 節	対田清水谷古墳群出土土器の胎土分析……………	(バリノ・サーヴェイ株式会社)……………	143
第 8 章	まとめ……………		151
第 1 節	対田清水谷古墳群(墳墓群)について……………	(上田)……………	151
第 2 節	岸田川・久斗川流域の経塚概観……………	(別府)……………	161
第 3 節	総括……………	(別府)……………	166

図版目次

第1章 周辺の環境

第1図 遺跡の位置

第2図 周辺の主要遺跡 …………… 3

第2章 調査に至る経緯と経過

第3図 確認調査地点位置図…………… 6

第4図 久谷城跡採集土師器 …………… 7

第5図 久谷城跡北尾根採集磨製石斧…………… 7

第6図 確認調査トレンチ配置図(1) …………… 8

第7図 確認調査トレンチ配置図(2)…………… 9

第3章 タルガ山遺跡

第8図 タルガ山遺跡 発掘調査位置図…………… 17

第9図 調査区全体図 …………… 18

第10図 SX-1石組 …………… 19

第4章 対田清水谷古墳群

第11図 対田清水谷古墳群 発掘調査位置図…………… 48

第12図 1区全体図 …………… 49

第13図 1・2号墳断面土層図…………… 50

第14図 3・4号墳断面土層図 …………… 51

第15図 1号墳…………… 52

第16図 2号墳 …………… 53

第17図 3・4号墳…………… 54

第18図 3号墳(1)第1・2主体部 …………… 55

第19図 3号墳(2)第3主体部・SK301 …………… 56

第20図 2区全体図 …………… 57

第21図 13・12・5号墳断面土層図…………… 58

第22図 6・7・8号墳断面土層図 …………… 59

第23図 9・10・11号墳断面土層図…………… 60

第24図 14・15号墳断面土層図 …………… 61

第25図 13号墳…………… 62

第26図 12号墳(1)第1主体部 …………… 63

第27図 12号墳(2)第2・3主体部…………… 64

第28図 5号墳(1)経塚(SX501) …………… 65

第29図 5号墳(2)経塚(SX501) …………… 66

第30図 5号墳(3)第1・2・4主体部 …………… 67

第31図 5号墳(4)第3主体部…………… 68

第32図 6号墳(1)第1主体部・SK601 …………… 69

第33図 6号墳(2)第2・3主体部…………… 70

第34図 7号墳(1)第1主体部 …………… 71

第35図 7号墳(2)第2主体部…………… 72

第36図 7号墳(3)第3・4主体部 …………… 73

第37図 8号墳…………… 74

第38図 9号墳(1)…………… 75

第39図 9号墳(2)SX901 …………… 76

第40図 9号墳(3)主体部 …………… 77

第41図 10号墳(1)…………… 78

第42図 10号墳(2)第1主体部 …………… 79

第43図 10号墳(3)第2主体部…………… 80

第44図 11号墳 …………… 81

第45図 14号墳…………… 82

第46図 15号墳 …………… 83

第47図 2・3号墳出土遺物…………… 84

第48図 3号墳出土遺物 …………… 85

第49図 4・12・5号墳出土遺物…………… 86

第50図 6・7・8号墳出土遺物 …………… 87

第51図 9・10・11号墳出土遺物…………… 88

第52図 14・15号墳他出土遺物 …………… 89

第53図 経塚(SX501)出土遺物 …………… 90

第54図 SK1401出土遺物 …………… 91

第5章 小坂谷古墳群

第55図 小坂谷古墳群 発掘調査位置図…………… 98

第56図 調査前平板測量図 …………… 99

第57図 調査区全体図…………… 100

第58図 1号墳(1)…………… 101

第59図 1号墳(2)…………… 102

第60図 2号墳 …………… 103

第61図 3号墳…………… 104

第62図 1号墳出土遺物 …………… 105

第63図 1号墳出土遺物…………… 106

第64図 2・3・4号墳出土遺物 …………… 107

第6章 浅谷下山古墳群

第65図 浅谷下山古墳群 発掘調査位置図…………… 119

第66図 1区全体図 …………… 120

第67図 調査前平板測量図…………… 121

第68図 古墳横断面土層図 …………… 122

第69図 古墳縦断面土層図…………… 123

第70図 7号墳(1)…………… 124

第71図 7号墳(2)第1・2主体部…………… 125

第72図 5・6号墳 …………… 126

第73図	6号墳第1・2主体部	127	第74図	3・4号墳	128
第75図	1・2号墳(1)	129	第76図	1・2号墳(2)主体部	130
第77図	2区全体図	131	第78図	2-1号墳	132
第79図	2-3・4号墳	133	第80図	2-3号墳	134
第81図	2-4号墳	135	第82図	SD01	136
第83図	7号墳出土遺物	137	第84図	6・4号墳出土遺物	138
第85図	2区出土遺物	139			
第7章 自然科学的分析					
第86図	対田清水谷9号墳(墓)出土の石椁に付着する赤色顔料	142			
第87図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度	145			
第88図	砂の粒径組成	146			
第89図	砕屑物・基質・孔隙の割合	146			
第90図	胎土薄片(1)	148			
第91図	胎土薄片(2)	149			
第8章 まとめ					
第92図	対田清水谷古墳群 遺構別出土遺物(1)	153			
第93図	対田清水谷古墳群 遺構別出土遺物(2)	154			
第94図	L字状石椁の形式分類と各時期の例	155			
第95図	墓域内に標石を伴う埋葬主体の例(北陸・北近畿地域)	158			
第96図	墓域内に標石を伴う埋葬主体の例(山陰地域)	159			

表目次

第1章 周辺の環境			
第1表	周辺の主要遺跡名一覧表	4	第2表 浜坂道路関連埋蔵文化財調査一覧 11
第4章 対田清水谷古墳群			
第3表	出土土器観察表	92	
第5章 小坂谷古墳群			
第4表	出土土器観察表	108	第5表 1号墳主体部出土玉類観察表 108
第6章 浅谷下山古墳群			
第6表	出土土器観察表	139	第7表 出土玉類観察表 140
第7章 自然科学的分析			
第8表	試料一覧および胎土分類結果	143	第9表 薄片観察結果(1×2) 144・145
第8章 まとめ			
第10表	対田清水谷墳墓群・古墳群における標石の可能性のある出土石材	158	
第11表	但馬の横穴を有する堅穴土坑	165	

写真図版目次

タルガ山遺跡

写真図版1	タルガ山遺跡遠景・山頂西半部全景
写真図版3	SX-1 石組
写真図版5	調査区全景・調査前の状況・山頂部の状況
写真図版7	出土砥石

写真図版2	山頂東半部全景・山頂北部の集石
写真図版4	SX-1 石組
写真図版6	南東斜面部の状況・SX-1

対田清水谷古墳群

写真図版8	遺跡遠景
写真図版10	近景
写真図版12	1区 1号墳 全景・主体部
写真図版14	1区 2号墳 全景・主体部
写真図版16	1区 3号墳 第1主体部
写真図版18	1区 4号墳 全景・須恵器出土状況
写真図版20	2区 13号墳 第1・2主体部
写真図版22	2区 12号墳 第1～3主体部
写真図版24	2区 5号墳 第2主体部
写真図版26	2区 5号墳 第4主体部
写真図版28	2区 経塚(SX501) 集石
写真図版30	2区 経塚(SX501) 銅鏡出土状況
写真図版32	2区 6号墳 第1～4主体部・SK601・602
写真図版34	2区 7号墳 第1・2主体部
写真図版36	2区 7号墳 第3・4主体部
写真図版38	2区 9号墳 全景・主体部
写真図版40	2区 10号墳 全景・第1主体部
写真図版42	2区 11号墳 全景・主体部・SK1101
写真図版44	2区 14号墳 主体部
写真図版46	2区 15号墳 全景・主体部
写真図版48	2区 14・15号墳調査状況
写真図版50	1区 3号墳出土遺物
写真図版52	1・2区 4・12号墳出土遺物
写真図版54	2区 7・8・9号墳出土遺物
写真図版56	2区 14・15号墳・その他出土遺物
写真図版58	2区 SK1401出土磨石・石皿

写真図版9	全景
写真図版11	全景
写真図版13	1区 2・3号墳 全景
写真図版15	1区 3号墳 全景
写真図版17	1区 3号墳 第2・3主体部・SK301
写真図版19	2区 13号墳 全景・主体部
写真図版21	2区 12号墳 全景
写真図版23	2区 5号墳 全景
写真図版25	2区 5号墳 第1主体部
写真図版27	2区 5号墳 第3主体部
写真図版29	2区 経塚(SX501)
写真図版31	2区 6号墳 全景
写真図版33	2区 7号墳 第1～4主体部
写真図版35	2区 7号墳 第3主体部
写真図版37	2区 8～11号墳・主体部・SK801
写真図版39	2区 9号墳 主体部とSX901
写真図版41	2区 10号墳 第1・2主体部
写真図版43	2区 14号墳 全景
写真図版45	2区 14号墳 SK1401
写真図版47	2区 15号墳 主体部
写真図版49	1区 2・3号墳出土遺物
写真図版51	1区 3号墳出土標石
写真図版53	2区 5・6号墳出土遺物
写真図版55	2区 9・10・11号墳出土遺物
写真図版57	2区 経塚(SX501)出土遺物

小坂谷古墳群

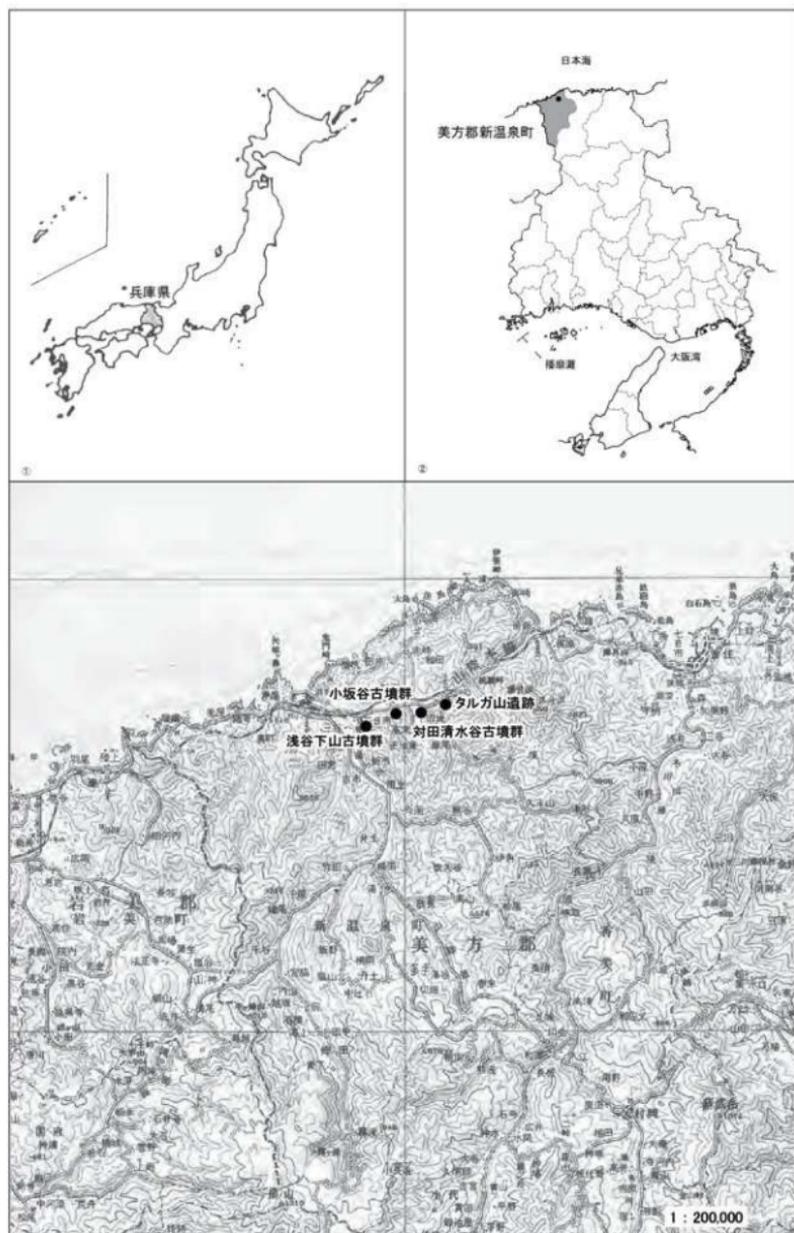
写真図版59	遺跡遠景
写真図版61	全景
写真図版63	1号墳
写真図版65	1号墳 主体部・鉄器・鏡出土状況
写真図版67	3号墳 全景・主体部
写真図版69	1・2号墳出土遺物
写真図版71	3・4号墳・確認トレンチ出土遺物

写真図版60	調査区近景・全景
写真図版62	全景
写真図版64	1号墳 全景・主体部
写真図版66	2号墳 全景・主体部
写真図版68	3号墳 土器枕・区画溝
写真図版70	1号墳出土遺物

浅谷下山古墳群

写真図版72	遺跡の立地
写真図版74	1区 全景
写真図版76	1区 7号墳 主体部
写真図版78	1区 7号墳 第1主体部底土坑
写真図版80	1区 7号墳 第2主体部
写真図版82	1区 6号墳 第1主体部
写真図版84	1区 3・4・5号墳・3号墳主体部
写真図版86	1区 1・2号墳 主体部
写真図版88	2区 2-1・3・4号墳 遠景
写真図版90	2区 2-3・4号墳 全景
写真図版92	2区 2-4号墳 全景
写真図版94	2区 SD01
写真図版96	1区 7号墳出土遺物
写真図版98	2区 出土遺物

写真図版73	遺跡全景
写真図版75	1区 7号墳 全景
写真図版77	1区 7号墳 第1主体部
写真図版79	1区 7号墳 土坑内銅鏡出土状態
写真図版81	1区 6号墳 全景
写真図版83	1区 6号墳 第1・2主体部・SK01
写真図版85	1区 2号墳 全景
写真図版87	2区 全景
写真図版89	2区 2-1号墳 全景
写真図版91	2区 2-3号墳 全景
写真図版93	2区 2-4号墳 墳丘
写真図版95	1・2区 作業風景
写真図版97	1区 6・4号墳出土遺物



第1図 遺跡の位置

第1章 周辺の環境

第1節 地理的環境

本書で報告する山陰近畿自動車道（鳥取豊岡宮津自動車道）の国道178号浜坂道路地体連携推進（道路改築）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、兵庫県美方郡新温泉町に所在する遺跡が対象である。本発掘調査を実施した4遺跡はともに旧浜坂町内に所在する。

美方郡新温泉町は2005年に浜坂町と温泉町が合併して誕生した町で、北は日本海に、そして西は鳥取県に接しており、兵庫県のみならず近畿地方の最北西端に位置している。海岸は山陰海岸国立公園に含まれ、但馬御火浦は1934年に国の名勝及び天然記念物に指定されている。近年では湯村温泉や小代、神鍋高原を含めた山陰海岸ジオパークの一部として、地球科学的な価値を持つ遺産としてその重要性が認められている。新温泉町の日本海側を占めている浜坂町であるが、その地名は大津波によってできた砂浜の形に由来する説や、行基菩薩が七道伽藍を建てた際に名付けたとの伝承もある。

美方郡は明治29(1896)年に二方郡と七美郡を合わせた郡名であり、浜坂は二方郡に属していた。浜坂の現在の中心地は岸田川河口の浜坂港周辺からJR浜坂駅周辺であるが、西の諸寄は天然の良港で北前船の風待り港として近世に栄えていた。さらに西側の居組を抜けると因幡国に入る。

但馬国は東の円山川流域と西の岸田川流域に大きく分かれ、兵庫・鳥取県境の驛ノ山(1310m)に源を発する岸田川の流域では、河口から久斗川が合流するその周辺が流域でも最も平地が広がる地域ではあるが、洪水等の自然災害を多く被った地でもある。久斗川を東へ廻り東西に長く久谷に抜けるルートは、JR山陰本線や国道178号も通る動脈であり、浜坂道路もこの谷の南辺を通過する。久谷から久斗山(650m)、蓮台山(628m)の連なる山塊を「ももうずき峠（桃観峠）」で越えると、古代美含郡に含まれる城崎郡香美町香住区余部へ至る。但し、古代山陰道駅路はこの日本海に沿ったルートを探らず、山間部の谷間を屈曲しながら通ることが想定されている。

第2節 歴史的環境

岸田川の最下流域及び支流である久斗川流域にはすでに400ヶ所近い埋蔵文化財包蔵地が知られているが、発掘調査を実施した遺跡は極めて限られている。また、分布する多くの遺跡が丘陵上や山城跡で占められており、低地の集落遺跡の実態は各時代とも不明である。その中で発掘調査が実施された岸田川最下流の旭町白川橋遺跡(660415)では縄文晩期・弥生前期・古墳時代の遺物が河道堆積物から出土しており、埋没したラグーン縁辺に集落が営まれていた可能性を示している。

その他に知られている縄文時代の遺跡は山裾の段丘上に分布している。久斗川上流には辺地遺跡(660246)や高末遺跡(660249)が知られており、特に広い範囲で遺物が散布している高末遺跡は規模の大きな集落跡の可能性が高い。対田清水谷古墳群(660425～660438)の14号墳下層で今回出土した石皿・磨石との関係が窺われる。

弥生時代・古墳時代の集落遺跡は確認されていないが、山裾や谷部に散布地が見つかっており、また現在の集落と重複して存在していた可能性がある。今回の調査でも対田清水谷古墳群山裾の平地や岸田川西岸の沖積地で確認調査を行ったが、集落跡の存在を示すものは確認できなかった。

弥生時代後期から古墳時代前半の墓址は丘陵上に広がっており、その多くが所謂階段式の墳丘を有するものあるいは区画の溝を切るものである。対田清水谷古墳群(660425～660438)の久斗川を挟んだ西対岸に立地する高末引谷古墳(660235)は木棺や土器棺を主体部としており、鉄製刀子や管玉が出土している。浅谷下山古墳群(660136～660156)の北の尾根上に立地する井ノ谷2・3号墳(660163・660164)からは木棺直葬及び土器棺が検出されており、鉄製の剣・斧・鏃、ガラス製小玉・管玉が出土している。柳谷1号墳(660082)は箱式石棺を主体部としたものである。

後期古墳も木棺直葬を主体部とするものは同様の立地をもつが、横穴式石室墳や横穴墓は支谷の中へと分布を変えている。浦谷1号墳(660044)は埴輪を有する全長23mの前方後円墳である。また、丘陵先端部に位置する二方古墳(660334)では縄掛突起を有する蓋石を持った組み合わせ式石棺が知られている。小坂谷古墳群直近の与三谷古墳(660216)からは須恵器とともに銀象嵌を施した長大な鉄刀が工事の際に出土しており、他より突出した内容を持つ古墳も知られる。

以上のように、浜坂周辺には弥生時代後期から連綿と墳墓が造られ、引き続いて後期古墳にも石棺を有するなど他を凌駕する事例が見られることから、在地の有力な氏族が存在していたことが伺われる。また二方郡名を冠する神社が存在するなど、二方郷があったとされることから二方郡の中心地であった可能性がある。但し今のところ官衙や寺院址は確認されていない。二方は文武八(701)年に但馬国に合されて(旧事本記)二方郡となる以前には、出雲国造の同系とされる二方国造、美尼布命が支配していたとされている。

奈良時代から平安時代の遺跡はあまり知られていないが、JR浜坂駅周辺の山裾や微高地上で散布が見られる。浜坂駅の南に入る谷には味原窯跡(660023)があり、生産遺跡の存在が知られる。この岸田川北側の観音山の山塊北東側にも須恵器が散布している糸城遺跡(660402)などが知られている。岸田川流域から日本海まで望むことができる観音山山上には九品山極楽寺が天平九(737)年、行基菩薩による創建と伝えられ、再興された貞観元(856)年に観音山相応峰寺(660414観音山城跡)に改称、国宝の木造十一面観世音菩薩立像は平安初期とされる。

平安時代末から中世前半の遺跡もあまり知られていないが、松村3号墳・4号墳(660337・660338)の墳丘上で見つかった経塚からは、経筒や銅鏡・鉄刀が出土している。また高末引谷古墳上からは土坑の一端に越前焼壺を置き、その前面を板石などで閉塞する遺構が確認されている。井ノ谷1号墳(660162)上からも土坑の一端に横穴を設け、須恵質の甕を収めて板石で閉塞する遺構(2・3号中世墓)が検出され、灯明皿と思われる糸切り底の土師器皿が横穴から出土した。また、円形の堅穴内に須恵質の甕を置き上面を板石などで覆う土坑(1号中世墓)も検出されている。

中世後半には但馬守護山名氏の家臣塩治氏居城とされる芦屋城跡(660011)が浜坂の港を見下ろす城山に築かれており、主郭部の一部の発掘調査により掘立柱建物跡や溝などが検出され、輸入陶磁器や刀子・硯などが出土している。また、元龜二(1571)年因幡鳥取城主武田氏が芦屋城を攻めた時、塩治方として参戦した田公氏の七釜城跡(660135)や矢谷氏の指杭城跡(660378田井城跡か)、西ノ城跡(660172)など所々に山城が築かれている。



第2図 周辺の主要遺跡

第1表 周辺の主要遺跡名一覧表

遺跡番号	遺跡の名称	遺跡番号	遺跡の名称	遺跡番号	遺跡の名称
660007	大谷ノ上南遺跡	660159	戸田穴蔵跡	660290~660293	汗津1~4号墳
660008	大谷ノ上北遺跡	660160~660161	戸田1-2号墳	660294	汗津城跡
660009	八山古墳	660162~660171	井ノ谷1~10号墳	660295	新野谷遺跡
660010	イツノ上城跡	660172	西ノ城跡	660296~660303	新野谷1~8号墳
660011	芦屋城跡	660173	二日市薬師寺跡	660304~660312	草谷1~9号墳
660012	芦屋陣屋跡	660174~660184	姥ヶ谷1~11号墳	660313	草谷遺跡
660013	蔵町遺跡	660186~660188	掘木1~3号墳	660314	高原城跡
660014	今在家遺跡	660189~660193	福谷1~5号墳	660315~660326	丹辺谷1~12号墳
660015	高見遺跡	660194~660198	願上寺1~5号墳	660327	丹辺谷遺跡
660016	中池古墳	660199	願上寺跡	660328~660332	本居下回住1~5号墳
660017	宇都野町遺跡	660200~660214	対田奥谷1~15号墳	660333	岡住城跡
660018	東岡古墳	660216~220217	与三谷1-2号墳	660334	二方古墳
660019~660020	下池1-2号墳	660218~660220	小坂谷古墳群	660335~660343	松村1~9号墳
660021	浜坂駅裏遺跡	660221	小坂谷遺跡	660344	松村遺跡
660022	下山谷古墳	660222~660227	井ノ口西1~6号墳	660345~660366	飛宮谷1~22号墳
660023	味原窟跡	660228	井ノ口遺跡	660367	飛宮谷遺跡
660024~660026	味原林谷1~3号墳	660229~660233	井ノ口東1~5号墳	660368~660372	落淵1~5号墳
660027	岸田河川口遺跡	660235	高末引谷古墳	660373~660376	鶴山1~4号墳
660028	八幡遺跡	660236	高末引谷遺跡	660377	鶴山遺跡
660029	秋葉台遺跡	660237	坂谷古墳	660378	田井城跡
660030	清泉寺遺跡	660238	岡谷遺跡	660379	田井薬師寺跡
660031	上稲葉古墳	660239	平谷遺跡	660380~660382	森1~3号墳
660032	三谷遺跡	660240	正法庵遺跡	660383	陣屋が平遺跡
660033	旭町遺跡	660246	辺地遺跡	660385	猪谷古墳
660034	福富遺跡	660247	向山古墳	660386	小枕古墳
660035	浜坂保健所裏遺跡	660248	松上古墳	660387~660390	村中1~4号墳
660036~660043	和泉谷1~8号墳	660249	高末遺跡	660391	村中遺跡
660044~660053	浦谷1~10号墳	660250	久谷城跡	660392~660399	浜谷1~8号墳
660054	釜谷古墳	660251	ヘタ山古墳	660400	指杭古墳
660055~660059	藤原1~5号墳	660252~660253	山ズエ1-2号墳	660401	赤城城跡
660060	丹辺谷13号墳	660254	テラモト遺跡	660402	赤城遺跡
660062	おどろが城跡	660255	上の山古墳	660403~660405	丸田1~3号墳
660078~660080	宮ノ平1~3号墳	660256	寺尾古墳	660406~660408	風呂呂3-1号墳
660081	宮ノ平遺跡	660257	和田城跡	660409	清富城跡
660082~660085	棚谷1~4号墳	660258	赤崎城跡	660410	清富陣屋跡
660127	高巻城跡	660259~660271	丸山1~13号墳	660411~660413	観音山3-1号墳
660128~660130	浅谷1~3号墳	660272~660276	水神山4~8号墳	660414	観音山城跡
660131~660132	清水谷1-2号墳	660277	ソバガ谷遺跡	660415	旭町白川橋遺跡
660133	カンロク谷古墳	660278~660280	水神山1~3号墳	660416~660420	タルガ山古墳群-遺跡
660134	一本柳古墳	660281	ソバガ谷古墳	660421~660423	入袋古墳群
660135	七釜城跡	660282	伊賀谷古墳	660424	袋谷古墳
660136~660156	浅谷下山古墳群	660283~660288	弥栄1~6号墳	660425~660438	対田清水谷古墳群
660157	国正寺裏古墳	660289	汗津遺跡		

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

延長約120kmの山陰近畿自動車道（鳥取豊岡宮津自動車道）は、鳥取県鳥取市を起点とし、京都府宮津市を終点とする道路で、鳥取県域内約30km、兵庫県域内約46km、京都府域内約44kmの三府県にわたる地域高規格道路として計画された。

兵庫県内では西端の東浜居組道路（約3.5km）や、余部道路（約5.3km）、香住道路（約6.2km）が先行して計画、路線決定がなされた。それに先だって一般国道178号地域連携推進（道路改築）事業に伴い埋蔵文化財の取り扱いは行われてきた。浜坂道路の東に続く余部道路では山谷墳墓群（美方郡香美町香住区）が発掘調査され、兵庫県文化財調査報告第398冊としてその成果が刊行されている。これら三道路はすでに供用を開始している。

浜坂道路も国道178号のバイパス道路として、美方郡新温泉町初谷の（仮）浜坂インターチェンジから美方郡香美町香住区余部の余部インターチェンジ間、約9.8kmが兵庫県但馬県民局新温泉土木事務所により計画された。

第2節 調査の経過

事業者である兵庫県但馬県民局の依頼により、計画路線内の分布調査を実施し、その結果を基にして確認調査・本発掘調査へと移行した。いずれも兵庫県教育委員会を調査主体としている。

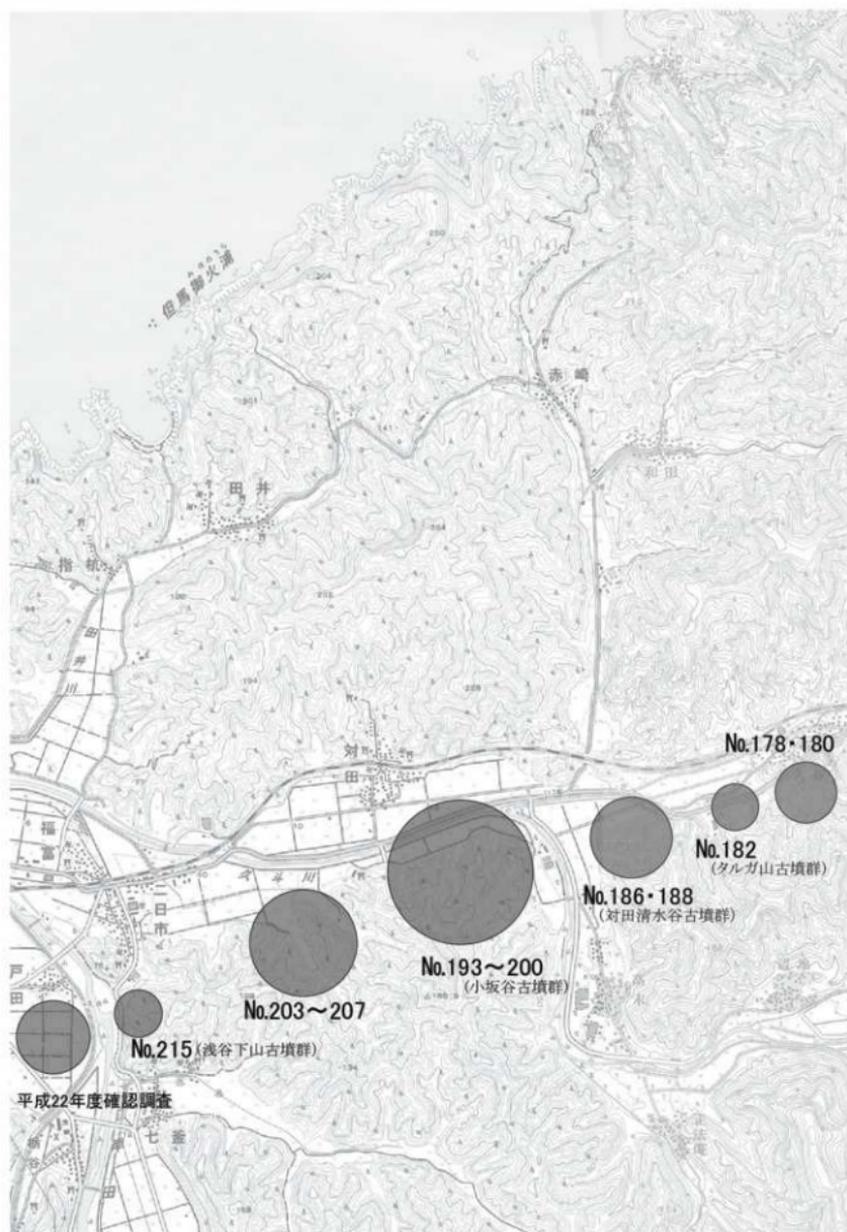
1. 分布調査

一般国道178号浜坂道路の計画区間約9.8kmで、兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部により平成20年3月に道路予定地（約310,500㎡）の分布調査を実施した。また、平成21年度には久谷城跡にかかる工用道路部の分布調査を実施している。

その結果、道路予定地内の美方郡香美町香住区余部で2地点、美方郡新温泉町内で19地点の周知の遺跡および新発見の埋蔵文化財包蔵地が合計で約18万㎡用地内に存在することが判明した。遺跡の多くは尾根上の古墳群や山城であった。

その後、但馬県民局新温泉土木事務所による、計画工期・経費の縮小および埋蔵文化財保護の観点からの道路予備設計（事業範囲及び工法）の大幅な変更の協議を受け、丘陵尾根の開削部のトンネル化などによって、調査対象遺跡が新温泉町内の13地点にまで縮小することとなった。（竹内太郎2013）

その結果、美方郡新温泉町内の井ノ口東古墳群（660229～660233）・井ノ口西古墳群（660222～660227）・対田奥谷古墳群（660200～660214）・願上寺古墳群（660194～660198）・福谷古墳群（660189～660193）・揚木古墳群（660186～660188）・姥ヶ谷古墳群（660174～660184）・



第3図 確認調査地点位置図 (S = 1 : 25,000)

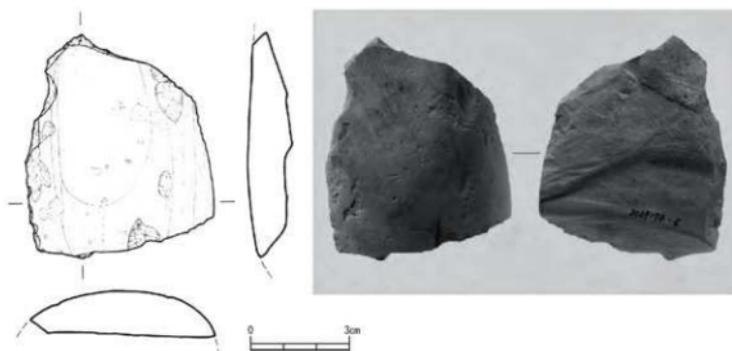
井ノ谷古墳群(660162~660171)や西ノ城跡(660172)・久谷城跡(660250)や美方郡香美町香住区余部の市午城跡などは現状保存されることとなった。

2. 確認調査

対象となった地点での遺跡の有無、本発掘調査範囲や調査規模の確定のための確認調査は、平成21年10月から12月にかけて兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部によって実施された。また平成22年度以降にも(仮)浜坂インターチェンジ部分や工事用道路などの設定にも適宜対応し、確認調査を実施した。その結果、道路杭番号№182地点(タルガ山古墳群)、№188地点(対田清水谷古墳群)、№198地点(小坂谷古墳群)、№215地点(浅谷下山古墳群)が本発掘調査の対象となった。また、平地部分の確認調査では遺跡の存在が全く確認できず、結果として集落遺跡の存在は不明である。

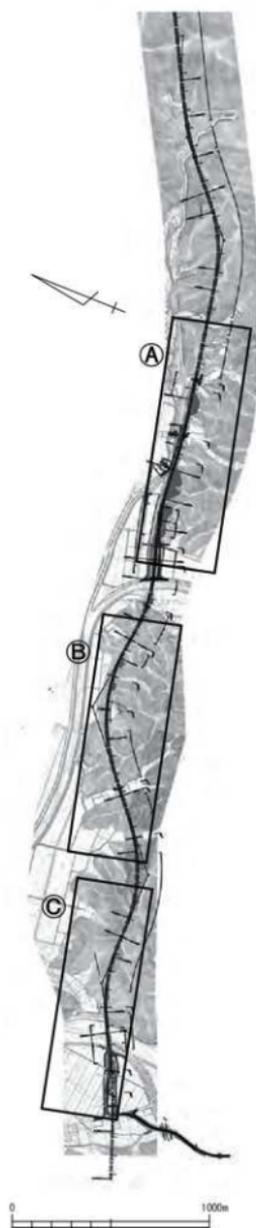


第4図 久谷城跡採集土師器



第5図 久谷城跡北尾根採集磨製石斧

久谷城跡(660250)はトンネルに工法が変更され保存されることとなったが、西側のトンネル開口部の確認調査は実施している。確認調査では遺構・遺物は検出されなかったが、その際に№178地点の久谷城跡北尾根の崖面で糸切り底部をもつ土師器碗の底部(第4図)が採集された。また、第5図は№180地点の久谷城跡北側丘陵の道路際の崖面で採集された磨製石斧破片である。近辺に城跡以前の遺跡が存在することが推定される。



第6図 確認調査トレンチ配置図(1)



第 7 図 確認調査トレンチ配置図 (2)

タルガ山古墳群(660416～660420)では、確認調査で墳丘を区画する溝や主体部、河原石を用いた箱式石棺と考えられる遺構が検出され、4基以上の墳丘が存在するものと想定された。

対田清水谷古墳群(660425～660438)の確認調査では、円鏡を使用した箱式石棺、木棺墓などを検出し、多数の弥生土器・土師器破片の他にL字状石杵が出土し、12基以上の古墳が存在することが推定された。そのほか古代や中世の土器も出土している。

小坂谷古墳群(660218～660220)は周知の古墳群であり、用地内に3基の古墳が存在する。確認調査の結果、主体部を確認し、須恵器が出土している。

浅谷下山古墳群(660136～660156)の工事範囲内の尾根上には周知の支群が存在し、9基程度の古墳の存在が推定された。尾根北東の谷内では横穴式石室と思われる石積みを検出し、須恵器が出土したことから、後期古墳やそれ以降の平地地造成を伴う寺院等の存在が推定された。

3. 本発掘調査

浜坂道路関連の本発掘調査は、平成24年のタルガ山古墳群の調査から始まった。

タルガ山古墳群は、確認調査では複数基の古墳の存在を想定していたが、本発掘調査の結果、明瞭な古墳の存在は確定できず、経塚と思われる集石土坑が検出されたため、本書では「タルガ山遺跡」として報告する。

対田清水谷古墳群では、平成25年度に1区及び2区の調査を実施し、1～10号墳を検出したが、法面の対策工の変更により、平成26年度に2区の南側部分の追加調査を実施し、5号墳および12～15号墳を検出した。

小坂谷古墳群は、平成25年度に調査を実施した。丘陵先端部は失われていたが、丘陵頂部及び北尾根、西尾根から4基の古墳を検出した。

浅谷下山古墳群では、尾根上の1区で1～7号墳の調査を実施。北西の谷内の2区で3基の後期古墳の痕跡や溝を検出した。同時に実施した1区の尾根先端部にかかる町道の調査では新温泉町教育委員会との協議、調査の結果、尾根先端部および西側丘陵先端部には古墳が存在しないことが判明している。

本発掘調査はいずれも兵庫県教育委員会を調査主体とし、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部によって実施された。平成24年度、平成26年度の発掘調査は日興建設株式会社に、平成25年度の発掘調査は株本建設工業株式会社に請負工事として発注した。空中写真測量は、平成24年度は株式会社エイテックに、平成25年度は株式会社かんこう、平成26年度は株式会社ウエスコと契約して実施した。

4. 出土品整理作業

本発掘調査や確認調査で出土した遺物の整理作業や保存処理作業は、平成26年度から公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部により始められ、水洗い・ネーミング・接合補強・復元・実測・写真撮影・図面補正・トレース及び金属器等の保存処理作業を実施した。

整理保存課 菱田淳子、長濱誠司、岡本一秀、池田征弘

担当嘱託職員は以下のとおりである。

上田沙耶香、藤池かづさ、嶺岡美見、島村順子、荻野麻衣、小野潤子、沼田真奈美、上西淳子、石田典子、宮田麻子、寺西梨紗、古谷章子、柏原美音、坂東知奈、佐々木智子、栗山美奈、八木和子、高瀬敬子、桂 昭子、佐々木愛、梶原奈津子、友久伸子、池田悦子、佐伯純子

原稿執筆は調査担当者である公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 岸本一宏、別府洋二、兵庫県立考古博物館 山上雅弘、上田健太郎が分担した。

赤色顔料の分析は九州国立博物館 志賀智史氏の手を煩わせ、玉稿を頂いた。また、出土した土器の胎土分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、本書に掲載している。

本書で使用した図は、国土地理院管理の地形図を基にした遺跡分布図、但馬県民局新温泉土木事務所提供の路線計画図、上記各空中写真測量によるものを使用し、その他の図は調査担当者、補助員、整理作業嘱託員によるものを使用した。

本書で使用した写真は、調査担当者によるものであり、遠景・全景等の空中写真は上空空中写真測量時のものを使用した。遺物写真は株式会社地域文化財研究所に委託し、撮影した。

第2表 浜坂道路関連埋蔵文化財調査一覧

種別	調査番号	調査期間	調査担当者	調査面積	備考
分布調査	2007143	平成20年3月17日 ～19日	山本 誠、磯 英記、 長濱誠司、上田健太郎	310,500㎡	
確認調査	2009174	平成21年10月13日 ～12月24日	渡辺 昇、久保弘幸、 上田健太郎	1,130㎡	
分布調査	2009302	平成22年2月15日	山本 誠	2,000㎡	久谷工事用道路部
確認調査	2010227	平成22年11月29日 ～12月2日	渡辺 昇、別府洋二	458㎡	浜坂IC部
確認調査	2011288	平成23年11月17日 ～18日	上田健太郎	46㎡	対田清水谷古墳群北麓部
本発掘調査	2012092	平成24年10月19日 ～12月21日	岸本一宏、長濱誠司	895㎡	タルガ山遺跡
確認調査	2012210	平成25年3月6日 ～3月7日	中村 弘	120㎡	対田清水谷古墳群西麓部
本発掘調査	2013013	平成25年5月16日 ～9月30日	山上雅弘、上田健太郎	1,503㎡	対田清水谷古墳群
確認調査	2013083	平成25年5月16日 ～9月30日	山上雅弘、上田健太郎	8㎡	小坂谷古墳群
本発掘調査	2013014	平成25年5月16日 ～9月30日	山上雅弘、上田健太郎	614㎡	小坂谷古墳群
本発掘調査	2014006	平成26年5月15日 ～9月30日	渡辺 昇、別府洋二	220㎡	対田清水谷古墳群拡幅部
本発掘調査	2014005	平成26年5月15日 ～9月30日	渡辺 昇、別府洋二	801㎡	浅谷下山古墳群

第3章 タルガ山遺跡

第1節 調査の概要

1. 調査の経過

タルガ山遺跡は、事業予定地内遺跡の旧№182地点にあたり、分布調査の時点で古墳群と想定されており、13本のトレンチを設定して確認調査を実施したところ、古墳の主体部や墳丘を区画する溝が存在すると判断され、丘陵尾根筋上に少なくとも4基以上の古墳の存在が想定され、また、北にのびる支尾根上には河原石を用いた箱式石棺墓と想定された遺構が検出されたことから、タルガ山古墳群の名称で周知の遺跡として登録された。

確認調査の結果により、平成24年度に但馬県民局長（新温泉土木事務所）からの依頼〔平成24年6月25日付け但馬（新土）第1262号〕があり、本発掘調査を実施することとなった。

タルガ山遺跡の本発掘調査期間は、平成24年10月19日から12月21日までの実働40日間で、兵庫県が設定した遺跡調査番号は2012092である。

本発掘調査を実施した箇所は、新温泉町の東部にある久谷集落の西端部南側に位置する山塊の北端部に位置している。久斗川と久谷川に挟まれたこの山塊北部には、東から久谷城跡（遺跡番号660250）、タルガ山古墳群（同660416～660420）、入袋古墳群（同660421～660423）、袋谷古墳（同660424）、対田清水谷古墳群（同660425～660438）があり、この山塊北側の東西にのびる谷内には弥生時代～平安時代のテラモト遺跡（同660254）が存在している。

調査は、古墳群調査として開始したため、掘削前に調査区全体の地形測量図を平板実測にて作成した。

その後、腐植表土および堆積土を人力により掘削し、掘削土は調査区西側の斜面の道路用地内に集積した。また、松・杉・檜を中心とした切株も同じ場所に集積した。

堆積土の掘削後は、人力により地表面を精査して遺構検出を実施し、遺構と思しき土壇・集石および経塚と考えられる石組を検出した。遺構検出後は人力により遺構掘削をおこない、出土遺物の回収および記録を作成した。

検出・掘削した遺構については、調査区全体の平板実測、個別遺構の平面実測および埋土層断面図作成や、出土状況および個別遺構の平面・断面の写真撮影をおこなった。

調査については日興建設株式会社に委託して実施し、調査区全体の測量については空中写真測量を株式会社エイテックに委託して、12月14日に実施した。

なお、調査の成果を地元住民に知ってもらうための遺跡調査結果の速報を、回覧のかたちで調査終了直前に配布した。

2. 調査の概要

本発掘調査区は、北東-南西方向の主尾根の頂部およびそこから北西にのびる支尾根であり、平面形

状は「T」字形を呈し、調査区頂部と山裾にあたる北側の現国道との比高差は約46mを測る。調査区は主尾根稜線方向（北東-南西）で約48m、支尾根方向（北西-南東）で最長42mである。調査区の幅は10~15m程度で、調査面積は895²である。

調査区内の主尾根の現況は、中央部が最も高いものの、稜線方向の傾斜は緩く、古墳状の隆起等は認められなかった。また、尾根直交方向の斜面は極めて急傾斜で、調査区内の支尾根の傾斜も急であった。

本発掘調査では、確認調査で埋葬施設や周溝と判断されていたものについて確認調査時のトレンチ底面まで、厚さ10~20cmの表土および厚さ10~20cmの岩盤風化土について、地表面から平均30cmの厚さで掘削したが、主尾根部分ではこれらの遺構と判断されたものを検出することはできなかった。したがって、主尾根部分で遺構と判断されていたものは地山の土層の違いであって、確認調査で遺構とされていたものは上面検出のみで判断されていたものも多かったため、土層の差か遺構かの確認ができていなかったものと判断できた。

ただし、確認調査トレンチが設定されていない部分において規模の大きな落ち込みを2か所で検出した。それらは、主尾根頂部で検出したものと、そこから南東側に少し下がった位置で検出した落ち込みである。また、主尾根頂部落ち込みの北側に寄った小規模な平坦部分で集石を1基検出した。さらに、北にのびる支尾根稜線上の調査区北端付近で経塚と思われる石組（SX-1）を検出した。

以上のように、今回の調査で検出した遺構は、落ち込み2基と集石遺構1基、経塚と推定した石組をもつ土壇1基である。

本発掘調査当初、調査区内には5基の古墳が存在する前提で調査にあたったが、調査の結果、古墳であったとの確証は得られなかった。また、確認調査時に発見され、箱式石棺と判断されていた石組も経塚と推定できるものであり、平安時代末~鎌倉時代の時期と推定している。

なお、調査区内では遺物はほとんど出土せず、唯一、頂部付近の南側斜面から砥石が1点出土したにとどまる。

第2節 遺構

前述のように、本発掘調査の結果、主尾根の頂部中央と、頂部から南東側にやや下がった斜面で落ち込みを各1基と、北側に寄った小規模な平坦部分で集石を1基検出し、北にのびる支尾根稜線上の調査区北端付近で経塚と思われる石組（SX-1）を検出した。

（1）尾根頂部の落ち込み（第9図、写真図版1・2・5）

尾根頂部の落ち込みは外形の平面形が歪で、南北約7.3m、東西約4.7mの規模で、地山は風化花崗岩盤で、さらに風化したものがその上層を形成していた。

平面は長方形に近いが、厚さ5~10cmの表土上面から10~30cm下に存在する花崗岩盤は上面の凹凸が激しく、岩盤の硬さも部分的にまちまちで、褐色や紫色の軟質部分も認められ、地山岩盤が単一ではなく、複数がまじりあった状況を示していた。

平面形や規模としては古墳の埋葬施設としても大きな問題はないものの、埋葬部分である棺部分の痕跡や、副葬品である遺物がまったく発見されなかったことから、この土壇が発見された部分が古墳ではなかった可能性がある。したがって、この土壇状のものは、底面の形状からは古墳等の埋葬施設の墓壇

と判断できるものではなく、地山花崗岩盤の軟質部分の層が入り組んだもので、遺構とは認められなかった。また、遺物も全く出土しなかった。

(2) 尾根頂部南東側の落ち込み (第9図、写真図版6)

尾根頂部南東側の落ち込みは平面「コ」字形に近い形状を呈し、長辺約7.9m、短辺約2.9mの規模で、斜面上側は深さ約30cmで段状を呈するが、斜面下側では山の傾斜面と平面的につながり、「段状遺構」に近い形状を示す。形状からは埋葬施設の墓壇とすることもできるが、落ち込み底面は南側に大きく傾斜しており、底の凹凸も目立ち、埋土の観察からも棺の痕跡が確認できなかった。埋土は表土下に10YR6/6～7/2～3の明黄褐～黄橙色を呈する土層が自然傾斜と同方向に堆積し、落ち込み底面は幅約0.9m部分が約20～30cm深くなっており、そこにも上記と同色・同質の土が堆積していた。この土層堆積状況から、何らかの自然作用でできた窪みに斜面上方から花崗岩風化土が堆積していった可能性が高い。この窪みの横断面の底面形状は、斜面上方から一度「V」字形に深く下がったのち、斜面下側で少し盛り上がった状況を示していることから、地滑りによる窪みである可能性が高いと判断できた。

(3) 集石 (写真図版2・5)

尾根頂部北寄りの平坦部で検出した集石は、一辺1mほどの平面三角形の範囲に5～25cm大の凝灰質砂岩の角礫が集散的に存在していたもので、礫が存在していた部分の底は、地表から15cm程度の深さであった。底面は平坦に近いが、掘り込んだ状況は認められなかった。自然によるものではない可能性が高いと判断しており、墓の可能性はあるものの、不明である。あるいは、経塚にかかわるものかもしれないが、ここでは性格を判断することができない。

集石内および周辺からも土器等の遺物は全く出土しなかった。

(4) 経塚 (SX-1) (第10図、巻首カラー図版3、写真図版3・4・6)

北西方向にのびる支尾根稜線上の東寄り斜面で、調査区北端付近の標高61.6m～62.1m付近で検出した石組で、確認調査で箱式石棺墓とされていたものである。しかし、本発掘調査で検出した結果、箱式石棺状に石を立てて組んだ状況ではなく、平面形状も長方形を呈しているわけではなかった。

この施設は、尾根稜線に近い斜面の緩傾斜部分に土壌を掘り込み、その内部に石を組んだものである。

土壌は直径70cmの平面円形に近いもので、斜面山側での深さは検出面から約80cm、斜面下側では20cm程度遺存していた。土壌は斜面山側で岩盤も約65cm掘り込んでおり、底は径50cm程度の円形に近く、底面はやや丸みを帯びている。また、土壌の山側側面は山側に10cm程度入り込んで、ややオーバーストック状になっている。

石組はまず土壌底の周囲を囲むように斜面下側に「コ」字形に板状に近い石を組んで、斜面山側の岩盤も利用して南北約40cm、東西約30cmの空間を形成し、この石組の上端に近い部分に25cm×30cm程度の方形に近い板状の石を、上面が水平になるように置かれていた。この方形板石下面と土壌底との空間の高さは25cm程度である。

方形板石の上部の石組は、この方形板石を囲むようなかたちで積まれており、2～3段に高さ約30cmまで確認できたと同時に、方形板石の上にも石が乗せられていた。なお、最上面での石組の直径は約70cmの範囲であった。

この石組では方形の板状石が重要な部分であると思われ、この石の上面または下部の空間が機能的な

意味を持つものと判断できよう。ここでは、方形板状石の直上にも石が乗っていた状況をふまえて、方形板状石の下部の空間を重視しておきたい。ただし、調査時点ではその空間には土が入り込んでおり、遺物は全く検出されなかった。

この遺構の性格としては、使用する石材の形状や、土壌底の山側奥部に接して石組をおこなう点および石組の形状から、但馬地域や京都府丹後地域で類例が多数認められる経塚の可能性が高い。その時期については、遺物が出土しなかったことから推測の域を出ないが、他の類例が平安時代末～鎌倉時代（12世紀～14世紀）のものが多いことから、本例もその時期と推定される。

なお、石組に使用されていた石には、この山塊で産出しない石種も多く存在しており、下の平地から運び込まれたものであろう。

第3節 遺物 (写真図版7)

タルガ山遺跡で出土した遺物は、尾根頂部南東側の落ち込み西側で出土した砥石1点のみである。

楔形に近い直方体を呈し、一部のみ欠損している。長さ121mm、幅78mm、厚さ41.7mmで、重量は611.6gとやや重い。石材は凝灰質砂岩と思われ、表面はやや風化しており、脆い。6面すべてが砥面となっており、各面端の稜線が鋭いことから、金属製品を研ぐための砥石であることは明白である。また、刃が当たった痕跡が6面全面に多数残っている。

表土直下から出土しているため、時期的には新しいものと思われる。

第4節 タルガ山遺跡小結

以上のように、今回の調査では落ち込み2基と集石1基のほか、経塚と推定した石組を持つ土壇(SX-1)1基を検出した。それらのうち、2基の落ち込みは自然のものであるとの結論に至った。

本発掘調査当初、調査区内には5基の古墳が存在する前提であったが、調査の結果、古墳であったとの確証は得られなかったことから、古墳は存在していなかったものと思われる。

いっぽう、平安時代末～鎌倉時代と推定される石組を伴う経塚を、斜面北側の小尾根稜線脇の調査区北端に近い部分で検出した。今回のような例は、新温泉町内の井ノ谷遺跡でも発見されているが、井ノ谷遺跡例は石組内に壘を埋納していた点で本例とは異なる。

本例は、石組内に木あるいは竹製の経筒を使用し、外容器も有機質あるいは使用しなかったものと思定され、年月の間に腐朽したものと推定している。

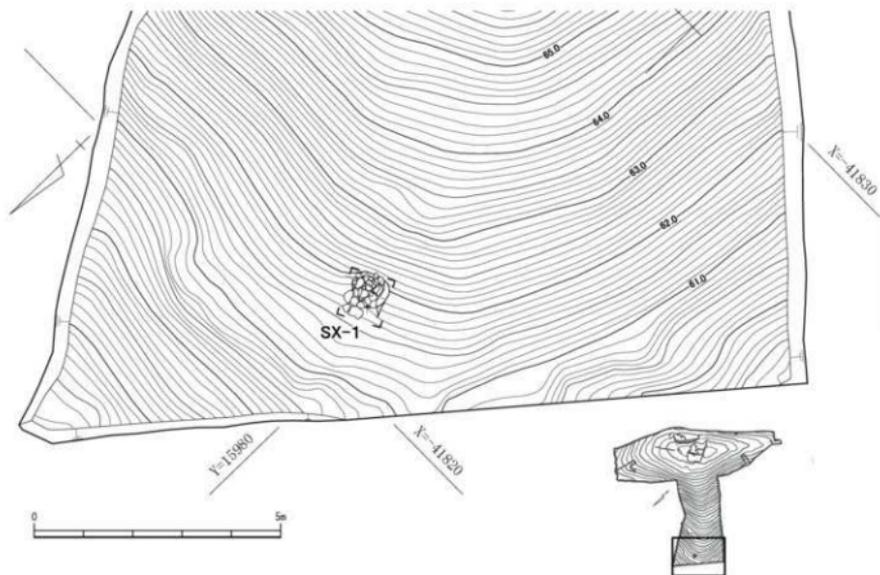
なお、経塚は本来、釈迦の死後千年経つと釈迦の教えがすたれる「末法(まっぽう)」の時代に入ることから、弥勒菩薩が第二の釈迦如来として出現する56億7千万年後まで大切な經典を埋めて保存しておく思想にもとづいたもので、日本では平安時代(11世紀初頭)に藤原道長が最初におこなったとされている。その後、経塚をつくる意味は本来の思想から離れ、現世利益や極楽往生などの思想に変わり、民衆の間でも広くおこなわれるようになったといわれている。



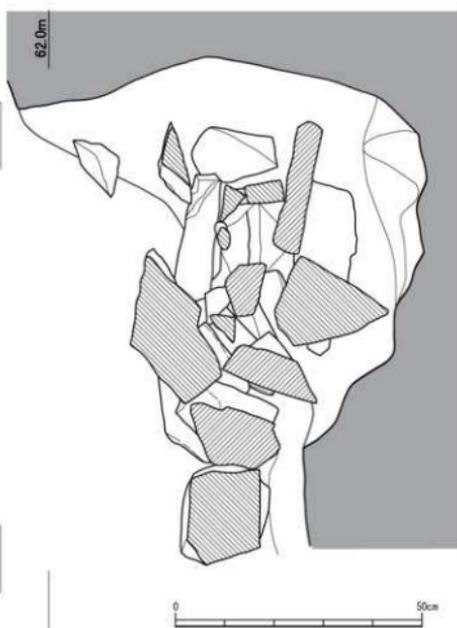
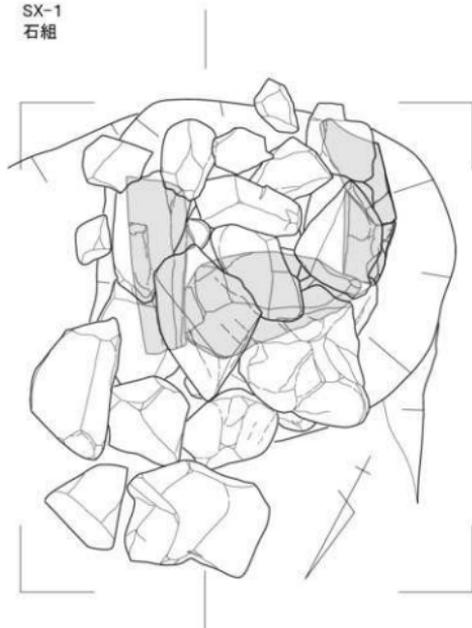
第8図 タルガ山遺跡 発掘調査位置図



第9図 調査区全体図



SX-1
石組



第10図 SX-1石組

第4章 対田清水谷古墳群

第1節 調査の概要

岸田川の支流久斗川は東に約3km遡った位置で南の谷に入り込む。その南東部の丘陵上に並ぶのが対田清水谷古墳群である。分布調査の段階では工事範囲内には階段状の古墳が5基以上存在することが推定された。この丘陵は東西に丘陵先端を切り落とすような谷地形を形成する断層と、久斗川が直角に屈曲しているように南北方向の断層地形が影響しており、その岩質も白褐色から赤褐色に変成されている。

袋谷古墳を頂上部に有する南北方向の尾根筋から、入袋古墳群を有する北東方向の尾根筋と対田清水谷古墳群を有する北西方向の尾根筋がそれぞれ派生している。対田清水谷古墳群はこの北西方向に派生する尾根筋の中腹に位置する舌状の平坦部から若干西側に方向を振りつつ（1～4号墳）一旦鞍部を経て南西側に派生する尾根筋（5～7・12～15号墳）を主体としながら、その一部は再び北西側に派生する尾根筋（8～11号墳）までの範囲に立地している。さらに後の周辺の地形観察から、古墳群は南へ伸びる2本の尾根上にも存在することが推定できた。墳墓群及び古墳群最高所に位置する1号墳からは久斗川流域の谷部から浜坂市街地、岸田川の河口付近までを一望することができる。

確認調査の結果、工事範囲内には区画溝、造り出された平坦部や主体部が複数検出され、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての土器やL字状石杵が出土したことから、12基以上の墳墓・古墳が存在することが推定された。さらに北側の急峻な尾根筋や丘陵裾の小谷内や平地部、久斗川東岸の平地にも確認トレンチを設定したが、遺物・遺構とも検出されなかった。

最高所にあたる東端から稜線を下った鞍部までを1区とし、鞍部を挟んで再び上がった後、北西に分岐する尾根稜線を含んだ丘陵裾部位までと南西方向の尾根の一部を2区として調査を行った。

調査区の現況は尾根筋に繁茂する雑木林である。樹木の生育により土壌化された表土層の直下には、流土層である褐色土層が一面に及んでおり、流土層を除去すると遺構検出面となる黄褐色の基盤層に至る。表土および流土層は尾根上では厚さ12～24cm程度、斜面では厚さ12～130cm程度堆積している。

1区は調査範囲内の最高所から1号墳、2号墳と呼称しており、続いて2区の調査範囲内最高所の5号墳から尾根を下って11号墳までを1年次に調査した。2区では2年次に尾根の奥や別の支尾根の調査を実施したことから、調査順に尾根奥から13・12号墳とし、南側の尾根に下って14・15号墳と呼称した。古墳番号が前後して間がとぶが、調査時点での呼称をそのまま踏襲して報告する。また、ここに報告する対田清水谷古墳群中には弥生墳墓も含まれているが調査時点での呼称のまま報告する。

第2節 1区の調査

1. 1区の概要

対田清水谷古墳群1区は、南東から北西へ緩やかに湾曲しながら下る急な尾根稜線を占めており、調

査区最高所の標高は調査前で67.1mを測り、1区最低所の4号墳裾で37.2mを測る。

以下、1区の尾根頂部の1号墳から尾根下方に向かって、2号墳・3号墳・4号墳の順で報告する。

2. 1号墳の調査 (第13・15図・写真図版12)

墳丘

尾根筋中腹平坦部分の突端部に立地し、調査区内の最高所に位置する。墳丘平面の検出最高部分で標高66.9mを測る。墳丘全体のうち、北西側半分強を検出した。標高65m付近に傾斜変換点が巡っており、その周囲の尾根筋の自然地形に比べて整った円錐形を呈することから円墳の形状を志向して墳丘斜面が成形されている蓋然性が指摘される。この場合の墳丘の検出最大長は10.2m、検出最大幅は6.0m、基底から墳丘平坦面までの高さは2.0mとなる。墳丘平坦面は東西方向にやや長い楕円形状を呈し、検出最大長6.7m、検出最大幅4.3mを測る。墳丘平坦面中心付近やや西寄りに木棺墓を1基検出した。

主体部

墓壇の平面形は長方形を呈し、尾根筋と直交する主軸方向を持つ。長さは2.52m、検出最大幅は1.48m、検出面からの深さは39cmを測る。墓壇の掘削は、基本的に1段掘りにより行われているが、北側法面において緩やかな面を持ち2段掘り状を呈している。北側以外の法面の傾斜は割と急である。

埋葬施設は木棺直葬とする。墓壇検出面より約23cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。墓壇の埋土は1～7層に分かれ、5・6層は裏込め土と考えられること、棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であったと推察される。長さが1.59m、幅47cmを測り、墓壇のほぼ中央に据えられるがわずかに西側に偏っている。棺として認識できた部分の深さは13cmを測り、その下に厚さ3cmほど敷き土と考えられる7層が認められる。頭位方向は不明ながら仮に棺幅がわずかながら広がっている東側とすれば、棺の主軸方向はN93.0°Eを指向する。棺痕跡の北側板外側に長径6～14cmの垂角礎が西半部に接して認められており、北側板の固定に用いられた可能性が考えられる。

出土遺物

墳丘平坦面及び墳丘斜面、墓壇内から遺物の出土は認められなかった。

3. 2号墳(墓)の調査 (第13・16図・写真図版13・14)

墳丘

尾根筋中腹以下の尾根筋上半(以下、尾根上半もしくは尾根下半とする)の西向き尾根線線上に立地し、この2号墳まで西北西を向く尾根筋がその直下で西南西に主軸方向を転じている。西北西側に向かって緩やかに傾斜する平坦面を削り出し、墳丘平坦面の検出最高部分で標高47.2mを測る。2号墳の直上で尾根筋の傾斜変換点となりそれ以上では岩盤が露出している状態で、墳丘平坦面をどの程度削り出しているのかは不明である。ただし、この尾根筋の傾斜変換点において尾根筋と直交する溝により明確に区画され、溝は長さ6.6m、最大幅80cm、深さは38cmを測り横断面形は逆台形を呈する。

平坦面の平面形は尾根筋下方の一边が丸みを帯びる台形状を呈し、長さ8.4m、幅6.0mを測る。墳丘平

埴面中央付近において木棺墓を1基検出した。

主体部

墓壇の平面形は長方形を呈し、尾根筋と平行する主軸方向を持つ。長さは2.97m、幅は1.51m、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは95cmを測る。墓壇の掘削は1段掘りにより行われ、各法面の傾斜は割と緩やかであるが北側では若干急な箇所も認められる。

埋葬施設は木棺直葬とする。墓壇検出の際に旧表土が落ち込んでいる状況は全く認められなかった。墓壇検出面の最も高いレベルから52cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。墓壇の埋土は2～11層に分かれ、粗砂を主体とするためきほど緊密度が高くないながらも8～11層は裏込め土と考えられること、棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であること及び長側板が小口板を挟んで端がはみだす棺痕跡が観察されたことからH字形の箱形木棺であったと推察される。長さが2.32m、幅74cmを測り、墓壇のほぼ中央に据えられる。棺として認識できた部分の深さは43cmを測る。頭位方向は不明ながら仮に棺幅がほんのわずかながら広がっている西側とすれば、棺の主軸方向はN83.5°Wを指向する。なお、小口板痕跡が観察される箇所の西側において、4層の上面に直径27cm大の礎が平たい面を下向きにして認められた。

出土遺物 (第47図・写真図版49)

墓壇中央付近やや南寄りの遺構検出面において高坏小片(3)が、墓壇内棺痕跡より上位の埋土から高坏(4)及び甕の小片が、棺裏込め土より器種不明の小片が、また、墳丘平坦面の南側の斜面において高坏が出土している(1・2)。

1・2は高坏脚部で、脚部の径から1は小型の、2は大型の椀形高坏となるか。1は脚柱部から裾部がラッパ状に開くタイプ。脚柱部の外面は縦方向のヘラミガキを施し、内面はユビナデを施す。2は脚裾部が若干内湾気味に収束し、端面が外面側から擦りつけられて内面側に余った粘土が若干盛り上がる箇所が認められる。外面は斜め方向のハケ調整ののち縦方向にヘラミガキが施される。

3・4は主体部出土の高坏坏部。3はやや丸みを帯びる坏部底面から口縁が屈曲して立ち上がる。外面は横方向のヘラミガキ、内面は縦方向のヘラミガキが施される。4は坏部の脚柱部に近い箇所で残存上半部は外面が横方向のヘラミガキ、残存下半部は磨ききれずに縦方向のハケ調整が残る。3・4は胎土や焼成がよく似通っており、同一個体となる可能性がある。

4. 3号墳(墓)の調査 (第14・17～19図・写真図版15～17)

墳丘

尾根筋上半の西向き尾根線縁上に立地し、西南西側に向かって緩やかに傾斜する平坦面を削り出す。墳丘平坦面の検出最高部分で標高42.4mを測る。3号墳の直上で尾根筋の傾斜変換点となり2号墳に至るまで割と急な斜面が続く状況から傾斜度が変化しており、墳丘平坦面をどの程度削り出しているのかは不明である。ただし、この尾根筋と直交する溝により明確に区画され、溝は長さ7.6m、中央付近の最大幅90cm、深さは31cmを測り横断面形は逆台形を呈する。

平坦面の平面形は北東コーナー部分のみが丸みを帯びる長方形を呈し、長さ7.1m、幅6.7mを測る。

墳丘平坦面中心付近において木棺墓3基及び土坑1基を検出した。位置的に中央を占める埋葬主体は認められず土坑も含めいわゆる空間分有型の配置をなしており、いずれの主体部の間どうしにも切り合いは認められない。なお、墳丘平坦面北北西側に位置する長円形プランの落ち込みについて、埋葬主体の可能性も視野にいれつつ土坑として検出し掘り進めたが、最終的に根拠と判断するに至った。墳丘平坦面の表土中において壺(9)及び甕口縁(5~7・11)、鼓形器台(8)、器台の小片が出土している。なお、5・7・8は確認調査時に出土しており、5・7の出土位置は第2主体部からSK301にかけて、8の出土位置は第2主体部の西端からSK301にかけての箇所該当する。

第1主体部

墓壇の平面形は西側が若干広くなる長方形を呈し、尾根筋と平行する主軸方向を持つ。長さは2.41m、幅は1.33m、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは95cmを測る。墓壇の掘削は1段掘りにより行われ、各法面の傾斜は急であるが底部付近では東西法面のみ若干緩くなる。

埋葬施設は木棺直葬とする。墓壇検出の際に旧表土が落ち込んでいる状況は全く認められなかった。墓壇検出面の最も高いレベルから50cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。墓壇の埋土は1~9層に分かれ、縦横断面ともに厚さ3cm程度の明黄褐色みを帯びた6層が皿状に緩やかに弧を描く状況から棺痕跡と考えられることから、舟底状木棺であったと推察される。長さが1.94m、幅68cmを測り、墓壇のほぼ中央に据えられる。棺として認識できた部分の深さは27cmを測る。なお、墓壇底に練まじりの黄褐色細砂(7~9層)を27~46cm敷いてから棺が据えられている。頭位方向は不明ながら仮に棺幅が若干広がっている西南西側とすれば、棺の主軸方向はN106°Wを指向する。

なお、棺痕跡の周囲の敷き土(7層)中の上半部において高坏部破片(14)が3箇所に分かれて出土した。これとは別個体の高坏部破片(12)と鼓形器台(13)が墓壇内1層中から出土している。

また、墓壇中央やや西寄りに長さ80.4cmの流紋岩の角礫(S1)が傾斜角75.5°で立った状態で確認された。角礫の下端が6層直上に接しており、下端から35cmほどより上部の風化が進んでいることから木柩45cmほどが地上に露出していたのが棺蓋等の腐朽に伴い棺上の土とともに落ち込んだ可能性が考えられる。

第2主体部

墓壇の平面形は隅丸長方形を呈し、尾根筋と平行する主軸方向を持つ。長さは2.78m、幅は1.38m、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは70cmを測る。墓壇の掘削は1段掘りにより行われ、各法面の傾斜は割と緩やかであるが北側は若干急である。

埋葬施設は木棺直葬とする。墓壇検出の際に旧表土が落ち込んでいる状況は全く認められなかった。墓壇検出面の最も高いレベルから33cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。墓壇の埋土は1~7層に分かれ、墓壇底に7~37cm敷かれた7層の検出状況から、割竹形木棺もしくは舟底状木棺であったことが推察される。長さが2.07m、幅69cmを測り、墓壇のほぼ中央に据えられる。棺として認識できた部分の深さは30cmを測る。頭位方向は不明ながら仮に棺幅がほんのわずかながら広がっている東北東側とすれば、棺の主軸方向はN75.5°Eを指向する。

出土遺物は、墓壇中央付近やや南西寄りの1層上部において甕小片(15)が、墓壇西半の1層中から鼓形器台と思われる破片(16)が出土している。

第3主体部

墓壇の平面形は西側が若干広くなる不整形を呈し、尾根筋と平行する主軸方向を持つ。長さは

2.35m、幅は1.21m、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは92cmを測る。墓壇の掘削は1段掘りにより行われ、各法面の傾斜は割と緩やかであるが南側では急な箇所も認められる。

埋葬施設は木棺直葬とする。墓壇検出の際に旧表土が落ち込んでいる状況は全く認められなかった。墓壇検出面の最も高いレベルから59cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。墓壇の埋土は1～6層に分かれ、5層は裏込め土と考えられること、棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であったと推察される。長さが1.51m、幅57cmを測り、墓壇の中央や南よりに据えられる。棺として認識できた部分の深さは30cmを測り、厚さ3cmほどの6層は棺底以下に敷かれたものと考えられる。頭位方向は不明ながら仮に棺幅が広がっている西側とすれば、棺の主軸方向はN89°Wを指向する。なお、墓壇内より遺物は出土していない。

SK301

第2主体部のすぐ西南西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、横断面形はボウル状をなす。長さ1.21m、幅99cm、検出面からの深さ39cmを測る。現代の根攪乱を受けているが1～3層に分かれ、1層中より壺の頸部から胴部にかけての破片(17)や甕の小片が出土している。

出土遺物 (第47・48図・写真図版49～51)

5～7・11・15は甕である。口縁の残存する5・6・11・15は下端から直立しつゝ上半で外傾し、器壁はスリムに仕上げられる。5・6は口縁の上端がよく揃み出され、下端も顕著に突出する。頸部内面の屈曲は「C」状となっている。口縁外面には板状原体のヨコナゲによって擬凹線を施されるが、6では上半部はナゲ消されている。7は摩滅が激しく口縁下端の揃み出しの強弱が不明であるが、口縁がスリムに立ち上がるようである。頸部の「C」状の幅が広く、体部はよくヘラケズリが施され薄く仕上げられている。11は口縁上端を欠損するも下端は揃み出され、頸部内面の屈曲は「C」状となっている。15は上端を欠損するも外反度が強く、下端部も揃み出される。頸部内面の屈曲は「C」状となっている。

9は二重口縁壺で、胴の張った扁球形の体部から頸部が直立し、口縁が斜め上方に折れ曲がって開く。底部は小さな円盤状を呈する。口縁は外反しつゝ外傾し、下方に大きく拡張する。頸部には細く横を向く突帯がめぐる。体部外面の上半部は横方向、下半部は縦方向から斜め方向のヘラミガキで仕上げられ、内面の上半部は横方向、下半部は縦方向に粗く削られる。

8・10・13・16は鉢形器台である。8・10は筒部から台部にかけての破片で、台部内面はヘラケズリで仕上げられる。13は受け部から筒部にかけての破片。16の筒部は短くなると思われる。受け部の内面はヘラケズリにより器壁を薄くした後ヘラミガキを施す。

12・14は第1主体部出土の高坏である。12は浅い鉢形の坏部から擬凹線を施した口縁部に至る途中で段を持つが退化して緩くなっている。14も大形の有段口縁を持つ高坏で、口径30.6cmに復元される。口縁部は大きく開き、外面に6条の擬凹線を施す。段は退化が進みきわめて緩い段となっている。外面は横方向のヘラミガキ、内面は縦方向のヘラミガキで仕上げられる。なお、外面のヘラミガキの施された箇所に、細かい砂粒が直線的に移動した痕跡が認められるが、ヘラケズリによるものか強いヘラミガキに伴う痕跡なのかは判然としない。

17はSK301出土の壺で、球形の体部上半から直立する長い頸部にかけて残存する。頸部の外面は横方向のヘラミガキが施され、体部との境に断面二等辺三角形となる突帯をめぐらせ突端には板状工具の端で斜めに刻み目を施す。体部上半外面には櫛描による直線文と波状文を交互に施文し、内面は横方向の

ヘラケズリが頭部付近にまで達し頭部との境界付近にはユビオサエをとどめる。なお、肩部に1箇所、外面からの打ち欠きによって穿孔されている。

S1は第1主体部墓壇内において立った状態で出土した標石。柱状節理する流紋岩を用い、図示した上部端に自然礫の折損した面を持つが全体的に加工した痕跡は特に認められない。長さ80.4cm、幅14.6cm、厚さ11.7cm、重さ21.4kgを測る。横断面形は上部で平行四辺形に近くなるほかは長方形を呈する。

5. 4号墳の調査 (第14・17図・写真図版18)

墳丘

尾根筋上半の西向き尾根稜線上に立地し、直上に位置する3号墳の墳丘斜面までは西南西を向く尾根筋がこの4号墳の墳丘平坦面から南西に主軸方向を転じすぐ下方は尾根筋の鞍部となっている。墳丘平坦面は尾根筋と直交する溝により明確に区画され、溝は長さ5.8m、最大幅54cm、深さは9cmを測り、横断面形は浅い皿状を呈する。墳丘平坦面の平面形は半分強ほどが調査区外に及ぶものの半月形を呈すると考えられ、検出最大長5.5m、検出最大幅3.5mを測る。なお、墳丘平坦面の低い側は最大幅約4.6mの範囲で最も厚い箇所ですら38cm盛土されている。1区の墳墓群・古墳群中で明確な盛土箇所が認められたのは、この箇所のみである。

墳丘平坦面の検出範囲からは埋葬主体は検出されなかったが、現地説明会後に調査区外で便宜的に通路としていた箇所において表土中に須恵器提瓶など複数の土器が露出していたのを発見し、調査後に調査区壁付近から切り土されることを踏まえて土器の配置状況について記録を行った。

土器は調査区壁の南1.1mの地点で露出しており、墳丘平坦面の尾根稜線やや南側の落ち際付近に該当すると考えられる。東側に須恵器提瓶(18)、西側に須恵器甕(19)が東西に並び、甕の南側に土師器高坏の脚部の破片(20)が認められた。いずれの土器も底部はほぼ同レベル上にあり、表土以下の安定した層の直上に配置されたものと考えられるが、同レベルにおいて精査を行ったものの直近には墓壇などの掘り方は認められなかった。

出土遺物 (第49図・写真図版52)

18は須恵器提瓶で、体部の直径が21.0cmの大型品で、厚さも15.1cmと分厚い。口縁を欠損するが頭部から緩やかに開き、肩部に環が2個1対で取り付く。体部の凸面側はカキメで仕上げ、平面側はヘラケズリの後周面に擬格子タタキを施した上、6本の沈線によるヘラ記号が刻まれる。

19は須恵器甕で口頭部は直線的に開き、胴部はなで肩の球形を呈する。口縁は内面直下を入念にユビナデし薄く仕上げ、頭部と口縁部の境界に段を設けその直上に沈線1条をめぐらす。頭部内面はヘラケズリを施し、外面は胴部上半から頭部にかけて板ナデを施す。外面胴部下半はヘラケズリの後にユビオサエ状の凹痕が多数認められ、入念にユビナデを施そうとしたものか。底面内面ではかろうじて不規則な凹凸が認められ、しぼり痕跡の可能性はある。

20は土師器高坏脚部で外面全体に赤彩されている。脚柱部が中実で外面は縦方向のナデで仕上げられ、内面は板ナデで粗く粘土を掻き取られている。

第3節 2区の調査

1. 2区の概要

対田清水谷古墳群2区は、1区からの尾根続きとなるが、一旦細く鞍部となることで分けられる。鞍部から再び高くなった標高43.45mの尾根頂部から稜線を通して、北西急斜面の尾根と、南西方向の尾根に分岐する位置を占める。北西尾根では標高21.7mの11号墳までを調査し、南西尾根では工事範囲内の14・15号墳を調査した。

2区調査区外の北斜面は非常に急な角度で切り立っており、裾部では横穴古墳等の存在を想定したトレンチが設けられて確認調査が実施されている。南側の斜面は主尾根となる南西尾根が南方向に向きを変えて伸びており、山裾まで比較的大規模な地形変化が認められる。さらに12号墳から南方向へ続く小規模で急角度を呈する尾根が認められ、地形観察では階段状の地形変化が認められる。この南側へ伸びる両尾根の間の谷地形に帯郭状の平坦部が15号墳上平坦部に続いて広がっており、墳墓群以外の地形変化が想定される。

平成25年度の調査では、2区最高所であった5号墳の一部から北西尾根下方の11号墳までを調査し、平成26年度の調査では5号墳およびその奥に立地する12・13号墳と、南西方向の尾根に立地する14・15号墳の調査を実施した。このため古墳・墳墓の番号は、調査順で付している。

古墳・墳墓は1区との間の鞍部から尾根頂部に上がる直前の13号墳、尾根頂部の12号墳、5号墳、6号墳は直線的な溝によって区画され、方形の墳形を有する。斜面となった位置に造られた半月形の7号墳から尾根が分岐し、北西方向に連なる8～11号墳、南西方向に続く14・15号墳はいずれもいわゆる階段状の墳墓となる。

また、2区では古墳・墳墓以外に後世の経塚や集石土坑が検出され、北西尾根下方の10・11号墳付近からは須恵器椀の蓋や糸切底部の土師器皿など(51～53)が出土している。さらに14号墳墳丘下層SK1401からは縄文時代に属すると思われる磨石、石皿(S8・9)が出土した。

以下、2区の主尾根最奥部の13号墳から西方の尾根下方に向かって、北西尾根、南西尾根の順で報告する。

2. 13号墳(墓)の調査 (第21・25図・写真図版19・20)

墳丘

対田清水谷13号墳は、2区の調査範囲内では最も東側に位置し、さらにその東側は丘陵鞍部へと大きく下ったのち、1区へと続いて再び上っていく。主尾根の方向が12号墳以西と若干変わり、やや北の方向へと曲がっている。

西側の12・5号墳の墳丘が高いため、西側への眺望は悪く、北側のみがかる。

墳丘の北側部分のみの調査となったが、南側の調査区外は1m程度で急斜面となり、あまり墳丘は広がらない。東側の丘陵鞍部も法面対策工の対象外である。

東側は明瞭な区画の溝は検出されなかった。西側の12号墳との間には上幅1.1m、底幅0.8m、深さ

0.14m程度の浅い溝が設けられていたが、地山面では小段程度の西からの落ちとなる。墳丘は東西約7mの方形墳と思われる。墳丘上面の平坦面は5×2.5m以上の規模をもつ。検出時の墳頂平坦面の標高は42.75mを測る。遺物は全く出土していない。

墳頂部平坦面に2基の木棺直葬の主体部を検出した。

第1主体部

墳頂部平坦面の東半部に尾根筋に平行する方向に長軸をもつ木棺直葬の主体部を検出した。墓壇の南半部は調査範囲外へと続いており、全体を明らかにすることはできなかった。

墓壇の長軸方向の長さは2.83m、幅は1.15m以上、深さは0.96mを測る。墓壇底は尾根の傾斜に合わせ緩やかに東へと下っている。長さ2.35m、幅0.65m以上の箱形の木棺を納めていたものと思われるが、他の墳墓の墓壇埋土と比べると堆積状況が単純であり、土壌化の低い埋土である。そのため木棺直葬主体部以外の遺構の可能性も考えられたが、傾斜があるものの底を平らに造っていることから木棺直葬の墓壇と判断した。

掘り方の北半部は、0.42mの深さに長軸方向に幅0.3mの段を設けており、さらに掘り方の北側肩部はやや傾斜をもって造られている。

遺物は出土していない。

第2主体部

第1主体部の西側で土坑状の掘り込みを検出した。幅1.1m、長さは0.5m以上の規模で、深さは0.35mと浅いものである。尾根筋と直交する方向に長軸方向をもつ木棺直葬と思われるが、棺の痕跡は確認できなかった。

墓壇掘り方は第1主体部と切り合っている可能性があるが、調査区内では明らかではない。

遺物は出土していない。

小結

2区の尾根状では最も奥に入った位置を占める墳墓で、主体部と思われる掘り込みを2基検出した。墳丘、墓壇ともに遺物が全く出土していないことから、所属時期は不明である。

3. 12号墳(墓)の調査 (第21・26・27図・写真図版21・22)

墳丘

対田清水谷12号墳は、2区の範囲内では最も標高が高く、検出面で43.45mを測る。但し西側は尾根頂部が5・6号墳まで続いており、見晴らしは北側の方が開ける。12号墳の南側には調査区外に急斜面ではあるが、尾根稜線が延びており、地形観察では7カ所程度の小規模な階段状の地形変化が観察できる。このことからこの南向きの尾根上にも墳墓・古墳群が広がる可能性が高い。但し、この南向きの尾根の西側の谷部に幅約6m、長さ約20mの半月形の平坦部が広がっており、さらに西側の南西尾根の15号墳にまで続いている。谷地形を造成して墳墓・古墳を築くことは弥生時代、古墳時代ではあまり行っていない。この谷内の平坦部が後世のもの、たとえば中世寺院などの造成であったならば、先述の尾根の階段状の地形変化も後世のものの可能性も考慮される。

12号墳と5号墳との間には上幅1.25m、底幅0.4m、深さ0.3mの直線的な溝が掘削されて明瞭な区画を

もつが、尾根東側の13号墳との間には上幅1.1m、底幅0.8m、深さが0.14m程度の溝状の落ちが設けられていたが、地山面までは掘り下げておらず、わずかな段を有するに過ぎない。12号墳は東西7.5m、南北7.7m程度の方形墳と思われ、墳頂部の平坦面の範囲は6.8×5mを測る。

墳頂部上面には3基の木棺直葬の主体部を検出したが、墳丘全体が変成を受けた土質であるため、人為的な掘削埋土の判別が著しく困難であった。

墳頂部表土下や、南斜面裾の地山直上から弥生土器片が数点出土し、墳頂部平坦面から主体部となる掘り込みを検出した。

第1主体部

墳頂部平坦面の西半部に尾根筋に平行する方向に長軸をもつ木棺直葬の主体部を検出した。墓壇の長軸方向の長さは2.15m、幅は1.73mを測る。長さ1.7m、幅0.53mの箱形の木棺を納めていた。掘り方の底の北半部には、長軸方向に深さ0.2mの高さに0.7mの幅で段を設けている。

上面の表土下から土器片が出土したが、棺・掘り方埋土からは遺物は出土しなかった。

第2主体部

第2主体部は尾根筋に長軸方向を合わせるが、第1主体部とは平行にならない。墳頂部平坦面の北端部に位置している。墓壇は長軸方向に約2m、幅は1.4mで、深さは0.35～0.85mを測る。掘り方北側では検出面から0.15mの深さに0.3mの幅で段を設けており、南側では傾斜をもって掘削されている。長さ1.38m、幅0.51mの箱形の木棺を納めていたものと思われる。

遺物は出土していない。

第3主体部

第1主体部の東側、第2主体部の東小口付近から墳頂平坦部全体に土の乱れが看取りでき、主体部の存在が考えられたが、上面では明瞭な木棺直葬の痕跡は確認できなかった。複数回にわたって埋土状の土層を掘削した結果、尾根筋と直交する方向に長さ1.3m、幅0.35mの箱形の木棺を納めたと思われる落ち込みの底付近を検出した。棺底までの深さは0.46mを測る。

出土遺物は確認されなかった。

出土遺物 (第49図・写真図版52)

21は墳頂部から出土した口縁部の破片で、全体の1/12程度しか残っていない。口径13.3cmの鉢か甕の口縁部が復元できる。内面にはヘラミガキが施され、内外面ともヨコナデによって仕上げられる。

22は墳丘南裾から出土した。墳丘上から転落したものであろう。弥生土器高坏の破片で、径の1/4残存している。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデによって仕上げる。

小結

12号墳は、2区最高所に造られ、尾根を直線の溝で画した方形の墳丘をもつ。墳丘上から出土した土器から弥生時代後期の台状墓であると考えられる。木棺直葬の主体部を複数有している。

4. 5号墳(墓)の調査 (第21・28～31図・写真図版23～30)

墳丘

対田清水谷5号墳は、2区の範囲内では12号墳に次いで標高が高く、検出面で43.38mを測る。また、東に奥まった12号墳より西側への眺望のきく位置を有している。その占地も含めて、いわゆる階段状の墳墓ではなく、尾根両端を溝によって区画している点から見ても、2区内では最もよい位置を有している。

この5号墳から12号墳にかけては墳丘全体が赤褐色の極細砂に灰色の軟質岩粒の混じる変成を受けた土質であり、東西方向及び南北方向の断層によって変成を受けたものと思われる。このため人為的な掘削埋土の判別が著しく困難であった。

前年度に調査された6号墳との間には上幅0.55m、底幅0.35m、深さ0.2mの直線的な溝が掘削されており、同じく尾根奥側の12号墳との間にも上幅1.25m、底幅0.4m、深さ0.3mの直線的な溝をもって区画されている。このため5号墳は東西6.5m、南北は約8mの方形墳となり、墳頂部上面の平坦部の範囲は5×4mとなる。

墳頂部上面には3基の木棺直葬の主体部をもち、さらに墳丘南西斜面に1基の木棺直葬が構築されている。墳丘斜面に主体部が構築されているのはこの5号墳のみである。また、墳頂部の北西に1基の経塚(SX501)が構築されていた。

経塚(SX501)の調査 (第28・29図・写真図版28～30)

集石

対田清水谷古墳群2区、5号墳墳頂平坦面の北西部で検出された。調査前から丘陵上では不自然な円礫が複数個、腐植土の下から見え隠れしており、明らかに人為的に持ち込まれたものであることは明らかであった。前年度調査で検出された9号墳上の中世墓(SX901)との共通性が指摘でき、経塚、あるいは中世墓の存在が想定された。

腐植土等を除去すると、立木の根元から大小の円礫・垂角礫30数点が集積されたような状態で、1.1×1.3mの範囲で尾根筋の方向にやや長く検出された。検出された礫は尾根上では採取できないもので麓の河川や海岸から搬入されたものである。木の根の影響が考慮されるが、この集石は丁寧に積み上げたものではない。長径が50cmもあるやや角張った大型の石の存在から、下部の構造物の可能性が考えられた。

集石の下には土壌化した暗褐色極細砂が東西1.63m、南北1.49mのほぼ円形の範囲に広がっており、除去すると、集石はすべてこの土壌化層の上に乗っており、土壌化層も深さ14cm程度の浅い土坑内に収まる事が判明した。その下層は墳墓の墓壇(第1主体部)の掘り方埋土と考えられたため、集石土坑を完掘したものとは判断し、記録保存の後、下層の墓壇の調査に移行した。集石土坑からは遺物は出土していない。

石室

木棺の痕跡を確認するために墓壇埋土を一段掘り下げたところ、再び板石が検出された。この時点では小型の箱式石棺の可能性も考慮されたが、墓壇の中心から偏っており、上面の集石土坑の直下にあることから集石土坑と同一の遺構と判断した。その掘り方を確認すると、下層墓壇掘り方の内側に1.25×

1.03mの隅丸方形の土坑が検出できた。板石はその土坑の北西隅に偏って置かれており、但馬地域で類例の多い「横口式石室」の構造をもつ経塚であることが想定された。石室周辺は樹根による影響も少なく、盗掘等を被った痕跡も認められなかった。

土層を観察しながら土坑を掘り下げると、やや大ぶりの亜角礫の板石を方形に立てて囲んだ上に同様の石を乗せて天井を高架した石室状の構造物が検出された。石室の東壁と天井石の隙間には更に石を積み上げており、東壁前面の左右の隙間には細長い石を立て掛けて置き、さらにもう一石板石を置いて東側を丁寧に塞いでいることがわかった。この石室は土坑掘り方の北西隅に構築されていることから、幾重にも石で塞いでいる東部側が横口式石室の閉塞部と思われた。

ところが、天井石が張り出しているため、土坑掘り方との隙間が狭く不明であった石室西側の壁を構成する石が存在しないことが判明した。つまり西側が開いた石室が構築されていることになり、また東壁を構成する板石が32×32cm、厚さ10cmと最も厚く形も整っていたことから、築造当時の閉塞方位の判別がつきにくくなった。類例を調べると、但馬や丹後地方のこの種の石室には、奥壁の石を持たないものも存在し、閉塞石のないものはほとんどない。また、閉塞石が大きな石を用いる例が多いことが知られており、検出されたものは奥壁のない石室で東側が閉塞部と断定した。

西側からの調査は狭く不可能であったため、天井石を取り外して石室内部の調査をおこなった。石室は土坑床面をさらに8cmほど掘り込んだ56×43cmの長円形を呈する土坑中に据えられており、比較的薄い底石は方形を呈しておらず、側石に接してはいなかった。石室の内法は南北0.25m、東西は底石の端まで0.3m、高さは0.3mを測る。

石室内部は小ブロックを含んだ極細砂質の土砂で埋まっており、東壁石（閉塞石）に沿ってやや倒れるように銅鏡が鏡面を東に向けて出土した。底からはかなり浮いた状態で出土である。土師器小皿は銅鏡より西寄りの北壁石近くから、ほぼ底石に近い高さで出土した。また、円礫2点が石室やや西の南壁石に沿った位置の底石直上から出土している。平たい方の円礫（S6）は壁石に平行に立った状態で出土した。

東壁を構成する板石（閉塞石）の両脇の隙間を埋めるように外側に置かれた石を外すと、その下から銅鏡が出土した。東の板石は南北の壁石の小口前面に立てられており、両壁石に挟まる状況ではないことから閉塞石の可能性が高くなった。この東閉塞石を取り除くと、さらにその下から銅鏡（大観通宝）が重なった状態で合計4枚が出土した。銅鏡は東閉塞部下以外からは出土していない。

また、底石の西下には土坑底が円形に黒化した部分があったが、炭粒などは確認できなかった。

石室内外からは経筒・外容器は出土しなかったが、銅鏡や円礫の出土状態は石室の中央に何らかの物体が存在していたことをうかがわせる。おそらく京都府大道寺経塚で出土したような竹製の有機質経筒であった可能性が高い。鏡・土師器小皿・円礫に囲まれた位置に納められていたであろう。

経塚出土遺物（第53図・写真図版57）

土師器小皿・銅鏡・円礫が石室内から、銭貨が閉塞石の下から出土した。上面の集石や土坑内埋土からは遺物は出土しなかった。

銅鏡（M2） いわゆる和鏡である。鏡面には和紙のような繊維が付着しており、紙に包んだ状態で埋納したものである。鏡面は緑青錆をふくが平滑で、付着した紙の繊維も白い。直径11.4cm、やや外傾気味に直立した周縁の厚さは0.75cmを測り、側面は削りによって仕上げられたためか中膨らみ気味

にわずかに湾曲する。周縁の上幅は0.45cmを測る。

鏡背は、円形の鈕孔をもつ鈕を中心に文様を配している。鈕の周囲に細い界線を巡らせ、その外側に珠文状の花葉が退化した文様を並べて直径2.1cmの鈕座とする。直径7.7cmの位置に太めの界線を巡らせ、内区と外区を分ける。文様は内外区を意識しながらも、外区の花文や州浜文は界線に切られながら内区へと続いている。

画面下に州浜と流水を表現し、州浜には明瞭ではないが草や葦が生えている様子を表現している。外区下部には「く」字状の形骸化した水波文を描き、州浜の上には葦の穂が表現される。内区には州浜の右方から2本の葦が伸び、左へ5弁の花6と5葉と3葉の葉を配した植物文を左方の州浜直上まで伸ばしている。5弁の花には各弁端に切り込みがあり、山吹の花を表現したものである。州浜の上の鈕座と植物文に囲まれた位置に2羽の鳥が向かい合って飛んでいる。画面上方の外区には内区と同様の植物文を配しているが、右半部は右に流れている。花文を切って界線を巡らせており、一部花文が歪んでいる。

典型的な和鏡の鏡胎をもつ厚縁鏡である。その鏡背に鋳出された文様から「州浜山吹双鳥鏡」と呼称することができる。鏡背の文様は密度が高く、植物文に押されて双鳥文は鈕左下の州浜近くまで下る。花葉座の葉頭は珠文化し、水波の文様なども形骸化している。

銭貨（M3～8） 石室東周辺の石をはずすと、石の下から銭貨が出土したが、破片の状態で出土したものもあり、本来の総数は不明である。石室の閉塞石に立てかけてある石の下から破片が1点出土。他の4点は石室閉塞石の板石下から出土し、内2枚は重なっていた。石室閉塞の直前に撒かれたものであろう。いずれも北宋銭で、「漣寧元宝」（M3・4）「大観通宝」（M5～7）共に真書で文字が書かれている。漣寧元宝の初鋳年は1068年、大観通宝の初鋳年は1107年である。

土師器小皿（54） 手づくねで作られ、口径7.4cm、器高1.5cmを測る。精良な胎土を持ち、7.5YR7/6 橙色のやや軟質の焼成である。外面にはユビオサエを残して内面ともナデによって仕上げられる。口縁端部は剥離している。底部外面はわずかに窪み、明瞭な面を持たない。体部外面に明瞭な面や底部との境に稜線を持たない。灯明皿として使用したような痕跡は現状では認められなかった。

円鏡（S6・7） 石室の南壁石に近い底石の上から2点の円鏡が出土した。共に白色に近い花崗岩の河原石である。長石が多く、石英は不透明である。黒～暗緑色の雲母がやや目立つ。近隣では採取できないとされ、選ばれて搬入されたものであろう。2点は形は違うが、表面は非常に平滑となる均整のとれた石が選ばれている。円鏡の出土では、山形県別所山経塚から保延六年銘陽鈔銅製経筒とともに卵形石が出土している例がある。

各円鏡の表面を赤外線カメラで観察したが、墨書等は認められなかった。また、表面の小さな窪み内に赤色の物質が残存していることが観察されたため、朱書による経石の可能性を考慮して蛍光X線分析装置を使用して分析したところ鉄（Fe）は検出されたが、水銀（Hg）は検出されなかった。

S6は、扁平で平面形が長円形を呈した8.55×6.7cm、厚さは2.8cmを測る円鏡である。一方の平坦面の中央がより平滑で、少し凹み気味になるが、使用によるものかは不明である。

S7は、平面形が長円形で断面がほぼ正円形を呈しており、5.75×4.8×4.4cmを測る。使用痕は認められない。

小結

対田清水谷経塚は、丘陵尾根頂部の見晴らしの良い5号墳墳丘上に構築され、隅丸方形の堅穴の一方

に閉塞部を東側にもつ小横口式石室を有し、埋め戻した後、地表に礎を積んだ構造をもつものである。石室内に和鏡・土師器小皿・円礎を配し、東側を閉塞する時に銅銭を撒いている。經典本体・経筒・外容器は出土しなかった。

出土した銅鏡と土師器小皿から13世紀代のものと思われる。

主体部の調査

第1主体部

上面に構築された経塚の調査を行った後、その下面で検出した第1主体部の調査を実施した。第1主体部は東西の尾根稜線の方に長軸方向を揃えており、墳頂部平坦面のほぼ中央に位置している。

墓壇は長軸方向2.19m、幅は1.4m、深さは0.91mを測る。北側壁は樹根及び経塚のため不明瞭である。南側壁下部は0.15mの高さに幅2.2mにわたって掘り残されており、木棺痕跡とほぼ一致することから、木棺を設置する際の支持として掘り残されたものであろう。また、墓壇内に降りる足場ともなる。木棺の痕跡は長さ1.3m、幅0.5mの規模で箱形で検出された。

棺側埋土中の棺痕跡検出レベル付近から弥生土器破片が出土した。棺側の南側に集中しており、出土した高さは墓壇掘り方底から0.2～0.3mとやや幅がある。甕及び脚部の2個体分が復元できたが、破片はすべて揃っているわけではない。棺内から副葬品等は出土していない。

第2主体部

墳頂部平坦面の東端、第1・4主体部掘り方の東小口に接するように、尾根筋に直交する方向に長軸をもつ。墓壇の長軸方向の長さは2.13m、幅は北側で0.82m、南側で0.9mを測り、南側がやや広い。0.9mの深さまで掘削される。長さ1.25m、幅0.35mの箱形の木棺を納めていた。

墓壇は北側の小口をやや傾斜をつけて掘削し、棺も南側に寄せるように納めている。両側面の壁はほぼ垂直に掘削されており、他の主体部よりは幅が狭い。

遺物は出土していない。

第3主体部

墳丘斜面に造られた主体部は今回調査できた対田清水谷古墳群中ではこれが唯一の例である。墓壇に伴う造成の範囲は狭く、この1基のみで独立した古墳とは認めがたいことから、5号墳に含めることが妥当と思われる。墳頂部平坦面から0.4m斜面下方から掘り込んでいる。5号墳墳頂部の平坦面にはまだわずかながら余裕があり、あえて墳丘斜面に構築したのかは不明である。

表土掘削時にこの地点には黒色土層が堆積しており、その土層中から土師質の土器破片が出土した。黒色土層を除去すると、等高線に沿って台形状に一段掘り下げた成形面が検出された。成形面は、斜面の傾斜に合わせて一段掘りさげられており、水平面を造り出すものではない。

2.8×1.45mの範囲に成形された下端側に、長さ2.7m、幅0.65mの木棺の掘り方を掘削し、長さ2.25m、幅0.34m、深さ0.5mの箱形の木棺を納めていたようである。木棺及び掘り方の小口部は地山層の風化崩壊が著しく、本来はもっと短いものかもしれない。棺内からは遺物は出土していない。

上面の黒色土層から高坏2点(25・26)が破片の状態ですら出土した。

第4主体部

第1主体部掘り方を完掘した際に北壁と西壁の一部が地山風化土よりもろい土質であることが観察できた。北壁のほとんどは樹根により大きく攪乱されていたが、精査の結果、さらにもう1基主体部が

存在することが判明した。この主体部は土層の状態から第1主体部によって墓壇の一部が切られていることがわかった。第1主体部掘り方は第4主体部の木棺部分には到っていない。

第4主体部の墓壇は、第1主体部掘り方の西壁にその一部が残存しており、幅1.65m、長さ2.2mで、深さは0.46mと第1主体部よりは浅い。第4主体部の木棺は掘り方の北側に寄せるように据えられており、当初から第1主体部と併設した位置を意識して構築されているようである。木棺の痕跡は底がやや湾曲するが箱形であろう。1.75×0.52mの規模を測る。

北側の棺側や棺底付近から土器片が数点出土した。第1主体部は前述のように第4主体部に並行して第4主体部の南壁を掘り抜く形で設けられている。また、北西部の一部の上半分は経塚によって掘削されている。第4主体部の木棺には及んでいないが、その掘り方の一部を掘削している。そのため第4主体部の棺側に入れられた破碎土器の破片が掘り出され、あるいは第1主体部埋土中に混在した可能性が考慮された。結果として、第1主体部と第4主体部から出土した土器相互の接合関係は認められず、土器そのものも焼成などが違っており、別個体である。先に掘られたと考える第4主体部では棺北長側辺に、第1主体部では棺南長側辺に土器が入れられており、最も離れた位置に当たるのは恣意的である。

棺内から副葬品等は出土していない。

出土遺物 (第49図・写真図版53)

5号墳と12号墳とを画する溝から脚部片が出土しているが図化できなかった。

第1主体部埋土上層からは脚部片(24)が出土しており、棺上にも土器が供えてあったことが窺われるが、経塚による掘削のため破片点数は著しく少ない。高坏あるいは器台の脚部1/6の破片で、接合できない別の破片に直径0.7cm以上の円形の透孔が残る。外面は縦方向のヘラミガキを施し、内面は横方向のハケを施して、端部をヨコナデにより仕上げる。外面には黒斑が認められる。

棺側及び一部棺内から甕(23)が破片の状態で出土した。棺内の棺底レベルからは3点ほどの破片が出土した。底部に接合できる直上の部分と、同様に別の底部破片に接合できた胴部下半部の破片である。

棺側では主に南側の長側辺の約25×100cmの範囲で埋土中から出土している。直近の棺底から約12cmの高さで出土しており、出土高低差はその上の10cm程度に収まる。底部の破片は棺側の東半部から出土しており、小さい方の底部破片は最も東の墓壇掘り方壁に接するように出土している。口縁部の破片はその西側の中央付近と、直接接合できない破片がさらに西に少し離れて出土した。

北側の棺側では東半部から甕口縁部が1点出土しており、南側の西端から出土した口縁部と接合できた。土器の縦方向に接合できる破片が近接して出土する傾向が見られる。

棺底付近から出土した土器片は、棺上あるいは棺に接してあったものが木材の腐朽とともに内部へ落ち込んだものか、または破碎土器を配する際に棺の蓋が開いており、一部が 떨어져 落下したものであろう。いずれにせよ棺内出土の土器の少なさは、棺の部分をあえて避けて配された結果と考えられる。

土器が出土した高さが箱形の木棺の上面とすれば浅すぎるため、木棺の側板を据えて土を入れ固定できた程度の高さであろう。

土器の破碎状況は土圧や出土以降の破碎もあるが、最大のものは底部から胴部下半部の破片で、口縁部の破片が続く。底部も半分に割れており、断面は風化していた。

出土した土器(23)は弥生土器甕であり、底部から口縁部まで残存しており接合できたが、1個体分は揃っておらず、75%程度の残存と思われる。口径14.4cm、器高17.9cm、底径3.2cmに復元できた。厚み

のある底部は一部に一方方向のナデを施している。外面の下半部は縦方向の、上半部は横方向のハケで調整しており、頸部から口縁部内外面はヨコナデによって仕上げる。内面の下半部は縦方向の、頸部下は横方向のヘラケズリを施している。

外面の一方には、口縁部から胴部中央にかけて大きく黒斑があり、内面の対向する位置にも黒斑が認められる。胴部下半には煤が付着しており、特に下から1/3の高さに帯状に付着している。煮炊具として使用されたものと思われるが、内面には焦げ等の痕跡は確認できなかった。

第3主体部上面の黒色土層から25・26の高坪2点が出土した。2点とも1/4程度の残存率である。両者とも口縁部・脚柱部・脚端部の破片は接合できないため図上復元をおこなっている。25は口径15.4cm、器高11.7cm、底径11.2cmを復元した。黒色の雲母片が見える肉厚の胎土をもつ。端部を外反させた口縁部はヨコナデによって仕上げ、稜をもたずに湾曲する坏部内面には横方向のハケ様の痕跡が残る。脚基部外面にも平行した工具の痕跡が残る。まっすぐ開いて伸びる脚端部はヨコナデで丸くおさめている。内面には横方向のヘラケズリを施す。

26は内湾しながら大きく開き、いったん外へ開いた後、外方へ開く口縁部へと続く。屈曲部の稜は甘い。内外面ともヘラミガキで調整し、口縁部はヨコナデによって仕上げる。緩やかに広がる脚部には円孔があり、内面下半はハケ調整が残る。外面はヘラミガキで仕上げる。

28・29は図化できなかったが、第4主体部棺底付近から出土した小型壺体部と直口壺口縁部破片である。

小結

5号墳は尾根稜線を直線的な溝で区画した方形の台状墓で、4基の木棺直葬の主体部が検出された。第1主体部と第4主体部の墓壇内や、第1主体部と第3主体部の墓壇上から土器が出土した。墳丘上には経塚が築かれている。

5. 6号墳(墓)の調査 (第22・32・33図・写真図版31・32)

墳丘

尾根筋下半の西向き尾根稜線上に立地し、西北西を向く尾根筋から緩やかに傾斜する平坦面を削り出し、墳丘平坦面の検出最高部分で標高42.5mを測る。12号墳からならかな尾根上緩斜面が続く状況で、墳丘平坦面をどの程度削り出しているのかは不明である。ただし、この尾根筋と直交する溝により明確に区画され、溝は長さ3.4m、最大幅57cm、深さは17cmを測り横断面形は低い逆台形を呈する。

平坦面の平面形は南西コーナーから西側の辺にかけて円弧を描く四角形状を呈し、長さ7.5m、幅5.7mを測る。墳丘平坦面中心付近において木棺墓を3基及び土坑2基を検出した。位置的に中央を占める主体部は認められず土坑も含めて空間分有型の配置をなしており、いずれの掘り方どうしにも切り合いは認められない。墳丘平坦面の第1・2主体部の間の表土中から甕の胴部片が、墳丘斜面の表土中において鼓形器台(30)が出土している。

第1主体部

墓壇の平面形は隅丸長方形を呈し、尾根筋と平行する主軸方向を持つ。長さは2.81m、幅は1.29m、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは81cmを測る。墓壇の掘削は、横断面では木棺部分がやや低くなっているが基本的に1段掘りにより行われ、北側法面の傾斜のみ急であるが他の法面の傾斜は割と緩

くなっている。

埋葬施設は木棺直葬とする。墓壇検出の際に中央付近やや北寄りに長円形に旧表土が落ち込んでいる状況が認められた。墓壇検出面の最も高いレベルから61cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。墓壇の埋土は1～8層に分かれ、5～8層は裏込め土と考えられること、棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であったと推察される。長さが1.22m、幅59cmを測り、墓壇の中央やや北寄りに据えられる。棺として認識できた部分の深さは20cmを測る。頭位方向は不明ながら仮に棺幅が若干広がっている東南東側とすれば、棺の主軸方向はN114°Eを指向する。なお、墓壇内から遺物は出土していない。

第2主体部

墓壇の平面形は長方形を呈し、尾根筋と平行する主軸方向を持つ。長さは2.22m、幅は1.07m、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは62cmを測る。墓壇の掘削は西北西方向にステップ状の平坦面が認められることから2段掘りで行われる。北・東・南の3辺及び西辺の1段目の各法面の傾斜は急である。

埋葬施設は木棺直葬とする。墓壇検出の際に中央付近に長円形に旧表土が落ち込んでいる状況が認められた。墓壇検出面の最も高いレベルから41cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。墓壇の埋土は1～9層に分かれ、8・9層は裏込め土と考えられること、棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であったと推察される。長さが91cm、幅38cmを測り、墓壇の中央東南東寄りに据えられる。棺として認識できた部分の深さは21cmを測る。頭位方向は不明ながら第1主体部で推定されるのと同様に東南東側とすれば、棺の主軸方向はN108.5°Eを指向する。なお、墓壇内から遺物は出土していない。

第3主体部

平面形は北側が若干広くなる長円形に近い隅丸長方形を呈し、尾根筋と直交する主軸方向を持つ。長さは2.53m、幅は85cm、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは51cmを測る。横断面形はV字形に近いU字状を呈し、底部も南側から北側に向かって傾斜することから初年度の調査の際には溝と認識されたが現段階では埋葬主体の可能性を想定している。埋土中から内外面にヘラミガキの施された高坏の受け部または器台上半部の破片と、脚部の破片(31)が出土している。

SK601

第1主体部のすぐ北西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、横断面形はボウル状をなす。長さ69cm、幅63cm、検出面からの深さ37cmを測る。1・2層に分かれ、壘口縁(32)や壘底部の小片が出土している。

SK602

第2主体部のすぐ東南東側に位置する。平面形は楕円形を呈し、横断面形はボウル状をなす。長さ72cm、幅55cm、検出面からの深さ25cmを測る。1・2層に分かれ、遺物は出土していない。

出土遺物 (第50図・写真図版53)

30は鼓形器台のくびれ部から受け部にかけての破片である。やや直立気味となる受け部外面には櫛描が2段めぐり、その間に竹管状のスタンプを施す。内外面とも器表面の摩滅が著しく調整は不明である。

31は第3主体部出土の高坏脚部裾で、端部付近は肥厚させ端面を設ける。外面は縦方向のヘラミガキで丁寧に仕上げられ、内面はハケ調整で肥厚する端部付近はヨコナゲが施される。

なお、同じ第3主体部から器台の口縁部付近の破片が出土しており、拡張した口縁部に退化した擬凹線がめぐり、内面に横方向のヘラミガキが施されている。この他にタタキを板ナデでナデ消した甕の頭部から肩部にかけての破片も認められる。

32はSK601出土の甕の口縁で、上下端を狭み出しわずかに外傾し若干半気味となる。内外ともに器表面の磨減が著しく調整は不明ながら、外面には櫛状の工具で擬凹線が施される。

6. 7号墳(墓)の調査 (第22・34～36図・写真図版33～36)

墳丘

尾根筋下半の西向き尾根稜線上に立地し、この7号墳では西北西を向く尾根筋が下方の8号墳で北西向きに、及び14号墳で西南西向きと二股に分かれて主軸方向を転じている。7号墳は尾根筋から北西西側に向かって緩やかに傾斜する平坦面を削り出し、尾根筋と直交する溝により明確に区画する。溝は長さ8.7m、最大幅67cm、深さは17cmを測り横断面は浅い皿状を呈する。

墳丘平坦面の平面形は半円形を呈し、長さ11.2m、幅6.2mを測る。墳丘平坦面の北東側を除く範囲において木棺墓を5基検出した。埋葬主体は古い方から、第3主体部→第2主体部(南主体部)・第4主体部→第2主体部(北主体部)→第1主体部の順での切り合いが看取される。なお、墳丘平坦面から斜面にかけての表土から甕口縁(34)及び壺肩部(33)の破片が出土している。

第1主体部

墓壇の平面形は長方形を呈し、尾根筋と直交する主軸方向を持つ。長さは2.51m、幅は1.43m、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは99cmを測る。墓壇の掘削は1段掘りにより行われ、各法面の傾斜は急であるが底部付近では東法面及び南法面のみ若干緩くなる。

埋葬施設は木棺直葬とする。墓壇検出の際に中央付近に長円形に旧表土が落ち込んでいる状況が認められた。墓壇検出面の最も高いレベルから50cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。埋土は1～16層に分かれ、8～16層は裏詰め土と考えられること、棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であったと推察される。長さが1.55m、幅69cmを測り、墓壇のほぼ中央に据えられる。棺として認識できた部分の深さは49cmを測る。頭位方向は不明ながら仮に棺幅がほんのわずかながら広がっている南西側とすれば、棺の主軸方向はN156°Wを指向する。

なお、墓壇内の遺構検出面(1層上面)及び3層中より甕口縁の破片が1点ずつ出土している。

第2主体部

木棺墓を埋葬主体とする南北2基の墓壇が切り合っており、いずれも平面形は長方形を呈し尾根筋と平行する主軸方向を持つ。両者の墓壇が切り合いながらも木棺痕跡がほぼ並列し、さらに南側の木棺痕跡を北側の墓壇が切らず北長側板のすぐ脇をかすめて掘削していることから、両者が近接した時期に埋葬された可能性を想定し、ここでは便宜的に一つの埋葬主体に含めて報告する。北主体部墓壇は長さ2.70m、検出最大幅は1.38m、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは1.16m、南主体部墓壇は検出最大長2.42m、検出最大幅は1.02m、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは93cmを測る。墓壇の掘削は北主体部が両側板の脇にテラスを設ける2段掘り、南主体部では北側板のみ脇にテラスを設ける2段掘りにより行われ、北主体部の西側法面を除いた各法面の傾斜は急である。

埋葬施設は南北両主体部ともに木棺直葬とする。墓壇検出の際に旧表土が落ち込んでいる状況は全く

認められなかった。兩主体部ともに墓壇検出面の最も高いレベルから73cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。北主体部の墓壇埋土は1～8層、南主体部では9～13層に分かれ、それぞれ8層及び12・13層は裏込め土と考えられること、棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることからいずれも箱形木棺であったと推察される。北主体部では長さが1.73m、幅51cm、南主体部では長さが1.72m、幅48cmを測り、ほぼ同規模に掘られている。北主体部では墓壇のほぼ中央に、南主体部では中央付近やや南寄りに据えられる。棺として認識できた部分の深さは北主体部で43cm、南主体部で20cmを測る。頭位方向は不明ながら北主体部では墓壇幅が、南主体部がほんのわずかながら棺幅が広がっているそれぞれの東側とすれば、棺の主軸方向は北主体部でN103.5°E、南主体部でN99°Eを指向する。いずれの墓壇内からも遺物は出土していない。

第3主体部

墓壇の平面形は長方形を呈し、尾根筋と直交する主軸方向を持つ。長さは2.99m、幅は1.81m、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは93cmを測る。墓壇の掘削は1段掘りにより行われ、各法面の傾斜は割と急である。

埋葬施設は木棺直葬とする。墓壇検出の際に中央付近に東側を頂点とする二等辺三角形に旧表土が落ち込んでいる状況が認められた(1層)。墓壇検出面の最も高いレベルから61cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。埋土は1～22層に分かれ、12～22層は裏込め土と考えられること、棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であること及び長側板が小口板を挟んで端がみだす形状の棺痕跡が観察されたことからH字形の箱形木棺であったと推察される。長さが1.59m、幅49cmを測り、墓壇の中央やや南寄りに据えられる。棺として認識できた部分の深さは32cmを測る。頭位方向は不明ながら仮に棺幅がほんのわずかながら広がっている北側とすれば、棺の主軸方向はN10.5°Wを指向する。

なお、棺痕跡の周囲の裏込め土のうち最も早い段階に設けられた15層及び17層の上部から壘(35)の破片が両側板の北半周辺及び棺内中央やや東寄りの3箇所に分かれて出土した。このうち両側板の北半周辺のもは墓壇底から10～14cm浮いたレベルに収まって散在しており、棺内中央やや東よりの破片は最も大きく、弧を描く壘口頭部の一端のみが棺底に接地している。後者の接地状況より当初から棺底に存在したのではなく、棺蓋直上にあつたものが棺蓋材の腐朽とともに周囲の土とともに落ち込んだ蓋然性が指摘される。このほかには墓壇内からの遺物の出土は認められていない。

第4主体部

墓壇の平面形は長方形を呈し、尾根筋と平行する主軸方向を持つ。長さは2.44m、幅は1.23m、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは94cmを測る。墓壇の掘削は1段掘りにより行われ、各法面の傾斜は急である。

埋葬施設は木棺直葬とする。墓壇検出の際に旧表土が落ち込んでいる状況は全く認められなかった。墓壇検出面の最も高いレベルから57cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。埋土は1～8層に分かれ、6～8層は裏込め土と考えられること、棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であったと推察される。長さが1.66m、幅71cmを測り、墓壇の中央やや西寄りに据えられる。棺として認識できた部分の深さは37cmを測る。頭位方向は不明ながら仮に棺幅がほんのわずかながら広がっている東側とすれば、棺の主軸方向はN89.5°Eを指向する。

なお、棺痕跡の周囲の裏込め土の中から器種不明の小片が出土している。

出土遺物 (第50図・写真図版54)

33は壺の体部上半の破片であろうか。櫛描による直線文と波状文が交互に施される。

34は口径が22.0cmに復元される大型の甕の口縁。上下端に拡張され縮み出された口縁が外反気味に外傾する。外面は櫛により擬凹線が施され、頭部の屈曲は鋭く「く」の字状となる。

35は第3主体部出土の甕。肩の張らない倒卵形の体部に接地面のわずかな底部で自立しない。頭部が強く外反し、口縁が斜め上方へと開き気味に立ち上がり外面には4条の擬凹線がめぐる。墓壇内の破砕土器配置とみられる出土状況で接合の結果残存率は全体の約1/2であり、外面に煤が付着している。

7. 8号墳(墓)の調査 (第22・37図・写真図版37)

墳丘

尾根筋下半の北西向きの尾根稜線上に立地し、北西側に向かって傾斜する平坦面を削り出す。墳丘平坦面の検出最高部分で標高37.8mを測る。墳丘平坦面を削り出すための掘削は標高38.6m付近から始まり、約80cmの比高となる二等辺三角形を描く法面をもって平坦面に連続する。平坦面の平面形は幅の狭い三日月形を呈し、長さ8.6m、幅2.8mを測る。墳丘平坦面中央付近に木棺墓を1基と北東寄りに土坑を1基検出した。両者は隔たれ、切り合い関係はない。

主体部

主体部は尾根筋と直交する主軸方向を持ち、墓壇の平面形は長方形を呈する。長さは2.01m、幅は1.02m、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは41cmを測る。墓壇の掘削は1段掘りにより行われ、四方いずれの法面の傾斜も割と急である。

埋葬施設は木棺直葬とする。墓壇検出の際に、墓壇掘り方のほぼ中央付近や北西寄りに掘り方の主軸方向に沿って帯状に旧表土が落ち込んでいる状況が認められた(1層)。墓壇検出面の最も高いレベルから21cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。埋土は1～5層に分かれ、4・5層は裏込め土と考えられること、棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であったと推察される。長さが1.39m、幅69cmを測り、墓壇のやや南西寄りに据えられている。棺として認識できた部分の深さは20cmを測る。頭位方向は不明ながら仮に棺幅がわずかながら広がっている北東側とすれば、棺の主軸方向はN47°Eを指向する。なお、棺痕跡内部棺底にほぼ近いレベルにおいて甕口縁(37)が出土した。

なお、墳丘平坦面より下位の北西側斜面において表土から高坏(36)と砥石(S2)が出土している。

SK801 (第37図)

主体部のすぐ北東側に位置する。平面形は隅丸方形に近い楕円形を呈し、横断面形はボウル状をなす。長さ96cm、幅88cm、検出面からの深さ31cmを測る。埋土は1層のみで、遺物は出土していない。

出土遺物 (第50図・写真図版54)

36は椀形高坏の坏部で摩擦が激しいが内外面ともに赤彩されており、脚部との接合は軸による挿入方式である。

37は主体部出土の甕の口縁で上下端を拡張し縮み出す。特に上端部を外方によく縮み上げ外反させる。頭部の屈曲がややきつくなり「く」の字状を呈する。口縁外面には櫛による擬凹線を施し、内面は横方

向のヘラミガキで仕上げる。

S2は珪質粘板岩を用いた砥石であり、図示した下半部を欠損する。表裏両面及び両側面の4面を砥面とし、いずれもよく使用されており、凹面をなす。特に欠損部付近では表裏両面からの研ぎ減りにより厚みが半分以下にまで至っている。4面ともに長辺方向に近い研磨方向の非常に細かい擦痕がまんべんなく認められ、図右側面の上部のみ側面の長辺と直交する研磨方向の擦痕が認められる。残存長8.5cm、幅3.56cm、厚さ1.2cm、重さ49.7gを測る。

8. 9号墳(墓)の調査 (第23・38~40図・写真図版38・39)

墳丘

尾根筋下半の北西向きの尾根稜線上に立地し、北西側に向かってわずかに傾斜する平坦面を削り出す。墳丘平坦面の検出最高部分で標高33.5mを測る。墳丘平坦面を削り出すための掘削は標高34.7m付近から始まり、約1.2mの比高となる弧を描く法面をもって平坦面に連続する。ただし、この法面掘部において尾根筋と直交する溝により明確に区画され、溝は長さ7.2m、最大幅49cm、深さは25cmを測り、横断面形は皿状を呈する。墳丘平坦面の平面形は台形に近い半円形を呈し、長さ8.8m、幅4.9mを測る。

墳丘平坦面中央付近の南東寄りに木棺墓を1基検出した。北西側中央付近をSX901に切られる。

主体部

墓壇の平面形は長方形を呈し、尾根筋と直交する主軸方向を持つ。長さは2.64m、検出最大幅は1.94m、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは98cmを測る。墓壇の掘削は、基本的に1段掘りにより行われているが、南西側法面において緩やかなステップ状の面を持ち2段掘り状を呈している。北東側の法面の傾斜のみが割と急である。

埋葬施設は木棺直葬とする。墓壇検出の際に、墓壇掘り方の中央やや北寄りに旧表土が落ち込んでいる範囲が長円形に認められた(1~2層)。特に旧表土を多く含む1層中よりL字状石柁1点(S3)と鼓形器台5点(38~42)と甕口縁の小片1点が出土した。L字状石柁は作業面(すり面)が上に向いた状況でハンドル頂部を墓壇中央に向けた状態であり、木棺の腐朽の際に鼓形器台や甕とともに旧表土ごと落ち込んだ可能性が想定される。

墓壇検出面の最も高いレベルから71cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であったと推察される。長さが1.38m、幅64cmを測り、墓壇のほぼ中央に据えられている。棺として認識できた部分の深さは17cmを測る。頭位方向は不明ながら仮に棺幅がわずかながら広がっている南西側とすれば、棺の主軸方向はN128°Wを指向する。

墓壇内旧表土落ち込み土(1層)から鼓形器台の図示した5点(38~42)と口縁の破片1点、甕口縁の小片1点、L字状石柁(S3)、墓壇内埋土2~5層から甕口縁の破片1点が出土したほか、墳丘平坦面のSX901北側の表土中から甕の胴部片が出土している。

SX901 (第39図・写真図版39)

主体部の北西側に位置し、主体部を切る。検出段階では東西2.0m、南北1.2mの範囲に蝶ネクタイ状に亜角礫が集積している状況が観察されたが、標高32.6m以下では西端の1石を除いて東西57cm、南北97cmの範囲に収束し、周囲に長円形の土坑状の掘り方を検出した。掘り方は検出最大長1.01m(復元長

1.33m)、幅72cmで、主体部墓壇北西側の検出面からの深さ36cmを測る。礫の集積の高さは最下に存在する礫基底から58cm、掘り方の底部から64cmを測る。礫は長径8～36cmで20cm前後のものが多く、水平に配されているものが一定量認められる中で地形に沿って北側から南側に向かって若干傾斜しているまどまもりも認められる。なお、掘り方埋土をはじめ亜角礫群の間隙からも遺物は出土していない。

出土遺物 (第51図・写真図版54・55)

38～42は主体部出土の鼓形器台である。38・39は鼓形器台の受け部から筒部にかけての小片で、38の受け部外面屈曲部の稜は明瞭に突出し内面は横方向のヘラケズリで仕上げられる。40・41は長めの筒部を持ち、上部内面は横方向のヘラケズリで薄く仕上げられる。40の受け部及び上部の外面屈曲部の稜は明瞭に突出する。42は「く」の字状に屈曲する筒部に緩やかに外反する上部が取り付け、端部はさらに外反しつつ尖り気味におさまられる。

この他に38～42同様に旧表土から主体部墓壇内への落ち込みから出土した鼓形器台の外反する口縁部の破片、棺痕跡より上位の落ち込み土から出土した外反気味に外傾し板ナデにより擬凹線状に施文される甕口縁の破片がある。

S3は流紋岩を用いたL字状石件である。長さ10.56cm、幅6.62cm、厚さ5.94cm、重さ426.08g、比重2.554dを測る。ハンドル部は自然礫の形状をほぼそのまま留めており、4面に分かち側面形はL字というよりむしろ一端の突出した三角形に近い形状を呈する。作業面(すり面)は、(ハンドル部の正面を前側とした場合)後半部が膨らみ左側面側がくびれ気味となる楕円形状を呈し、側面形は弧度の極めて緩いカーブを描く。作業面の前半部は側面から見た場合のカーブがやや強く、面の長軸方向に近い向きの研磨痕が多く見られるのに対し、後半部では不整方向の擦痕が見られる円形の平滑な面が形成されている。ハンドル部との境界の稜線も面の前半部では明瞭で、後半部では曖昧となり周囲に摩擦の及ぶ帯状の曲面が認められる。

なお、肉眼では赤色顔料の識別は困難を極めるが、ラマン分光分析により分子構造の測定を行った結果、水銀朱の付着が確認された(第7章第1節参照)。

9. 10号墳の調査 (第23・41～43図・写真図版40・41)

墳丘

尾根筋下半の北西向きの尾根稜線上に立地し、北西側に向かってわずかに傾斜する平坦面を削り出す。墳丘平坦面の検出最高部分で標高27.3mを測る。墳丘平坦面を削り出すための掘削は標高28.1m付近から始まり、約80cmの比高となるわずかに弧を描く法面をもって平坦面に連続する。ただし、この法面掘削において尾根筋と直交する溝により明確に区画され、溝は長さ7.3m、検出最大幅55cm、深さは34cmを測り横断面形は皿状を呈する。平坦面の平面形は幅の狭い台形に近い半円形を呈し、長さ9.0m、幅3.3mを測る。墳丘平坦面中央付近に切り合う木棺墓を2基検出した。切り合い関係は、第1主体部が第2主体部を切り、2つの主体部が区画溝を切る状況となっている。なお、確認調査時に墳丘平坦面から約6.0m北西側の斜面において表土から甕の口縁部から底部にかけての破片(43)が1個体分出土している。

第1主体部

第1主体部は尾根筋と直交する主軸方向を持ち、墓壇の平面形は長方形を呈する。長さは2.95m、幅は1.73m、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは55cmを測る。墓壇の掘削は、基本的に1段掘りにより行われる。北東側及び南西側の法面の傾斜がやや急である。

埋葬施設は木棺直葬とする。墓壇検出の際に、墓壇掘り方のほぼ中央付近に掘り方の主軸方向に沿って帯状に旧表土が落ち込んでいる状況が認められた（1層）。墓壇検出面の最も高いレベルから39cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であったと推察される。長さが1.67m、幅57cmを測り、墓壇のほぼ中央に据えられる。棺として認識できた部分の深さは16cmを測る。頭位方向は不明ながら仮に棺幅がほんのわずかながら広がっている北東側とすれば、棺の主軸方向はN31°Eを指向する。

墳丘平坦面の棺痕跡南西隅にあたる部分の上部の墓壇検出面直上において砥石（S4）が出土した。また、墓壇中央付近の土層断面セクション付近の表土及び1層中から出土した高坏脚部（44）の破片が接合している。

第2主体部

第2主体部は尾根筋と平行する主軸方向を持ち、墓壇の平面形は長円形ないしはコマボコ形を呈する。長さは2.08m、検出最大幅は1.11m、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは41cmを測る。墓壇の掘削は1段掘りにより行われ、北側及び西側の法面の傾斜がやや急である。

埋葬施設は木棺直葬とする。墓壇検出の際に旧表土が落ち込んでいる状況は全く認められなかった。墓壇検出面の最も高いレベルから6cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であったと推察される。長さが1.46m、幅53cmを測り、墓壇のほぼ中央からやや北西側に偏った箇所へ据えられる。棺として認識できた部分の深さは35cmを測る。頭位方向は不明ながら仮に棺幅がほんのわずかながら広がっている北西側とすれば、棺の主軸方向はN60°Wを指向する。墓壇内から遺物の出土は認められなかった。

出土遺物（第51図・写真図版55）

43は単口縁甕で、球形の胴部に「く」の字に屈曲する口縁がとりつく。口縁端は丸くおさまられ折り返されはしないものの内面直下に弱い稜線をもって屈曲気味に立ち上がる。体部外面は上半・下半・底部と3回に分けられるハケ調整、内面はヘラケズリによって器壁を薄く仕上げている。

44は高坏脚部で、外面器表が剥落するも本来は全体が赤彩されているものとみられる。脚柱部は筒状で裾部は低い円錐状を呈する。脚柱部内面はヘラナデが施されるがわずかにしぼり痕跡を留めており、脚柱部上方は棒状工具による刺突がなされている。

S4は流紋岩製の砥石で、両側を欠損する。図正面側が最もよく使われ残存長辺方向の擦痕が認められ、裏面側の鈍角に接する2面にも擦痕が観察される。残存長13.2cm、残存幅5.5cm、厚さ4.2cm、重さ400.8gを測る。

10. 11号墳の調査 (第23・44図・写真図版42)

墳丘

尾根筋下半の北西向き尾根稜線上に立地し、北西側に向かって傾斜する平坦面を削り出す。墳丘平坦面の検出最高部分で標高21.9mを測る。墳丘平坦面を削り出すための掘削は標高22.6m付近から始まり、約70cmの比高となる二等辺三角形を描く法面をもって平坦面に連続する。平坦面の平面形は幅の狭い半円形を呈し、長さ6.6m、幅1.5mを測る。墳丘平坦面中央付近に木棺墓を1基と中央やや東寄りに土坑を1基検出した。両者は隔てられ、切り合い関係はない。

主体部

主体部は尾根筋と直交する主軸方向を持ち、墓壇の平面形は長方形を呈する。長さは2.37m、検出最大幅は93cm、墓壇検出面の最も高いレベルからの深さは63cmを測る。墓壇の掘削は1段掘りにより行われ、南西側法面において緩やかな面を持ち2段掘り状を呈している。南西側を除く3方の法面の傾斜は割と急である。

埋葬施設は木棺直葬とする。墓壇検出の際に旧表土が落ち込んでいる状況は全く認められなかった。墓壇内北側で埋土上半に15～25cm大の垂角礫が含まれていたため土層の識別には困難を極めたが、墓壇検出面の最も高いレベルから39cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であったと推察される。長さが1.95m、幅48cmを測り、墓壇のほぼ中央に据えられている。棺として認識できた部分の深さは24cmを測る。頭位方向は不明ながら仮に墓壇幅がわずかながら広がっている北東側とすれば、棺の主軸方向はN41°Eを指向する。なお、棺痕跡内部の北東側長側板付近の中央よりやや北西側の棺底レベルにおいて鉄鏝(M1)が出土した。

先述した棺埋土内出土鉄鏝のほかは墓壇内埋土をはじめ墳丘平坦面及び墳丘斜面からの遺物の出土は認められなかった。

SK1101 (第44図・写真図版42)

主体部のすぐ南東側の斜面に位置する。平面形は楕円形を呈し、横断面形はボウル状をなす。長さ79cm、幅57cm、検出面の最も高いレベルからの深さ31cmを測る。埋土は1・2層に分かれる。遺物は出土していない。

出土遺物 (第51図・写真図版55)

M1は長頸鏝で、先端を欠損するため鏝身部の形式は不明である。残存長10.1cm(接合部も含めた推定10.4cm)で、頭部残存長6.7cm、茎部残存長3.4cmを測り、頭部の幅0.7cm、厚さ0.7cm、茎部の幅0.35cm、厚さ0.25cm、いずれも横断面形は方形を呈する。茎部に横方向に樹皮巻が施されているのが観察できる。頭部には板状の木質が付着しており、接していた棺材が残存したものと考えられる。

11. 14号墳(墓)の調査 (第24・45図・写真図版43～45・48)

墳丘

対田清水谷14号墳は、2区の最高所から西に続く尾根が南北に二つに分かれた南側の尾根上に位置す

る。7号墳の下方から分岐する尾根筋は、本来はこの南西側へと続く尾根が主と思われ、8～11号墳が乗る北西側の尾根筋よりは幅が広く、傾斜も緩やかである。

この南西側の尾根筋には、今回一部を調査した14・15号墳が立地し、さらに南の方へと屈曲して、下方に少なくとも2基の15号墳と同規模の墳丘が存在している。さらに下方には大きく尾根筋を切断した痕跡が認められた。この尾根上には複数の墳墓・古墳が存在することが現状でも認められるが、南西尾根の東にある谷頭に造成された平坦部のように、さらに後世にも南向き斜面全体が利用されていた可能性がある。この谷部の改変は、山城築城による改変とは異なり、中世寺院のそれに類似しているとの指摘があった。

14号墳は平成25年度の調査の際に墳頂平坦部の一部が検出されており、階段式の墳墓・古墳が存在することが想定されていた。平成26年度の本体工事手法面対策工範囲の変更に伴う調査で、主体部が検出されたことから、さらに用地範囲の際まで調査範囲を広げて主体部全体を検出することができた。但し、墳丘の半分程度は調査範囲外となるため、墳丘規模等は不明である。墳丘平坦部にはさらに主体部が存在する可能性はあるが、南東側では地山成形が平坦ではなく傾斜しており、盛土によって平坦面を造成していた可能性がある。そうなればあまり広い平坦面を確保できないため多くの主体部は設けられにくいだろう。

14号墳は尾根筋を掘削して平坦部を作り、掘削した残土の一部は下方に積み上げて墳丘盛土としている。盛土は主に南東側に施されており、南東側の傾斜が元々急であったものと思われる。本来の尾根の幅がこの地点ではあまり広くなかったことに起因しており、そのため墳丘規模もあまり大きくはならない。斜面上方の掘削は平坦面より1m程度上から削っているようであるが、上方の7号墳平坦面には及んでいない。

平坦面は等高線に沿った方向に造られている。平坦部の標高は検出面で38.13mを測る。平坦部の山側裾には幅0.2～0.3m、深さ10cm程度の直線的な溝を走らせており、その北端部は斜面下方へと曲げている。溝の南東端部は等高線に沿って緩やかに弧を描いており、7号墳の状況に近い。この溝が周溝や排水溝としての機能を保つものであるなら、主体部上への盛土はあまり高いものではなく、墳丘上は平坦面を残していたものと思われる。調査区内の墳頂部平坦面の範囲は5×3mを測る。

墳頂部上面の平坦部は中央部周辺を10cmほど掘り下げており、その落ち込み部や溝の埋土上層には黒色の層が堆積しており、土器片が数点出土した。落ち込み部内に木棺直葬の主体部1基を検出した。また、墳丘南西斜面の盛土を除去すると、地山面に掘り込まれた土坑（SK1401）が1基検出された。

第1主体部

墳頂部平坦面に等高線に直交する方向に長軸をもつ木棺直葬の主体部を検出した。墓壇の長軸方向の長さは2.23m、幅は山側の東部で1.15m、谷側の西部で0.9mを測り、深さは0.9～1.2mを測る。南側の棺側を長軸方向に幅0.2m、高さ0.1mほど掘り残しており、墓壇内へ降りる足場及び、木棺設置の支持としたものであろう。掘り方の南西部は盛土上から掘削されており、本来の地山面からでは墓壇底まで0.2mの深さとなる。墓壇の北側に寄せるように長さ1.73m、幅0.5mの箱形の木棺の痕跡を検出した。北棺側や西小口側、棺底付近から土器片が出土した。

SK1401（第45図・写真図版45）

墳丘の土層を観察するため調査区壁面にサブトレンチを掘削したところ、墳丘斜面でこの山では不自然な石が検出された。このため主体部下方の墳丘盛土を除去すると、地山面に掘られた赤褐色シルト

質極細砂埋土の土坑が検出された。調査区外に続くが、南北1.2m以上、東西0.88mの不整形の土坑で、深さは最大で0.65mに及ぶ。北側で小段が付き、段の下斜面から石皿と磨石が出土した。

石皿は底部を上にして2片に割れた状態で出土しており、半分近くを欠失している。そのすぐ横から磨石が出土した。

明らかに縄文時代に属するものであり、墳丘造成以前に埋められたものであろう。対田清水谷古墳群の調査では他には同時代の遺構・遺物は確認されておらず、何故急な丘陵斜面に埋められていたのかわからない。調査地点の西を北流する久斗川の約500m上流右岸には高木遺跡が存在し、縄文・弥生時代の遺物が広範囲に多数散布していることが知られている。このような近隣の縄文時代の集落の活動範囲が本遺跡にも及んでいたのであろう。

出土遺物 (第52・54図・写真図版56・58)

45は墓壇上面の黒色土中から出土した高坏である。緩やかに広がる脚部には円形の透孔が穿たれる。脚部外面は縦方向のヘラミガキで仕上げ、内面は横方向のハケが残る。脚端部と筒部、透孔周辺はナゲによって仕上げている。坏部は内湾しながら広がり、ヘラミガキで仕上げる。

46は主体部内棺側の北側から出土した甕口頭部である。あまり張らない胴部から屈曲して外方へ広がった後、外上方に向かう口縁部へ続く。口縁部外面には6条の擬凹線を巡らせる。口縁部はヨコナゲで仕上げ、頭部下はヘラケズリを施す。口縁部外面には煤が付着する。

S8・S9は墳丘下検出土SK1401から出土した磨石と石皿である。磨石S8は長石・雲母粒が顕著な花崗岩質の石材を用いており、風化が著しい。平面形は11.6×10.7cmのほぼ円形で、厚さは7.55cmで断面は楕円形を呈している。長側面や短側面に最大で5cm程度の幅の平坦面が観察できるが、風化のため擦痕や敲打痕は観察できない。

石皿S9は軟質の凝灰岩質砂岩と思われる石材を用いており、過半を欠損するが長円形を呈するものである。長径35.6cm、短径は18.1cm以上、厚さは8.65cmを測る。上面全体を3cmほど窪めており、縁を作り出したものではない。底面も曲面を呈しているが、偏った位置に表面が剥離した痕跡が見られ、長軸方向の長方形の脚台が作り出されていたのかもしれない。風化が著しく擦痕等は不明であるが、器表面の細かい凹みは長軸方向の縁にそってやや長くなる。

小結

14号墳は一部の調査であるが、いわゆる階段式の墳丘で、斜面上方側に溝を切るものである。木棺直葬の主体部1基を検出し、墓壇埋土上面と墓壇内から弥生土器が出土し、墓壇内のものは破砕土器である。また、墳丘下から縄文時代に属する石皿と磨石が出土した。

兵庫県内の縄文遺跡からは石皿も多く出土しており、自然石をそのまま使用したものがほとんどである。近隣で発掘調査された豊岡市竹野町見蔵岡遺跡では、主として中期末葉から後期前葉に属する33点の石皿が出土しているが、凝灰岩や花崗岩などの扁平な円礫の平坦面をそのまま使用したものである。また、佐用町延吉遺跡では縄文後期の墓地とされる集石土坑などから66点の石皿・台石が出土しているが、これも自然石の表面に使用痕が認められているものである。

12. 15号墳（墓）の調査（第24・46図・写真図版46～48）

墳丘

15号墳は、14号墳墳頂部から約3m下方に造られており、主体部を検出した平坦面の標高は35.16mを測る。

前年度の調査の際に墳頂平坦部の一部が検出されており、また調査区外の南側へと平坦部が続く状態から階段式の墳墓・古墳の存在はわかっていた。調査できた範囲は幅4.1m、長さ5mほどの半月形の一部であるが、調査区外も含めると等高線に沿った方向の平坦部が約14m続くことがわかっており、検出できた第1主体部以外にも、複数の主体部が存在する可能性がある。また、南側の谷頭にまで平坦部を広く造成していることから、後世の造作である可能性も残される。

15号墳は尾根筋を約1mの高さから掘削して、等高線に沿った方向に平坦部を造っている。掘削の範囲は上方の14号墳の盛土部分を選んだ位置から行っているようである。平坦部を造り出した後、平坦部下方及び墳丘の斜面部に盛土を施している。斜面の盛土は35cm近い厚さの部分が認められる。

平坦部の北側はおそらく動物の巣穴と思われる細長く不整形な掘り込みによって攪乱されているが、その一部は土坑状に掘削でき、搬入された礫が含まれていたことから、一部は墳墓築造以降の人為的な掘削であった可能性も残る。遺物は出土していない。

平坦部の山側裾には14号墳のような溝は掘削されていないようであるが、断面では平坦面上に盛土を施しており、平坦部山側裾に黒色土を含む層が落ち込んで堆積している様子が観察できた。盛土上に溝を走らせていた可能性が高い。平坦部の西側は急斜面となっており下っている。

墳頂平坦部には黒褐色の土層が堆積しており、土器片が数点出土した。黒褐色土除去下面は不定形な窪みが検出された。また、土器の北寄りには黒褐色土の下面約10cmまで突き刺さった状態で山石1点（S5）が検出された。その下部に木棺直葬の主体部が検出されたことから墓壇の標石として置かれた可能性がある。黒褐色土層も主体部上を中心に分布している。木棺直葬の主体部1基を検出した。

第1主体部

墳頂部平坦面に等高線に平行する方向に長軸をもつ木棺直葬の主体部を検出したが、掘り方の東端部は調査区外へと続いている。墓壇の長軸方向の長さは2.5m以上、幅は1.75m、深さは1.63mを測る。斜面下方側つまり掘り方の西側の底は0.2mの高さで幅0.3mほどの段を掘り残しており、墓壇内に降りる利便性及び、木棺設置の支持としている。長さ1.75m以上、幅0.75mの箱形の木棺の痕跡を検出した。棺の高さは0.5m近いものと思われる。

土層断面の状況から、木棺が腐朽して大きく上層の埋土が落ち込んでいることが観察できた。この木棺への落ち込みは上層の黒色土層までは影響が及んでいないが、黒色土下面は平坦ではない。

上面の表土下や黒色土層、墓壇東上から土器片（50）が出土しており、墓壇上に置かれたものと思われる。墓壇内破砕土器や副葬品は出土していない。

出土遺物（第52図・写真図版56）

47は壺口頭部で、複合口縁をもち、肩部は比較的なだらかに下る。器壁が摩滅しているが、屈曲部の稜はやや甘く、外面はヨコナデによって仕上げる。肩部内面にはユビオサエが残る。

48はわずかに凹んだ小さな底部をもつが、ほぼ丸底で、47と同一個体の可能性がある。内外面ともハ

ケ調整の後、ナデによって仕上げる。内面底にはケズリが見られる。外面に黒斑が見られる。

49は器台受け部である。円筒状の筒部から緩やかに広がり、口縁端部はわずかに上方を向く。口縁外面下に粘土を付加して面を作り、沈線2条と櫛描波状文を施す。外面は縦方向のハケの後、ヘラミガキ、口縁部はヨコナデで仕上げる。内面はハケの後、ヘラミガキで仕上げる。

50は台付鉢の脚台部である。外面・底面はハケ調整後、ナデ仕上げを行う。墓壇東肩上から出土した。

S5は墓壇埋土上面に突き刺さるように検出され、黒色土に埋没した状態で出土した角礫で、墓壇標石と思われる。一端が鋭く尖った断面が概方形の山石で、加工されたものかは不明である。長さ20.6cm、幅11.8cm、厚さ6.7cmを測る。

小結

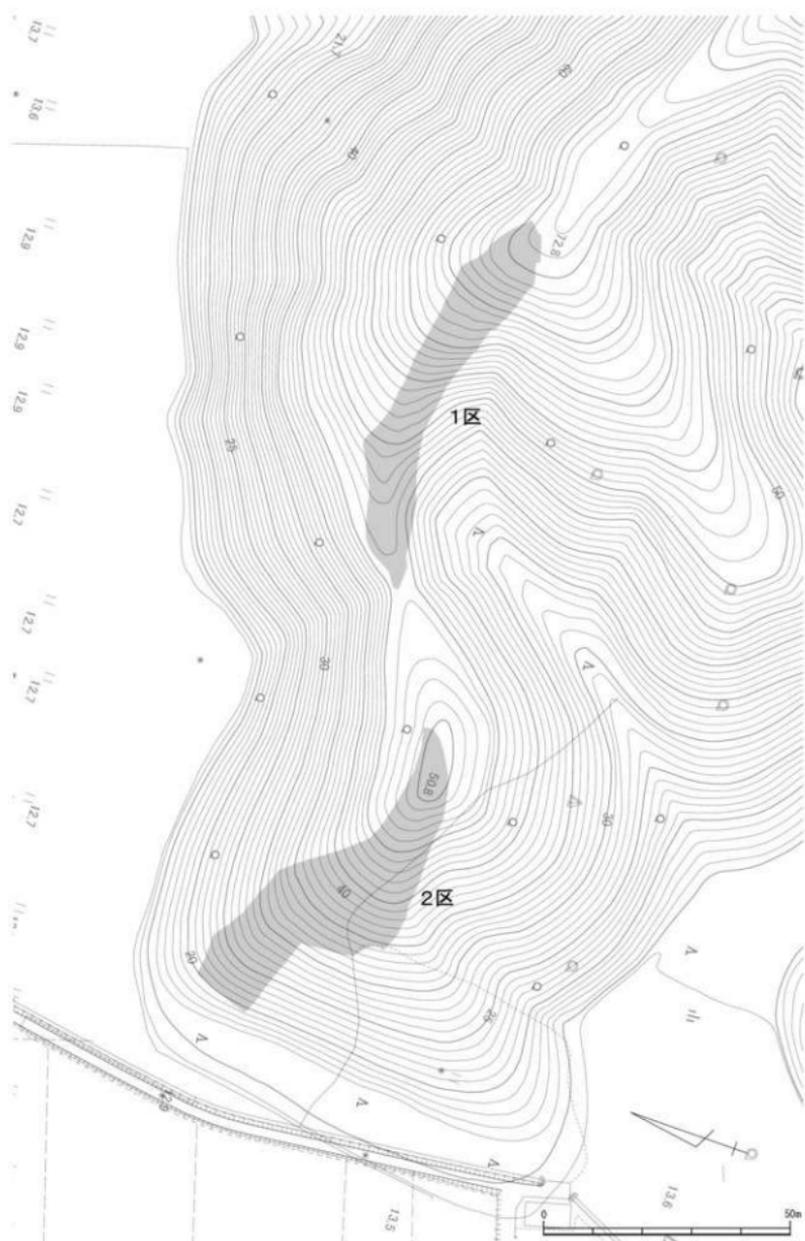
15号墳はいわゆる階段式の墳丘をもち、造成された平坦部に木棺直葬の主体部1基を検出した。墓壇上から土器が出土し、標石と考えられる石が検出できた。

第4節 対田清水谷古墳群小結

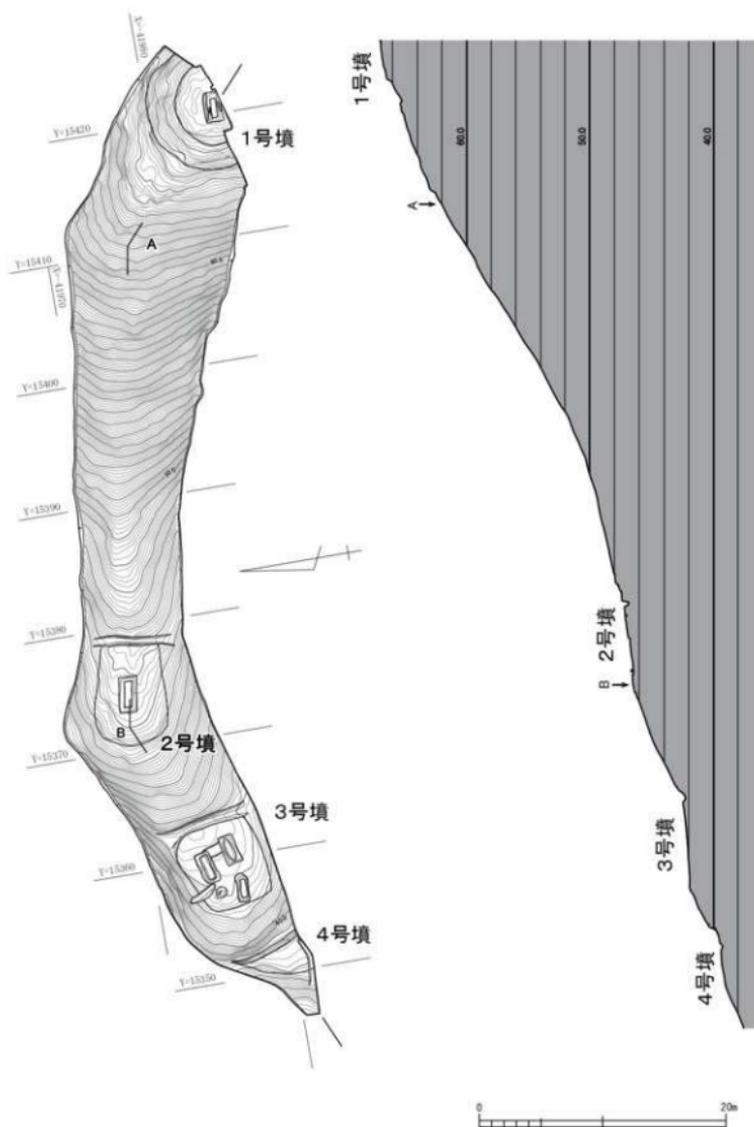
対田清水谷古墳群の今回の調査では、北西に伸びる尾根上の15基の弥生墳墓・古墳の調査を行った。調査区は尾根の地形により2区に分けて調査しており、1区では4基、2区では11基検出している。区画溝で画された墳丘や斜面を平坦に削った階段式墳丘を有し、各々1基から4基の主体部を有している。

弥生時代後期後半から庄内併行期、古墳時代前期・中期・後期と断続的ではあるが連続と墳墓が造営されており、特に弥生墳墓では主体部上面や墓壇内木棺周辺に土器破片を配したのものや、主体部上面に石を立てた標石を持つものなど、東西の葬送における習俗が採り入れられている。

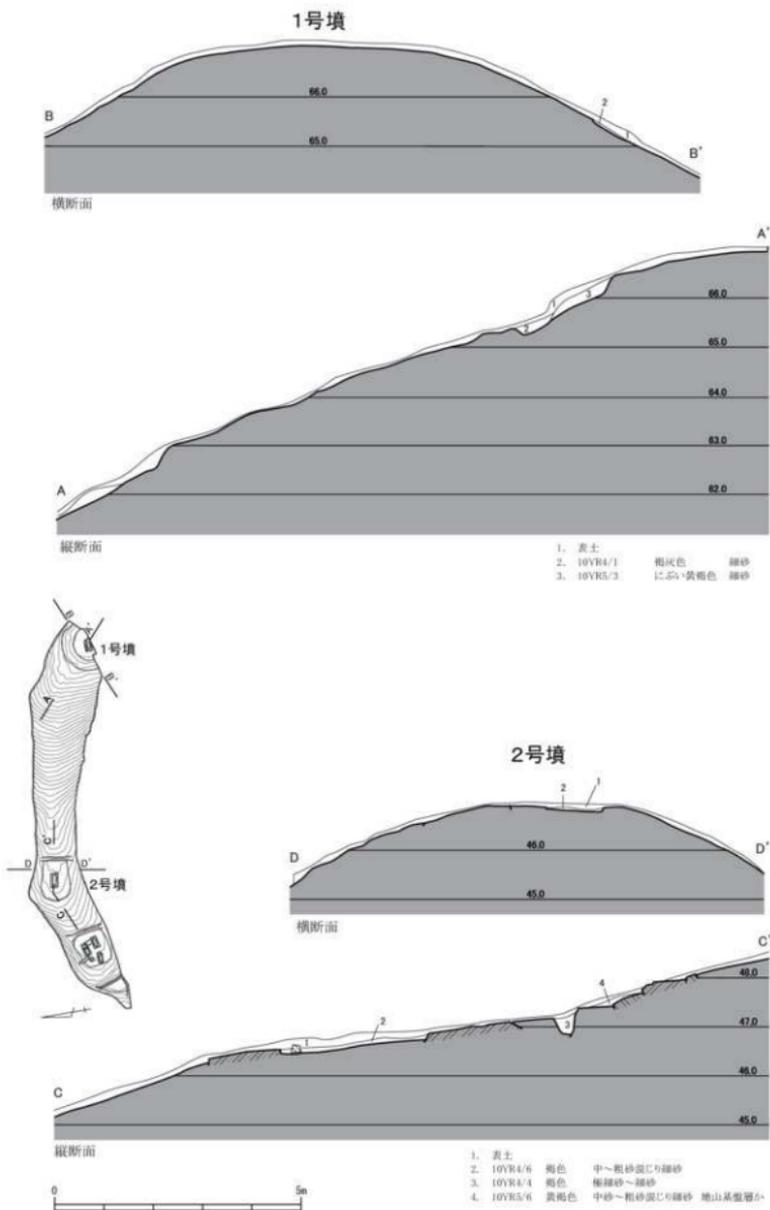
また、13世紀代の横口式石室をもつ経塚（SX501）や土坑に横穴を付設させたSX901が墳丘を利用して造営されている。また、石皿・磨石を出土した土坑が墳丘下から検出された。



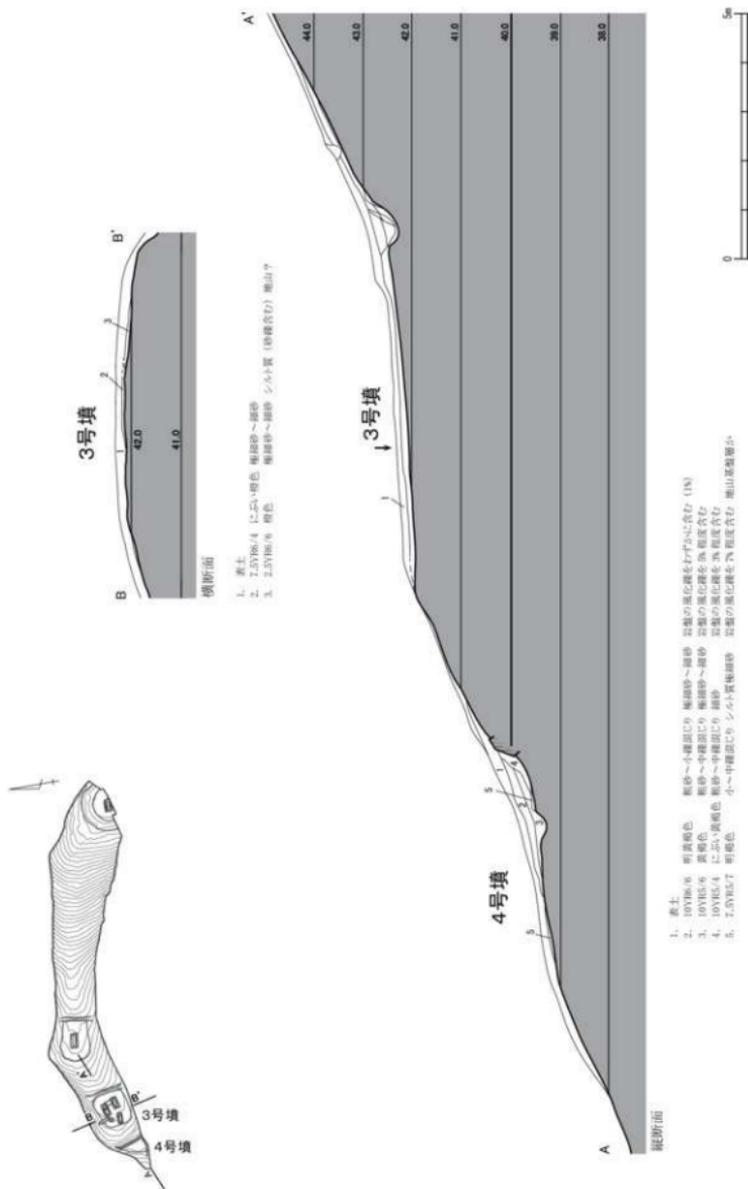
第11图 对田清水谷古墳群 発掘調査位置図



第12图 1区全体图

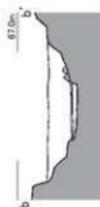
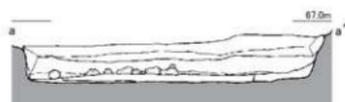
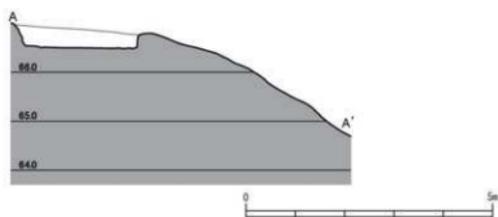
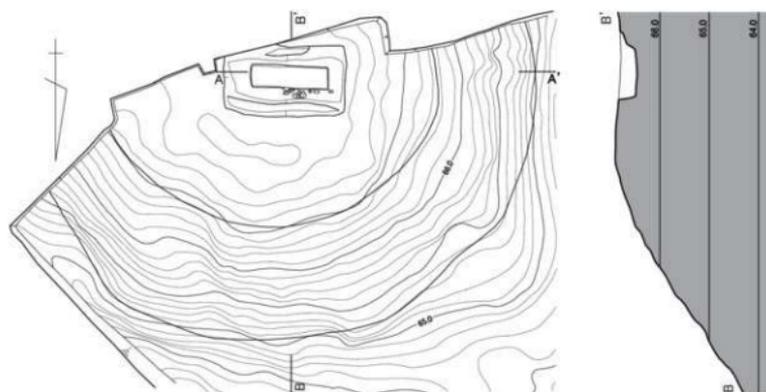


第 13 图 1・2号墳断面土層図

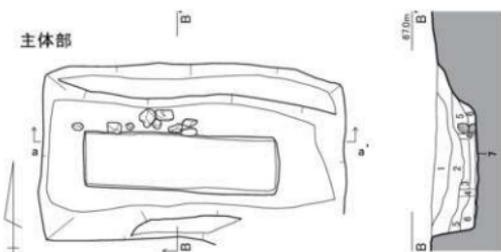


第14図 3・4号墳断面土層図

1号墳



主体部

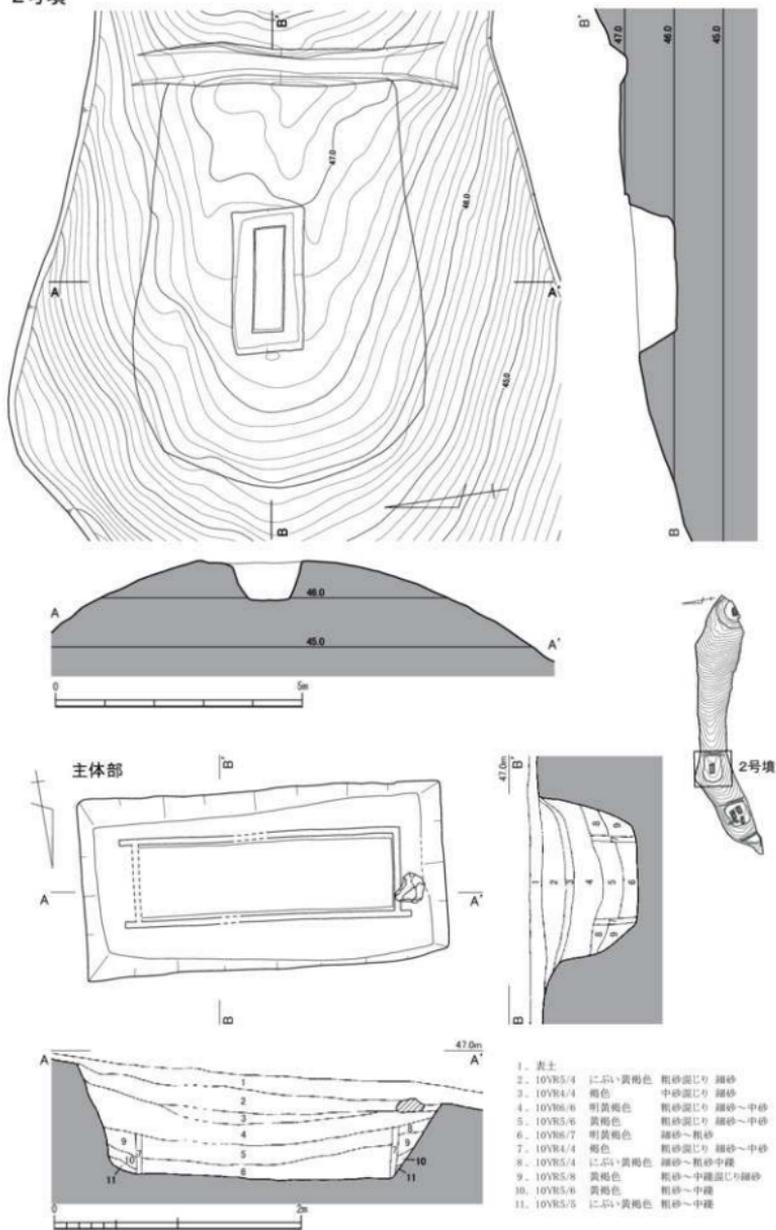


1. 10YR5/3 濃い黄褐色 粗砂混じり極細砂～細砂
2. 10YR5/6 黄褐色 粗砂混じり細砂～中砂
3. 10YR5/8 黄褐色 粗砂混じり極細砂～細砂
4. 10YR4/7 褐色 粗砂混じり極細砂～細砂
5. 10YR6/8 黄褐色 粗砂混じり細砂～中砂
6. 10YR5/4 明黄褐色 細砂～粗砂
7. 10YR5/6 濃い黄褐色 細砂～中砂



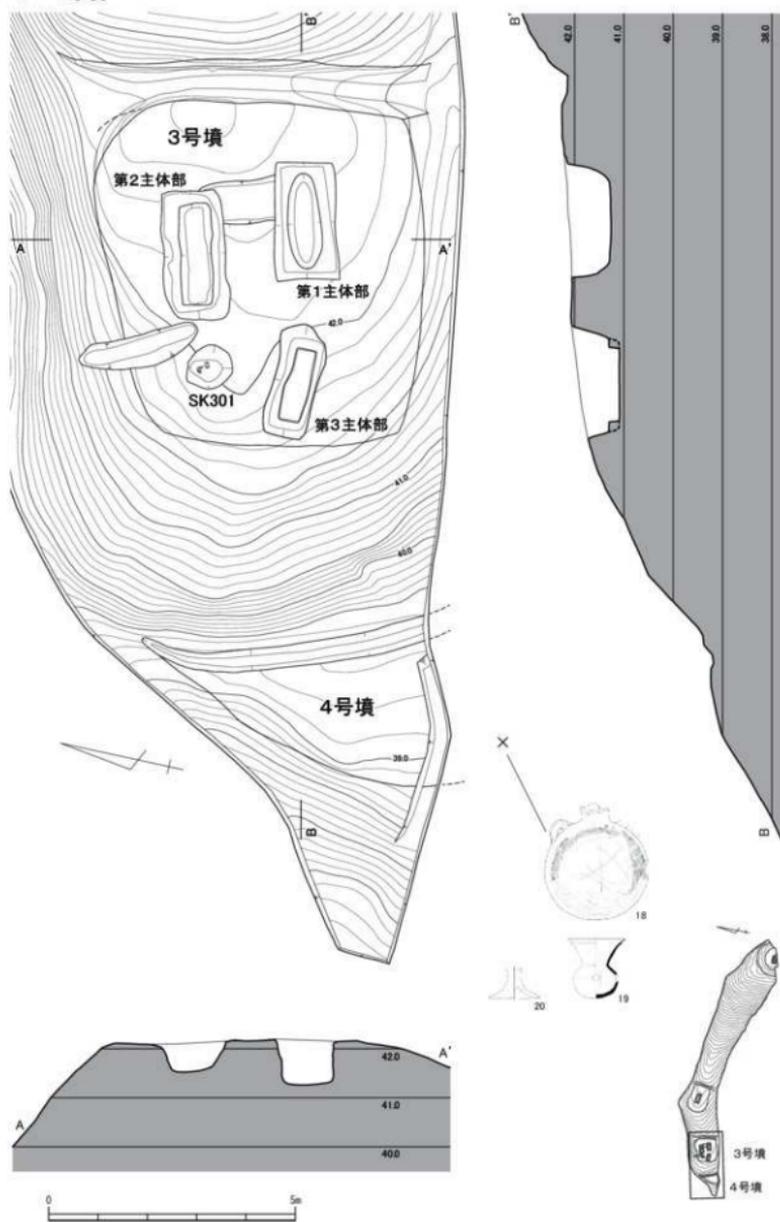
第15図 1号墳

2号墳



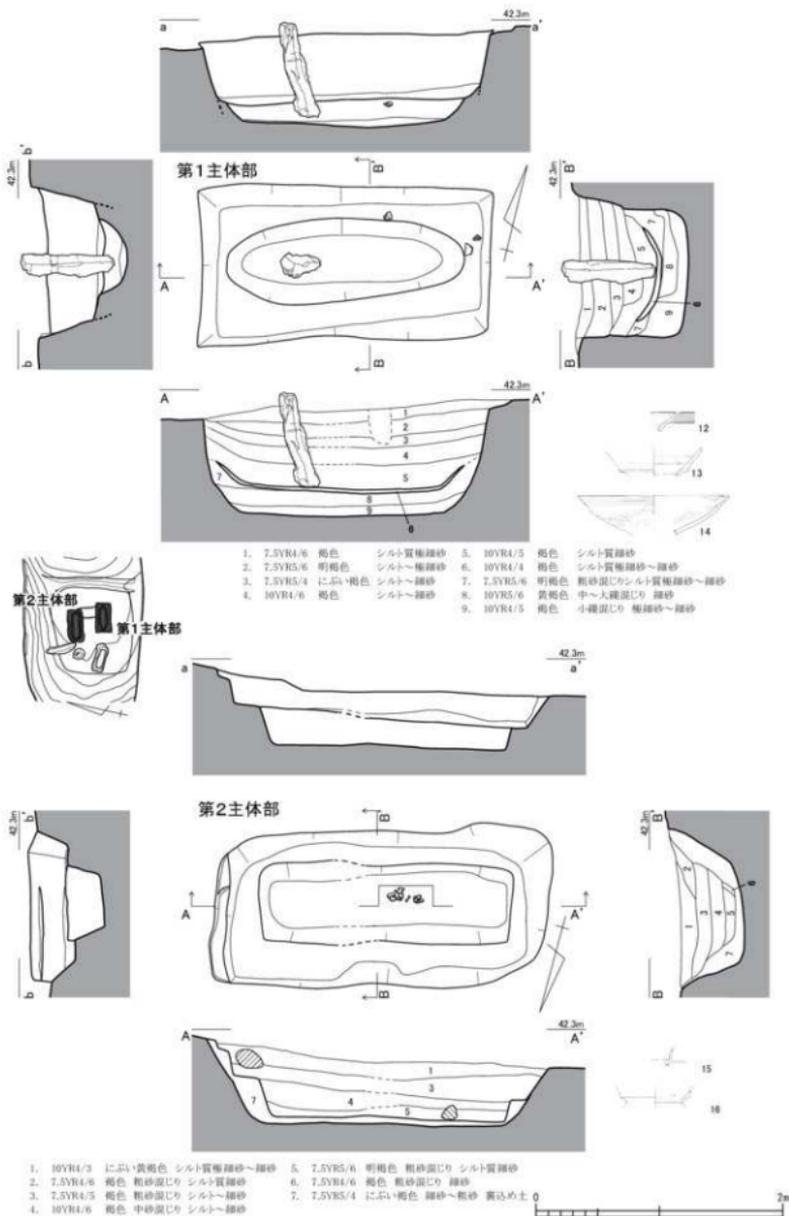
第16图 2号墳

3・4号墳



第17图 3・4号墳

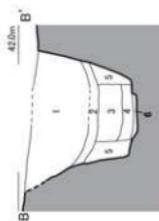
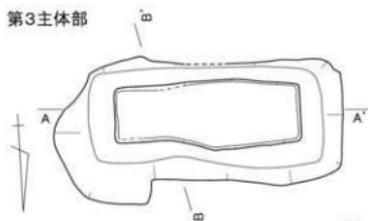
3号墳



第18図 3号墳(1) 第1・2主体部

3号墳

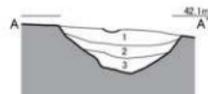
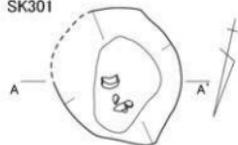
第3主体部



1. 5VR5/6 明赤褐色 極細砂～細砂 地山礫混じり シルト質
2. 10R1/8 赤色 砂質土 地山腐土
3. 5VR5/4 に近い赤褐色 極細砂～細砂 10cm 程度の地山礫含む
4. 5VR5/3 に近い赤褐色 極細砂～細砂 地山礫を少し含む
5. 7.5VR5/6 明褐色 極細砂～細砂 地山礫含む
6. 7.5VR6/4 に近い褐色 地山礫 腐土



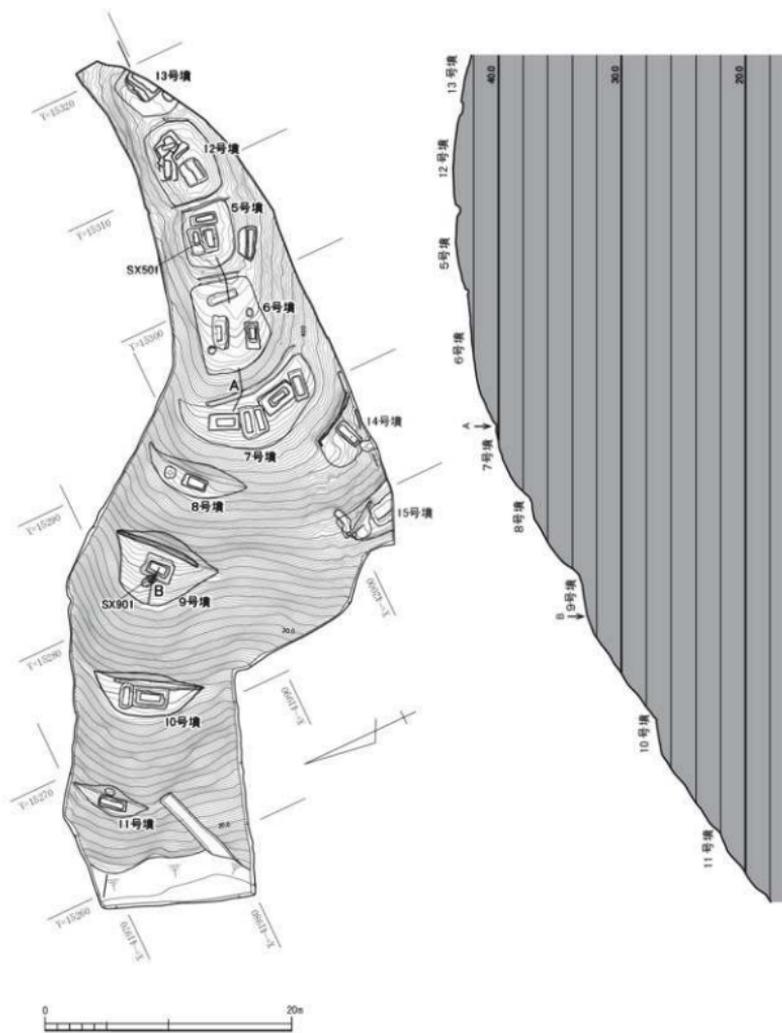
SK301



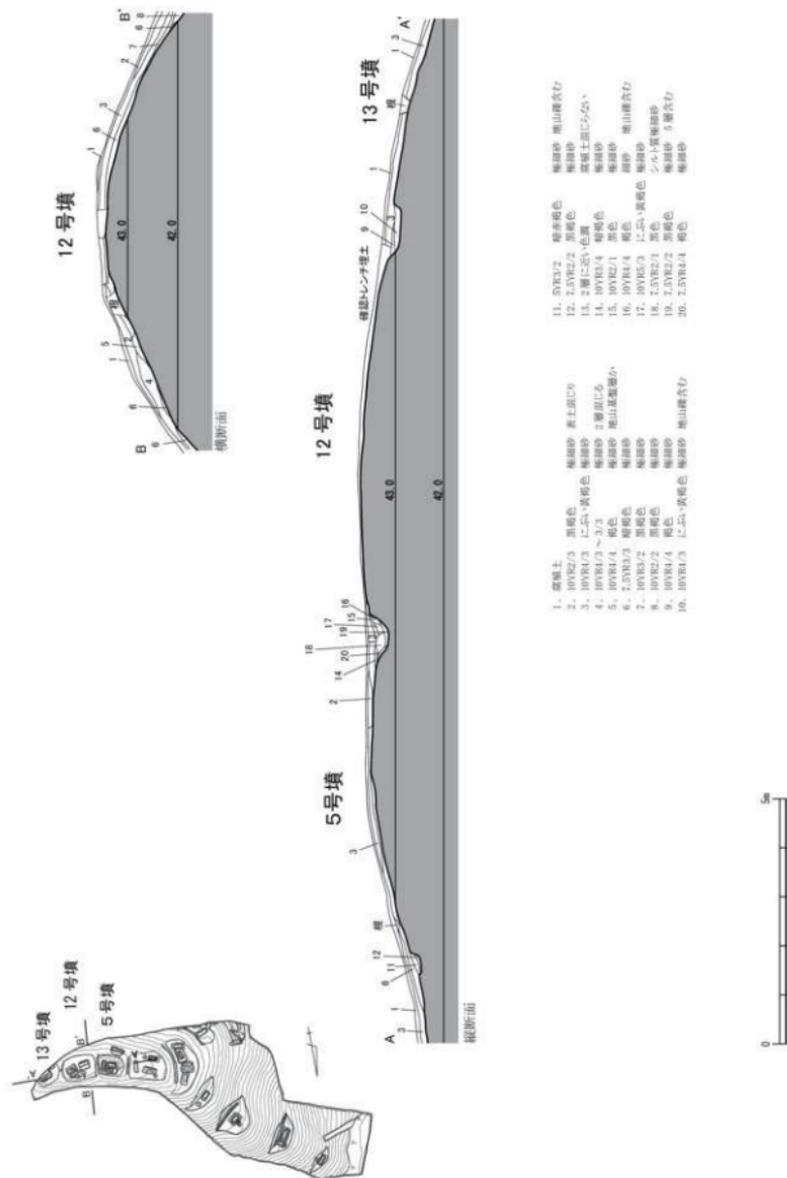
1. 10VR5/3 に近い黄褐色 粗砂混じり極細砂～細砂
2. 10VR5/4 に近い黄褐色 極細砂～細砂
3. 10VR5/6 黄褐色 細砂



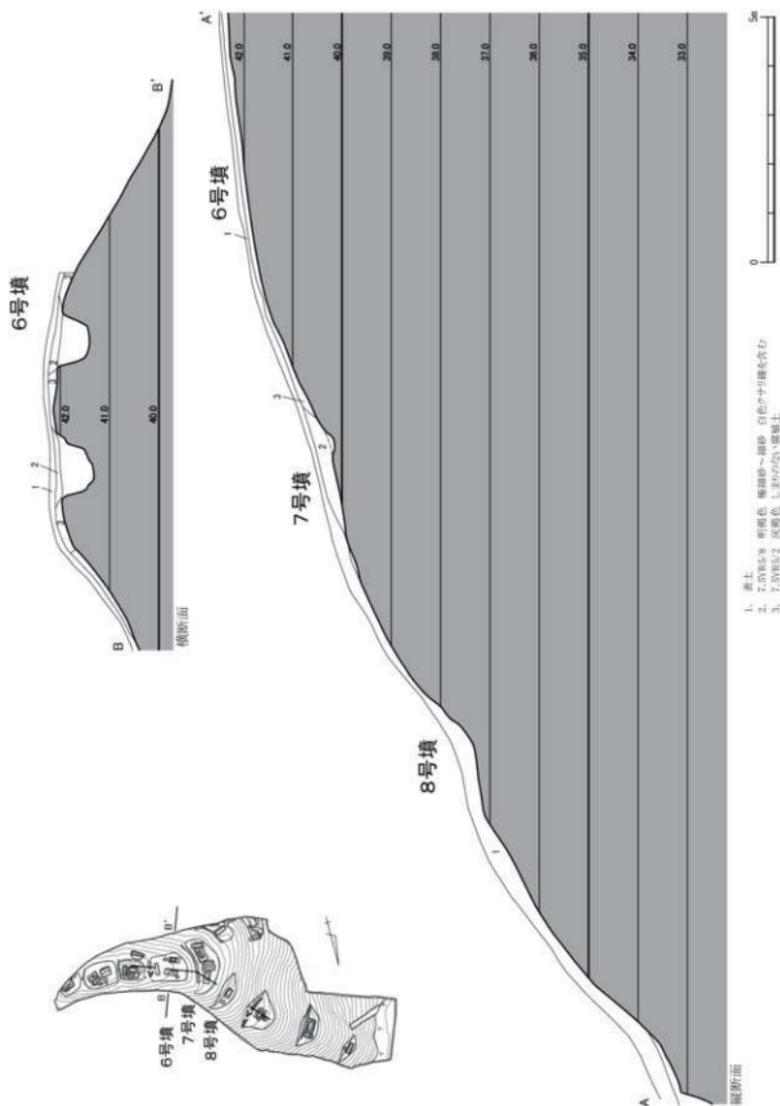
第19図 3号墳(2)第3主体部・SK301



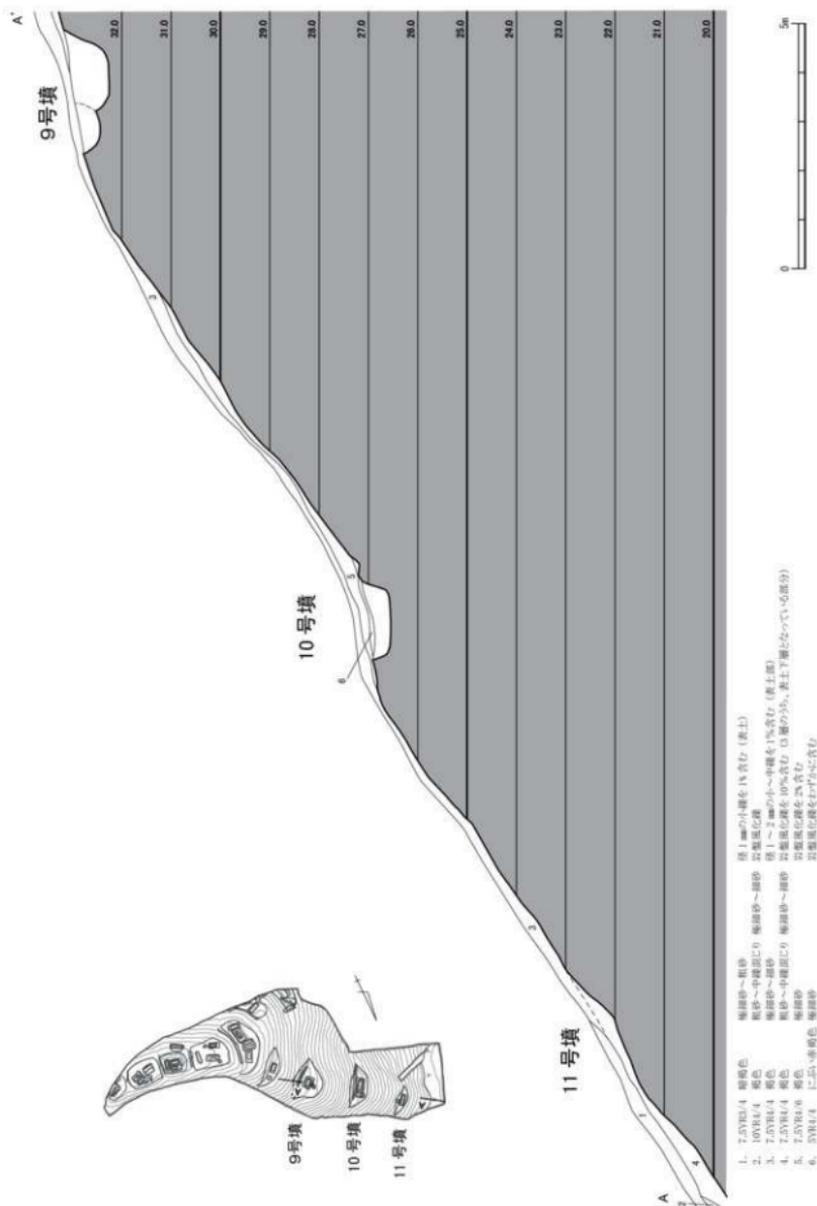
第 20 图 2区全体图



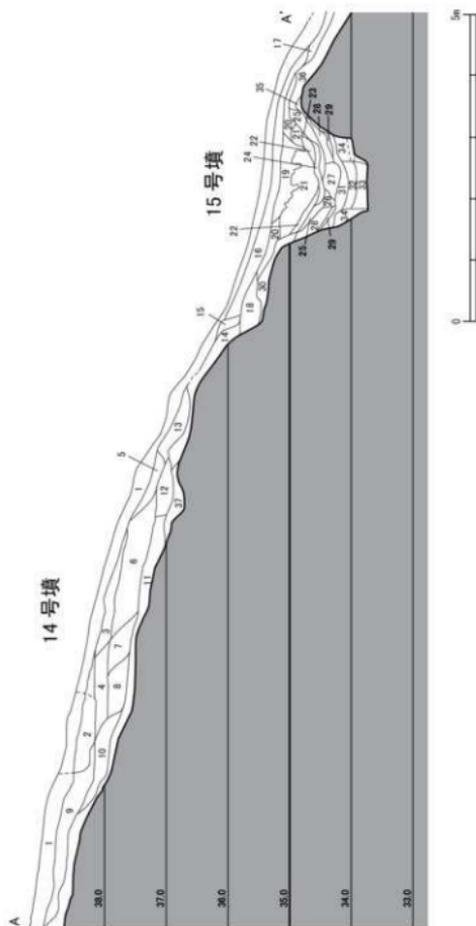
第21図 13・12・5号墳断面土層図



第22图 6・7・8号墳断面土层图

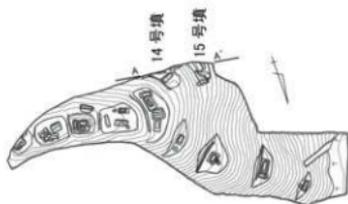


第23図 9・10・11号墳断面土層図



14号墳

15号墳



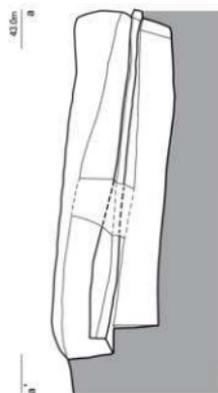
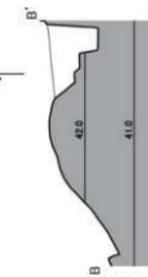
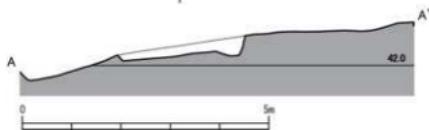
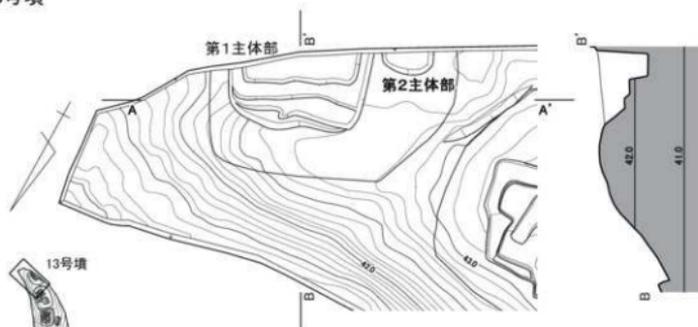
14号墳

15号墳

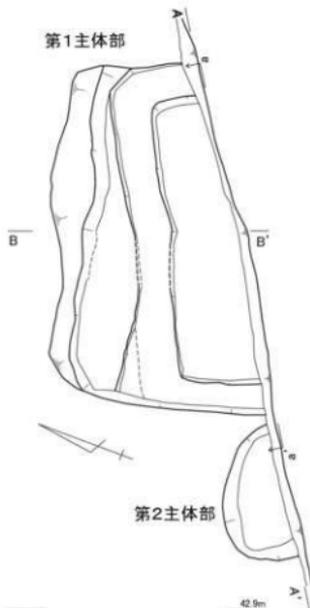
- | | | | | | |
|-------------|--------|-------|---------|------------|--|
| 1. 10VRI.3 | にじい質褐色 | 中砂混じり | 極細砂 | 黄土 | |
| 2. 10VRI.2 | 黒褐色 | | 極細砂 | クワゴ砂 | |
| 3. 25VR4.4 | 黒褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 4. 25VR4.6 | 褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 5. 25VR4.8 | 褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 6. 25VR3.8 | 褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 7. 25VR4.4 | 褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 8. 25VR4.6 | 明褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 9. 25VR4.6 | 黄褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 10. 10VRI.8 | 黄褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 11. 10VRI.8 | 黄褐色 | | 極細砂 | | |
| 12. 25VR4.6 | 明褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 13. 25VR3.8 | 明褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 14. 35RI.6 | 赤褐色 | | シルト質極細砂 | ペーブル・クワン含有 | |
| 15. 25VR4.6 | 褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 16. 10VRI.4 | 暗褐色 | | 極細砂 | | |
| 17. 25VR4.7 | 褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 18. 10VRI.3 | 赤褐色 | | シルト質極細砂 | クワゴ砂 | |
| 19. 10VRI.3 | 赤褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 20. 25VR3.4 | 暗褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 21. 25VR4.6 | 赤褐色 | | シルト質極細砂 | ペーブル・クワン含有 | |
| 22. 35RI.6 | 赤褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 23. 35RI.6 | 赤褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 24. 35RI.6 | 暗赤褐色 | | シルト質極細砂 | ペーブル・クワン含有 | |
| 25. 35RI.6 | 暗赤褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 26. 35RI.6 | 暗赤褐色 | | シルト質極細砂 | ペーブル・クワン含有 | |
| 27. 25VR4.6 | 赤褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 28. 25VR4.6 | 赤褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 29. 25VR5.8 | 明褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 30. 35RI.8 | 赤褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 31. 10VRI.4 | 暗褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 32. 35RI.6 | 暗赤褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 33. 35RI.6 | 暗赤褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 34. 25VR5.8 | 明赤褐色 | | シルト質極細砂 | ペーブル・クワン含有 | |
| 35. 35RI.8 | 赤褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 36. 35RI.6 | 明赤褐色 | | シルト質極細砂 | | |
| 37. 35RI.8 | 赤褐色 | | シルト質極細砂 | | |

第24図 14・15号墳断面土層図

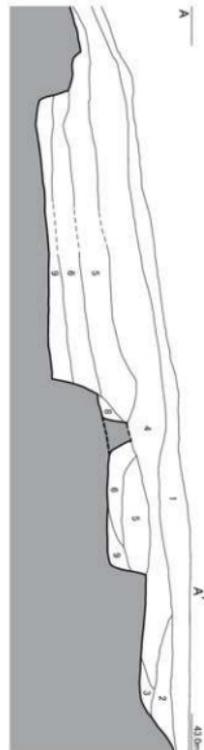
13号墳



第1主体部



第2主体部

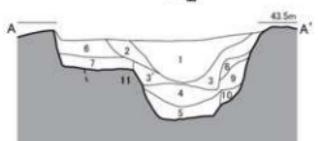
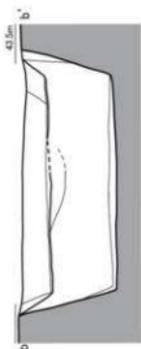
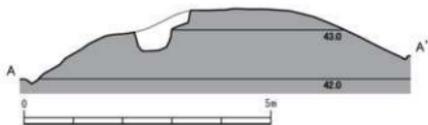
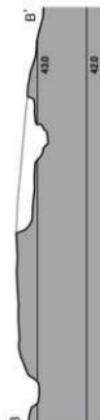
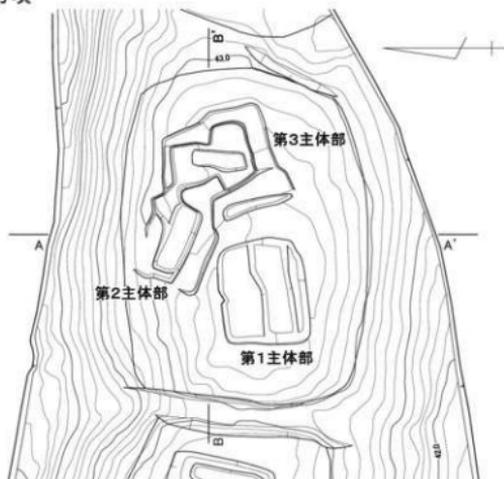


1. 腐植土
2. 10YR3/4 暗褐色 極細砂 溝?
3. 7.5YR4/6 褐色 極細砂
4. 7.5YR5/8 明褐色 シルト質極細砂
5. 10YR4/8 褐色 シルト質極細砂
6. 7.5YR4/6 褐色 シルト質極細砂 小粒含む
7. 7.5YR5/8 明褐色 極細砂
8. 5YR4/6 赤褐色 極細砂 小粒含む
9. 2.5YR5/8 明赤褐色 極細砂 鏡面 ベース



第25図 13号墳

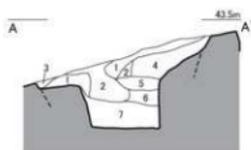
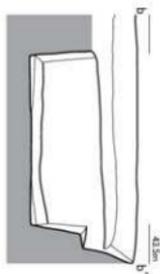
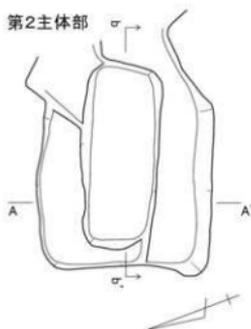
12号墳



- | | | |
|--------------|--------|--------------------|
| 1. T.5YR4/6 | 褐色 | 小礫(地山)混じりシルト質極細砂 |
| 2. 5YR3/4 | 暗赤褐色 | 小礫混じり極細砂 |
| 3. T.5YR4/6 | 褐色 | シルト質極細砂 混 ①は中礫多く含む |
| 4. 5YR4/6 | 赤褐色 | シルト質極細砂 混 小〜大礫含む |
| 5. 5YR4/6 | 赤褐色 | シルト質極細砂 混 小礫含む |
| 6. 5YR3/6 | 暗赤褐色 | シルト質極細砂 |
| 7. 5YR5/6 | 明赤褐色 | シルト質極細砂 礫少 |
| 8. 5YR4/4 | にぶい赤褐色 | シルト質極細砂 礫多 |
| 9. 5YR4/6 | 赤褐色 | シルト質極細砂 礫多 |
| 10. T.5YR7/3 | にぶい褐色 | 極細砂質粘土 ペース |
| 11. T.5YR4/8 | 赤褐色 | シルト質極細砂 パース |



第26図 12号墳(1) 第1主体部



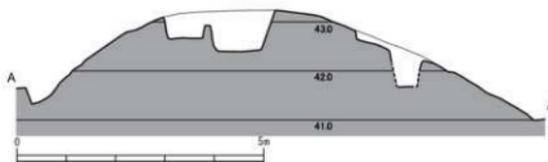
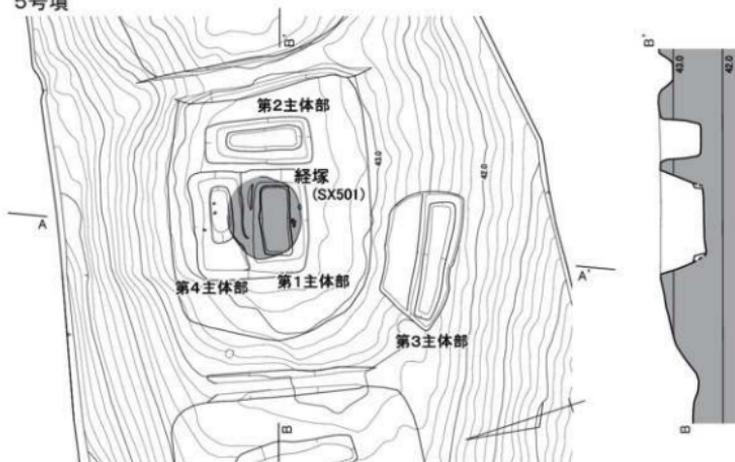
- | | | | | |
|----|-------------|--------|-----|---------|
| 1. | 5YR4/6 | 赤褐色 | 極細砂 | 地山黄土 |
| 2. | 腐植土 10YR3/3 | 黒褐色 | 極細砂 | 硝石 |
| 3. | 10YR2/2 | 黒褐色 | 極細砂 | 地山土型じり |
| 4. | 7.5YR4/3 | 褐色 | 極細砂 | 地山礫含む |
| 5. | 7.5YR5/6 | 明褐色 | 細砂 | 地山礫含む |
| 6. | 5YR4/4 | にぶい赤褐色 | 細砂 | |
| 7. | 7.5YR5/6 | 明褐色 | 細砂 | 地山礫多く含む |

第3主体部

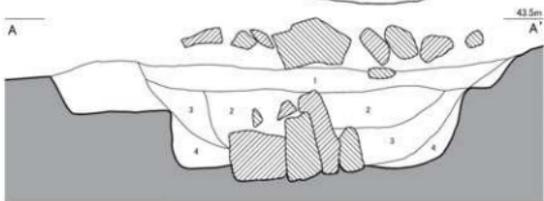


第27図 12号墳(2) 第2・3主体部

5号墳



経塚
(SX501)

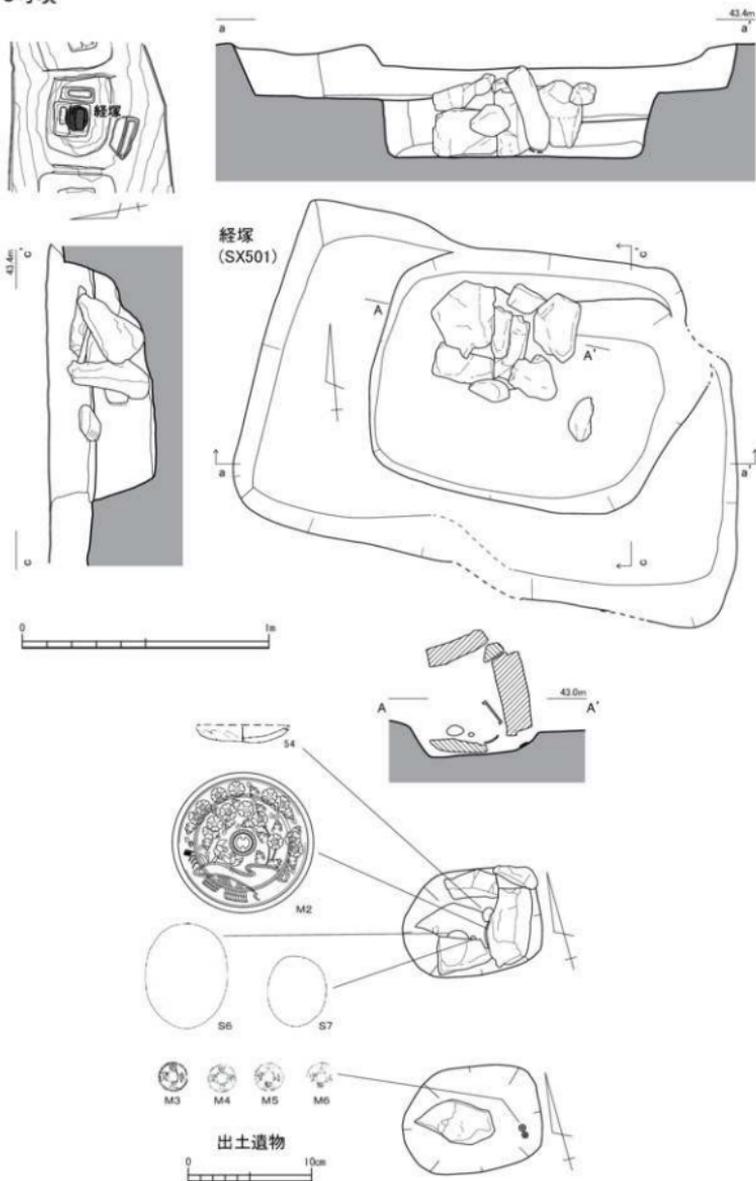


1. T5YR3/3 暗褐色 極細砂
2. T5YR4/6 褐色 極細砂 ベースブロック含む
3. 5YR4/8 赤褐色 極細砂
4. 5YR5/8 明赤褐色 極細砂



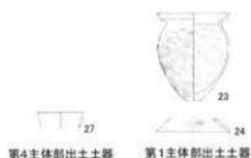
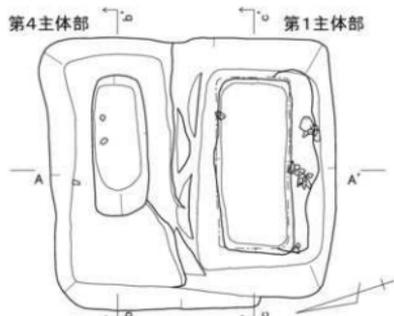
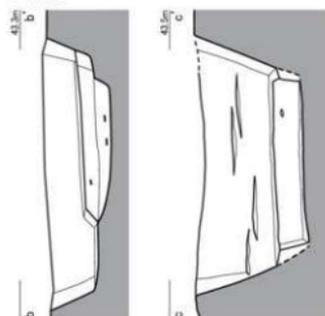
第28図 5号墳(1) 経塚(SX501)

5号墳



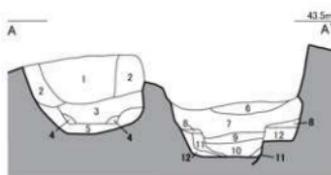
第29図 5号墳(2) 経塚(SX501)

5号墳



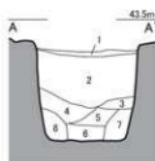
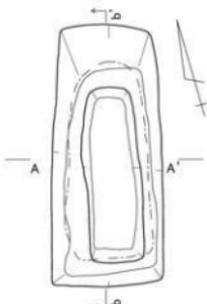
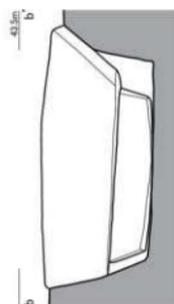
第4主体部出土土器

第1主体部出土土器



- | | |
|------------------------------------|----------------------------|
| 1. 7.SYR4/6 褐色 極細砂 網組か | 7. 5YR4/8 赤褐色 極細砂 |
| 2. 5YR5/8 明赤褐色 極細砂 地山ブロック含む | 8. 5YR5/8 明赤褐色 シルト質極細砂 |
| 3. 2.SYR5/8 明赤褐色 極細砂 地山ブロック径 5mm含む | 9. 5YR4/8 赤褐色 極細砂 地山ブロック多い |
| 4. 7.SYR5/8 明褐色 極細砂 | 10. 5YR4/6 赤褐色 極細砂 大ブロック多い |
| 5. 2.SYR6/8 橙色 極細砂 地山 鉄質 | 11. 5YR4/8 赤褐色 シルト質極細砂 |
| 6. 7.SYR4/6 褐色 シルト質極細砂 | 12. 2.SYR6/8 褐色 極細砂 |

第2主体部

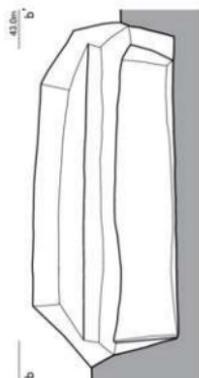


- | | |
|-------------------------|---------|
| 1. 7.SYR6/8 褐色 極細砂 | 地山雜含む |
| 2. 7.SYR5/8 明褐色 極細砂 | 地山雜多し |
| 3. 7.SYR5/6 明褐色 極細砂 | 地山雜含む |
| 4. 7.SYR4/4 褐色 シルト質極細砂 | 地山雜含む |
| 5. 7.SYR5/6 明褐色 極細砂 | 地山雜多し |
| 6. 7.SYR5/8 明褐色 シルト質極細砂 | 地山風化土含む |
| 7. 7.SYR6/8 褐色 極細砂 | 地山雜多し |
| 8. 7.SYR7/3 にじみ褐色 極細砂 | 雜層 地山含む |

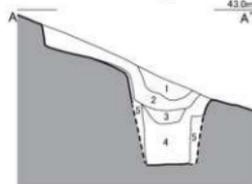
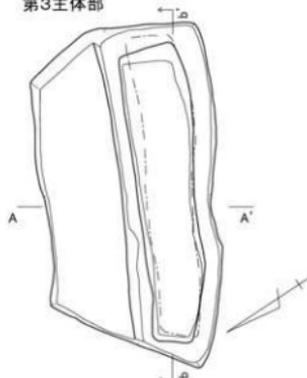


第30図 5号墳(3) 第1・2・4主体部

5号墳



第3主体部

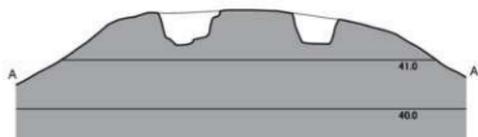
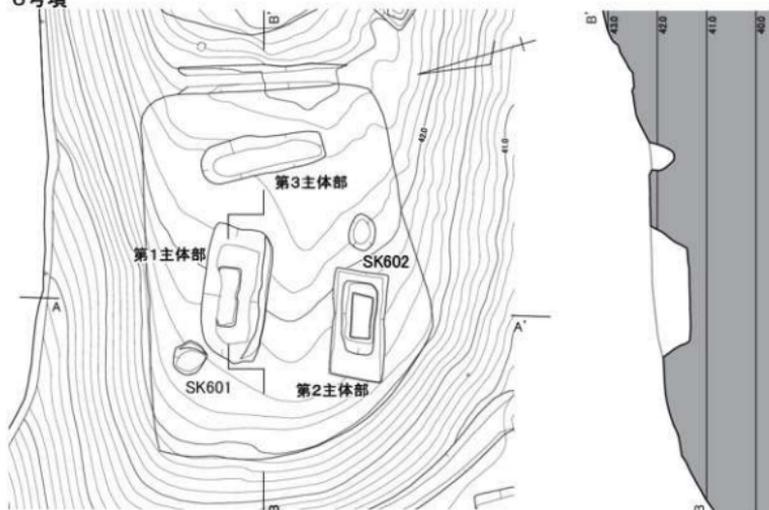


1. 5YR1.7/1 黒色 層砂 クロボタウ
2. 10YR4/4 褐色 シルト質極細砂 クロボタウ入り込む
3. 10YR4/4 褐色 シルト質極細砂 ベース露出む
4. 2.5YR5/4 明褐色 シルト質極細砂 ベース露多む含む
5. 2.5YR5/4 明褐色 シルト質極細砂 ベース露多む含む
6. 2.5YR6/2 暗褐色 シルト質極細砂混じり
7. 2.5YR8/6 浅黄褐色～左 礎ベース

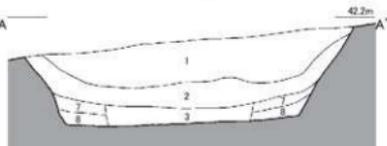


第31図 5号墳(4)第3主体部

6号墳



6号墳



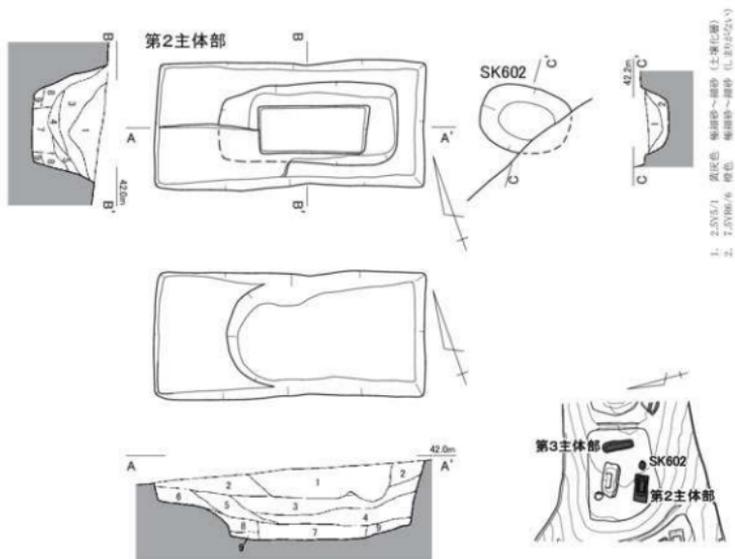
- 1. 2.5V5/1 黄灰色 細砂 (土壌層)
- 2. 7.5V6/6 褐色 細砂

- 3. 7.5V3/2 黒褐色 極細砂～細砂
- 4. 7.5V4/2 灰褐色 小粒混じり極細砂～細砂
- 5. 7.5V5/6 明褐色 粗砂～中粒混じり細砂～中砂
- 6. 7.5V5/4 比色不明 粗粒混じり細砂

- 7. 10YR4/2 灰黄褐色 小粒混じり細砂
- 8. 10YR5/4 比色不明 粗砂混じり極細砂～細砂
- 9. 7.5V5/4 比色不明 中粒混じり極細砂～細砂
- 10. 7.5V5/8 明褐色 中粒混じり細砂～中砂



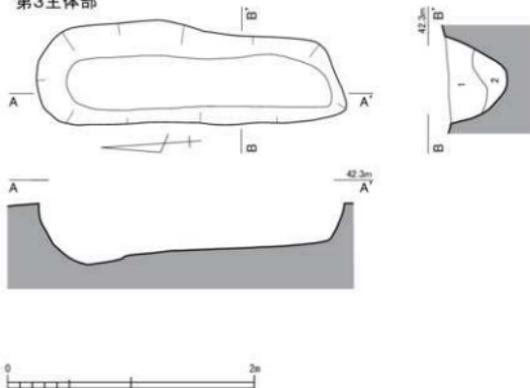
第32図 6号墳(1)第1主体部・SK601



1. 2.SV5/1 黄灰色 埴土層 埴土層
2. 7.SVR6/6 褐色 埴土層

1. 2.SV5/1 黄灰色 (土壌層) 埴土層 埴土層
2. 10YR6/3 濃い黄褐色 埴土層 埴土層
3. 5YR5/4 濃い黄褐色 埴土層 埴土層
4. 7.SVR6/6 褐色 埴土層 埴土層
5. 5YR6/8 褐色 埴土層 埴土層
6. 7.SVR7/8 黄褐色 埴土層 埴土層
7. 7.SVR6/6 褐色 埴土層 埴土層
8. 7.SVR5/7 明褐色 埴土層 埴土層
9. 7.SVR5/7 明褐色 埴土層 埴土層

第3主体部

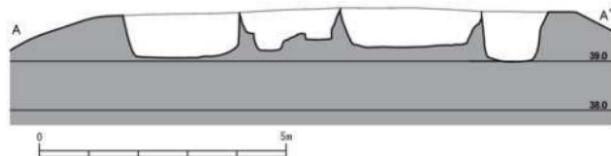


1. 10YR5/2 黄褐色 埴土層 埴土層

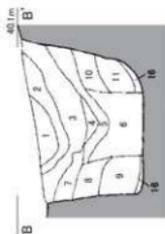
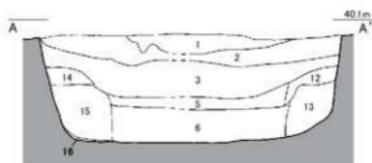
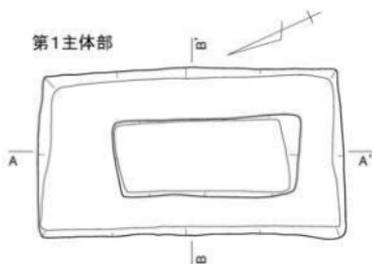
2. 7.SVR5/6 明褐色 埴土層

第33図 6号墳(2)第2・3主体部

7号墳

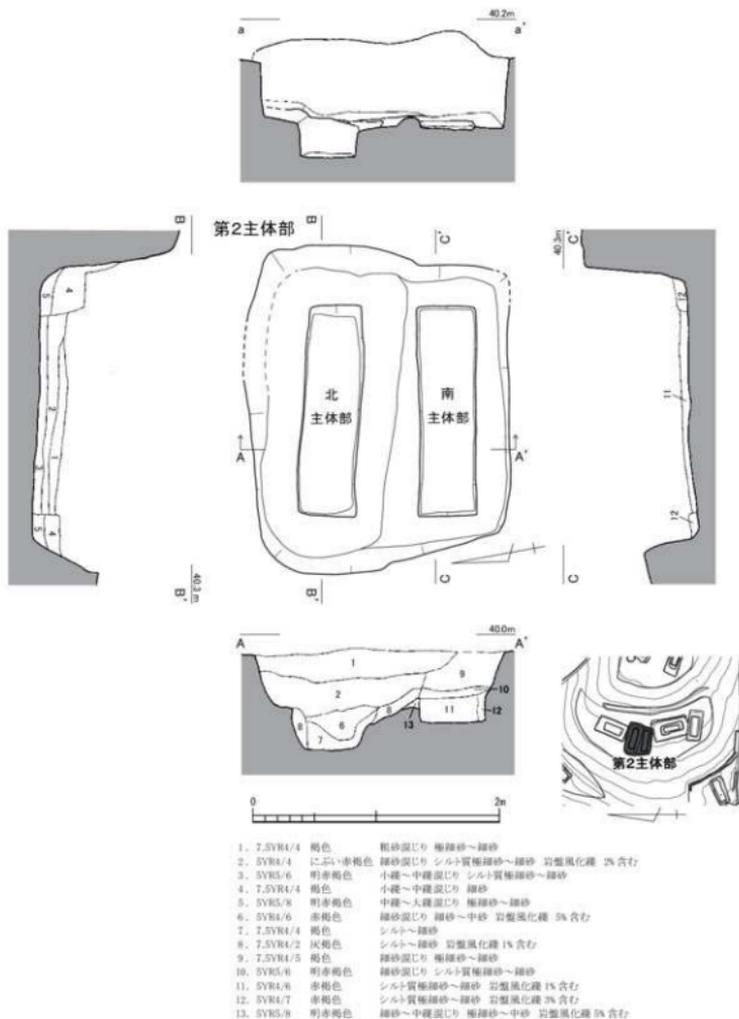


第1主体部



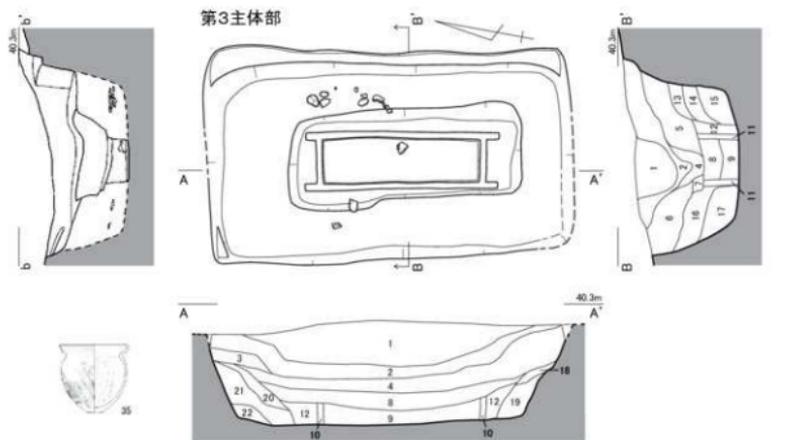
- | | | |
|--------------|--------|------------------------|
| 1. 10VR2/1 | 黒色 | 極細砂 |
| 2. 10VR3/3 | 黄褐色 | 極細砂～細砂 岩盤の風化層を1%含む |
| 3. 7.5VR1/6 | 褐色 | 極細砂～細砂 岩盤の風化層を2%含む |
| 4. 7.5VR1/6 | 褐色 | シルト質極細砂～細砂 |
| 5. 7.5VR5/8 | 明褐色 | 細砂～粗砂 (わずかに極細砂含む) |
| 6. 7.5VR5/6 | 明褐色 | 細砂～粗砂 |
| 7. 7.5VR5/6 | 褐色 | 極細砂～細砂 風化層 2%含む |
| 8. 5VR4/8 | 赤褐色 | シルト質極細砂 |
| 9. 5VR4/4 | にぶい赤褐色 | シルト質極細砂 |
| 10. 5VR5/8 | 明赤褐色 | シルト質極細砂 径1～2mmの小礫 2%含む |
| 11. 7.5VR5/6 | 明褐色 | シルト質極細砂～細砂 |
| 12. 5VR4/4 | にぶい赤褐色 | シルト質極細砂～細砂 |
| 13. 7.5VR1/5 | 褐色 | 細砂 |
| 14. 7.5VR5/8 | 明褐色 | 極細砂 (径1mm以下小礫をわずかに含む) |
| 15. 7.5VR4/4 | 褐色 | 極細砂～細砂 |
| 16. 5VR4/6 | 赤褐色 | 極細砂～細砂 |

第34図 7号墳(1) 第1主体部



第35図 7号墳(2)第2主体部

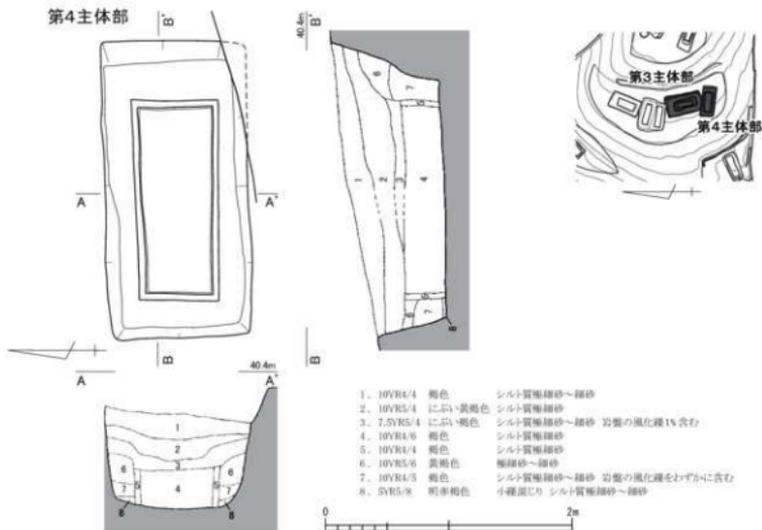
7号墳



- | | | |
|--------------|--------|----------------------------|
| 1. 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | 細砂～粗砂 炭化雑含む 田土落ち込み土 |
| 2. 5YR5/6 | 明赤褐色 | 極細砂～細砂(シルト質) 田土落ち込み土 |
| 3. 7.5YR4/5 | 褐色 | 極細砂～粗砂 |
| 4. 7.5YR4/6 | 褐色 | シルト質極細砂 |
| 5. 7.5YR4/4 | 褐色 | 細砂～粗砂(シルト質) 径1～2mmの小礫1%含む |
| 6. 7.5YR4/4 | 褐色 | シルト質極細砂 |
| 7. 7.5YR5/8 | 明赤褐色 | シルト質極細砂～粗砂 |
| 8. 7.5YR4/5 | 褐色 | シルト質極細砂～細砂 大礫含む 箱内埴土 |
| 9. 10YR4/5 | 褐色 | シルト質極細砂～細砂 炭盤の炭化礫を2%含む |
| 10. 7.5YR5/6 | 明赤褐色 | 小～中礫混じりシルト質極細砂～細砂 |
| 11. 7.5YR4/6 | 明赤褐色 | シルト質極細砂～粗砂 |
| 12. 5YR5/8 | 明赤褐色 | シルト質極細砂～粗砂 径1mm以下の小礫わずかに含む |

- | | | |
|--------------|-------|----------------------------|
| 13. 7.5YR5/6 | 明赤褐色 | シルト質極細砂～細砂 |
| 14. 5YR4/8 | 赤褐色 | 極細砂～細砂 堆山層 |
| 15. 7.5YR5/8 | 明赤褐色 | 極細砂～細砂(シルト質) |
| 16. 7.5YR4/5 | 褐色 | 細砂～小礫混じりシルト質極細砂～中砂 炭盤炭化雑含む |
| 17. 5YR5/7 | 明赤褐色 | 粗砂～小礫混じりシルト質極細砂～中砂 炭盤炭化雑含む |
| 18. 7.5YR5/6 | 明赤褐色 | 中礫混じり 細砂～中砂 |
| 19. 5YR5/7 | 明赤褐色 | 中礫混じり 細砂～中砂 |
| 20. 5YR5/8 | 明赤褐色 | シルト質極細砂～細砂 |
| 21. 5YR5/6 | 明赤褐色 | 細砂～中礫 |
| 22. 7.5YR5/4 | にぶい褐色 | 小～中礫混じり 粘質シルト～細砂 粘土混じり |

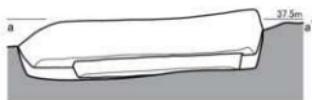
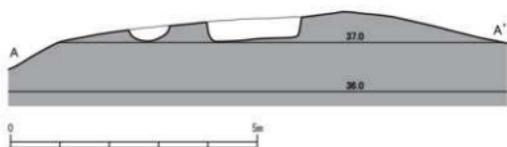
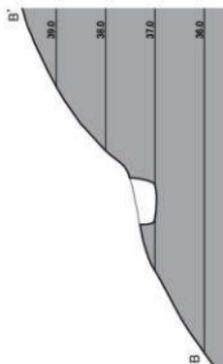
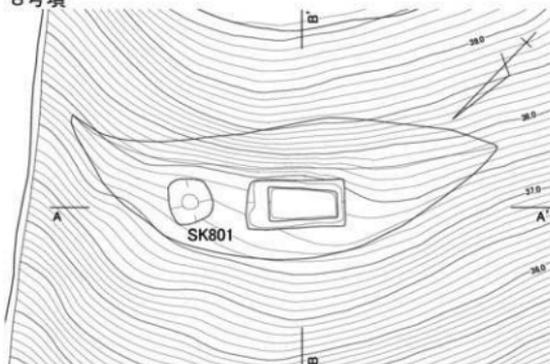
第4主体部



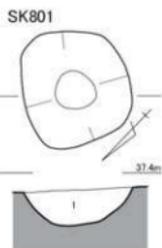
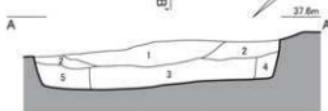
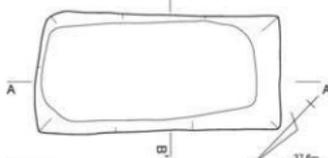
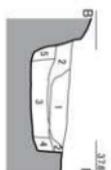
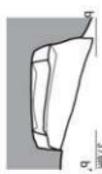
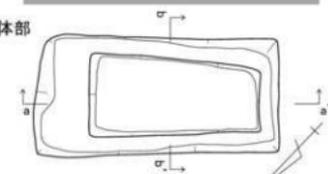
- | | | |
|-------------|--------|--------------------------|
| 1. 10YR4/4 | 褐色 | シルト質極細砂～細砂 |
| 2. 10YR5/4 | にぶい黄褐色 | シルト質極細砂 |
| 3. 7.5YR5/4 | にぶい褐色 | シルト質極細砂～細砂 炭盤の炭化礫1%含む |
| 4. 10YR4/6 | 褐色 | シルト質極細砂 |
| 5. 10YR4/4 | 褐色 | シルト質極細砂 |
| 6. 10YR5/6 | 黄褐色 | 極細砂～細砂 |
| 7. 10YR4/5 | 褐色 | シルト質極細砂～細砂 炭盤の炭化礫をわずかに含む |
| 8. 5YR5/8 | 明赤褐色 | 小礫混じりシルト質極細砂～細砂 |

第36図 7号墳(3) 第3・4主体部

8号墳



主体部



SK801

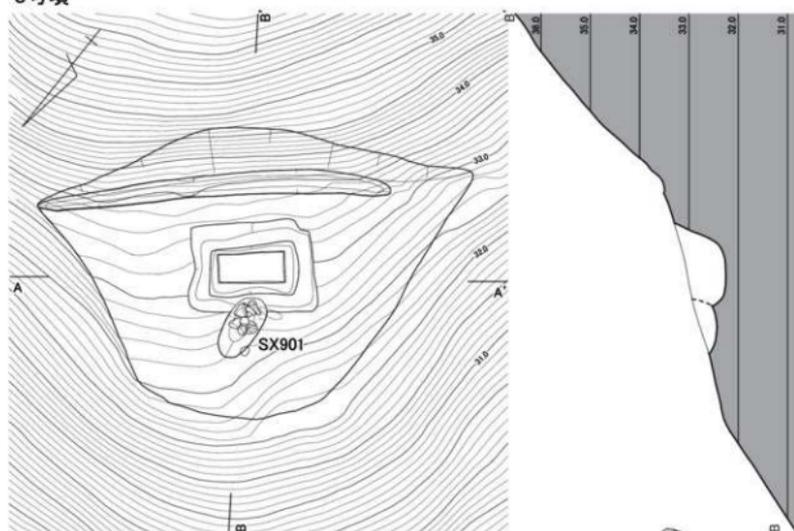
1. 5YR4/6 赤褐色 粗砂混じり細砂～中砂
直径2～12cmの礫40%程度含む



1. 5YR4/4 に近い赤褐色 小礫～中礫混じり極細砂～中砂 風化礫含む
2. 5YR5/6 明赤褐色 中礫～大礫混じり細砂～中砂 風化礫含む
3. 5YR5/7 明赤褐色 中礫～大礫混じり細砂～中砂 風化礫含む
4. 5YR4/3 に近い赤褐色 中礫混じり細砂～粗砂 風化礫含む
5. 5YR5/6 明赤褐色 小礫～中礫混じり細砂～粗砂 風化礫含む

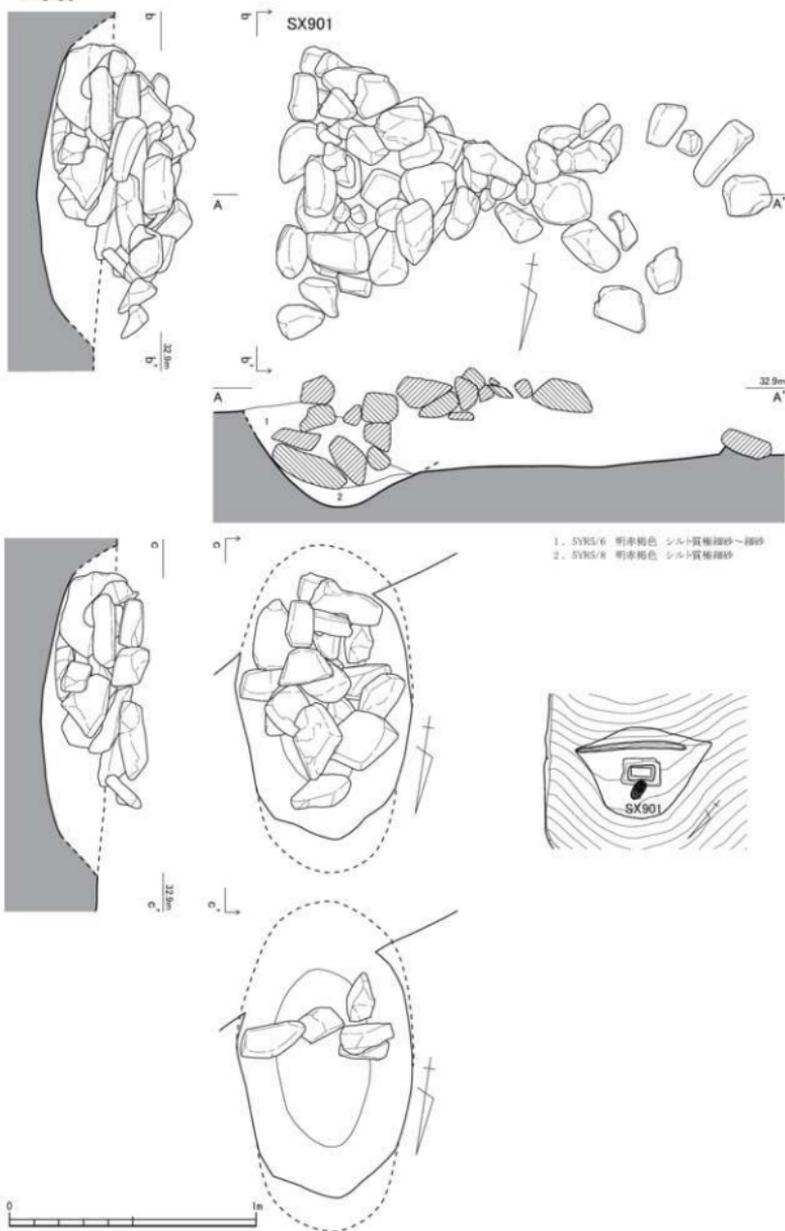
第37図 8号墳

9号墳



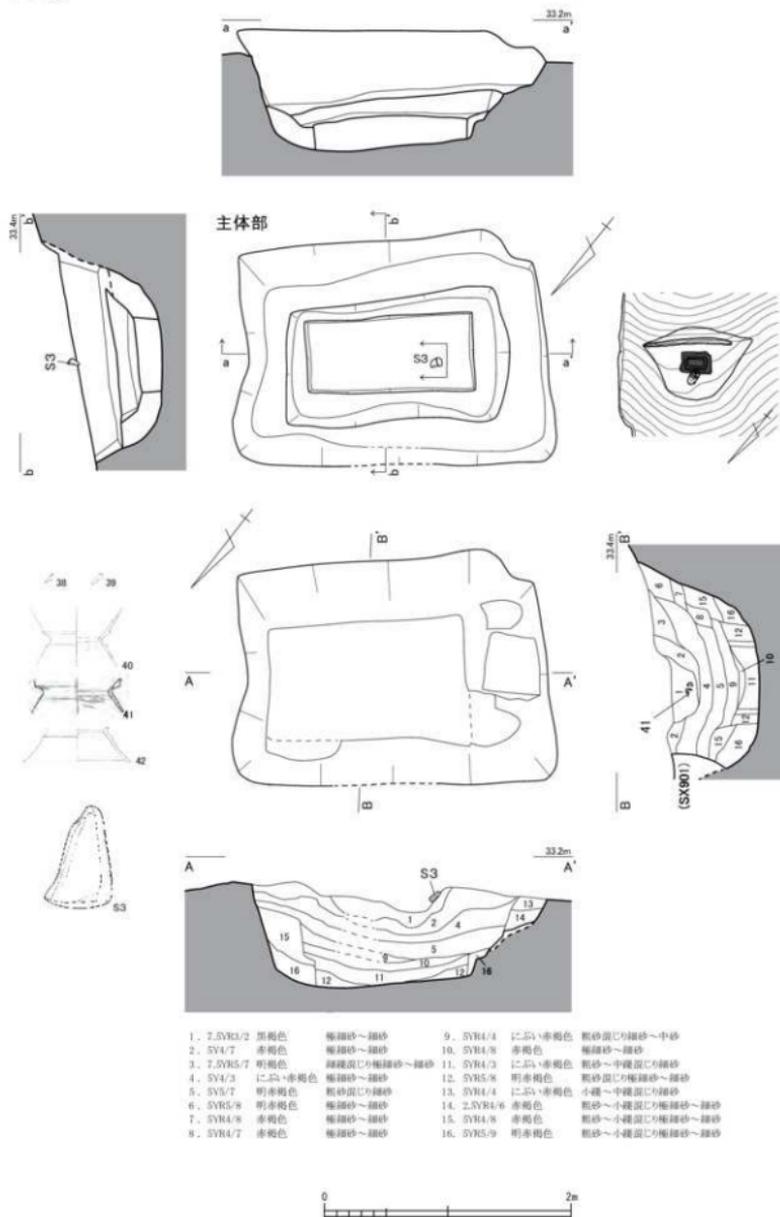
第38図 9号墳(1)

9号墳



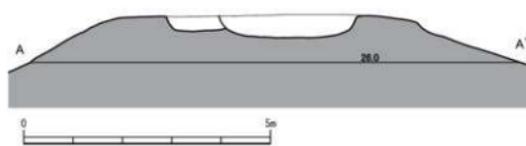
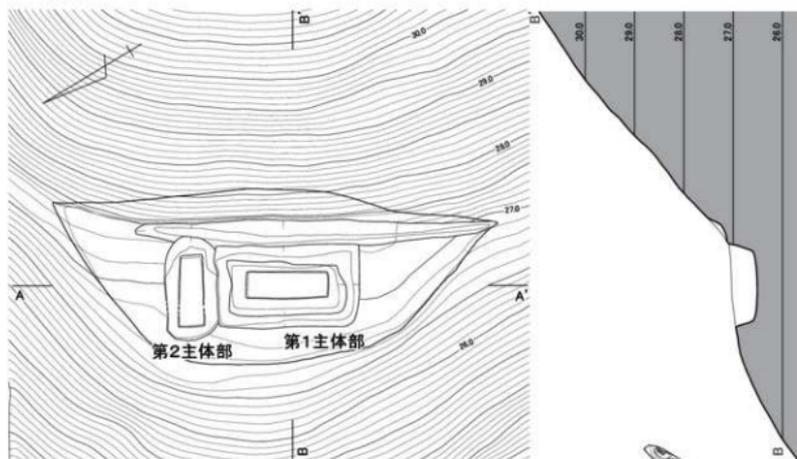
第 39 图 9号墳 (2) SX901

9号墳

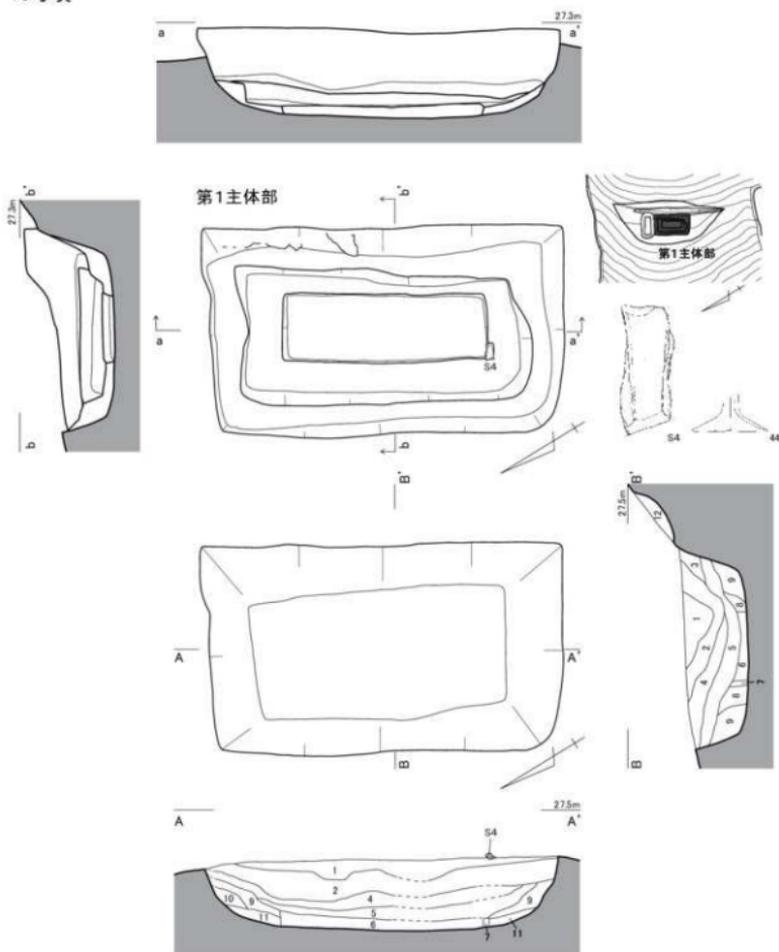


第40図 9号墳(3)主体部

10号墳



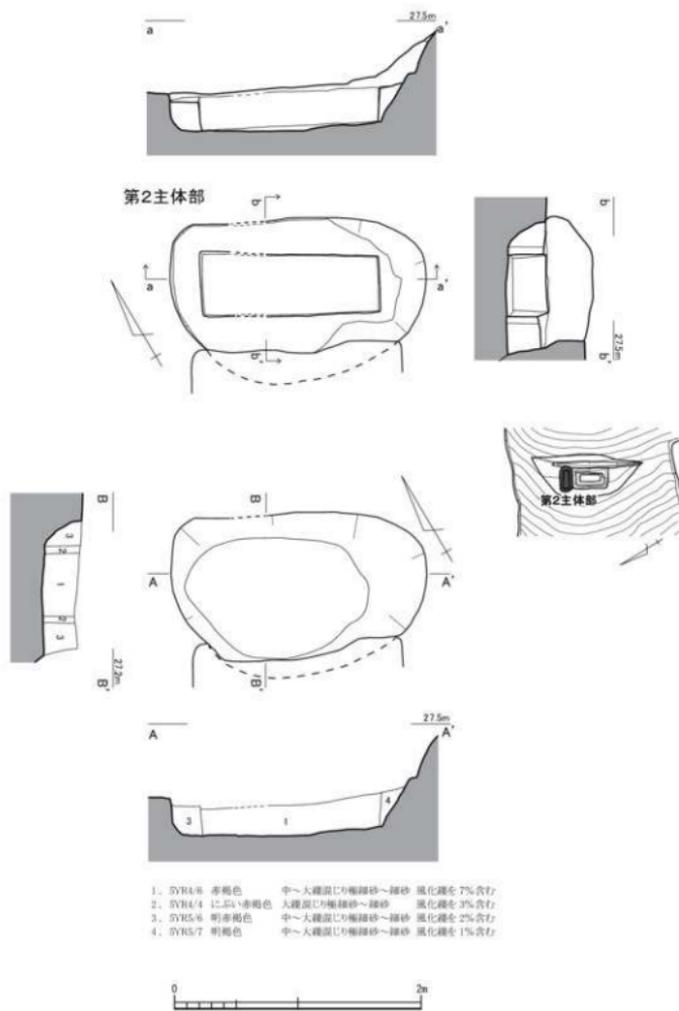
第41图 10号墳(1)



1. 7.5YR3/2 黒褐色 極細砂～細砂 岩盤の風化層含む
2. 7.5YR4/6 褐色 シルト質極細砂～細砂
3. 5YR5/4 に2.5、赤褐色 粗砂～中礫混じり 極細砂～細砂 岩盤の風化層含む
4. 5YR4/4 に2.5、赤褐色 小礫～中礫混じり 細砂～中砂
5. 5YR4/6 赤褐色 粗砂～中礫混じり 極細砂～細砂 岩盤の風化層含む
6. 5YR5/6 明赤褐色 小礫～中礫混じり シルト質極細砂～細砂 岩盤の風化層はほとんど認められず
7. 5YR4/4 に2.5、赤褐色 細砂～中砂
8. 5YR4/7 赤褐色 粗砂～中礫混じり 細砂
9. 5YR4/8 赤褐色 小礫～中礫混じり 細砂～中砂
10. 7.5YR5/8 明褐色 中礫混じり 細砂
11. 7.5YR3/6 明褐色 細砂～中砂
12. 5YR4/4 に2.5、赤褐色 中礫混じり 極細砂～細砂

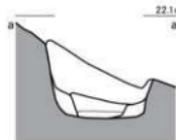
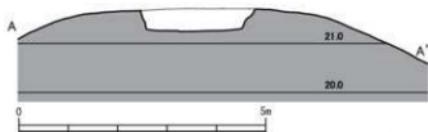
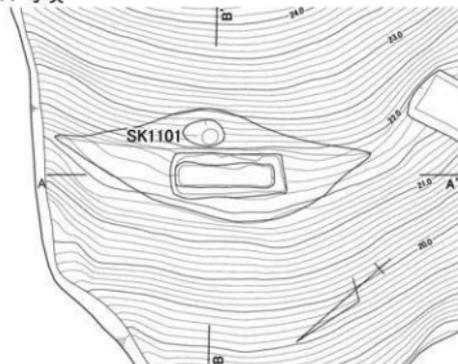


第42図 10号墳(2) 第1主体部

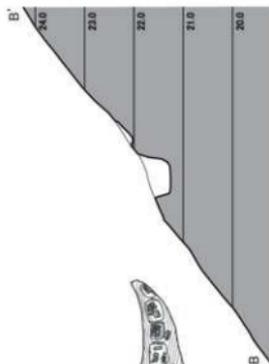


第43图 10号墳(3)第2主体部

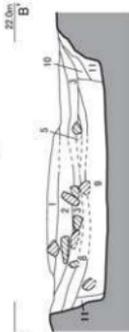
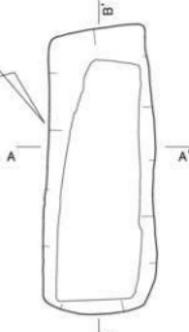
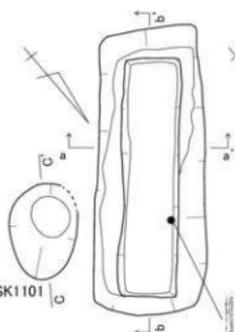
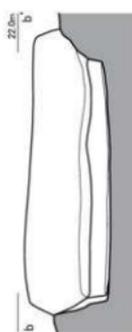
11号墳



主体部



1. 表土
2. 7.5VR4/2 褐色 極細砂～細砂 岩盤の風化層を1%未満含む
3. 7.5VR4/3 褐色 極細砂～細砂 岩盤の風化層を2%程度含む
4. 7.5VR4/5 褐色 小礫～中礫混じり 細砂～中砂 岩盤の風化層は1%以下
5. 7.5VR4/4 褐色 中砂混じり細砂 岩盤の風化層を1%含む
6. 7.5VR4/4 褐色 小礫～中礫混じり 細砂～中砂 岩盤の風化層を1%含む
7. 7.5VR4/6 褐色 小礫～中礫混じり 細砂～中砂 岩盤の風化層を1%含む
8. 7.5VR4/4 褐色 小礫混じり 細砂 風化層は1%以下
9. 7.5VR4/5 褐色 粗砂～小礫混じり 細砂～中砂 風化層は1%以下
10. 7.5VR5/7 明褐色 粗砂混じり 細砂～中砂
11. 7.5VR4/4 褐色 粗砂混じり 細砂～中砂

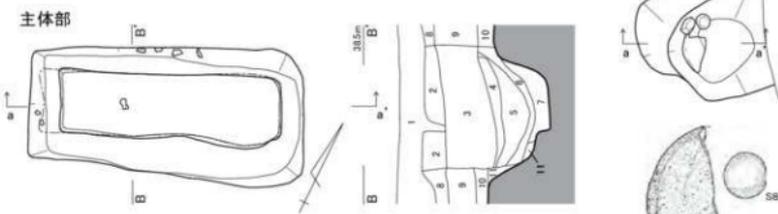
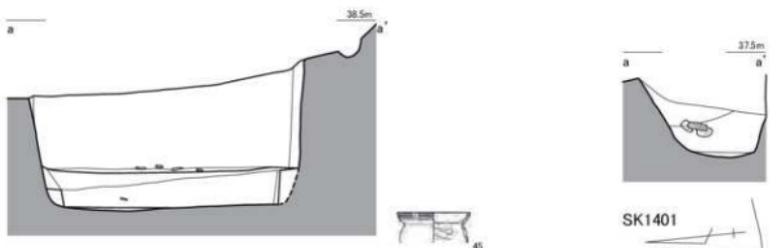
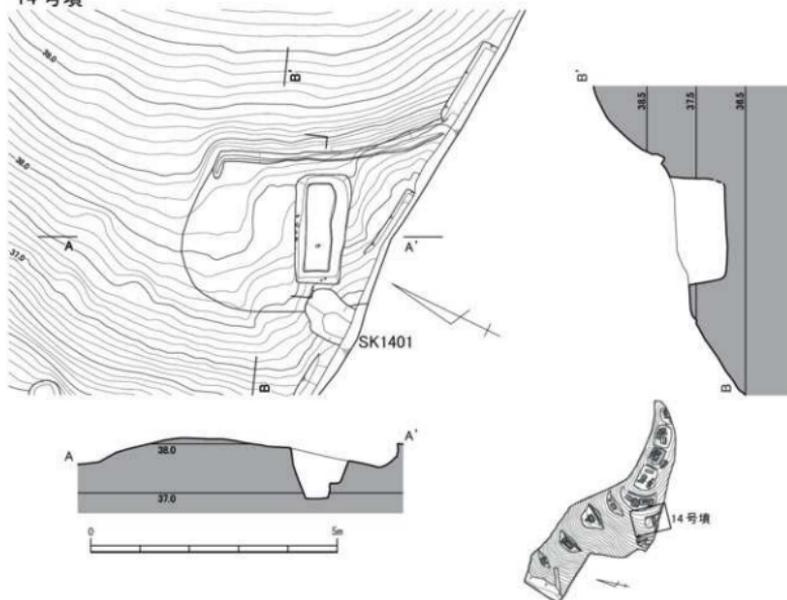


1. 7.5VR4/3 褐色 細砂 岩盤の風化層を1%含む
2. 7.5VR3/3 明褐色 小礫混じり 細砂～粗砂 岩盤の風化層を3%含む



第44図 11号墳

14号墳

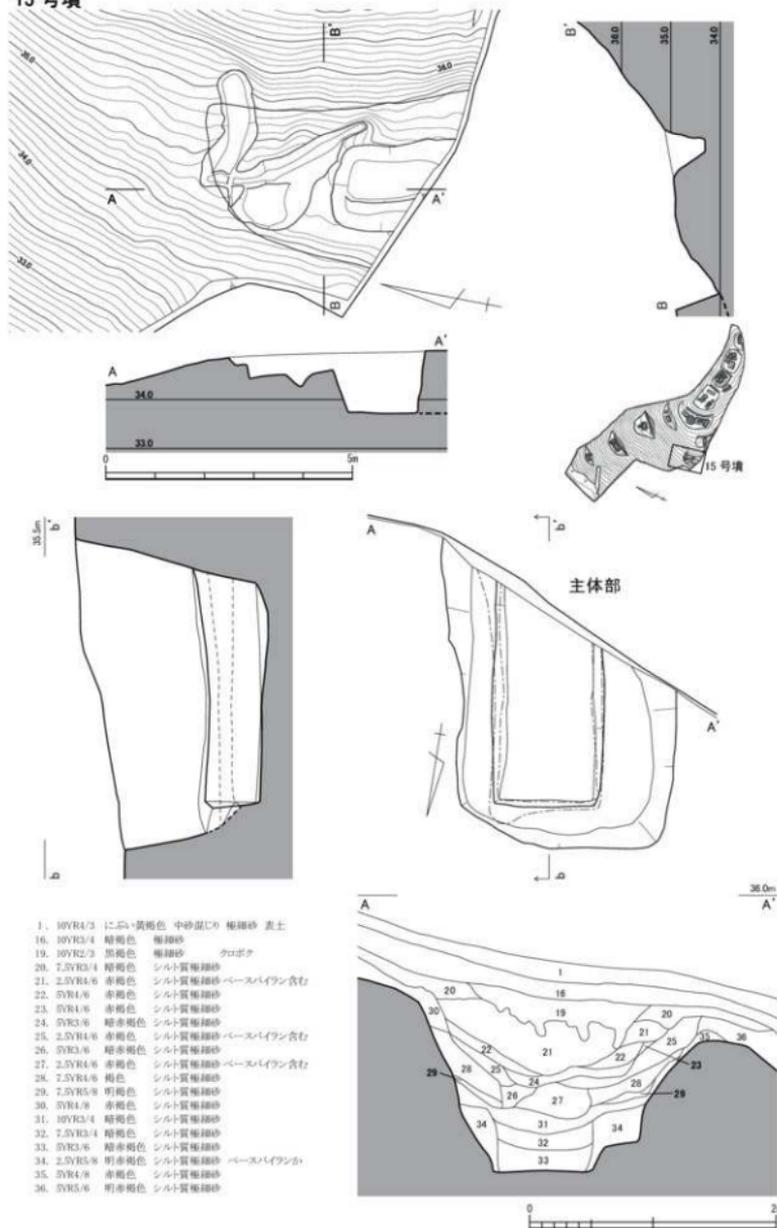


- | | |
|----------------------------------|---------------------------------|
| 1. 表土 10VR3/4 暗褐色 極細砂 上半腐植土 | 8. 2.5VR4/4 褐色 極細砂 |
| 2. 2.5VR4/4 褐色 小礫混じり シルト質極細砂 | 9. 2.5VR5/6 明褐色 極細砂 帯地層① |
| 3. 5VR4/8 赤褐色 シルト質極細砂 地山ブロック多く含む | 10. 5VR4/8 赤褐色 シルト質極細砂 地山塊化土が |
| 4. 2.5VR4/6 褐色 シルト質極細砂 | 11. 2.5VR5/8 明赤褐色 シルト質極細砂 雜質ベース |
| 5. 5VR4/8 赤褐色 シルト質極細砂 地山ブロック含む | |
| 6. 2.5VR4/6 褐色 シルト質極細砂 | |
| 7. 5VR4/8 赤褐色 シルト質極細砂 地山ブロック含む | |



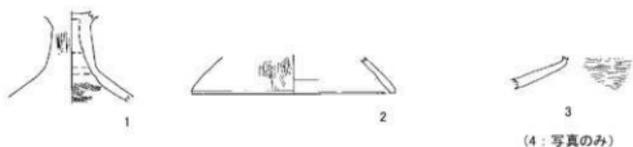
第45図 14号墳

15号墳

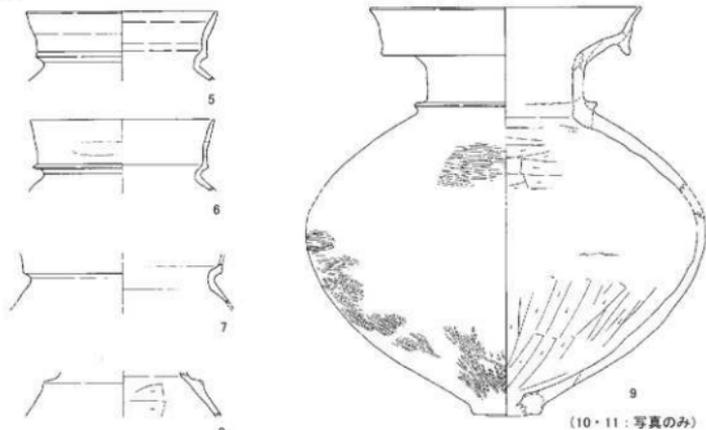


第46図 15号墳

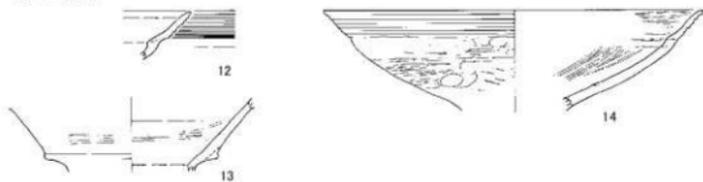
2号墳



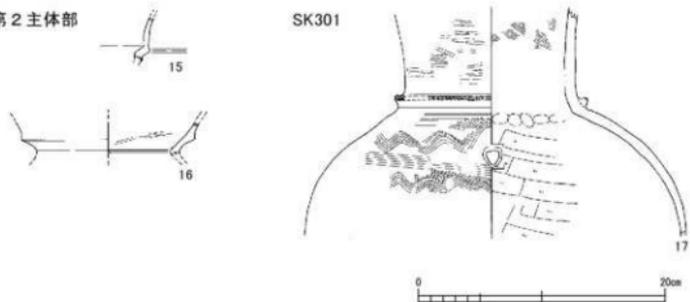
3号墳



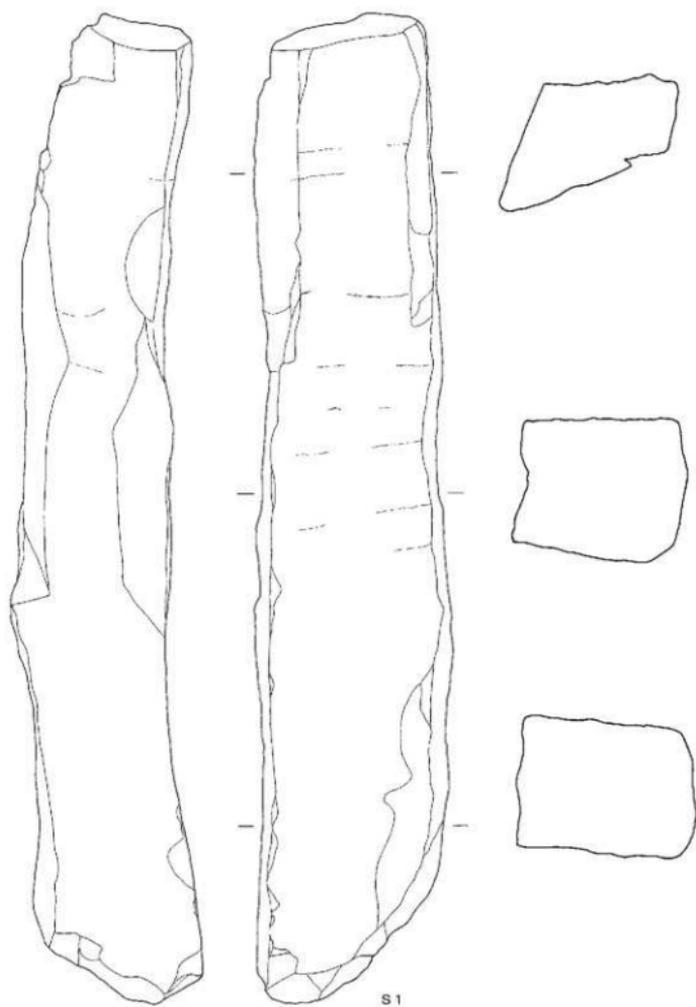
第1主体部



第2主体部

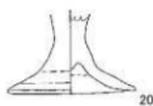
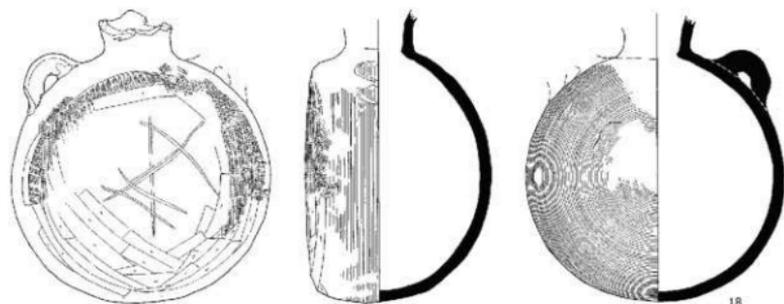


第47図 2・3号墳出土遺物



第48図 3号墳出土遺物

4号墳

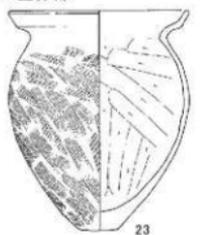


12号墳

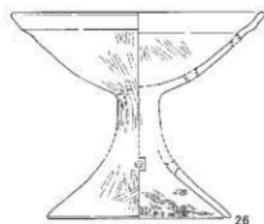
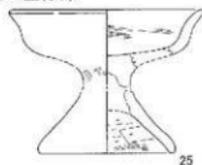


5号墳

第1主体部



第3主体部



第4主体部



(28・29: 写真のみ)



第49図 4・12・5号墳出土遺物

6号墳



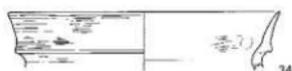
第3主体部



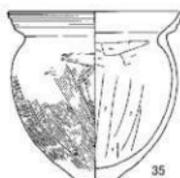
SK601



7号墳



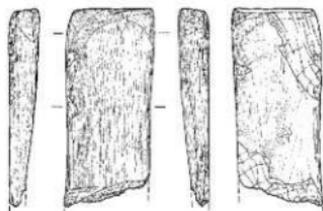
第3主体部



8号墳

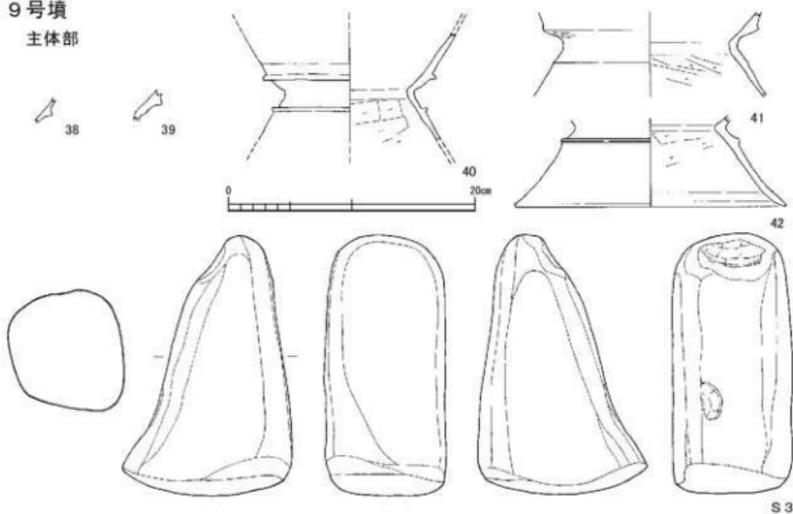


主体部

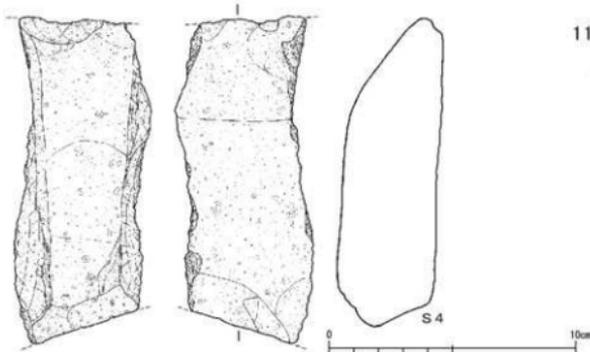
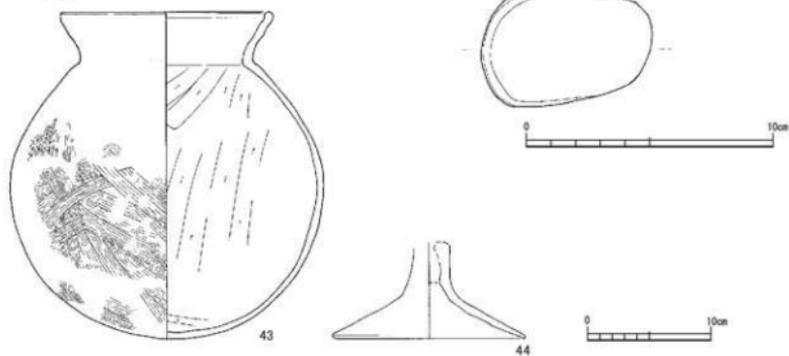


第50図 6・7・8号墳出土遺物

9号墳
主体部



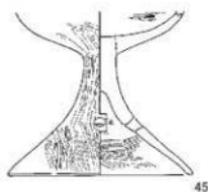
10号墳



11号墳
主体部

第51図 9・10・11号墳出土遺物 (S3・S4・M1は1/2、それ以外は1/4)

14号墳



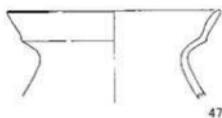
45

第1主体部



46

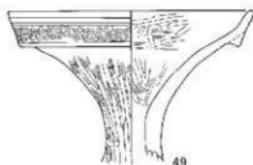
15号墳



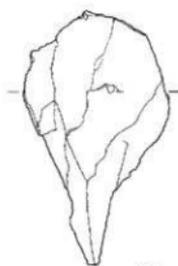
47



48



49



S5

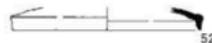


50

その他



51



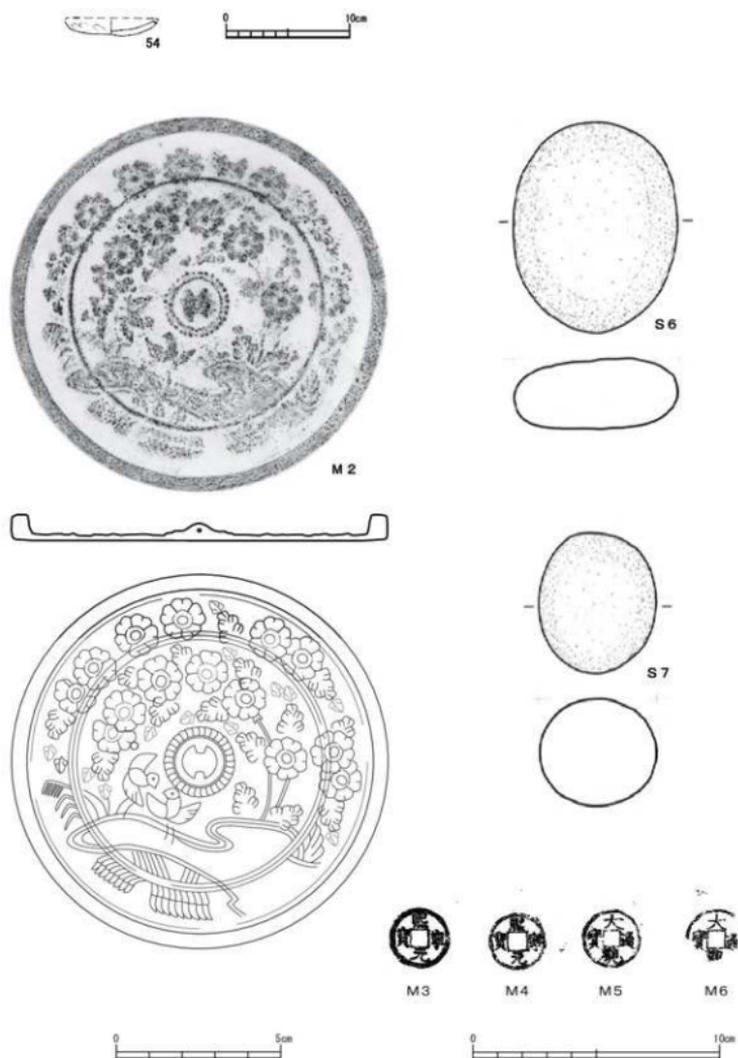
52



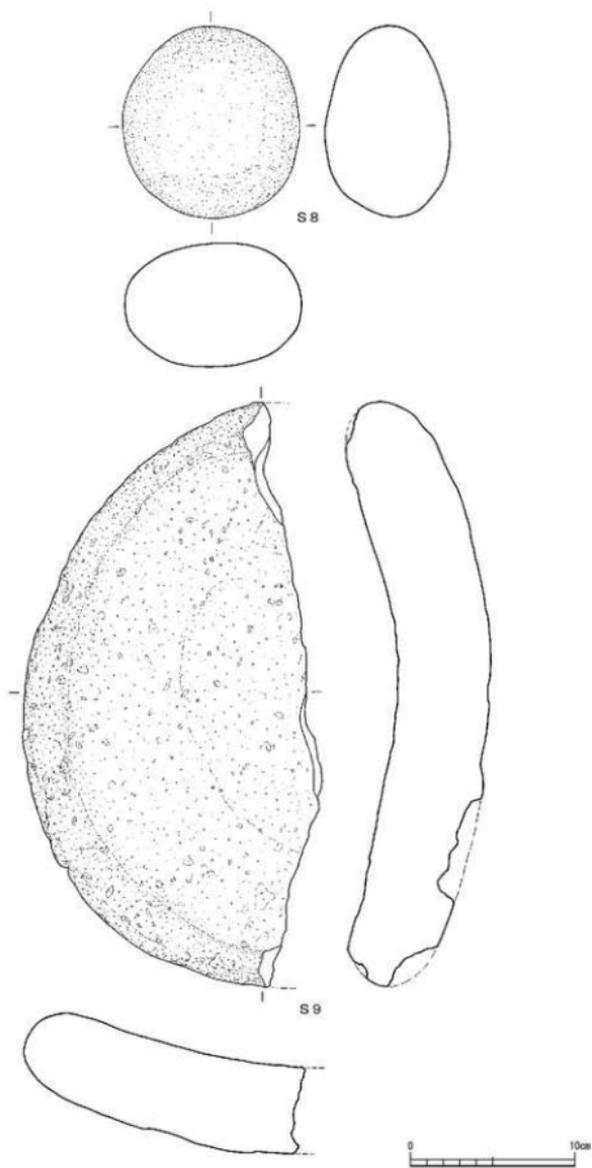
53



第52図 14・15号墳他出土遺物



第53図 経塚(SX501)出土遺物



第54図 SK1401出土遺物

第3表 対田清水谷古墳群出土土器観察表

報告番号	遺構・層位	種別	器種	法量 (cm)			残存	備考
				口径	器高	底径		
1	2号墳 斜面	弥生土器	高坏		(7.4)		脚1/6	
2	2号墳 斜面	弥生土器	高坏		(3.0)		脚端部1/8	
3	2号墳 主体部 墓嚢嚢上中央南半	弥生土器	高坏		(3.8)		坏部 小片	
4	2号墳 主体部 墓嚢嚢上北半	弥生土器	高坏				坏部 小片	写真のみ掲載
5	3号墳 表土～検出面	弥生土器	甕	(15.2)	(5.6)		口縁部小片	
6	3号墳 表土～検出面	弥生土器	甕	(14.8)	(5.8)		口縁部小片	
7	3号墳 表土～検出面	弥生土器	甕		(3.3)		頸部1/8	
8	3号墳 南東隅表土	弥生土器	鼓形器台		(3.7)		胴部～台部小片	写真なし
9	3号墳 表土	弥生土器	蓋	(22.0)	(33.3)	(5.6)		胴上段元
10	3号墳 表採	弥生土器	鼓形器台				胴部～台部小片	写真のみ掲載
11	3号墳 表土	弥生土器	甕				口縁部小片	写真のみ掲載
12	3号墳 第1主体部 1層	弥生土器	高坏		(4.9)		口縁部小片	破砕土器
13	3号墳 第1主体部 1層	弥生土器	鼓形器台		(5.9)		受部～胴部1/8	
14	3号墳 第1主体部 7層上部	弥生土器	高坏	(30.6)	(8.1)		坏部1/8	
15	3号墳 第2主体部 1層	弥生土器	甕		(3.6)		口縁部小片	
16	3号墳 第2主体部 1層	弥生土器	鼓形器台		(2.8)		胴部1/6	写真なし
17	3号墳 SK301 1層	弥生土器	蓋		(18.6)		頸～体部2/3	胴部穿孔
18	4号墳 表土	須恵器	樽瓶		(23.3)		口縁部欠損	
19	4号墳 表土	須恵器	甕	11.7	12.2		口縁部7/8欠損	
20	4号墳 表土	土師器	高坏		(6.5)	10.3	脚部完存	
21	12号墳 墳頂部	弥生土器	鉢or甕	(13.3)	(2.2)		口縁部小片	
22	12号墳 墳丘南側	弥生土器	高坏		(3.35)		坏部～脚上部1/4	
23	5号墳 第1主体部 棺側	弥生土器	甕	14.4	17.9	3.2	体部1/2	破砕土器 破付着
24	5号墳 第1主体部 埋土層	弥生土器	高坏or器台		(2.95)	(14.9)	脚端部1/6	破砕土器
25	5号墳 第3主体部 黒色土	弥生土器	高坏	(15.4)	(11.7)	(11.2)	約1/4	胴上段元
26	5号墳 第3主体部 黒色土	弥生土器	高坏	(20.2)	(16.85)	(15.0)	約1/4	胴上段元
27	5号墳 第4主体部 棺外	弥生土器	直口蓋	(9.2)	(3.15)		口縁部1/6	
28	5号墳 第4主体部 棺底	弥生土器	小笠蓋		(3.8)		体部小片	写真のみ掲載
29	5号墳 第4主体部 棺底	弥生土器	直口蓋		(4.0)		口縁部小片	写真のみ掲載(22と同一)
30	6号墳 斜面	弥生土器	鼓形器台		(3.8)		口縁部小片	竹炭状スランプ
31	6号墳 第3主体部	弥生土器	高坏		(3.25)		脚端部小片	
32	6号墳 SK601	弥生土器	甕		(4.75)		口縁部小片	
33	7号墳 表土	弥生土器	蓋		(3.5)		体部小片	
34	7号墳 表土	弥生土器	甕	(22.0)	(4.7)		口縁部1/8	
35	7号墳 第3主体部 9・15層	弥生土器	甕	(13.0)	13.9	(3.1)	1/2	破砕土器 破付着
36	8号墳 表土	土師器	高坏		(3.75)		坏受部1/4	
37	8号墳 主体部 棺底直上	弥生土器	甕		(4.45)		口縁部小片	破砕土器か
38	9号墳 主体部 1層	弥生土器	鼓形器台		(2.1)		受部～胴部片	
39	9号墳 主体部 1層	弥生土器	鼓形器台		(2.6)		受部～胴部片	
40	9号墳 主体部 1層	弥生土器	鼓形器台		(9.0)		胴部2/3	
41	9号墳 主体部 1層	弥生土器	鼓形器台		(6.85)		胴部1/8	3号墳第2主体部表土と接合
42	9号墳 主体部 1層	弥生土器	鼓形器台		(7.3)	(21.6)	胴部～台部1/8	
43	10号墳 表土	土師器	甕	(16.7)	(26.45)		口縁小片+体部1/4	2009年12月確認スランプ
44	10号墳 第1主体部 1層	土師器	高坏		(7.8)	(15.4)	脚部1/2	
45	14号墳 墓嚢埋土上面	弥生土器	高坏		(13.25)	(15.0)	坏部1/8 脚部1/4	
46	14号墳 主体部 棺側埋土	弥生土器	甕	14.8	(6.3)		口縁部完存 体部1/8	破砕土器 破付着
47	15号墳	弥生土器	蓋	(17.0)	(7.2)		口縁部1/8	
48	15号墳	弥生土器	蓋?		(8.4)		底部1/4	47と同一
49	15号墳	弥生土器	器台	19.6	(12.3)		受部～胴部3/4	
50	15号墳 墓嚢解方東上	弥生土器	台付鉢		(2.7)	5.7	台部完存	
51	10～11号墳付近 表土	須恵器	椀輪蓋	(15.6)	2.8		天蓋部完存	
52	10～11号墳付近 表土	須恵器	椀輪蓋	(15.1)	(1.9)		口縁部1/8	
53	10～11号墳付近 表土	土師器	椀	(1.8)	5.2		底部	
54	経塚 (SX50) 石組内	土師器	小皿	(7.4)	(1.5)		ほぼ完存	

第5章 小坂谷古墳群

第1節 調査の概要

旧浜坂町東部の久斗谷南岸の丘陵上に位置する古墳群である。この丘陵は南背後の山稜から伸びた突端に位置するもので、久斗谷の谷中を見下ろす位置に所在する。周囲と比べてみても標高は決して高くはないが、平地からは円錐形を呈した小高い独立丘陵となる景観を持っており、比較的に目立つ存在である。丘陵上からの眺望は対岸の対田集落を初め西側の浜坂市街などへの視野は開けている。

古墳が立地する丘陵は円錐形を呈する山容であるが、頂部は幅5～6m前後で斜面は急斜面となる。これは地質が真砂質のために斜面の風化が著しいことが原因と推測される。

古墳群は1号墳が立地する丘陵頂部から北東側と西側に尾根が分岐する。ただし、分岐して伸びる尾根の先は両方とも土取りによって大きく削平され崖状地形となっている。検出された古墳は丘陵頂部に1号墳、西側に伸びる尾根に2号墳、北東に伸びる尾根に3・4号墳の合計4基がある。

なお、埋葬施設は1～3号墳の3基が木棺直葬墳で、4号墳は墳丘を大きく削平されているため不明である。

小坂谷古墳群の西側には与三谷古墳群（1・2号墳）がかつて存在したといわれている。この2基の古墳は昭和45～46年ごろの工事なしい土取りなどに伴って消滅したといわれているが、その際に採取された直刀1振、須恵器3点（杯蓋1点、杯身2点）が残されている。（大江奈穂2015）このうち直刀は5世紀後半から6世紀初頭の鐔付きの太刀である。須恵器は6世紀後半～7世紀前半のものとされる。ただし、これらの出土遺物については1・2号墳のどちらのものであるのかは不明である。なお与三谷古墳の埋葬主体は横穴式（横穴墓？あるいは横穴式石室）といわれ、これらの遺物は横穴からの出土といわれている。

このほか、東側の尾根にも古墳群の存在が知られており井ノ口西1～6号墳・井ノ口東古墳群などがあり、周辺は古墳が密集する場所である。

第2節 遺構

1. 1号墳の調査（第58・59図、写真図版63～65）

小坂谷古墳群の立地する丘陵頂上（標高46.5m）で検出された。墳丘規模は直径10m前後の円墳であるが、自然地形の制約を受けて歪な形状となる。西側には2号墳に向けて尾根が伸びるが墳端に周溝などは持たない。北側には比高7m下に3号墳があり、南側の尾根続きには瘦尾根の様線が伸びている。なお地形から見ると調査区は南側の墳端までは達せず、墳丘手前までが調査範囲である可能性が高い。墳丘斜面の成形は北側の平野方向には顕著であるがその他の方向には自然地形を改変した形跡があまり認められない。

墳丘に盛土はなく、主体部の検出も地山であったので墳丘の上層部は流失したものと推測される。また、墳丘および裾部には外護施設は認められない。

主体部は墳頂に1基検出された。木棺直葬墓で北東-南西に軸方向を持つ。墓壙の掘り方は平面長方形で、

側面はほぼ垂直に掘削される。法量は長軸2.8m、幅1.05～1.1mの規模で、検出面からは0.5m前後の深さが残されていた。なお、墓壇底は水平に掘削されるが若干凹凸が見られた。

主体部の埋土はやや粘性のある細砂で、上層は表土の影響でやや土壌化する。地山は風化した礫質土でややもろく剥離が著しい。

棺は痕跡のみが検出された。棺の痕跡は長さ2.2m、幅0.65～0.75mの規模である。上面には破砕された須恵器甕片(102)が墓壇上および墳丘南側に散布された状態で出土している。(第59図網掛け部分)

棺内部からは内行花文鏡1面(M101)、鉄刀1振(M103)、鋤ないし鎌1点(M102)鉄鏝9本(M104～M112)、玉82点(白玉・ガラス玉J101～J182)が出土した。鏡・鉄刀・鉄鏝などは棺の南端に置かれるが、玉類についても南側に集中するので棺の頭位は南側と考えられる。鏡は小型仿製鏡で六花弁内行花文鏡となる。

なお、この墓壇は中央に後世の破壊を受けていた。南北0.9m、東西0.6mの楕円形の掘り方をもった土坑が掘られ内部に長さ30～40cm前後の角礫が多量に投棄されていた。掘削が偶然主体部の中に及んでいたが、これは、主体部が頂上の中央に位置したこと、掘りやすい場所であったことから選ばれたものと推定される。このような選択が行われた背景を推測するならば、墳丘の盛土はもともと余りなかった可能性が高いだろう。

土器の共存遺物が無いので時期は不明であるが、中世前後に何らかの祭祀を行った埋納坑である可能性が高い。

2. 2号墳の調査 (第60図、写真図版66)

1号墳の西側尾根続きで検出された。西側が土取りによって大きく削平され墳丘の半分を失っている。

東側(1号墳側)の尾根を横断して区画溝が設けられる。墳形は尾根地形に合わせた形で方形になるが、基本的には方墳を意識したものではない。

墳頂部で木棺直葬の主体部1基を検出した。小型のもので長軸2.3m、短軸0.66～0.8mを測る。北側の方がやや幅が広がる。検出面からの深さは0.3mである。棺の痕跡は不明であるが掘り方が西側で2段掘りになる点を見ると、主体部掘り方の東側が遺体を埋葬した場所であることがわかる。

主体部北側に土器杖が置かれていた。石材と土師器杯(103)が並べて置かれたもので土師器杯は完形品で伏せた状態で据えられていた。頭位は土器杖の検出と、墓壇幅から北側と考えられる。

検出された出土遺物は土師器杯(103～105)、墳丘周辺から出土したものに須恵器甕(106)がある。

3. 3号墳の調査 (第61図、写真図版67・68)

1号墳の北東方向の尾根の下に検出された古墳で、検出面は標高43mである。ただし、本墳は上面の流失が著しく墳丘盛土は失われていた。このため表土直下から須恵器などの副葬品が出土している。

本墳は南北6m×東西6mの規模を持つが、平面形は地形に制約されて舌状を呈する。墳丘山側には区画溝が掘削され、1号墳の山側斜面は大きく削平されて3号墳の墳丘を際立たせている。区画溝は幅0.5m、検出面からの深さは0.35mである。

主体部は墳丘山側に見つかった。主軸を東西方向に持つものであるが、墓壇の大半が流失し棺底のみがcaろうじて検出された。主体部と区画溝の間には地山が土手状に区画溝に沿って残されていたが、これは墳丘盛土の流失によって地山部分のみが残された結果と考えられる。棺の頭位は西側で須恵器杯蓋(107)と坏身(108)がセット、隣に須恵器坏身(109)が並べられて土器杖に転用されていた。

出土した遺物は棺内から須恵器杯身（108・109・111）、同蓋（107）、土師器壺（110）、刀子（M113）がある。さらに墳丘上から出土したのとして破砕された須恵器横瓶（112）がある。これは墳丘北側で（第61図網掛け部分）散布されたような状況で出土している。

4. 4号墳の調査（第57図）

1・3号墳から続く尾根の先端、標高32m前後に位置する。墳丘は全体が土取りによって消失し、周溝の一部のみが残されていた。なお、3号墳との間は尾根筋となるが急傾斜で墳丘が立地できる場所はない。唯一残された周溝は北側に弧を描いて検出された。この溝の残存法量は長さ5.5m、幅1.0m、深さ0.3mである。周溝は浅いもので埋土はやや粘性のある細砂であった。この古墳は比高が低いためか周知されていない。今回の調査によって新たに発見されたものである。

なお、土取りによって切り崩され崖地形となった場所から土師器高坏（113）1点が出土している。

第3節 遺物（第62～64図、写真図版69～71）

1. 1号墳

1号墳からは多くの副葬品が出土した。墳丘上から須恵器甕（102）、土師器高坏（101）が出土している。さらに主体部からは内行花文鏡1面（M101）、鉄刀1振（M103）、鉄鏃9本（M104～M112）、玉82点（白玉・ガラス玉 J 101～J 182）などが出土した。周辺の古墳群の事例と比べ比較的多くの副葬品を持つ事例といえる。墳丘上のもので棺内から出土したものに分けて報告する。

墳丘上出土遺物

須恵器甕（102）は破砕されて小さな破片が多い個体である。口縁部から底部まで図上復元することができた。口縁部はハの字状に開き端部とやや下に突帯をもつ。肩が張る個体で底部に向けてやや窄まる器形を持ち、底部は丸底になる。外面は縦方向の平行タキヤ痕跡を顕著に残し、内面は当て具痕を底部付近にわずかに観察できるが、大半はナゲ消されている。6世紀前半頃のものであろう。

土師器高坏は脚部の破片である。摩滅が著しく、調整などの詳細は不明である。

棺内出土遺物

内行花文鏡 小型の部類に入る鏡で、裏面の文様から六花弁内行花文鏡に分類される。鏡面の直径8.05～8.13cm、厚さ0.05～0.52cmである。鈕径1.25cm、鈕孔の径約0.25cmを測る。文様は内区に團帯文・珠文（6個）・内行花文、外縁に葡萄文・銀歯文が同心円状に描かれる。ただし、文様はやや不鮮明な跡上がりである。

縁部はやや厚くなるが平縁である。鏡面には腐食が観察されるものの全体的な残りは良好である。ただし、鏡面や文様には摩滅が認められた。

出土した小型仿製鏡としては浜坂町内では2例目であるが、発掘調査で見つかったものは初めてであり、第6章で報告する浅谷下山古墳群7号墳の珠文鏡が3例目となる。

今回のものも含めて3例とも久斗川流域で見つかったもので、残る1例は破片であるが戸田古墳から工事中発見のものである。破片のため鏡種は不明である。⁽¹⁾

1号墳と同種の文様を持つ内行花文鏡については兵庫県下に40面前後の出土がある。但馬では豊岡・出石・

和田山などの古墳から6面の出土が知られ、今回のものが7例目である。

このうち六花文鏡は但馬で2例目の出土となる。これらのことから小坂谷古墳群は浜坂地域の古墳時代を考えるうえで貴重な成果をもたらしたといえる。

鉄刀 刀身、茎とも一定の幅を持つ直刀であるが、茎尻の一部を欠損する。全長70.7cm、刀身の長さ58.5cm、幅3.0cm、厚さ0.9cmで茎は残存長12.2cm、幅1.25cm、厚さ0.55cmである。刀身・茎との反りはない。間は両側に挟るもので、刃側が緩やかに大きくカーブし、背の側は小さく挟りが見られる。

鉄鏃 鉄鏃は9本出土した。ほぼ完存するM106で長さ15.6cm、幅ないし厚さは鏃刃部で0.8cm、頸部で0.5cm、茎で0.3cmである。すべて尖根系長頸式のもので片刃箭式となる。鏃刃部の先端が片側にのみ付けられたもので、幅広で鏃刃部には長い逆刺が付く。また、長い頸部を持つ鏃で、頸部の断面は方形である。M110・111は先端を欠き、M112は頸部のみの破片である。M104～106・110・111の茎には木質部、M107・109には糸巻痕が残る。5世紀後半～6世紀前半頃のものである。

鏃・鉄 M102は鋸ないし鉄先の破片である。右端に鍛造によって重ねた鉄片の重なりが観察される。残存長8.6cm、厚さ1cmである。

玉類 出土したものはガラス製の小玉（J 101～J 175）が75個、滑石製の白玉（J 176～J 182）が7個、合計82個である。

小玉は気泡が目立つもので直径2.4～3.3mm、厚み1.2～2.5mm、重さ0.01～0.03g、孔径は0.7～1.2mmである。小さなものが多く、精緻な作りである。ただし、上下に面を意識するものが多いが中には扁平な形状になるものもみられる。また、鈕孔は中央に穿孔されないものもあって、大きさは一定しない。緑色ないし青色からやや青紺色で透明のものが多く、やや灰色がかつたものなどさまざまである。

白玉は直径1.1～4.3mm、重さ0.04～0.07g、孔径は1.1～1.5mm、厚み1.6～2.4mmである。小玉よりは大小があるが細かい加工が施される製品である。発色は灰褐色ないし灰白色のもので、若干個体差がある。これらは、出土状況から見て1連のものとして推測される。

2. 2号墳

土師器杯（103～105）、須恵器甕（106）がある。土師器杯は口径13.7～15.2cm、器高5.3～6.2cmで、103が完形品、他の2個体は破片である。いずれも磨滅の著しい個体で、やや雑な造りである。口縁部が肥厚し、先端をつまみ内面に段を持ち、103の外面には浅い沈線が観察される。すべての個体で外面に不定方向のハケメが施される。さらに、104・105は内面に指頭痕跡が目立ち、103はヨコナデ後、多方向の仕上げナデを施す。

甕（106）は口縁部の破片である。口径9.36cmである。外面に波状文、残存部の下端に突帯が観察される。全体にシャープな造りで波状文も細やかである。時期的には6世紀代のものと推測される。

3. 3号墳

棺内出土遺物は須恵器坏身（108・109・111）、坏蓋（107）、土師器壺（110）がある。須恵器坏蓋（107）と坏身（108）がセット、隣に須恵器坏身（109）が並べられて土器枕に転用されていた。このほか、付近からは刀子（M113）、墳丘上からは須恵器横瓶（112）が出土している。

土師器壺（110）は磨滅した頸部の小片である。内面を横方向にヘラケズリする。

須恵器坏身(108・109)は口径11.6～13.0cm、器高2.9～4.4cmである。かえりが内傾して短く立ち上がる個体である。底部は粗く簡略化された回転ヘラケズリが観察される。108は外面に顕著な自然軸が付着、109は器高が低い個体である。111は焼成がやや甘い。

須恵器坏蓋(107)は口径13.8cm、器高2.9cmで、天井がくぼんだ個体である。天井部には粗く簡略化された回転ヘラケズリが観察される。

須恵器横瓶(112)は破碎されて小片となっていたが接合によってほぼ全形を図上復元することができた。法瓶は胴長34cm、同幅26.7cm、残存高27.5cmで、丸い長胴を持つ。中央に口縁部が立ち上がり、ハの字に開くもので端部を丸くおえる。外面は横方向の平行タタキのち、縦方向のカキメによってタタキ痕跡を消している。内面には当て具痕が顕著に残される。

M113は刀子の破片である。鉄製で刃先および基部を欠く。

須恵器坏から見ると3号墳の時期は7世紀初頭頃になると考えられる。

4. 4号墳

土師器高坏(113)、および中世の土師器椀(114)が出土している。113は厚手の個体で、脚部を欠く個体である。口径16cm、坏部の高さは7.2cmである。ラッパ状に開くもので、内面体部および、外面底部にハケメが観察される。114は椀の底部小片で、糸切り痕跡が観察される。摩滅した個体である。

第4節 小坂谷古墳群小結

小坂谷古墳群の調査では古墳4基が検出された。このうち丘陵頂部の1号墳主体部では鏡など多くの副葬品を伴っており特筆される。時期的には墓上から出土した須恵器が6世紀前半頃、主体部から出土した鉄鏡が5世紀後半から6世紀初頭頃のものである。これらのことから古墳の造営時期は6世紀前半頃と考えられる。一方、3号墳は主体部から出土した須恵器坏が7世紀初頭頃であることから造営はこの頃と推定される。

以上から、小坂谷古墳群の造営時期は頂上の1号墳が6世紀に造営され、7世紀の初頭頃まで営まれていたと考えられる。

その上で主墳である1号墳は副葬品から浜坂を代表するような有力者のものであることが判明した。つまり、古墳群が密集する久斗川南岸の丘陵地帯にあって、1号墳は多くの副葬品を持つ点で注目される存在である。

そして、本古墳群の対岸には対田の集落があるが、この集落は丘陵麓に比較的広い緩傾斜地を持つ集落であり、現在もこの谷における有力集落である。これに対して本古墳群が所在する南岸は川床からの比高が低く有力集落が立地できる可能性は低い上、現在も集落の立地はなく古墳群の埋葬者が対岸にあることを推定させる。

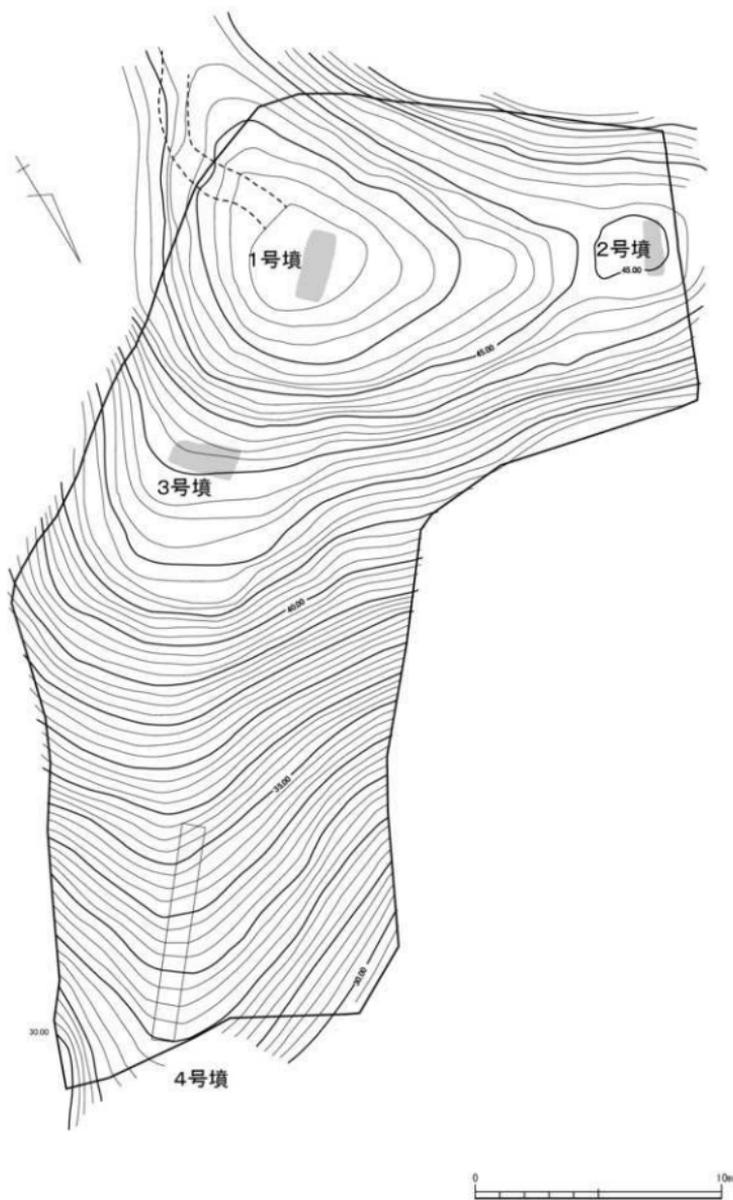
小坂谷1号墳から出土した内行花文鏡は浜坂から出土した事例としては既述のとおり2例目である。埋葬主体が木棺直葬である点は若干ランクが下がる可能性をもつものの、副葬品の内容から見ると久斗谷における有力者が被葬者であることは疑いが無い。

註

- (1) 川原晴夫氏からのご教示である。忠霊塔建設に際して出土したものという。遺物は新温泉町教育委員会に保管されている。



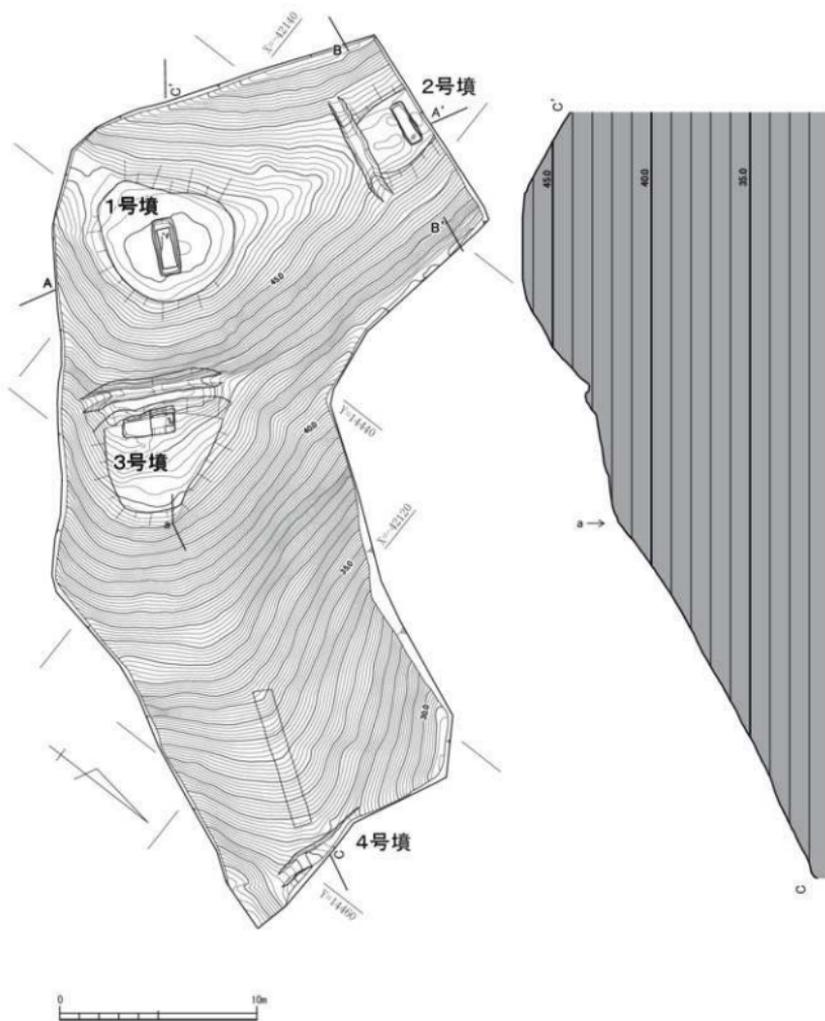
第 55 図 小坂谷古墳群 発掘調査位置図



第 56 図 調査前平板測量図

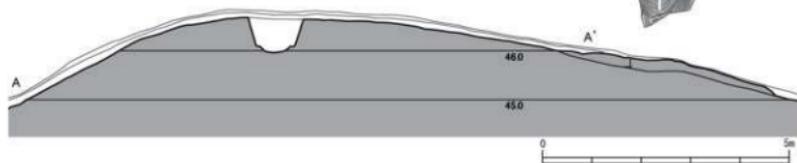
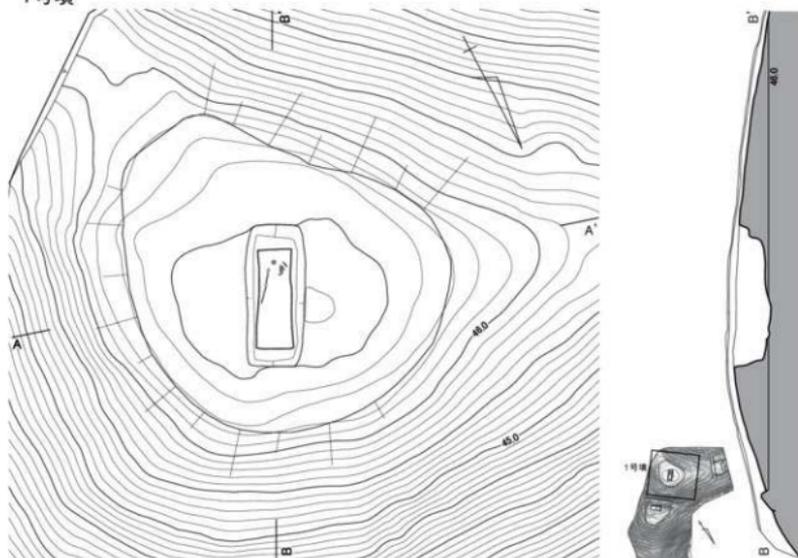


1. 表土
2. 10YR7/6 明黄褐色 细砂~中砂

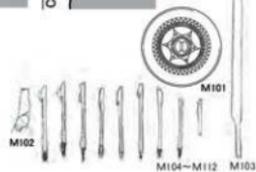
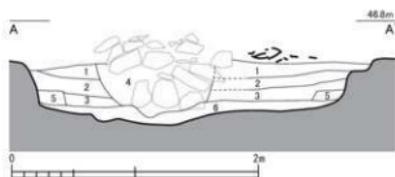
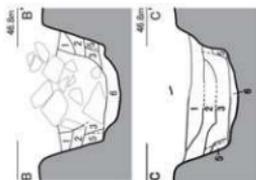
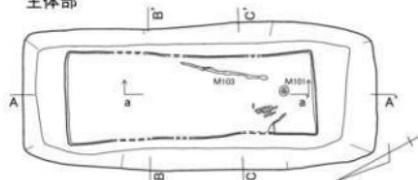


第57图 調査区全体图

1号墳



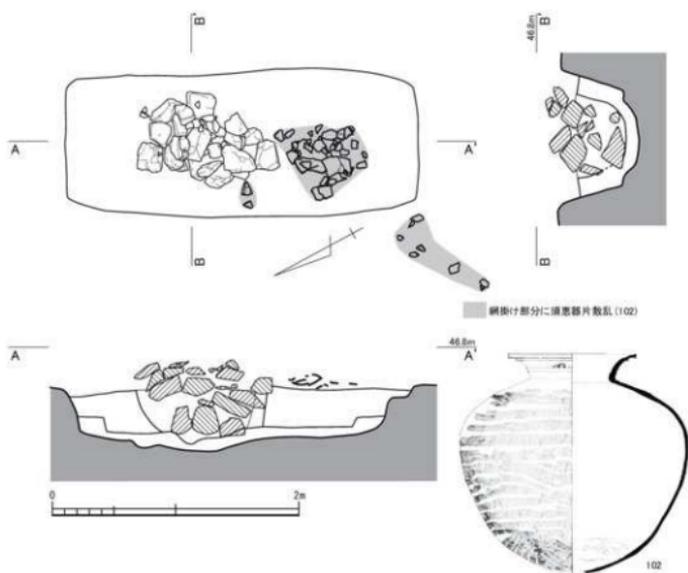
主体部



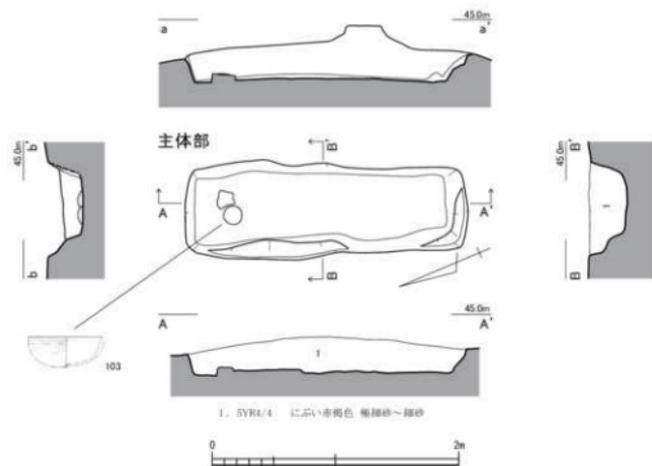
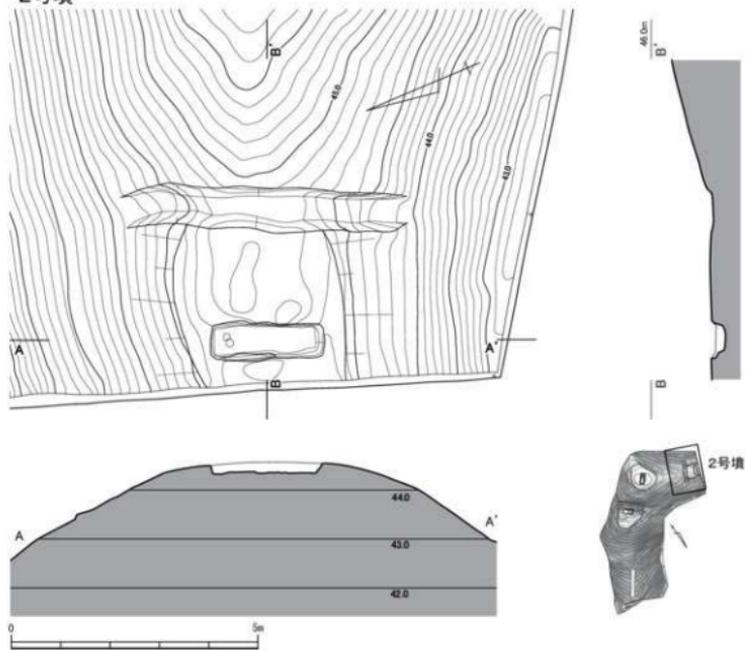
- | | | |
|------------|--------|-----------------------|
| 1. 10YR6/6 | 明黄褐色 | 瓶砂～中砂 |
| 2. 10YR5/3 | に高い黄褐色 | 瓶砂～中砂 |
| 3. 2.5Y6/4 | に高い黄色 | 細砂質(ややシルト質) |
| 4. 10YR7/6 | 明黄褐色 | 瓶砂～中砂 しまり弱 粘性弱(土坑内埋土) |
| 5. 2.5Y6/4 | に高い黄色 | 中砂 |
| 6. 2.5Y7/6 | 明黄褐色 | 極細砂～細砂 |

第58図 1号墳(1)

1号墳

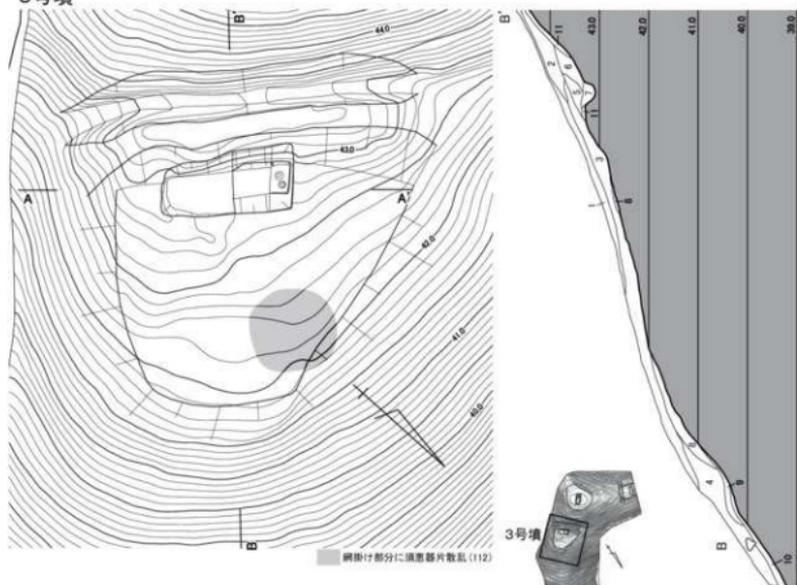


2号墳



第60図 2号墳

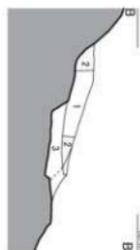
3号墳



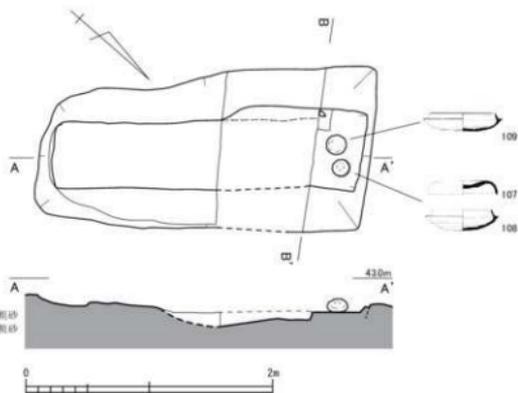
網掛け部分に調査器具敷置(112)



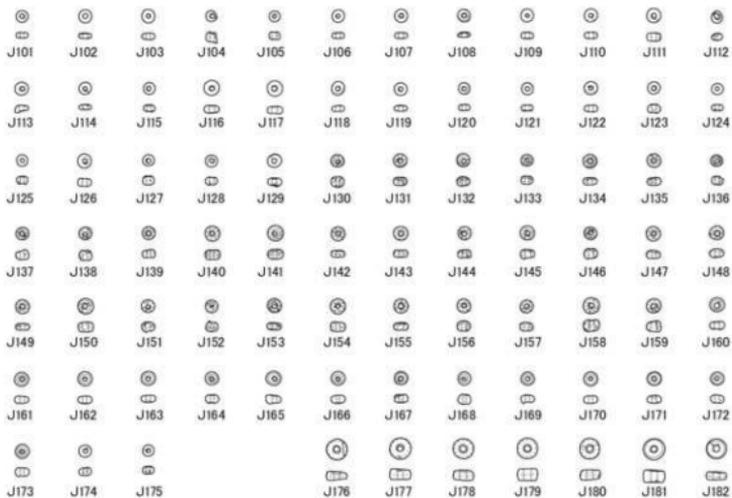
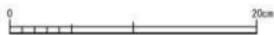
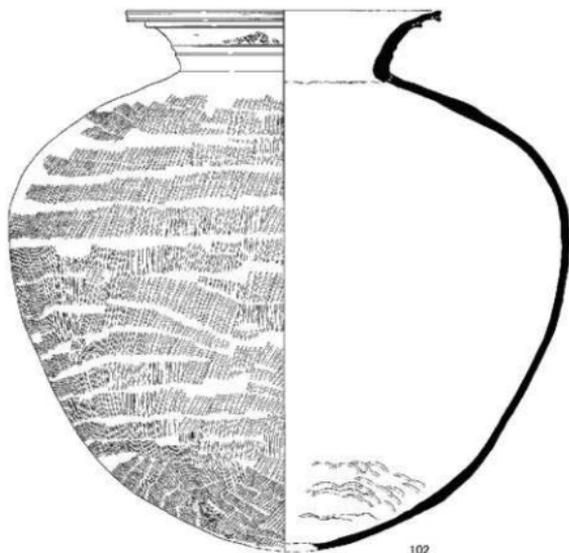
- | | | |
|-------------|--------|----------------|
| 1. 表土 | 褐色 | 粗砂面(L)層砂~中砂 |
| 2. 10YR4/4 | にじみ黄褐色 | 小窪~中窪面(L)層砂~粗砂 |
| 4. 10YR4/3 | にじみ黄褐色 | 中窪面(L)層砂~粗砂 |
| 5. 10YR3/3 | 暗褐色 | 層砂~中窪 |
| 6. 10YR5/6 | 黄褐色 | 中砂~中窪 |
| 7. 10YR5/4 | にじみ黄褐色 | 中砂~中窪 |
| 8. 10YR5/7 | 黄褐色 | 中砂~中窪 |
| 9. 10YR3/3 | 暗褐色 | 中窪面(L)層砂~中砂 |
| 10. 10YR4/6 | 褐色 | 層砂~中砂 |
| 11. 10YR6/6 | 明黄褐色 | 中砂~中窪 (埋山層) |



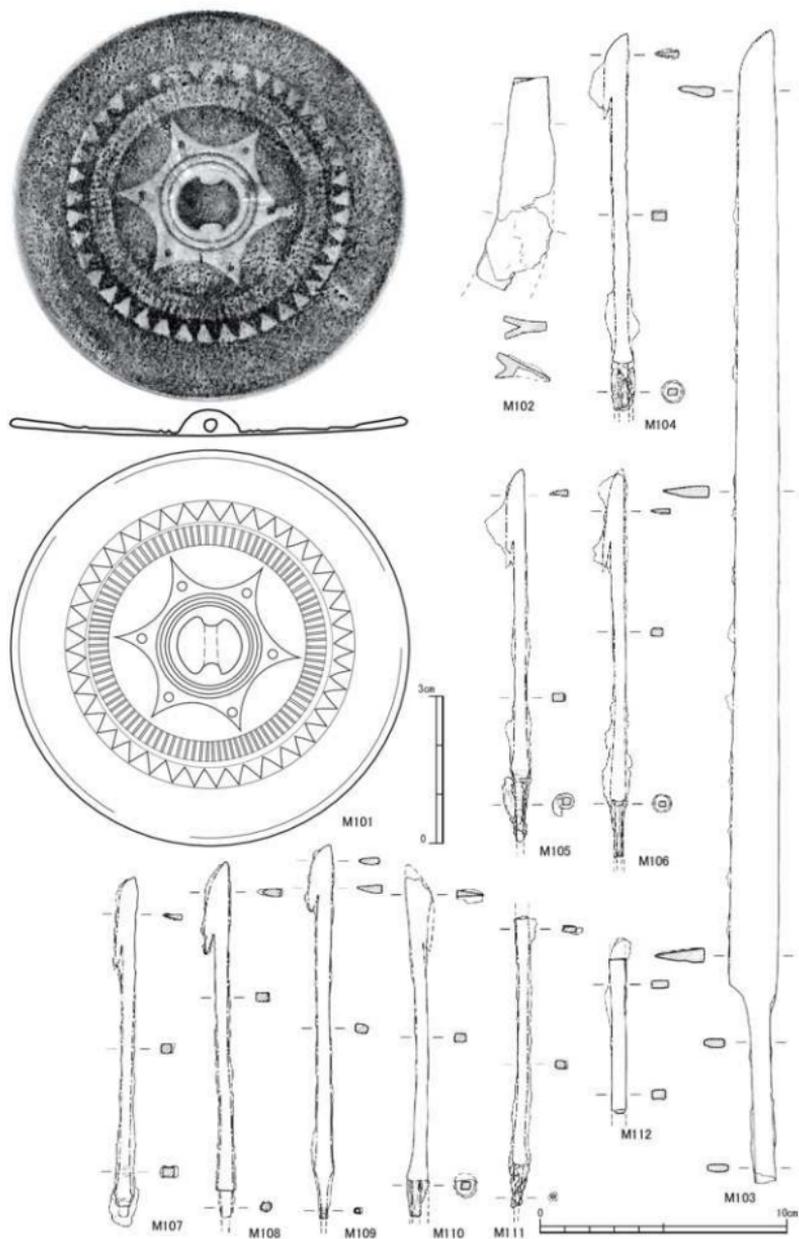
- | | | |
|------------|------|-------------|
| 1. 10YR6/6 | 明黄褐色 | 中窪面(L)層砂~粗砂 |
| 2. 10YR7/6 | 明黄褐色 | 中窪面(L)層砂~粗砂 |
| 3. 10YR5/8 | 黄褐色 | 中砂~小窪 |



第61図 3号墳

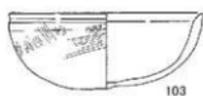


第 62 图 1号墳出土遺物



第63图 1号墳出土遺物

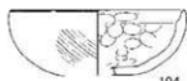
2号墳



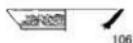
103



105



104



106

3号墳



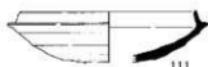
107



110



108



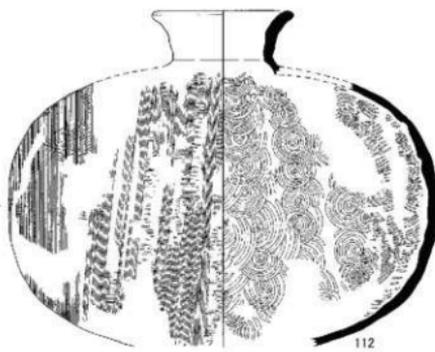
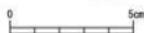
111



109



M113



112

4号墳



113



114



第64図 2・3・4号墳出土遺物

第4表 小坂谷古墳群出土土器観察表

報告番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)			現存	備考
				口径	器高	底径		
101	1号墳表土	土師器	高坏		(6.6)		脚柱部1/6	
102	1号墳	須恵器	甕	(25.7)	(45.2)		口縁部1/8体部3/4	破砕須恵器・図上復元
103	2号墳主体部	土師器	坏	15.2	6.2		先形	土師杖
104	2号墳表土	土師器	坏	(13.7)	(5.3)		体部1/8	
105	2号墳表土	土師器	坏		(4.3)		体部1/8	
106	2号墳表土	須恵器	甕	9.36	(2.6)		口縁部小片	
107	3号墳主体部	須恵器	坏蓋	13.8	2.9		先形	土師杖1
108	3号墳主体部	須恵器	坏身	11.6	4.4	12.0	先形	土師杖1
109	3号墳主体部	須恵器	坏身	13.0	3.8	11.4	先形	土師杖2
110	3号墳	土師器	甕		(5.1)		頸部1/8 体部1/5	
111	3号墳	須恵器	坏身	(13.8)	(4.15)		口縁部1/4体部4/3	確認調査トレンチ
112	3号墳	須恵器	横板	(10.4)	(27.5)		口縁部1/5体部1/2	確認調査トレンチ 図上復元
113	4号墳	土師器	高坏	16.0	(7.2)		坏部先形	
114	4号墳	土師器	甕		(2.0)	(4.0)	底部2/5	確認調査トレンチ

第5表 小坂谷古墳群1号墳主体部出土玉類観察表

報告番号	種類	長さ	幅	厚み	孔径	重量	報告番号	種類	長さ	幅	厚み	孔径	重量
J 101	ガラス小玉	2.5	2.6	1.3	0.9	0.01	J 142	ガラス小玉	2.8	2.8	1.3	1.0	0.01
J 102	ガラス小玉	2.8	2.8	1.3	1.0	0.02	J 143	ガラス小玉	2.7	2.8	1.3	1.0	0.01
J 103	ガラス小玉	2.9	2.8	1.5	0.9	0.02	J 144	ガラス小玉	2.6	2.6	1.6	1.0	0.01
J 104	ガラス小玉	2.4	2.4	2.5	1.0	0.02	J 145	ガラス小玉	2.8	2.8	1.9	1.0	0.01
J 105	ガラス小玉	2.3	2.4	1.8	0.9	0.02	J 146	ガラス小玉	2.5	2.6	1.9	1.0	0.01
J 106	ガラス小玉	2.7	2.7	1.4	0.8	0.01	J 147	ガラス小玉	2.9	2.9	1.6	1.0	0.02
J 107	ガラス小玉	2.8	2.8	1.4	0.9	0.01	J 148	ガラス小玉	2.7	2.9	1.7	1.0	0.01
J 108	ガラス小玉	2.7	2.7	1.2	0.9	0.01	J 149	ガラス小玉	2.8	2.8	1.3	1.1	0.01
J 109	ガラス小玉	2.8	2.7	1.5	0.7	0.01	J 150	ガラス小玉	3.1	3.1	2.0	1.1	0.03
J 110	ガラス小玉	2.8	2.7	1.5	0.8	0.01	J 151	ガラス小玉	2.6	2.5	1.9	1.2	0.01
J 111	ガラス小玉	3.0	3.0	1.9	0.9	0.02	J 152	ガラス小玉	2.5	2.5	2.1	1.0	0.01
J 112	ガラス小玉	2.6	2.4	1.6	0.9	0.01	J 153	ガラス小玉	2.7	2.9	1.4	1.2	0.01
J 113	ガラス小玉	2.8	2.9	1.7	0.9	0.01	J 154	ガラス小玉	3.1	3.1	1.9	0.8	0.02
J 114	ガラス小玉	2.6	2.7	1.2	0.8	0.01	J 155	ガラス小玉	2.9	2.9	1.5	1.0	0.01
J 115	ガラス小玉	2.6	2.5	1.6	0.9	0.01	J 156	ガラス小玉	2.7	2.7	1.9	1.0	0.01
J 116	ガラス小玉	3.2	3.3	1.7	1.1	0.02	J 157	ガラス小玉	2.6	2.7	1.7	1.0	0.01
J 117	ガラス小玉	3.3	3.3	1.7	1.2	0.02	J 158	ガラス小玉	3.2	3.3	2.4	1.0	0.03
J 118	ガラス小玉	3.0	2.8	1.4	1.0	0.01	J 159	ガラス小玉	2.8	2.9	2.1	1.5	0.02
J 119	ガラス小玉	2.7	2.8	1.3	0.9	0.01	J 160	ガラス小玉	2.8	2.9	1.5	1.1	0.01
J 120	ガラス小玉	2.5	2.5	1.4	0.9	0.01	J 161	ガラス小玉	2.7	2.8	1.4	0.8	0.01
J 121	ガラス小玉	2.6	2.5	1.4	0.9	0.01	J 162	ガラス小玉	2.8	2.8	1.4	0.8	0.02
J 122	ガラス小玉	2.8	2.9	1.5	0.9	0.02	J 163	ガラス小玉	2.8	2.8	1.3	0.9	0.01
J 123	ガラス小玉	2.6	2.8	2.0	1.0	0.01	J 164	ガラス小玉	2.6	2.6	1.5	0.8	0.01
J 124	ガラス小玉	2.4	2.5	1.4	0.8	0.01	J 165	ガラス小玉	2.8	3.0	1.6	0.8	0.01
J 125	ガラス小玉	2.5	2.4	1.8	0.8	0.01	J 166	ガラス小玉	2.7	2.7	1.6	0.8	0.01
J 126	ガラス小玉	3.1	2.9	1.8	0.9	0.02	J 167	ガラス小玉	2.6	2.6	1.6	0.8	0.01
J 127	ガラス小玉	2.4	2.5	2.0	0.9	0.01	J 168	ガラス小玉	2.5	2.5	1.9	0.6	0.02
J 128	ガラス小玉	2.6	2.6	1.8	1.0	0.01	J 169	ガラス小玉	2.6	2.6	1.6	0.9	0.01
J 129	ガラス小玉	2.7	2.9	1.9	1.0	0.02	J 170	ガラス小玉	2.8	2.8	1.5	0.7	0.01
J 130	ガラス小玉	2.5	2.6	2.0	1.0	0.02	J 171	ガラス小玉	2.7	2.8	1.4	0.9	0.01
J 131	ガラス小玉	2.6	2.6	1.6	1.0	0.01	J 172	ガラス小玉	2.5	2.6	1.6	0.8	0.01
J 132	ガラス小玉	2.6	2.5	1.9	0.8	0.01	J 173	ガラス小玉	2.8	2.7	1.7	0.8	0.02
J 133	ガラス小玉	2.3	2.4	1.6	1.0	0.01	J 174	ガラス小玉	2.6	2.7	1.8	0.9	0.01
J 134	ガラス小玉	2.7	2.8	1.4	1.0	0.01	J 175	ガラス小玉	2.5	2.5	1.7	0.9	0.01
J 135	ガラス小玉	2.7	2.7	1.4	1.0	0.01	J 176	白玉	4.1	4.2	1.6	1.3	0.04
J 136	ガラス小玉	2.2	2.4	1.6	1.1	0.01	J 177	白玉	4.15	4.3	2.1	1.3	0.06
J 137	ガラス小玉	2.5	2.6	2.0	1.0	0.02	J 178	白玉	4.0	4.1	1.85	1.5	0.05
J 138	ガラス小玉	2.5	2.6	2.1	1.0	0.02	J 179	白玉	4.1	4.1	2.4	1.4	0.06
J 139	ガラス小玉	2.5	2.6	1.6	1.2	0.01	J 180	白玉	4.2	4.1	2.0	1.3	0.05
J 140	ガラス小玉	3.0	3.0	1.8	1.0	0.03	J 181	白玉	4.2	4.2	2.4	1.1	0.07
J 141	ガラス小玉	3.1	3.1	2.0	1.0	0.03	J 182	白玉	4.1	4.2	1.7	1.3	0.04

*重量の単位はg、それ以外の単位はmm

第6章 浅谷下山古墳群

第1節 調査の概要

山陰近畿自動車道国道178号浜坂道路に関連した今回の埋蔵文化財の本発掘調査では、浅谷下山古墳群は最も西に位置する。また、浅谷下山古墳群は、他のタルガ山遺跡、対田清水谷古墳群、小坂谷古墳群が岸田川の支流である久斗川流域の南岸の丘陵上に立地するのに対して、岸田川本流の東岸丘陵上に立地する。岸田川は、浅谷下山古墳群の1.4km下流で久斗川と合流し、さらに北西へ流れ1.3kmで河口となって日本海へと注いでいる。

浅谷下山古墳群は新温泉町二日市浅谷及び七釜下谷にかけての丘陵尾根上に広がる古墳群で、いわゆる階段状の小円墳・方墳が21基連なっていることが、これまでに知られていた。古墳群の本体と思われる支群は、南西方向の七釜側の下る尾根上に分布しており、15基存在していることが分布調査における地形観察によって知られている。

今回の浜坂道路に関連した工事によって、北西方向に延びる尾根上の支群およびその北東側の谷内が調査対象となった。尾根上では4基程度の支群があることが想定されていたが、トレンチ3本を尾根稜線上及び北側斜面部に設定して確認調査を行った結果、尾根稜線の上半部で3基の古墳を確認でき、弥生土器或いは土師器片が出土した。さらに調査区外の南東側の尾根上方には6基程度の古墳が存在することが地形観察から推測できた。

谷内では平坦地が広がっており、集落跡や寺院址などの存在が想定された。針葉樹の植林の中、確認トレンチを設定し掘削すると、6世紀後半頃の須臾器やブロック状の塊石を積み上げたような地点が確認されたことから、後期古墳の存在を推定して浅谷下山古墳群の2区として本発掘調査を実施した。

第2節 1区の調査

1. 1区の概要

浅谷下山古墳群1区は、細長い尾根筋の標高27～39mの範囲が調査対象となった。尾根は北西方向に延びており、両側が非常に急な斜面となった馬の背状の尾根である。

1区は、眼下を流れる岸田川が西方に湾曲して流れ込む日本海方面や現在の浜坂の港町から岸田川対岸を臨むことができる、北西方向への眺望が開けた立地を有しているが、真北から真南方向の視野は別の丘陵や尾根によって遮られている。

尾根の先端部は斜面が急となっているが、道路関連施設建設が計画されており、また尾根裾に町道の計画があったため、その法面工事に伴って、本調査中に新温泉町教育委員会と協力して確認調査を実施した。その結果、尾根先端部はすでに地山の岩盤が表土直下に露出しており、古墳は存在していない、あるいは残存していないことが判明したため、当初想定していた1号墳の掘部までを本発掘調査範囲と

して確定した。

調査前の平坦面や盛り上がりなどの地形観察から、7基の墳丘を想定して土層観察用の畦を設定したが、すでに一部岩盤が露出している地点も存在し、墳丘盛土の多くが失われていることが窺われた。

表土掘削を行うと、尾根下方ではすぐに白色のブロック状に風化した岩盤が現れ、墳丘盛土はほとんど存在していないことが判明した。区画溝や平坦部の存在により、尾根下方から1号墳・2号墳と名付け、7号墳まで設定したが、主体部が検出できなかったものや、地形変化は認められるが区画が不明瞭な墳丘が存在する。以下に調査地点最高所の7号墳から報告する。

2. 7号墳の調査 (第70・71図、写真図版75～80)

墳丘

7号墳は調査区最高所の標高約39mに位置し、墳丘の上方南東部は調査区外に続いている。下方の6号墳とは溝によって区画されている。溝は岩盤まで掘り込んだ、尾根を切断する7mの長さの直線的な溝であるが、南側は東へ屈曲し、2m伸びて調査区外の急斜面へ流れる。北側端部もわずかに尾根の上方向に湾曲させて急斜面に消えており、周溝状に墳丘を囲んで掘削している点がいわゆる階段状の墳丘のものとは異なる。地形観察からは斜面上方の調査区外にも溝が巡らされていることが推定される。溝は上幅1.5m、底幅0.5m、深さ0.5mを測り、墳丘側の斜面は一見貼り石状に見える地山ブロックが現れている。溝埋土から土師器小型壺片(202)が出土している。

11×11mの隅丸方形の墳丘を有しており、6m四方程度の墳頂部平坦面上に2基の主体部を検出した。主体部の主軸方向は他の古墳とは異なり、尾根稜線方向には一致せず、やや斜め方向を採る。

第1主体部

第1主体部はこの古墳の中心主体となるものと思われ、墳丘上平坦部のほぼ中央を占めている。2.7×1.7mの隅丸方形の墓壇掘り方を深さ0.5mまで掘削し、1.86×1.0mの箱形をした木棺を納めている。棺外墓壇埋土には15cmほどの地山礫が含まれるが、棺を囲む状態ではない。棺底は平坦であるが、底板が存在したかは不明である。棺内及び墓壇埋土からは遺物は出土していない。

岩盤を平坦に成形した棺底の中央部に0.8×0.48mの長円形の土坑が、棺の主軸方向とやや異なって北に振れた方向に0.13mの深さで掘られており、土坑内北隅から土師器高杯、銅鏡、鉄刀子、碧玉製小玉、堅櫛が出土した。高杯は坏部を土坑中央に向けた斜め横倒しの状態で出土しており、坏部の地表面側の一部を欠く。銅鏡は高杯坏部に接するように鏡面を外方下に向けた状態で土坑壁に沿って出土した。土坑底や壁面には接していない。小玉・堅櫛などは土坑内の高杯や銅鏡が出土した周辺の埋土を水洗選別して検出している。

坏部を弧状に打ち欠いた高杯を土器枕とすれば、鏡や玉類、堅櫛は被葬者の頭部付近で出土することが最も多い遺物であるが、木棺中央近くに頭部を配することになる。また、棺底に掘削された土坑には小口板や仕切板を固定する穴などがあり、京都府久美浜町の境谷古墳群A-1号墳の第1主体部では幅・深さが0.2m程ある仕切板をはめ込むための穴の横から堅櫛・玉類・刀子が出土している。また、朝来市の茶すり山古墳第2主体部の東仕切穴に落ち込んだ枕石上から複合堅櫛や鉄針が出土している。豊岡市のカヤガ谷墳墓群3号墓第3主体部では小口板掘り方を拡張して掘り込み、甕底部を打ち欠いた土器枕を設置している。別の主体部に切られているため、残存長は2m強であるが、4m強の規模があつ

たと推定される。本例のような小型の木棺の中央近くに設けられる小口穴や仕切穴の例は少ない。

このような木棺の床面中央の下部に掘られた土坑は、大陸や半島に類例の多い「腰坑」を想起させる。腰坑は彼の地では比較的類例が多く、本来は犠牲を埋納するものである。韓半島で著名なものに慶尚南道茶戸里遺跡の1号墳副葬坑があり、木棺下の竹籠に銅鏡や銅劍、五銖銭、筆などの文房具等様々なものが埋納されていた。このような習俗、葬送儀礼が列島に伝えられ、列島内で消化吸収された可能性はある。県内での類例には尼崎市東武庫遺跡の弥生時代前期の方形周溝墓4号墓の1号主体部木棺下の土坑から出土した無頭蓋がある。また、河内平野では弥生時代中期の例があり、木棺の下から土器や鋳が出土している。今回の事例が「腰坑」の性格を有するものであったとしても、古墳時代前期まで時間的・空間的に広範囲に採用された習俗・儀礼ではなかろう。比較的普遍に継続した習俗・儀礼となっている大陸・半島との断続的な接触による極めて限定されたものであろう。

第2主体部

第2主体部は第1主体部の北西隅から0.4m離れた西側に、主軸を第1主体部と直交させて掘削されている。1.86×1.04mの墓壙を0.58m掘削し、内部に1.46×0.54mの箱形の木棺を納めている。棺内や墓壙内からの出土遺物はない。

出土遺物 (第83図、写真図版96)

201・M201・M202・W201・J201～J360 は第1主体部床面下の土坑から出土した。

201は土師器高坏である。坏部は水平に開いた後、稜を持って屈曲し、わずかに外反して開く口縁部へと続く。口縁端部は丸くおさめる。脚部は少し開き気味の筒部から屈曲して開く脚部へ続き、端部は四角く外面を作っておさめる。坏部外面から端部はヨコナデで仕上げ、内面は放射方向の暗文風のヘラミガキを施す。脚部外面は筒部に縦方向のハケ調整を残しながらナデによって仕上げ、内面は筒部に竹管や棒状の刺突痕跡を残しており、脚端部は放射状の工具痕を残してハケ調整後ヨコナデを施している。赤色顔料を塗布しており、口縁部の一部を打ち欠いている。

M201の刀子は、全長14.5cm、刃長9.0cm、刃幅1.6cmの細長い刀子で、茎には木質が残っており、柄を装着した状態で副葬されたものである。茎の先端は刃側をやや尖らせた形状である。緩やかな刃間とわずかな背間を有する刃部はわずかに反る。刃の表裏に刃に対して斜め方向の織線をもつ布目(10本/5mm)が観察できる。

M202の銅鏡は、非常に脆弱で、取り上げ時のにわか雨等によって破損したが、本来は完形であった。仿製鏡で直径6.9cmの珠文鏡である。鏡背には中心に半球状の鈕を鋳出している。丸く0.5cmの高さに突出した鈕には0.5×0.25cmの方形の鈕孔が開けられる。鈕の周囲に細い突線を巡らせ、その外側に直径2.25cmの連珠状の鈕座を置く。やや不規則な二列の珠文を配し、直径3.85cmの界線を経た外区には複線波文から櫛歯文を巡らせる。幅0.65cmの外縁は斜縁気味の平縁である。

珠文鏡は兵庫県内では本例を含めて26面出土しており、直径は3.5cm～8.7cm、平均6.4cmの小型鏡に属する。但馬地域では10面出土しており、主に円山川流域の木棺直葬墳から出土している。豊岡市長谷・ハナ4号墳、法尺谷3号墳、養父市源氏山4号墳が木棺直葬の棺内からの出土であり、豊岡市田多地引谷5号墳は箱式石棺から、同半坂峠(カチヤ)古墳では箱式石棺上から出土している。岸田川流域の美方郡香美町村岡区の文堂古墳では横穴式石室からの出土であり、外区の複線波文・櫛歯文は浅谷下山7号墳例と同じである。外区の文様である櫛歯文は珠文鏡でも後出する要素と言われる(森下1991)。

J201～360は土坑埋土の水洗選別により160点確認できた小玉である。緑灰色から明オリブ灰色の硬質の石材を用いており、碧玉と思われる。平面形はほぼ円形を呈しており、直径は2.8mm～4.2mmとやや幅がある。厚みは1.1mm～4.3mmと白玉状の扁平なものから管玉状を呈するものまで存在する。回転穿孔による孔径は1.1mm～1.8mmの差がある。側面は上下に分けて研磨されたものが多いが、一部の個体に見られる不明瞭な稜線も偏った位置に残るものがほとんどである。

W201は堅櫛で、同じく土坑埋土の水洗選別によって検出できた。幅1cmほどの小型の堅櫛で、竹様の薄板を5～6枚重ねて折り曲げ、黒漆で固めた結歯式堅櫛である。櫛歯の部分は失われているが、ムネ部が7点出土しており、復元すると歯を外にして弧状に連結することがわかった。類例には兵庫県茶すり山古墳のものがある。この複合堅櫛と呼称されるものは、大型の堅櫛の頂部から棒状の部材で繋がれた7点の小型の堅櫛を弧状に連結した立ち飾り状のものである。この複合堅櫛は兵庫県長谷・ハナ6号墳、京都府論田11号墳、滋賀県雪野山古墳などで類例があり、韓国釜山市福泉洞53号墳からも出土している。本遺構では大型の堅櫛は検出できなかった。

古墳時代堅櫛の類例の出土状況には、住居土・土坑・井戸からの少数の出土例を除けば、古墳主体部からの出土例が圧倒的に多く、明らかに被葬者頭部に装着していた状況を示すものを初めとして、頭部付近から出土する例が多い。但し被葬者の足元付近や棺外から出土した例も少なくない。古墳時代における結歯式堅櫛の最古の例は瀬戸遺跡辻地区土坑4下層出土のものとされ、庄内式新段階のものである。本例も同時期に並ぶものである。

3. 6号墳の調査 (第72・73図、写真図版81～83)

墳丘

7号墳下方の標高37mに位置し、尾根稜線を切断する2本の溝によって長さ7.5mに画される。斜面下方の溝は幅0.9m、深さ0.15mを測り、直線状に4.5m伸びるが、南側はわずかに東へ曲がる。

6×4mの平坦面を有し、平坦面上には尾根稜線に直交方向に主軸をもつ木棺直葬の主体部が2基検出された。また、第2主体部を切って直径0.9～1.0m、深さ0.5mの土坑SK01が掘られているが、出土遺物は見られず、その性格は不明である。

第1主体部

尾根先端側に構築された第1主体部は墓壇3.1×1.8mを測り、2.16×0.5mの箱形の木棺の痕跡を検出した。墓壇南東部にも方形の落ち込みを検出したが、主体部とは判断できなかった。

木棺は西側と北小口周りに山石を並べて固定しているが、石を積み上げてはいない。木棺内埋土上層から土師器(203・204)が破片の状態出土した。棺上にあつたものが落ち込んだものと思われる。

また、棺内の北側の西側板付近から鉄製鎌、刀子とメノウ製勾玉1点が出土した。

第2主体部

第1主体部の尾根稜線上方に第1主体部に平行して検出された。2.2×1.35mの墓壇内に1.6×0.42mの箱形の木棺を納めたものであろう。墓壇の北東部にはブロック状の岩盤を掘り残す。遺物は出土していない。

出土遺物 (第84図、写真図版97)

202は6号墳と7号墳間の溝から出土した土師器小型壺の頸部の破片である。ゆるやかに屈曲する頸部で、口縁端部は欠失するが、残存部で薄くなっており、端部に近い。内外面をナデにより仕上げるが、胴部内面にはユビオサエが観察できる。外面と口縁部内面に赤色顔料が塗布されている。

203は墓壇中央から北半部の上層から出土した土師器甕である。球形の胴部から「く」字に屈曲して内湾気味に開く口縁部へと続く。口縁端部は四角くおさめる。外面は横方向、斜め方向のハケによって調整されるが、接合できない上半部と下半部では斜めの方向が異なる。内面の下半部は斜め方向のヘラケズリ、屈曲部は横方向のヘラケズリを施す。口縁部は内外面をヨコナデで仕上げる。胴部下半外面に煤が付着し、内面下端にも炭化物が付着している。胎土に細かい角閃石様の粒子を含むが、鈍い橙色に焼成される。

204は墓壇南東部埋土上層から出土した土師器高坏である。坏部は水平に近く斜め上に開いた後、鈍い段を持って屈曲し、口縁部へと続く。口縁端部は丸くおさめる。脚部はゆるやかに湾曲して開き、端部は丸くおさめる。坏部上半部はヨコナデで仕上げ、内面はハケメを残す。脚部外面はヨコナデによって仕上げ、筒部内面は筒状の痕跡を残して横方向のヘラケズリを施す。

J361は勾玉である。透明度の高いメノウ製の勾玉で、頭部後半は赤色が強く、頭部先端や尾部から中央部の後半は白っぽい透明である。縦3.6cm、横幅2.3cmで、不明瞭な稜線を残し、一部に条痕を残している。穿孔は片側からであるが、滑らかである。

M203は全長12.2cm、刃長8.5cm、刃幅1.95cmの鉄製の刀子である。刃開とわずかな青閃を有する刃部がやや反る形態をもつ。刃の表裏に斜め方向の繊維をもつ布目(10本/5mm)が観察でき、茎部の一部かかっている。茎には木質が観察できず、鞘や柄を装着しない状況のまま布で包んで副葬されたものであろう。

M204は鉄板の基部の背側を折り曲げた鎌で、全長16.9cm、幅3.95cmを測る。切っ先は下方に緩やかに曲がり、細く丸くおさめる。刃部を下に向け、切っ先を左にした時、基部の左上角を0.75cmの幅でほぼ直角に手前に折り曲げる。無茎式の曲刃鎌で、刃を下に向けた時に右側を手前に折り曲げる甲類に分類できる。斜めに折り曲げた方向に柄を装着すると刃との角度は137.5度の鈍角を呈する。表裏面には斜めの繊維方向をもつ布目が観察されるが、装着された柄の木質は確認できない。刀子と同様、柄に未装着のまま布で包んで副葬されたものであろう。

4. 5号墳の調査 (第72図、写真図版84)

概要

5号墳は、6号墳墳頂部の平坦部から一段下がった位置にも平坦部を観察できたことから古墳の存在が推定された。表土掘削の結果、6号墳下側の区画溝と、その下方8mで検出した幅0.65m、長さ3.6m、深さ0.13mの直線状の溝に挟まれた範囲内の稜線上が一部平坦に成形されており、この範囲を5号墳として調査したが、表土直下ですぐに岩盤が露出し、墓壇等の掘り込みは検出できなかった。遺物も出土していない。墳丘がすでに流失したものと判断した。

5. 4号墳の調査 (第74図、写真図版84)

概要

4号墳は、5号墳下の区画溝の下方に平坦部が認められることから、古墳が存在した可能性が高いものとした。また掘削中に掘部の表土から土器片(205~207)が出土している。この範囲を4号墳として調査したが、表土直下で風化した岩盤が露出し、明瞭な平坦面も検出できなかった。斜面下方の区画溝も検出できなかった。また墓壇等の掘り込みも確認できなかった。

出土遺物 (第84図、写真図版97)

205は4号墳南西裾から出土した土師器高坏である。水平に開く坏部片で、屈曲して開く口縁部と筒状の脚部が剥がれ落ちている。

206は同じく4号墳南西裾から出土した土師器器台である。いわゆる鼓形器台で、大きく開く台部から突帯を経て丸く屈曲する。台部には円形の透孔が開けられる。台部外面は透孔を挟んで2段の縦方向のヘラミガキで仕上げ、一部に横方向のハケメを残す。台部内面は横方向のヘラケズリからナゲが施される。上半部内面にはヘラミガキが観察できる。

207は4号墳掘の表土下から出土した須恵器坏である。高い高台から内湾気味に立ち上がる坏部へ続く。柄に近い形態で平安時代に属するものであろう。同時期の遺構は確認されていない。

6. 3号墳の調査 (第74図、写真図版84)

概要

4号墳下方には区画溝は検出できなかったが、墳掘部から2.5m離れて幅0.7m、深さ0.15mの直線的な溝が5.5mの長さで掘削されており、その間は平坦に成形されていた。平坦面に尾根稜線と直交方向に2基の主体部を検出した。墳丘、主体部共に遺物は出土していない。

第1主体部

主体部と考えられる方形の土坑は区画溝と平行に2基、小口部を接するように検出された。第1主体部は北側に位置し、1.45×0.8mの長方形を呈しており、深さは10cmほどしか残存していない。墳丘盛土を流失し、木棺の底部分のみが残存したものであろうか。

第2主体部

第1主体部の南西に直列するように、1.75×0.85mの長方形を呈した土坑が検出できた。第1主体部同様、深さは10cmほどしか残存しておらず、埋土中に風化礫を含んでいる。

7. 2号墳の調査 (第75・76図、写真図版85・86)

概要

3号墳下側区画溝から平坦面が5m四方にわたって広がっている。平坦面からは約0.5m急に下って1号墳と区画している。これにより、2号墳は6.5×7.0mの方形の墳丘をもつことが推定できる。やはり墳丘盛土をほとんど残していないが、平坦面に2基の主体部を検出した。主体部は尾根稜線からやや偏

った方向に主軸を置き、それぞれ岩盤を切り込んで構築している。

第1主体部

第1主体部は南側に位置し、上方の区画溝からは0.3mしか離れていない。2.9×1.4mの長方形の墓室内の東に偏した位置に1.1×0.5m、深さ0.35mの箱型の木棺を据えている。掘り方は深い部分で0.65mほど掘り窪めているが、西側では浅く1段掘り込んだ状態で留める。同様の浅い掘り込みは第2主体部でも観察される。掘り方埋土内には塊石が含まれている。遺物は出土していない。

第2主体部

第1主体部の北側に並列するように、1.8×1.55mの長円形を呈した墓塚が検出できた。深さは0.5mほど掘削されている。そのやや北に偏った位置に1.1×0.7mの箱型の木棺の痕跡を検出した。木棺の北側板は掘り残した風化岩盤で支持されている。遺物は出土していない。

8. 1号墳の調査 (第75・76図、写真図版86)

概要

尾根最下部で検出できた。不規則な節理状に突出した岩盤が露出しており、斜面部は岩盤の加工は認めたいが、平坦面を造るために岩盤を造成しているようである。本来あったと思われる岩盤上の堆積土や盛土は流出してしまったものと考えられる。

2号墳直下に4×3mの平坦面をもち、平坦面のやや西に偏した位置に0.7×1.0mの直角に曲がる掘り込みの一隅を検出し、主体部墓壇掘り方の痕跡であると判断した。

1号墳は墳丘がほとんど流失し、岩盤面を加工した平坦面とわずかに岩盤面まで到達した主体部の一部を検出できた。遺物は出土していない。

第3節 2区の調査

1. 2区の概要

浅谷下山古墳群2区は、尾根稜線上に墳墓・古墳が造られた1区とは異なり、1区の北東尾根下に広がる谷底の平地が対象である。現状では植林された比較的緩やかな平坦地で、谷底を流れる流路もなく、安定した平坦地が続く地形であった。1区調査地点からは約20m離れている。調査地点は谷開口部で一旦狭まった谷が広がっており、段差を持たずに谷奥まで続いている。調査地点奥の谷はやや西方へ曲がり、次第に幅が狭まる。開口部前面には独立丘陵がそびえており、眺望は全く開けていない。

調査地点周辺が最も平地が広がっており、中世寺院などの小規模な建築物が立地する可能性が考えられた。12本のトレンチ調査の結果、谷の平坦部西寄り、積み上げた状態の巨石を検出し、完形に近い須恵器坏などの遺物が出土している。このため横穴式石室墳などの存在が考慮された。

調査地区内には所々に巨石が顔を出していたため、表土除去後、巨石を残しながら重機掘削を実施したが、巨石の下にも腐植土が広がる場合は巨石も撤去しながら掘削した。南端部中央付近では巨石を中心として塊石が集中して検出される地点があり、その周辺から須恵器器台片などの土器が比較的多く出

土したことから、2-1号墳として調査を進めた。

また、谷開口部付近でも同様に塊石が集中し、土器が出土する地点を2-2号墳として調査を行った。掘削を進めると塊石は積み上げた様相ではなく、下層にも腐植土様の堆積が存在し、下層からは遺物はほとんど出土しなかったことから、古墳ではないと判断した。このため2-2号墳は欠番とする。

また、1区尾根の山裾にあたる西壁付近の掘削中に塊石とともに須恵器杯の比較的大きな破片が出土したため、西側を拡張して調査を続行し、2ヶ所の盛土と石材の抜き取り痕と思われる溝状の落ち込みを検出したことから、2-3号墳、2-4号墳とした。検出された塊石はいずれも1区の地山を構成する白褐色の風化礫ではなく、より硬質な岩塊であり、少なくとも尾根上から転落したものではない。但し、谷の東側の斜面には岩盤が一部露頭しており、谷の奥でも同様の岩塊が点々と認められることから、谷の奥から供給された可能性はあるが、人為的に持ち込まれたものと判断した。

調査区のさらに西側の尾根斜面や北側の谷開口部付近にも遺構が残存する可能性も皆無ではなかったが、周辺部は確認調査結果により、埋蔵文化財が存在しないと判断されていた。周辺部の調査区内からは顕著な遺物や石材は見られず、またすでに検出された遺構が大きく削平されていることから周辺部に遺構が明瞭に残存している可能性は極めて低いものと判断された。確認トレンチは谷西側の丘陵尾根にも設けられたが、遺物・遺構とも検出されなかった。

2. 2-1号墳の調査 (第78図、写真図版89)

2-1号墳とした地点には一辺が1mを超えるような板状の巨石が残存し、周辺に0.5m大の石材が散乱した状況を示していた。周辺の石の多くは下面に腐植土が入り込んでおり、旧位置を保っていないことが判明したため除去したが、他の石も積み上げられたような状況ではなかった。石材集中部の周囲にはやや汚れた土が堆積しており、深さ0.2m程の浅い落ち込みとなる。埋土中には須恵器破片が含まれていた。石材のほとんどがこの埋土の上に乗っており、そのため原位置を示す石材は存在しないことが判明した。石室の基底石を据える掘り方も検出されなかった。

古墳として把握できる状況ではないが、遺物が集中して出土することや、石室を構成していたと考えられる石材が集中していることから、後世に他所から持ち込まれたものとするよりも、この位置あるいは近辺におそらく横穴式石室墳が存在しており、完全に破壊された状況を示すものと捉えている。石材の大きさは他の2-3・2-4号墳周辺で検出された石材より大きく、その立地からも他のものより大型の横穴式石室墳であった可能性が高い。

周辺から出土した遺物はほとんどが須恵器片であり、3点図化できずにすぎない。柳描き波状文を施した器台あるいは甕口縁部の破片は数点出土している。原位置から出土した状況ではないが、2-1号墳のものとなれば、谷内で検出された古墳の中ではやや古いものとなる。

3. 2-3号墳の調査 (第79・80図、写真図版90・91)

2-1号墳の西側、1区古墳群が連なる尾根北東斜面裾に立地する。斜面裾から古墳時代の須恵器が出土したため、拡幅して調査をした。石室石材と思われる岩塊が多く検出されたが、原位置を保つものは確認できていない。斜面上方の等高線に沿った方向に最大幅0.6m、深さ0.58mの腐植土や黒色土を含

んだ埋土の溝が約3.6m続き、さらに0.5m途切れて1.1m続いていた。溝の斜面下方には0.7mほどの平坦面が残り、斜面となって落ちていく。平坦面を石室床面の名残で、溝を横穴式石室左側壁の基底石掘り方と捉えて横穴式石室が存在した痕跡と想定した。右側壁は盛土上に構築されていたため、痕跡すら残していないものと推定される。溝の東端部は北へ曲がっており、奥壁となるのかもしれない。

斜面上方の調査区壁面には約6mの幅で高さ1mほどの礫を多く含む盛土が確認でき、墳丘と考えられるが、確認トレンチや樹根によって大きく失われている。

石室と想定した西側前方には1段低く削った幅の狭い緩斜面が2.5m続き、段に沿って小礫が立った状態で不規則に並んでいた。この部分は2-4号墳との位置関係から墓道と捉えることができ、谷の出口、西側開口の横穴式石室と推定される。

石室が存在したと考えられる平坦部の斜面下方から須恵器坏蓋・坏身（208・209）が出土したが、墳丘部や石室周辺からは出土しなかった。

4. 2-4号墳の調査（第79・81図、写真図版92・93）

2-3号墳と同様、斜面下方から古墳時代の須恵器片が多く岩塊とともに出土したため、拡幅して調査した。2-3号墳の北西、やや斜面を下った位置に2-3号墳と同様の幅0.35m、深さ最大値0.65mの溝が2.85mに渉って直線的に検出された。埋土はやはり腐植土や黒色土を含んでおり、締まってはいる。石室側壁基底石の抜き取り痕と思われる。溝底は高低が著しい。

溝の西端部や東端部の斜面下方にも同様の土坑状の穴が見られ、これも石材の抜き取り痕と思われる。奥壁や右側壁に対応するものであろう。溝の斜面下方には幅1.0mほどの平坦面が存在することから、長さ2.1m以上、幅1.0m程度の横穴式石室が存在していたものと推測した。石室前面には0.1m程度の小段が0.8mほど続いており、羨道部或いは墓道部とすれば、谷の口方向、西側開口であったものと思われる。墳丘部や石室周辺からは遺物は出土しなかった。

5. 溝（SD01）（第82図、写真図版94）

調査区の北西側を走る溝で、谷の方向に沿ってほぼ直線的に流れる。幅は最も広いところで2mを超えるが平均1mほどであり、深さは0.8mを測る。两岸の壁面は比較的急である。埋土中には山石が部分的に落ち込んでいるが、積み上げたような状態ではない。

埋土下層からわずかに古墳時代と思われる須恵器小片が出土している。

6. 2区出土遺物（第85図、写真図版98）

208は2-3号墳斜面下から転石と共に出土した須恵器坏蓋である。1/3程度残存しており、口径は11.2cmと小型に属するが、器高は4.0cmと深さを保つ。口縁端部は尖らせ気味に丸くおさめる。天井部外面に圧痕及び細かい擦痕が観察できる。

209は2-3号墳斜面下から転石と共に出土した須恵器坏身である。1/2残存しており、口径10.1cm、器高3.55cmを測る。

210は確認調査時に2-1号墳石組み内から出土した須恵器坏蓋である。約1/3の破片であるが、口径12.8cm、器高4.5cmを復元した。

211も確認調査時に2-1号墳石組み内から出土した須恵器坏身である。ほぼ完形で、口径10.6cm、器高3.7cmを測る。底面に直線が刻まれる。自然軸が付着する。

212～214は調査区北半から出土している。212は須恵器高坏の坏部小片である。213は平瓶などの底部と思われ、下半部外面に回転によるヘラケズリを行っている。

214は須恵器器台破片と考えるが、甕口縁部付近の破片かもしれない。2条単位の沈線間に柳掻き波状文を施している。

S201は2-3号墳丘陵斜面下方から、S202～205は2区の人力掘削中に出土した石である。もちこまれたものの可能性が高いがいずれもやや扁平な円礫で加工・使用の痕跡は確認しがたく、写真のみの掲載とする。S201の平面形は135×81mmの楕円形で厚さ58mm、重量740g、S202は96×77mmのほぼ円形で厚さ59mm、582.5g、S203は52×44mm、厚さ15mmで54.8g、S204は40×36mm、厚さ26mmで48.4g、S205は157×57mm、厚さ28mmと扁平な棒状で311.5gを測る。

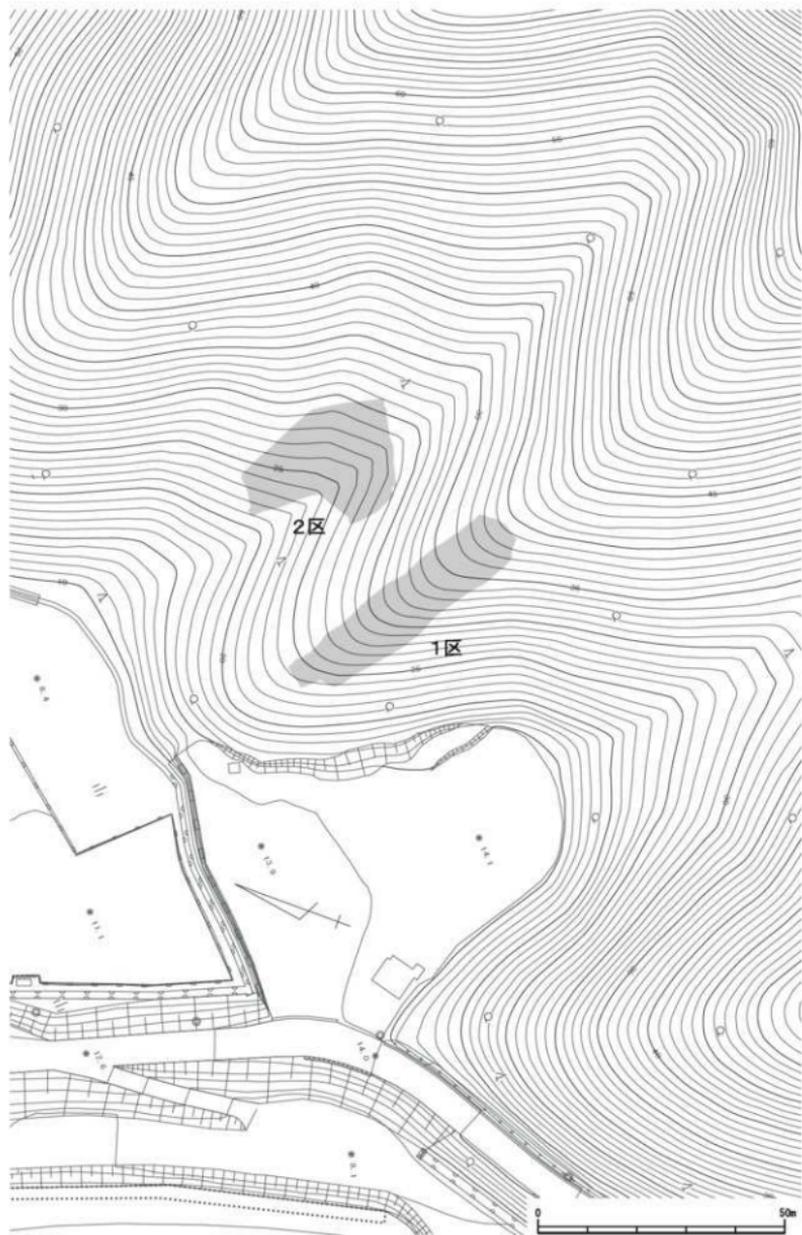
第4節 浅谷下山古墳群小結

浅谷下山古墳群の1区では、幅10mほどの細く瘦せた尾根上に墳墓が構築されていたが、墳丘が流失し、岩盤が露出しているため平坦部と斜面上方の区画溝によって7基の墳墓を復元した。出土遺物が少ないが全て古墳時代前期頃のものと思われる。

尾根上方の2基の古墳、6号墳・7号墳は遺物が伴っており、7号墳が庄内期末から布留期初頭頃、6号墳が布留期前半の時期が与えられよう。7号墳は階段式の古墳ではなく、周溝を巡らせる墳丘を有する。7号墳第1主体部木棺下で検出された土坑は、検出状況から「腰坑」と類似する。そこから出土した遺物（仿製鏡・鉄製刀子・玉類・壱柳と土師器杖）は前期古墳の長大な木棺内の頭部付近で見られるものに近いが、小規模な墳丘・墓塚・棺であるがゆえに棺側などには鉄製の武器等は有していない。6号墳も周溝を意識した溝を掘り、鉄製の刀子と鎌、勾玉を有している。

浅谷下山古墳群2区的位置する谷内は後世に削平されて平坦地が作られたようである。わずかに近世以降の遺物が掘削の際に出土しており、比較的新しい時期に造成された可能性が高い。但し、構造物の痕跡は全くなく、生活の痕跡も見出せなかった。また可耕地として利用された状況も認められなかったことから、植林や簡単な畑地として利用されたものであろう。調査区外の南東部谷の奥は緩やかにのぼっており、30m程は平坦地が続くが、次第に狭くなる。谷の奥にも古墳の存在を示すような痕跡は現状では認められなかった。

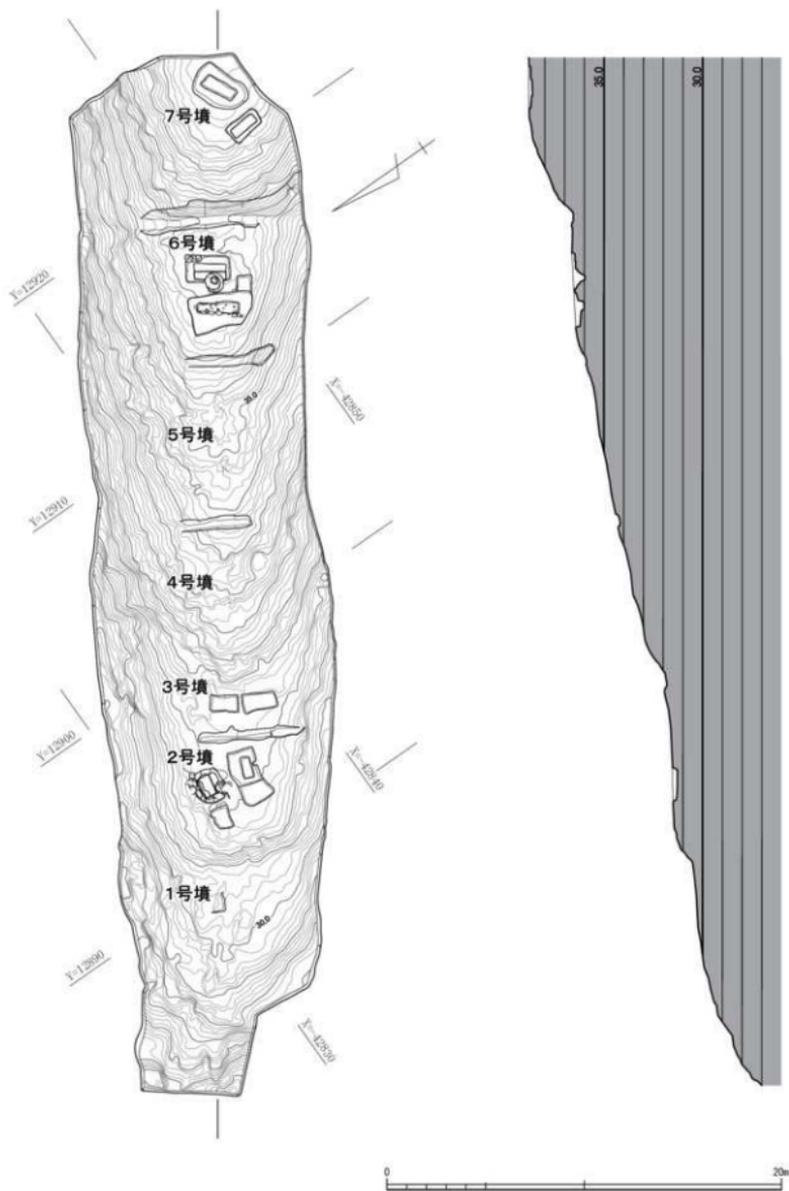
出土した須恵器とわずかに残された痕跡から横穴式石室を3基復元したが、完全に破壊されていた。比較的広い谷内に古墳時代後期の墳墓が存在した可能性を示したに留まる。出土した土器は小片がほとんどであり、古墳時代後期のものに限られてはいるが、若干の時期差が認められる。



第 65 図 浅谷下山古墳群 発掘調査位置図

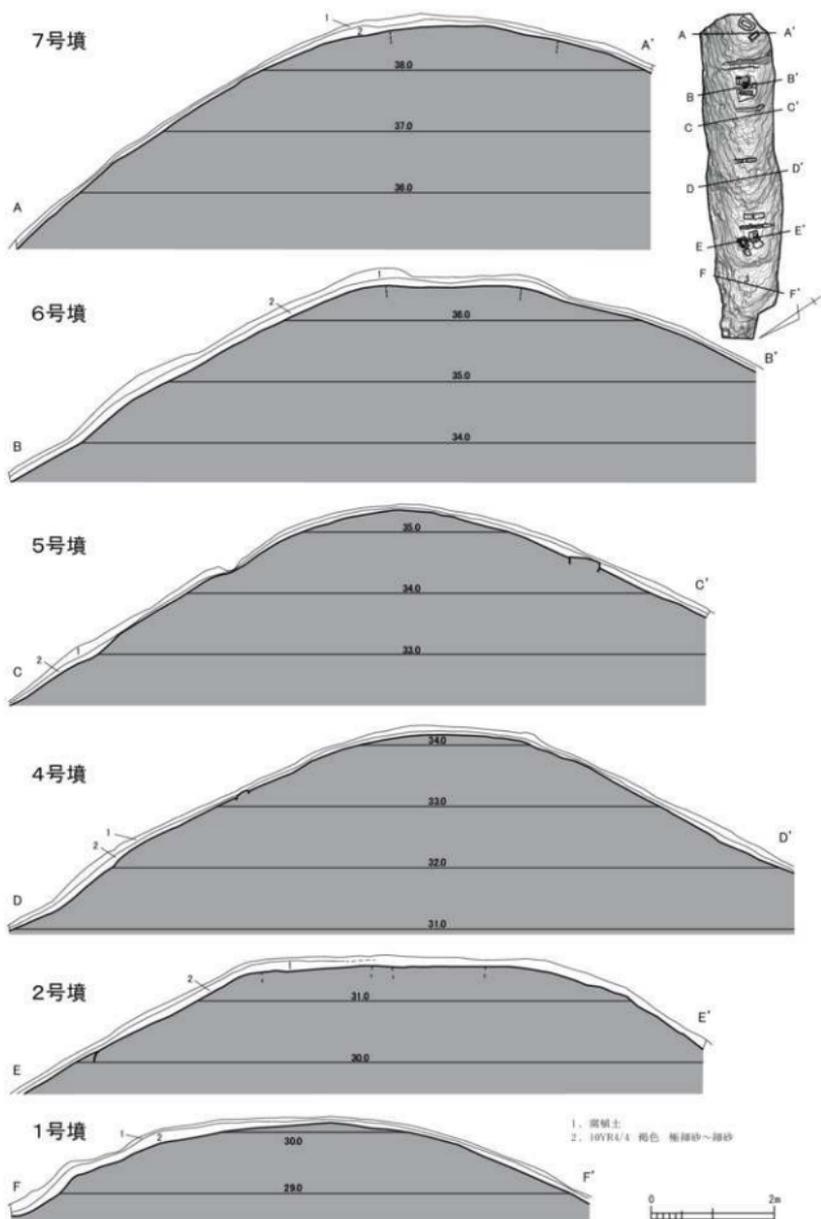


第 66 图 1 区全体图

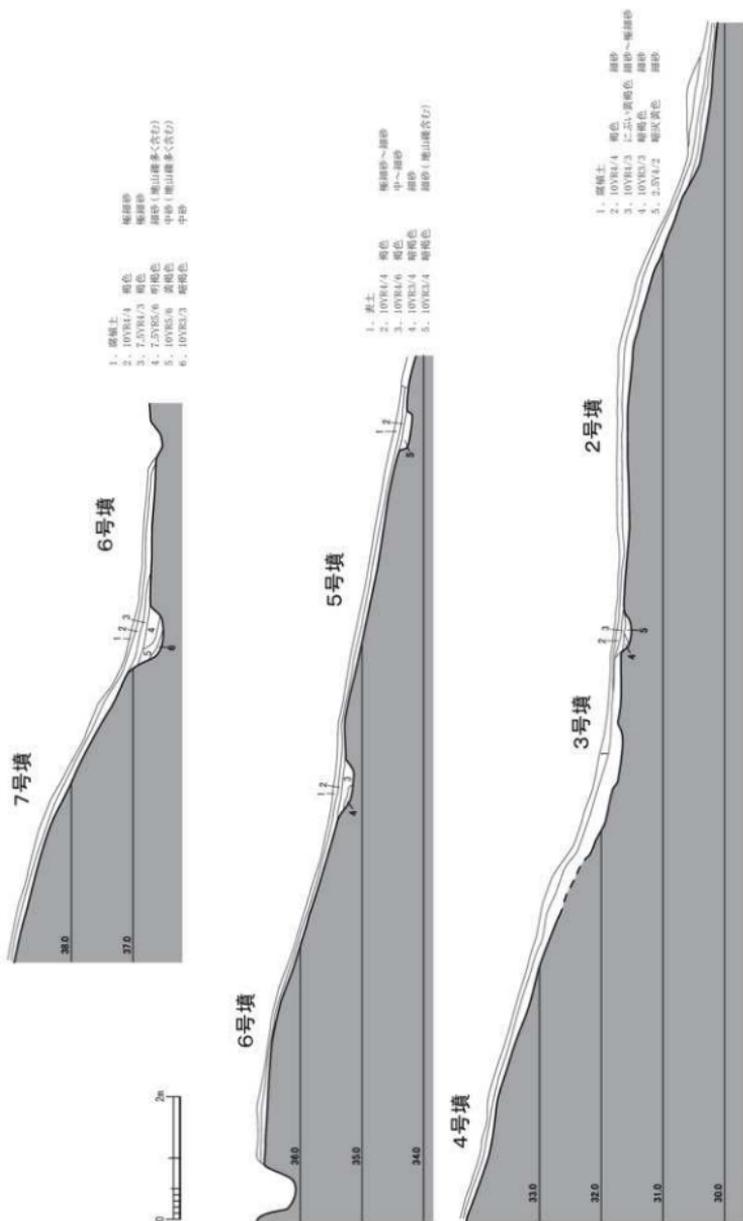


浅谷下山古墳群 1区

第 67 図 調査前平板測量図

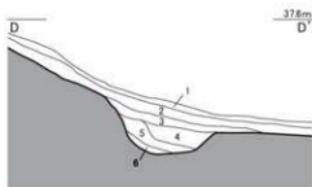
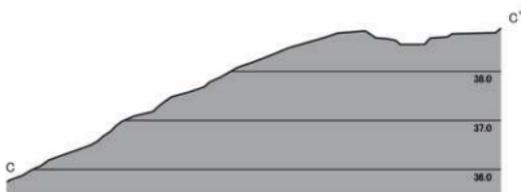
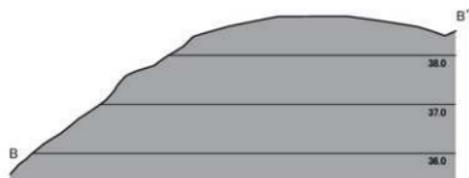
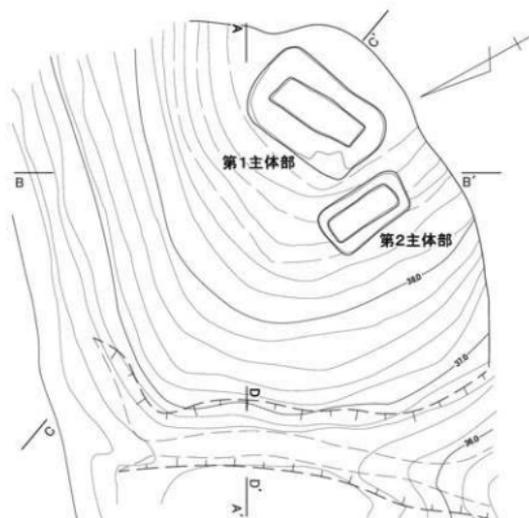
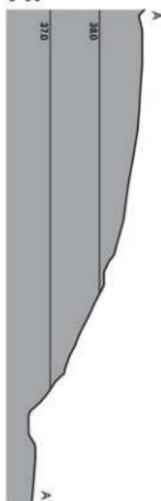


第68図 古墳横断面土層図



第69图 古墳横断面土層図

7号墳



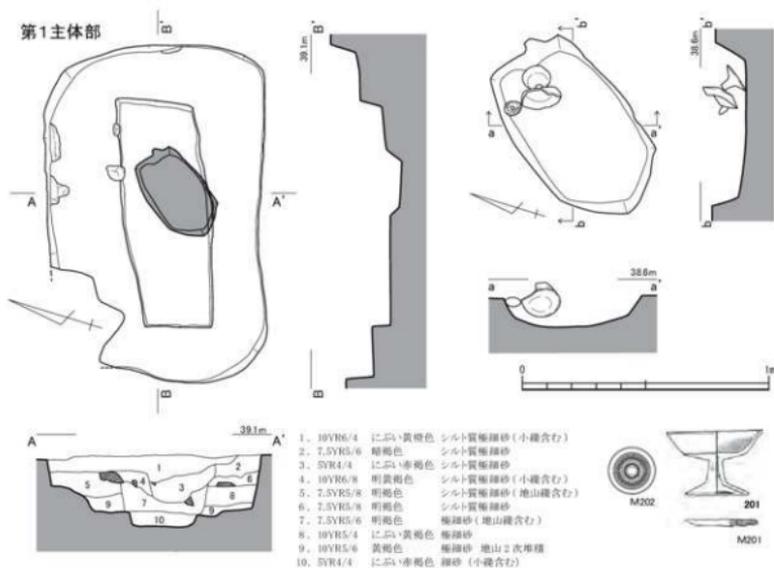
1. 腐植土
2. 10YR4/4 褐色 極細砂
3. 7.5YR4/3 褐色 極細砂
4. 7.5YR5/6 明褐色 細砂(地山礫多<含土)
5. 10YR5/6 黄褐色 中砂(地山礫多<含土)
6. 10YR3/3 暗褐色 中砂



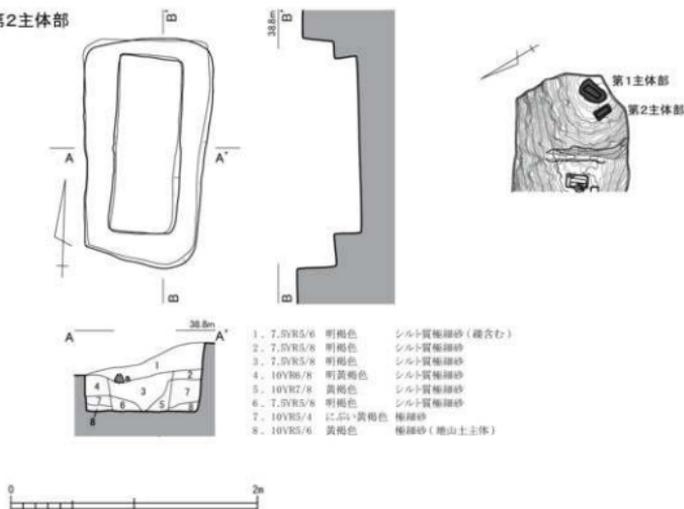
第70図 7号墳(1)

7号墳

第1主体部

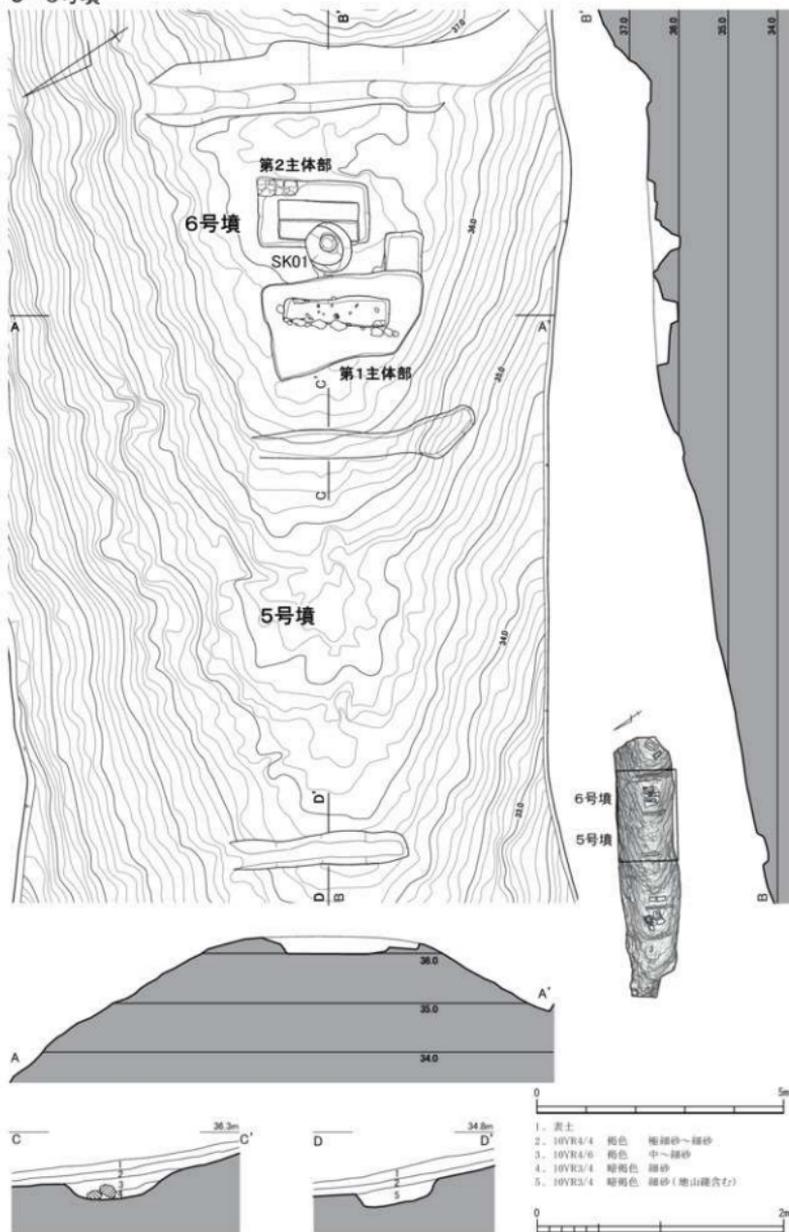


第2主体部



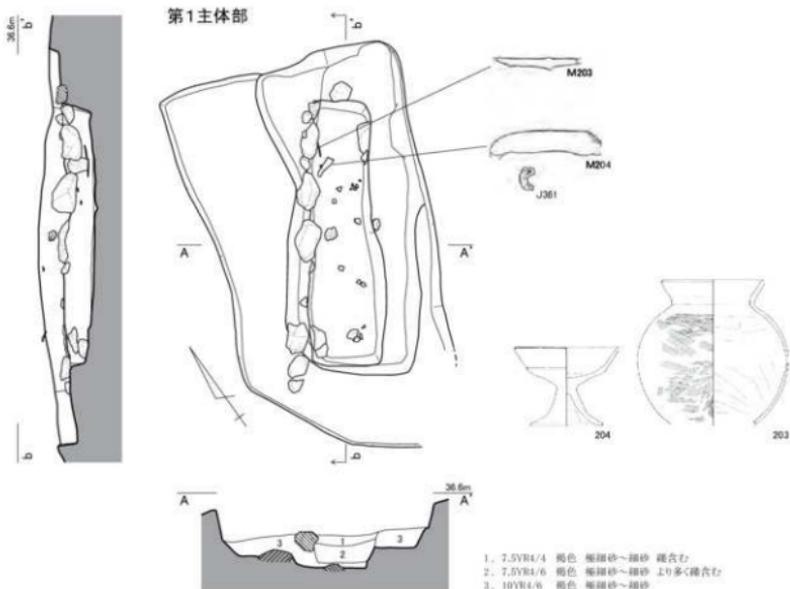
第71図 7号墳(2) 第1・2主体部

5・6号墳



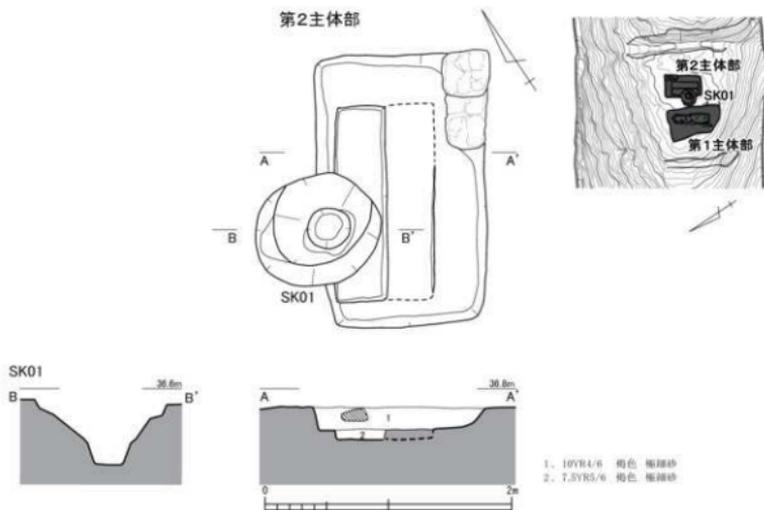
第72图 5・6号墳

6号墳



1. 7.5YR4/4 褐色 極細砂～細砂 鏡食台
2. 7.5YR4/6 褐色 極細砂～細砂 上9多C鏡食台
3. 10YR4/6 褐色 極細砂～細砂

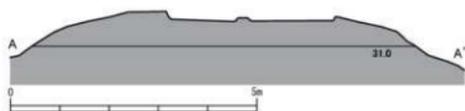
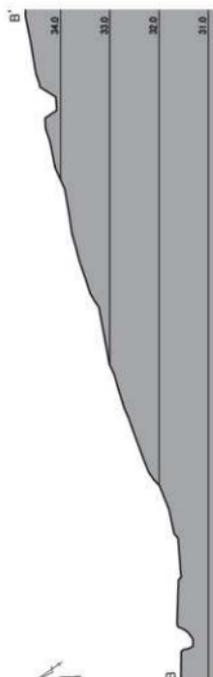
第2主体部



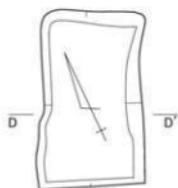
1. 10YR4/6 褐色 極細砂
2. 7.5YR5/6 褐色 極細砂

第73図 6号墳第1・2主体部

3·4号墳

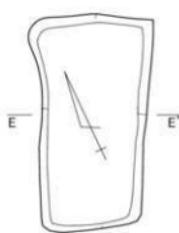


第1主体部

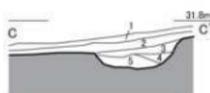


1. 7.5YR5/6 明褐色 緑砂

第2主体部



1. 10YR5/6 黄褐色 緑砂(雜合石)
2. 7.5YR5/6 明褐色 緑砂(雜合石)

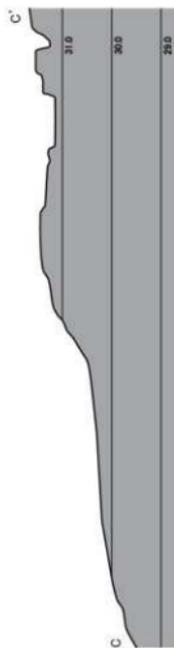
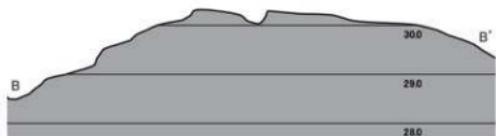
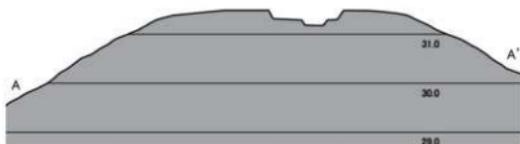
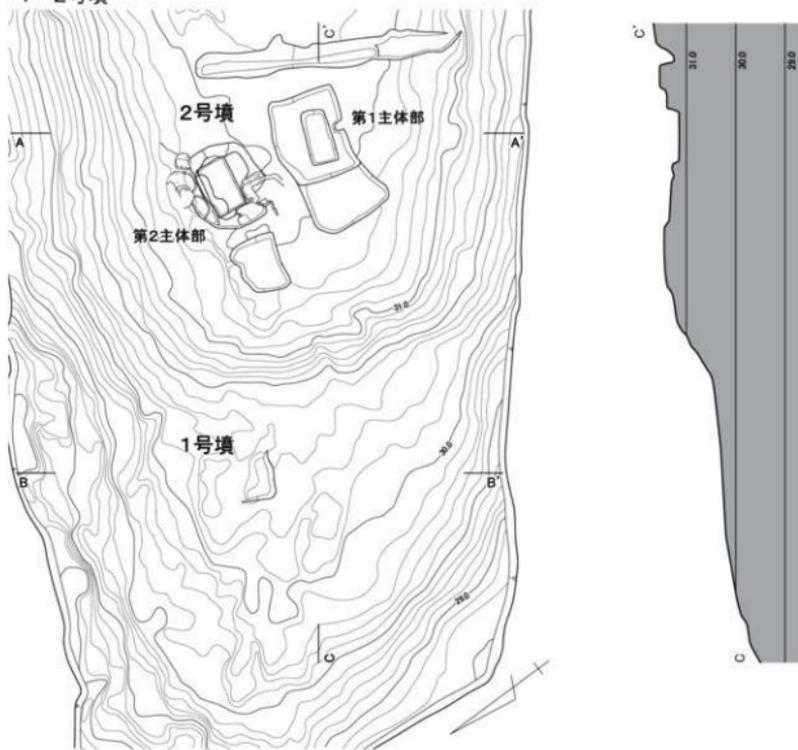


1. 腐殖土
2. 10YR4/4 褐色 緑砂
3. 10YR4/3 紅褐色 緑砂~極細砂
4. 10YR3/3 暗褐色 緑砂
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色 緑砂



第74图 3·4号墳

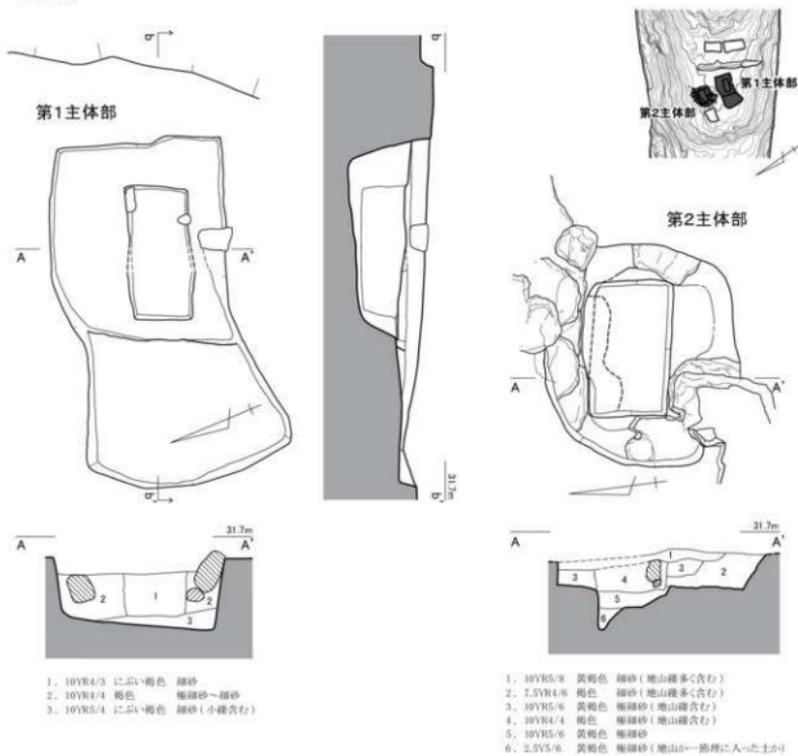
1・2号墳



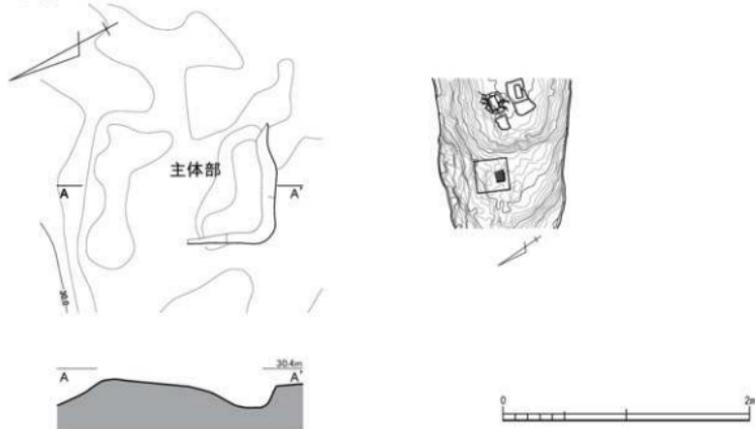
浅谷下山古墳群 1区

第75图 1・2号墳(1)

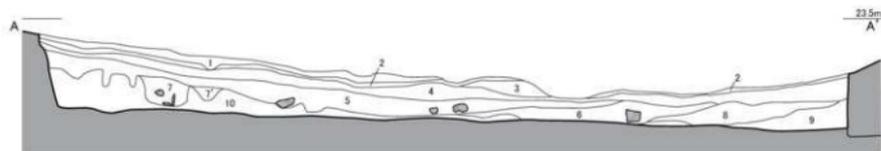
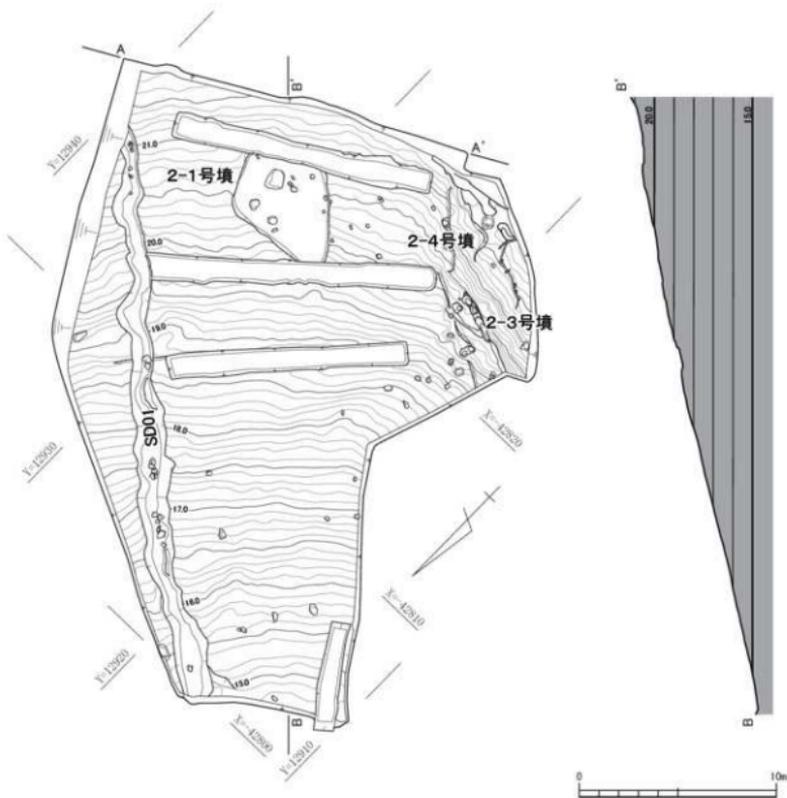
2号墳



1号墳



第76図 1・2号墳(2)主体部



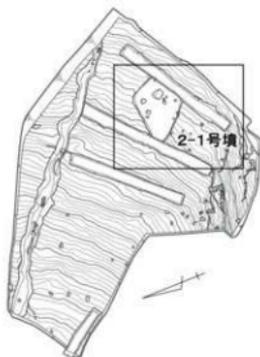
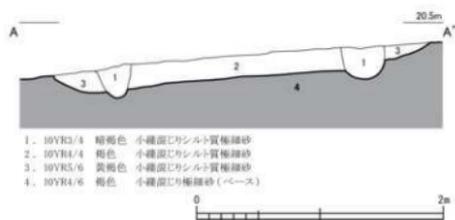
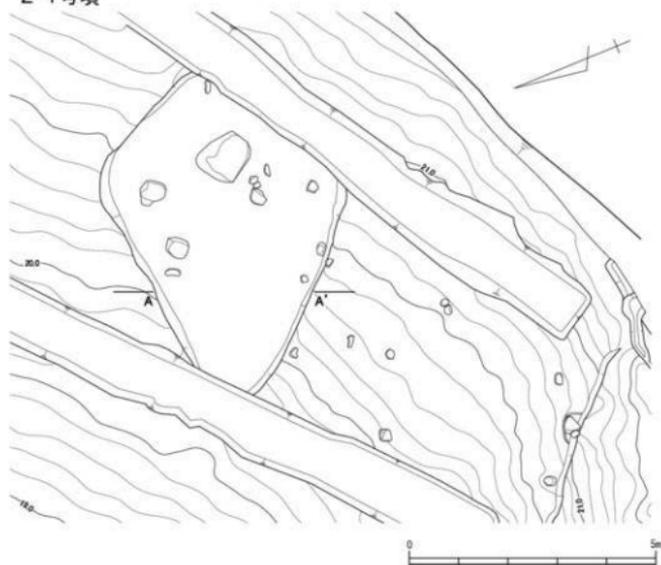
1. 底土
2. 灰褐色 中雑炭じり極細砂
3. 10YR5/6 黄褐色 小雑炭じりシルト質極細砂 (巨粒径 20cm 含む)
4. 10YR4/4 褐色 小雑炭じりシルト質極細砂
5. 10YR3/3 暗褐色 中雑炭じりシルト質極細砂 (巨粒径 20cm 含む)
6. 10YR3/2 黒褐色 小雑炭じりシルト質極細砂 (巨粒径 20cm 含む)
7. 10YR3/4 暗褐色 小雑炭じりシルト質極細砂 (巨粒径 15cm 含む) 溝中
8. 10YR4/6 褐色 小雑炭じり極細砂
9. 10YR5/8 黄褐色 小雑炭じりシルト質極細砂 ベース
10. 9層上りややぐれい 中雑炭じりシルト質極細砂 ベース

浅谷下山古墳群

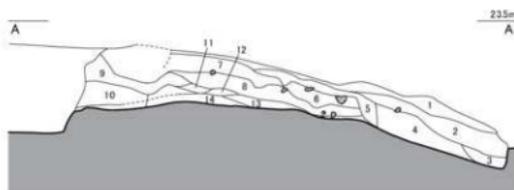
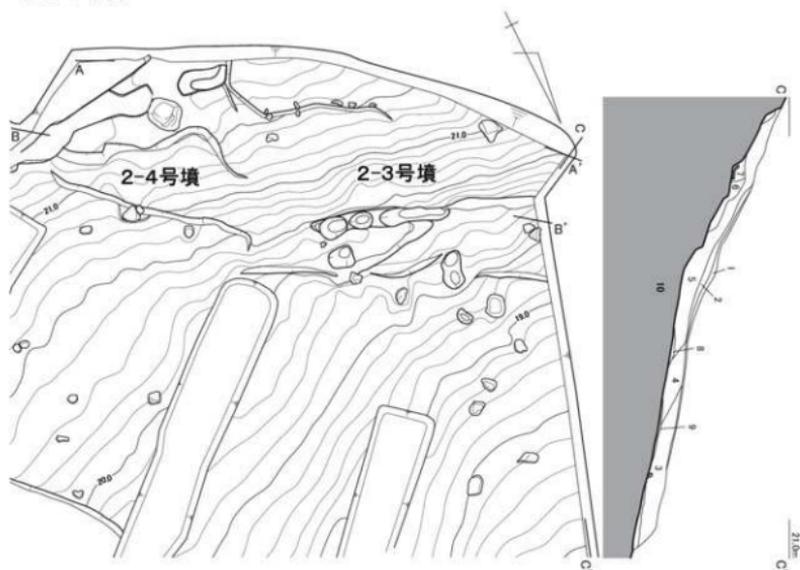
2区

第 77 図 2 区全体図

2-1号墳

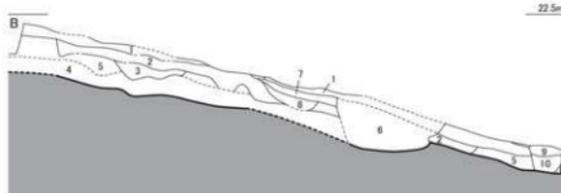


2-3・4号墳

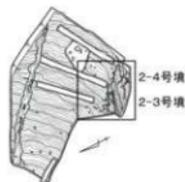


- | | | |
|-------------------|------------------|------------------------|
| 1. 腐植土 | 8. 10YR5/6 黄褐色 | 小礫混じり極細砂 |
| 2. 10YR4/4 褐色 | 9. 10YR5/8 黄褐色 | 粗砂混じりシルト質極細砂 |
| 3. 10YR4/6 褐色 | 10. 10YR4/6 褐色 | 中礫～粗砂混じりシルト質極細砂(石材抜き層) |
| 4. 10YR5/6 黄褐色 | 11. 10YR5/6 黄褐色 | 中礫多しシルト質極細砂 |
| 5. 10YR4/4 褐色 | 12. 10YR5/8 黄褐色 | 中礫含むシルト質極細砂 |
| 6. 10YR4/3 に灰・黄褐色 | 13. 7.5YR4/6 褐色 | 中砂混じりシルト質極細砂(ベース) |
| 7. 10YR5/8 黄褐色 | 14. 7.5YR5/6 明褐色 | 小礫混じりシルト質極細砂(ベース) |

- C'
1. 腐植土
 2. 10YR4/4 褐色
 3. 10YR4/6 褐色
 4. 10YR4/2 に灰・黄褐色
 5. 10YR4/2 に灰・黄褐色
 6. 10YR4/2 に灰・黄褐色
 7. 10YR4/6 黄褐色
 8. 10YR4/6 黄褐色
 9. 10YR4/6 黄褐色
 10. 10YR4/6 黄褐色
- 粗砂混じりシルト質極細砂
粗砂混じりシルト質極細砂
粗砂混じりシルト質極細砂
粗砂混じりシルト質極細砂
粗砂混じりシルト質極細砂
粗砂混じりシルト質極細砂
粗砂混じりシルト質極細砂
粗砂混じりシルト質極細砂
粗砂混じりシルト質極細砂
粗砂混じりシルト質極細砂



- | | | | |
|----------------|------------------|-------------------|--------------|
| 1. 10YR5/6 黄褐色 | 中砂混じり極細砂 | 6. 10YR4/4 褐色 | 粗砂混じり極細砂 |
| 2. 10YR4/4 褐色 | 小礫混じり極細砂 | 7. 10YR4/3 に灰・黄褐色 | 中砂混じり極細砂 |
| 3. 10YR4/4 褐色 | 小礫混じりシルト質極細砂 | 8. 10YR4/4 褐色 | 粗砂混じり極細砂 |
| 4. 10YR4/4 褐色 | 中砂混じり極細砂 | 9. 10YR4/6 褐色 | 小礫混じりシルト質極細砂 |
| 5. 10YR5/6 黄褐色 | 中礫～シルト質極細砂(やや黄砂) | 10. 10YR4/4 褐色 | 中礫混じりシルト質極細砂 |

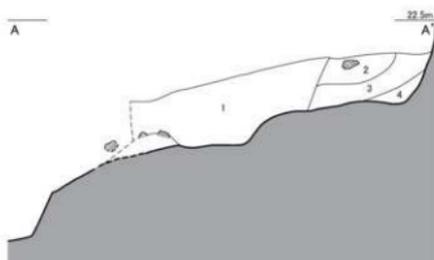
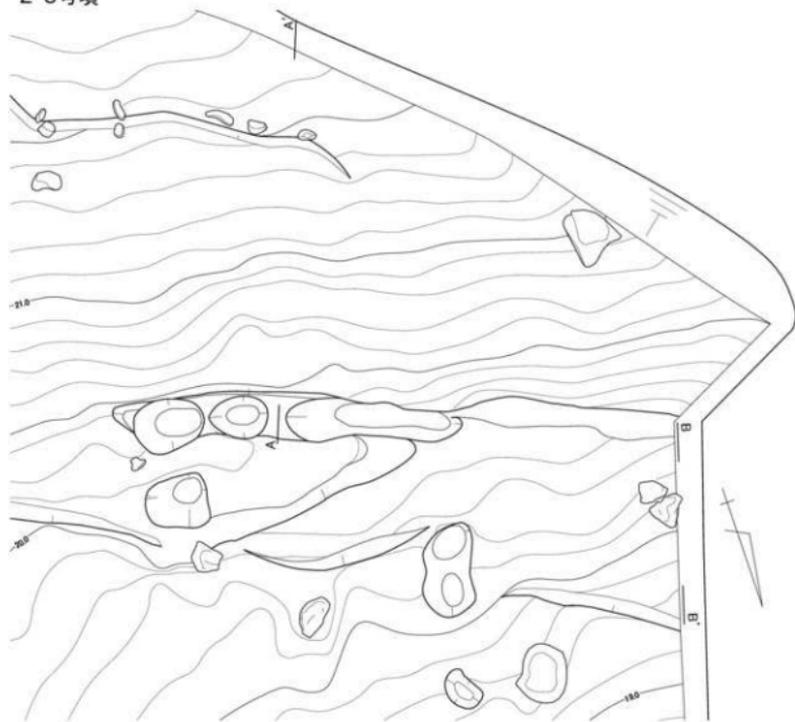


浅谷下山古墳群

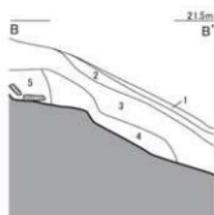
2区

第79図 2-3・4号墳

2-3号墳



1. 10YR3/4 暗褐色 小礫混じりシルト質極細砂
2. 10YR4/4 褐色 粗砂混じりシルト質極細砂
3. 10YR5/6 黄褐色 粗砂混じりシルト質極細砂
4. 10YR4/6 褐色 小礫混じりシルト質極細砂

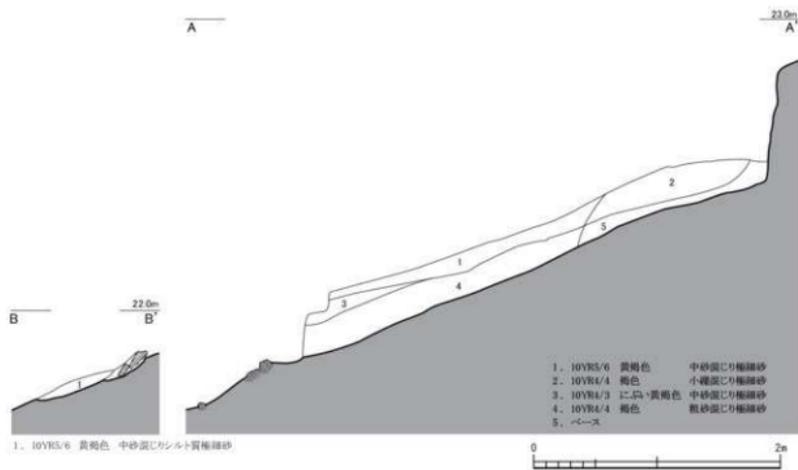


1. 高城土
2. 10YR4/4 褐色 粗砂混じりシルト質極細砂
3. 10YR4/4 褐色 小礫混じりシルト質極細砂
4. 10YR4/3 にじみ黄褐色 粗砂 シルト質極細砂
5. 10YR5/6 黄褐色 粗砂 シルト質極細砂



第80図 2-3号墳

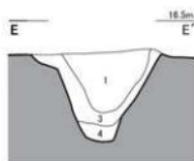
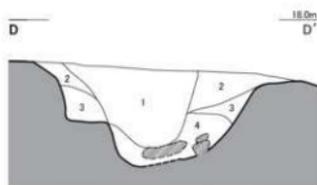
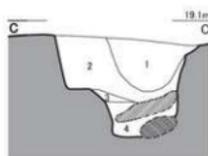
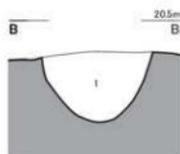
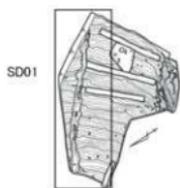
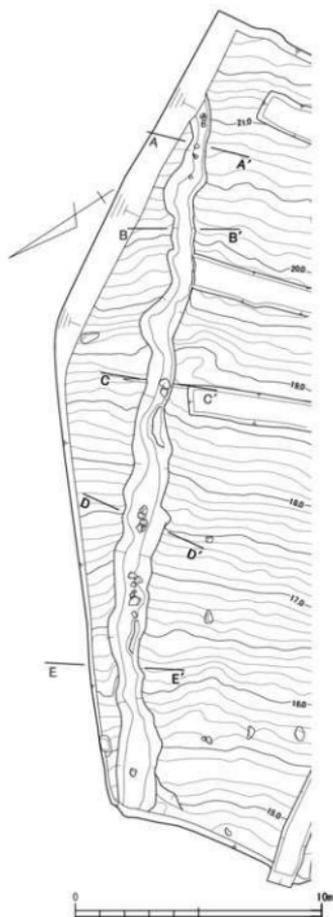
2-4号墳



浅谷下山古墳群

2区

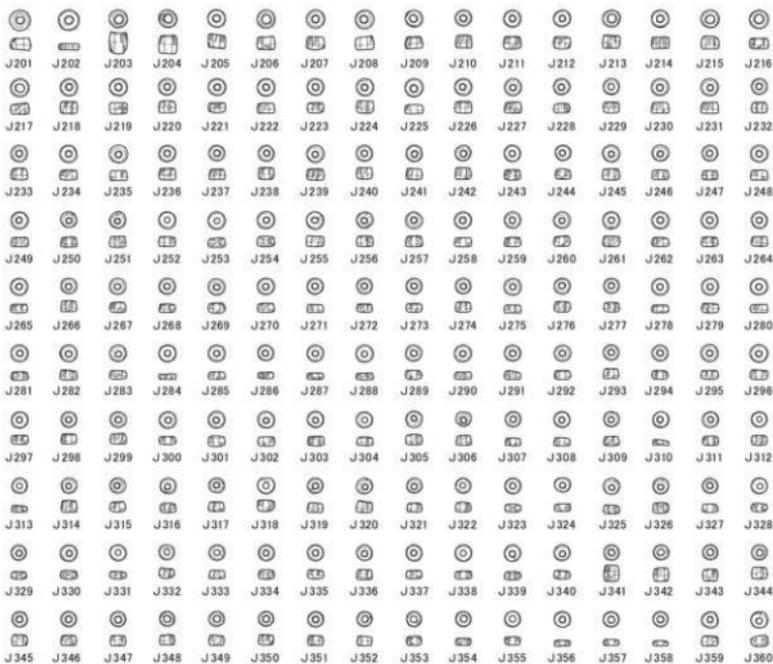
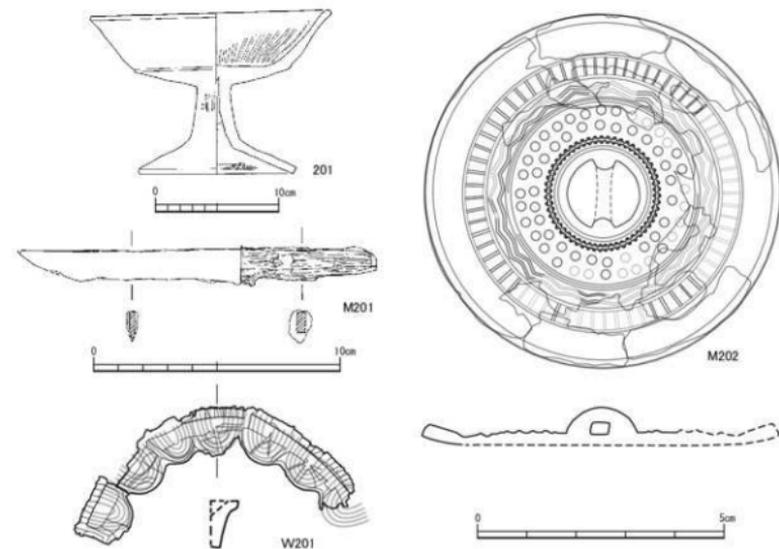
第81図 2-4号墳



1. 10YR3/4 暗褐色 中粒炭Cリ層細砂
2. 10YR3/3 暗褐色 小粒炭Cリシルト質極細砂
3. 10YR4/4 褐色 小粒炭Cリシルト質極細砂
4. 10YR3/4 黄褐色 小粒炭Cリシルト質極細砂

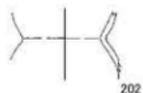


7号墳



第83图 7号墳出土遺物

6・7号墳間溝

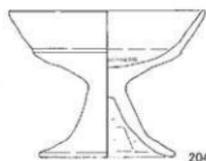


202

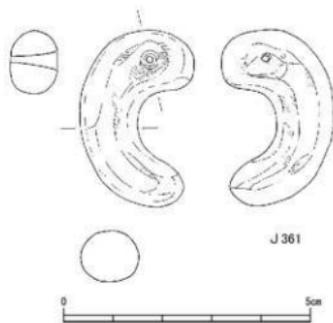
6号墳



203



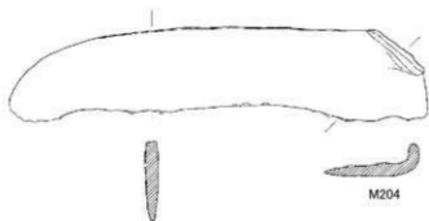
204



J 361



M203



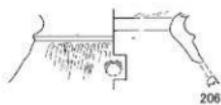
M204



4号墳



205



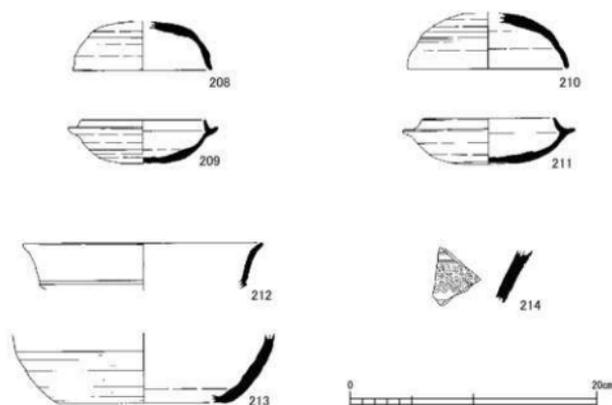
206



207



第84図 6・4号墳出土遺物



第 85 図 2 区出土遺物

第 6 表 浅谷下山古墳群出土土器観察表

報告番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)			残存	備考
				口径	器高	底径		
201	7号墳 第1主体部 底土坑	土師器	高坏	19.2	13.25	12.4	白縁部1/2欠損	
202	6・7号墳間溝	土師器	小型甕	(頸6.9)	(5.6)		頸~体部1/5	
203	6号墳 第1主体部 棺内	土師器	壺	(14.7)	(22.2)		白縁部3/4 体部1/4	煤付着
204	6号墳 第1主体部 棺内	土師器	高坏	(15.6)	(12.0)	10.8	白縁部1/4脚部完存	図上復元
205	4号墳 裾部	土師器	高坏		(0.8)		坏部2/5	
206	4号墳 裾部	土師器	鼓形器台		(5.95)		脚部1/5	
207	4号墳 裾部	須恵器	坏	(13.6)	4.8	8.4	法江1/2	生焼
208	2-3号墳 斜面下	須恵器	坏蓋	(11.2)	(4.0)		白縁部1/6 底面1/3	
209	2-3号墳 斜面下	須恵器	坏身	(10.1)	3.55		法江1/2	
210	2-1号墳 石組(レキ層)内	須恵器	坏蓋	(12.8)	(4.5)		法江1/3	確認調査
211	2-1号墳 石組(レキ層)内	須恵器	坏身	10.6	3.7		法江完存	確認調査
212	2区 北平	須恵器	高坏	(19.4)	(3.7)		白縁部小片	
213	2区 北平	須恵器	平瓶?	(5.55)		(13.8)	底部小片	
214	2区 北平	須恵器	器台		(4.5)		小片	

第7表 浅谷下山古墳群出土土類観察表

報告番号	長さ	幅	厚み	孔径	重量	報告番号	長さ	幅	厚み	孔径	重量	報告番号	長さ	幅	厚み	孔径	重量
J 201	4.2	4.1	2.5	1.5	0.01	J 255	3.3	3.4	1.9	1.3	0.05	J 309	3.0	3.0	1.8	1.3	0.04
J 202	4.1	4.1	1.3	1.5	0.02	J 256	3.2	3.2	1.8	1.3	0.04	J 310	3.1	3.0	1.1	1.2	0.01
J 203	3.5	3.6	4.3	1.8	0.07	J 257	3.2	3.4	1.8	1.2	0.04	J 311	3.1	3.1	1.5	1.3	0.02
J 204	3.5	3.7	3.8	1.8	0.06	J 258	3.3	3.3	1.6	1.3	0.04	J 312	3.1	3.0	1.6	1.3	0.02
J 205	3.5	3.5	2.7	1.5	0.05	J 259	3.2	3.2	1.6	1.3	0.03	J 313	3.0	3.0	1.2	1.2	0.02
J 206	3.7	3.7	2.7	1.8	0.05	J 260	3.3	3.2	1.9	1.3	0.03	J 314	3.1	3.0	2.3	1.3	0.03
J 207	3.6	3.7	2.8	1.4	0.05	J 261	3.4	3.5	1.9	1.3	0.03	J 315	2.9	3.1	2.2	1.4	0.03
J 208	3.7	3.8	2.7	1.5	0.05	J 262	3.4	3.4	1.6	1.3	0.03	J 316	2.9	3.0	1.5	1.3	0.03
J 209	3.4	3.5	2.4	1.1	0.04	J 263	3.4	3.4	1.8	1.4	0.03	J 317	2.9	3.0	1.7	1.3	0.03
J 210	3.3	3.3	2.5	1.3	0.06	J 264	3.3	3.2	1.9	1.2	0.05	J 318	3.0	3.4	2.2	1.4	0.03
J 211	3.5	3.5	2.2	1.1	0.05	J 265	3.4	3.4	1.6	1.3	0.03	J 319	3.0	3.0	1.9	1.3	0.03
J 212	3.2	3.3	2.1	1.2	0.05	J 266	3.2	3.1	2.4	1.2	0.04	J 320	3.1	3.0	2.2	1.3	0.03
J 213	3.5	3.5	2.4	1.7	0.05	J 267	3.3	3.3	2.0	1.2	0.04	J 321	2.9	2.9	1.7	1.3	0.02
J 214	3.4	3.5	2.2	1.5	0.05	J 268	3.4	3.4	1.6	1.2	0.03	J 322	3.0	3.0	1.6	1.4	0.03
J 215	3.5	3.6	2.5	1.8	0.04	J 269	3.5	3.4	2.0	1.4	0.04	J 323	3.1	3.1	1.2	1.3	0.03
J 216	3.8	3.8	2.0	1.7	0.05	J 270	3.4	3.5	1.8	1.2	0.04	J 324	2.8	3.1	1.5	1.2	0.03
J 217	3.7	3.7	2.0	1.8	0.04	J 271	3.3	3.4	1.8	1.3	0.03	J 325	3.2	3.1	1.7	1.3	0.04
J 218	3.5	3.5	2.2	1.2	0.04	J 272	3.3	3.3	1.7	1.3	0.04	J 326	3.1	3.1	1.8	1.3	0.03
J 219	3.5	3.5	2.3	1.3	0.04	J 273	3.3	3.3	1.7	1.4	0.03	J 327	3.1	3.0	1.5	1.3	0.03
J 220	3.3	3.3	2.3	1.1	0.04	J 274	3.2	3.3	2.0	1.2	0.03	J 328	3.1	3.2	1.4	1.3	0.04
J 221	3.5	3.4	1.8	1.3	0.04	J 275	3.4	3.3	1.8	1.2	0.03	J 329	3.0	3.0	1.2	1.3	0.03
J 222	3.4	3.5	1.9	1.3	0.06	J 276	3.2	3.2	1.9	1.2	0.03	J 330	3.3	3.3	1.4	1.3	0.03
J 223	3.2	3.2	1.8	1.0	0.06	J 277	3.2	3.2	1.8	1.2	0.03	J 331	3.2	3.2	1.3	1.3	0.03
J 224	3.4	3.4	2.2	1.2	0.08	J 278	3.4	3.5	1.4	1.2	0.04	J 332	2.9	3.0	1.8	1.4	0.03
J 225	3.7	3.7	1.9	1.4	0.06	J 279	3.3	3.3	1.6	1.3	0.04	J 333	3.1	3.0	1.6	1.2	0.03
J 226	3.5	3.4	2.4	1.3	0.06	J 280	3.3	3.4	1.8	1.2	0.04	J 334	3.1	3.1	1.5	1.3	0.03
J 227	3.5	3.4	2.4	1.3	0.08	J 281	3.4	3.4	1.8	1.2	0.03	J 335	3.2	3.1	1.7	1.3	0.03
J 228	3.1	3.2	1.9	1.3	0.06	J 282	3.5	3.5	2.0	1.4	0.04	J 336	3.1	3.0	2.1	1.3	0.03
J 229	3.3	3.3	2.1	1.4	0.07	J 283	3.5	3.4	1.8	1.2	0.03	J 337	3.1	3.0	1.6	1.3	0.02
J 230	3.4	3.4	2.2	1.2	0.04	J 284	3.5	3.5	1.2	1.2	0.03	J 338	3.3	3.3	1.4	1.4	0.02
J 231	3.6	3.5	2.3	1.3	0.03	J 285	3.3	3.3	1.5	1.2	0.03	J 339	3.2	3.3	1.3	1.3	0.02
J 232	3.3	3.2	2.1	1.4	0.03	J 286	3.0	3.1	1.1	1.0	0.03	J 340	3.1	3.1	1.8	1.4	0.03
J 233	3.2	3.4	2.1	1.4	0.03	J 287	3.2	3.2	1.3	1.1	0.02	J 341	3.1	3.1	3.3	1.1	0.04
J 234	3.6	3.5	1.9	1.1	0.03	J 288	3.5	3.6	1.3	1.2	0.03	J 342	2.9	3.0	2.6	1.4	0.03
J 235	3.4	3.5	2.0	1.1	0.04	J 289	3.2	3.3	1.7	1.1	0.02	J 343	3.0	3.0	2.2	1.3	0.03
J 236	3.3	3.3	2.1	1.3	0.04	J 290	3.4	3.4	1.5	1.2	0.03	J 344	3.0	3.0	2.2	1.2	0.03
J 237	3.1	3.2	2.1	1.3	0.03	J 291	3.2	3.2	2.1	1.2	0.03	J 345	2.9	2.9	2.2	1.4	0.04
J 238	3.2	3.1	2.2	1.3	0.04	J 292	3.3	3.4	1.8	1.2	0.03	J 346	3.0	3.0	2.0	1.3	0.04
J 239	3.4	3.6	2.2	1.3	0.04	J 293	3.1	3.1	2.0	1.2	0.03	J 347	3.0	3.0	2.1	1.4	0.04
J 240	3.1	3.1	2.2	1.3	0.03	J 294	3.2	3.3	1.7	1.1	0.04	J 348	2.9	3.0	2.0	1.4	0.03
J 241	3.1	3.0	2.0	1.3	0.03	J 295	3.4	3.4	1.5	1.2	0.04	J 349	3.0	3.1	2.1	1.4	0.04
J 242	3.0	3.1	2.2	1.3	0.04	J 296	3.5	3.6	1.8	1.2	0.04	J 350	2.9	2.9	1.9	1.3	0.03
J 243	3.3	3.3	1.8	1.4	0.03	J 297	3.3	3.4	1.8	1.1	0.03	J 351	3.0	3.0	2.0	1.3	0.03
J 244	3.0	3.0	1.7	1.2	0.04	J 298	3.1	3.0	2.0	1.1	0.03	J 352	2.9	3.0	2.0	1.3	0.02
J 245	3.3	3.3	2.1	1.2	0.04	J 299	3.2	3.3	2.2	1.1	0.04	J 353	3.0	3.0	1.7	1.5	0.02
J 246	3.1	3.2	1.8	1.0	0.03	J 300	3.3	3.4	1.5	1.2	0.04	J 354	3.0	3.0	1.4	1.3	0.02
J 247	3.1	3.0	1.8	1.2	0.03	J 301	3.2	3.2	1.7	1.3	0.03	J 355	3.0	3.1	1.5	1.4	0.02
J 248	3.3	3.3	1.9	1.3	0.03	J 302	3.2	3.4	1.8	1.3	0.03	J 356	3.1	3.1	1.1	1.3	0.02
J 249	3.3	3.4	1.8	1.2	0.05	J 303	3.2	3.2	1.8	1.3	0.02	J 357	3.1	3.1	1.1	1.3	0.02
J 250	3.1	3.1	1.9	1.2	0.03	J 304	3.1	3.0	1.5	1.2	0.03	J 358	3.0	3.0	0.9	1.4	0.02
J 251	3.1	3.1	2.1	1.3	0.05	J 305	3.2	3.3	1.8	1.4	0.03	J 359	3.2	3.2	1.9	1.4	0.04
J 252	3.4	3.2	1.7	1.3	0.05	J 306	2.9	3.0	2.0	1.3	0.03	J 360	3.2	3.3	1.7	1.3	0.03
J 253	3.5	3.4	1.6	1.3	0.05	J 307	3.1	3.0	1.4	1.3	0.03	J 361	3.6	23	10.5	1.5	9.9
J 254	3.4	3.4	1.6	1.2	0.04	J 308	3.0	3.2	1.5	1.2	0.04						

*重量の単位はg、それ以外の単位はmm

第7章 自然科学的分析

第1節 対田清水谷古墳群出土の石杵に付着する赤色顔料について

志賀智史(九州国立博物館)

兵庫県美方郡新温泉町対田にある対田清水谷古墳群から出土した石杵に付着する赤色顔料について、その種類や遺存状況を知るために分析調査をおこなった。石杵は9号墳(墓)の木棺蓋上に置かれていたと推定される位置から出土した。墳墓の時期は弥生時代終末期と考えられている。

石杵は、概略長方形をした亜角礫の自然礫を素材とし、その形状を生かしながら部分的に整形されている。一端には凸湾曲した平滑な磨面が作出されている。磨面と持ち手の位置関係がL字状になることから、L字状石杵に分類されるものであろう。L字状石杵は、弥生時代後期の西日本地域で盛行し、朱(水銀朱, HgS)専用の石杵と考えられている(本田1990)。

これまでの調査によって弥生時代～古墳時代の赤色顔料は、水銀を主成分とする「朱」(HgS, 鉱物名称:辰砂/Cinnabar)と、赤色の酸化鉄に発色の要因がある「ベンガラ」(α -Fe₂O₃, 鉱物名:赤鉄鉱/Hematite)の二種類が知られている。両者を念頭に置き調査を行った。

最初に目視(視力左右とも1.5)による観察を行ったが、赤色物の付着は全く認められない。実体顕微鏡(7倍方～100倍)で表面をくまなく観察すると、磨面の持ち手側の一部分にのみ赤色の粒子が認められた(第86図-1)。赤色粒子は、磨面の微小な凹部に食い込むように遺存している(第86図-2)。朱特有の樹脂状の赤色光沢を持ち、最大径は概ね50 μ mであった。ベンガラのように見える赤色物は確認できなかった。

次に、科学的に赤色物の組成を知るために、ラマン分光分析装置を用いて分子構造の測定を行った。ラマン分光分析は、物質に単色光(レーザー光)を照射することによって生じる散乱光から分子構造を特定する分析手法である。日本の文化財科学分野では認知度は低いが、世界的に見ればよく知られた分析手法である。直径1 μ mほどの微小資料の測定も、非破壊・非接触で行なうことができる特性を持つ。測定にはBruker Optics社SENTERRA(785nm/1mW/1s/測定径2 μ m/測定範囲90-3500 cm^{-1} /波数分解能9-15 cm^{-1})を用い、磨面に付着した赤色物をそのまま測定した。測定の結果、辰砂(朱の鉱物名称)のスペクトル(Lafuente B et al. 2015)と一致した(第86図-3)。

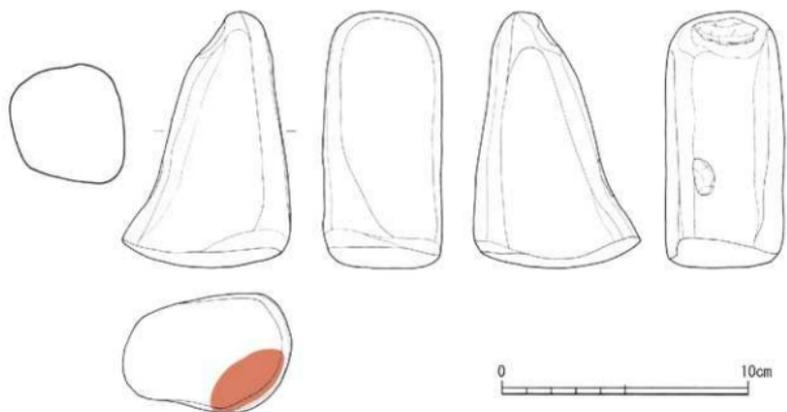
なお、今回は資料が極微量であったことから、通常行う生物顕微鏡(50倍～1000倍)による粒子の色調、形態、赤色顔料粒子の混在状況等の観察、蛍光X線分析は行わなかった。

以上の調査結果から、この石杵には赤色顔料が付着しており、その種類は朱であった。ここでもL字状石杵と朱の強い関係性が認められた。

参考文献

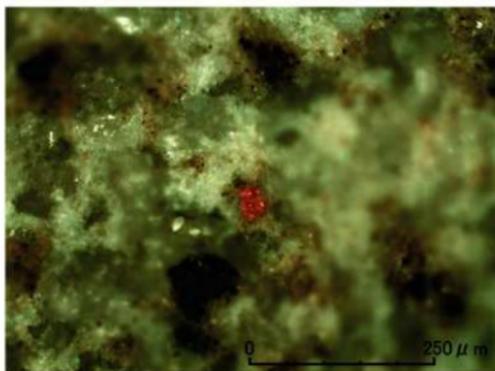
本田光子1990「石杵考」『古代』90, 早稲田大学考古学会, 111頁-140頁

Lafuente B, Downs R T, Yang H, Stone N (2015) The power of databases: the RRUFF project. In: Highlights in Mineralogical Crystallography, T Armbruster and R M Danisi, eds. Berlin, Germany, W. De Gruyter, pp 1-30

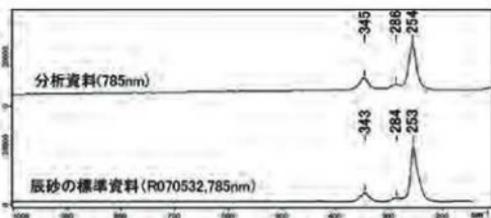


1. 赤色顔料の付着部位（トーン部）

赤色顔料の種類は朱。朱は目視では確認できないが、実体顕微鏡による観察で磨面の一部にのみ極微量確認できた。



2. 磨面に付着する朱（落射光 150倍）



3. ラマン分光分析スペクトル図

辰砂（朱の鉱物名称）によく一致するスペクトルが得られた。

第 86 図 対田清水谷 9 号墳（墓）出土の石片に付着する赤色顔料

第2節 対田清水谷古墳群出土土器の胎土分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、中国山地北東部の新温泉町対田の山地斜面上に位置する対田清水谷古墳群から出土した、弥生時代後期から古墳時代初頭までの時期を示す土器について、その材質(胎土)の特性を明らかにし、その生産や供給事情に関わる資料を作成する。

1. 試料

試料は、対田清水谷古墳群から出土した6点の土器片である。試料には、試料番号1～6までの番号が付されている。発掘調査所見により、これらの土器は弥生時代後期から古墳時代初頭のもと考えられている。各試料の器種や実測番号などを第8表に示す。

第8表 試料一覧および胎土分類結果

試料番号	調査番号	報告番号	器種	胎土分類
1	2009174	9	壺	1類
2	2013013	14	高杯	3類
3	2013013	17	壺	1類
4	2013013	35	甕	3類
5	2013013	42	鼓形器台	2類
6	2014006	23	甕	4類

2. 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩石片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される。同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法が有効である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

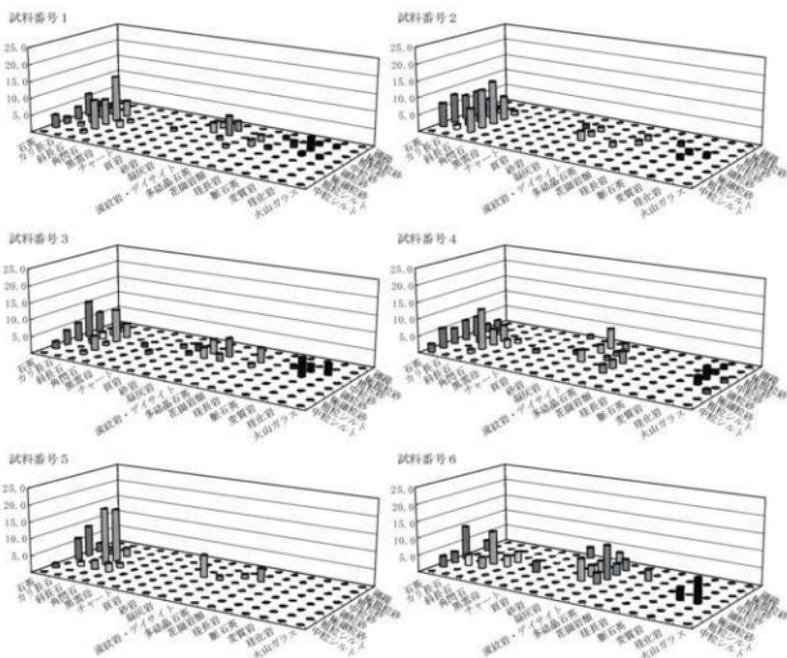
砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

第9表 薄片観察結果(1)

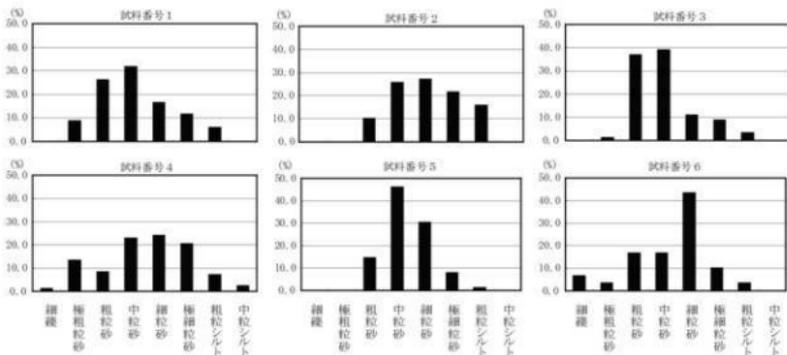
試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成														合計										
		石英	クリストパライト	カリ長石	鉱物片	斜方輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト		安山岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	雲母岩	珪化岩	その他	火山ガラス	植物珪体	
1	細粒																								0	
	極粗粒砂	1										2	3					1		1	1				9	
	粗粒砂	3		2	5							3	6				2		2	4					27	
	中粒砂	7		4	14		1				1		1				2	1		1	1				33	
	細粒砂	4		2	8		2									1									17	
	極細粒砂	2		1	9																				12	
	粗粒シルト	4			1																			1	6	
	中粒シルト																								0	
	基質																									546
	孔隙																									13
備考	基質は淡褐色粘土鉱物、雲母鉱物、酸化鉄などで埋められる。流紋岩、凝灰岩は結晶質～低結晶質。変質岩の原岩は、流紋岩、凝灰岩とみられる。																									
2	細粒																								0	
	極粗粒砂																								0	
	粗粒砂	1		1	1							1	1					1		1					7	
	中粒砂	5		4	5							1						1		1	1				18	
	細粒砂	5		1	9							2				1				1					19	
	極細粒砂	6		1	8															1					15	
	粗粒シルト	5		1	5																				11	
	中粒シルト																								0	
	基質																									438
	孔隙																									3
備考	基質は淡褐色粘土鉱物、雲母鉱物、酸化鉄などで埋められる。変質岩は火山岩の風化岩など。																									
3	細粒																								0	
	極粗粒砂				1																				1	
	粗粒砂	6		2	4							1	2	4	5			4		1	2	3			34	
	中粒砂	10		2	9				1			1	3	2	2			1			5				36	
	細粒砂	5	1	1	1			1			1														10	
	極細粒砂	4			4																				8	
	粗粒シルト	2			1																				3	
	中粒シルト																								0	
	基質																									419
	孔隙																									12
備考	基質は淡褐色粘土鉱物、雲母鉱物、酸化鉄などで埋められる。変質岩は火山岩の風化岩など。																									
4	細粒										1														1	
	極粗粒砂	2										5	2	1							1				11	
	粗粒砂	2		1								2	1								1				7	
	中粒砂	5		4	1							1	1	3							3	1			19	
	細粒砂	5	1	4	2						1		3		2						2				20	
	極細粒砂	4			10													2				1			17	
	粗粒シルト	5		1																					6	
	中粒シルト	2																							2	
	基質																									502
	孔隙																									14
備考	基質は淡褐色粘土鉱物、雲母鉱物、酸化鉄などで埋められる。凝灰岩は、低結晶質～結晶質。																									
5	細粒																								0	
	極粗粒砂																								0	
	粗粒砂	2		1	2												2	1	3						11	
	中粒砂	7		12	1								5	1	9										35	
	細粒砂	5			13	1									4										23	
	極細粒砂			1	2	2			1																6	
	粗粒シルト	1																							1	
	中粒シルト																								0	
	基質																									450
	孔隙																									5
備考	基質は淡褐色粘土鉱物、雲母鉱物、酸化鉄などで埋められる。安山岩は、新鮮でガラスが残っており、第四紀火山由来とみられる。																									

第9表 薄片観察結果(2)

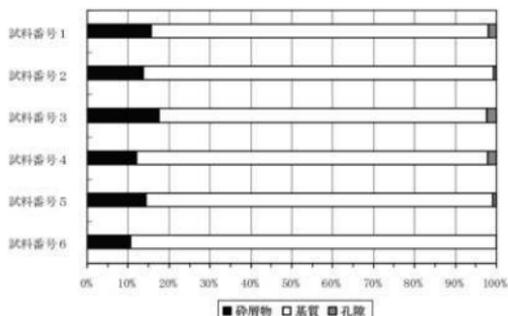
試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成														合計										
		石英	クリストバライト	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	不透明鉱物	セリサイト	頁岩	砂岩	凝灰岩	凝灰岩・デイサイト		火山岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	輝石岩	寄岩岩	珪化岩	その他	植物珪体	
6	細砂											1		1												2
	極粗粒砂														1											1
	粗粒砂	1													1			1				1				5
	中粒砂					1									1	3										5
	細粒砂	3			3		1					1			2	1						1	1			13
	極細粒砂	1	1	1																						3
	粗粒シルト	1																								1
中粒シルト																									0	
基質																									254	
孔隙																										
備考	基質は淡褐色粘土鉱物、セリサイト、酸化鉄などで埋められる。凝灰岩は結晶質。凝灰岩は低結晶質。角閃石には弱酸化しているものが認められる。																									



第 87 図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度



第 88 図 砂の粒径組成



第 89 図 碎屑物・基質・孔隙の割合

3. 結果

観察結果を第 9 表、第 87～89 図に示す。以下に鉱物・岩石組成、粒径組成、碎屑物・基質・孔隙の割合の順に述べる。

1) 鉱物・岩石組成

当社では、これまでに兵庫県下の遺跡から出土した土器の胎土分析を多量に行い、それらの結果について、特徴的に含まれる鉱物または岩石の種類によって胎土の特徴を分類し、それぞれに分類名を付してきた。

6 点の試料はいずれも岩石片の種類構成において、凝灰岩や流紋岩・デイサイトあるいは安山岩などの火山岩が比較的多く含まれる。このような特徴は、F 類に相当する。

2) 粒径組成

各試料の砂分全体の粒径組成をみると、モードを示す粒径は試料により異なる。ここでは、モードを示す粒径により、粗粒傾向の組成から細粒傾向の組成に向かって、順に 1 類から 4 類までの分類を設定した。各分類の内容を以下に示す。

1類：中粒砂をモードとするが、粗粒砂も同程度に多い。

2類：中粒砂をモードとする。

3類：細粒砂をモードとするが、中粒砂も同程度に多い。

4類：細粒砂をモードとする。

1類は試料番号1と3の2点、2類は試料番号5の1点、3類は試料番号2と4の2点、4類は試料番号6の1点である。

3) 砕屑物・基質・孔隙の割合

砕屑物・基質・孔隙の割合では、砕屑物の割合が10数%から10%台後半までの幅があるが、その中で各試料の値はばらつき、特に集中する値は見出せない。したがって、砕屑物の割合からは分類を設定することはできない。

4. 考察

土器の胎土に認められた鉱物・岩石組成は、土器の材料となった粘土や砂の採取地(おそらく生産地か生産地かなり近い場所と考えられる)における地質学的背景を反映している。今回の分析では、6点の試料がいずれも大きくはF類に分類されたことから、古墳群から出土した土器は、同様の地質学的背景を有する地域内で作られた可能性がある。その生産地域について、対田清水谷古墳群の立地する背後の地質から周辺域に広げてみることで検討してみたい。周辺地質については、上村ほか(1974)、猪木(1981)、日本の地質「近畿地方」編集委員会(1987)および日本地質学会編(2009)などを参照した。

対田清水谷古墳群の立地する中国山地北東部は、北但扇群と呼ばれる新第三紀中新世の堆積岩、凝灰岩類からなる地質により構成されている。さらに、山地内を流れる岸田川や久斗川などの谷沿いには局所的に白亜紀～古第三紀に貫入した山陰帯の花崗岩類も分布している。花崗岩類や堆積岩類の混在するF類という岩片組成は、このような対田清水谷古墳群周辺の地質学的背景とよく一致する。したがって、対田清水谷古墳群から出土した土器は、至近の久斗川や岸田川などの河川砂が材料とされた可能性があると考えられる。

なお、粒径組成においては、6点の試料間で違いが認められたが、器種との対応をみると、壺の試料2点(試料番号1、3)はいずれも粗粒傾向の強い1類であり、高坏(試料番号2)や壘(試料番号4、6)は細粒傾向の強い3類または4類である。また、器台(試料番号5)は両者の中間的な2類である。これらの結果は、器種によって、素地土の使い分けがされていた可能性のあることを示唆している。ただし、現時点では、その理由が、成形時の都合によるものか使用時の都合によるものかは明らかにできない。今後の資料の蓄積とその検討が必要であろう。

引用文献

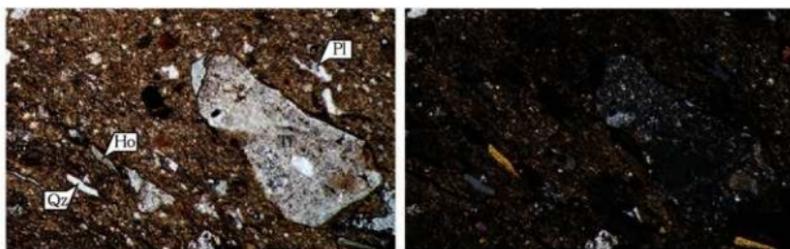
猪木幸男,1981,20万分の1地質図幅「姫路」.地質調査所.

上村不二雄・坂本 亨・山田直利・猪木幸男,1974,20万分の1地質図幅「鳥取」.地質調査所.

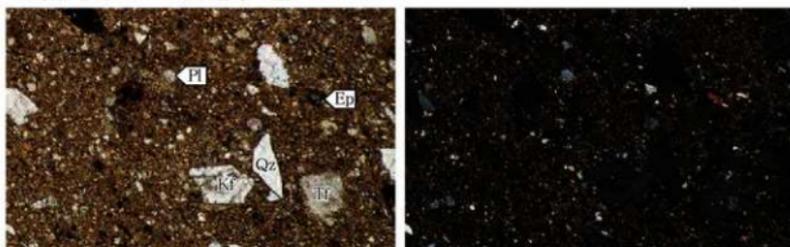
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.

日本地質学会編,2009,日本地方地質誌5 近畿地方.朝倉書店,453p.

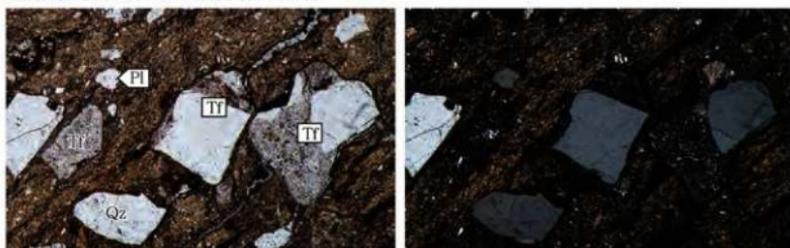
日本の地質「近畿地方」編集委員会,1987,日本の地質6 近畿地方.共立出版,297p.



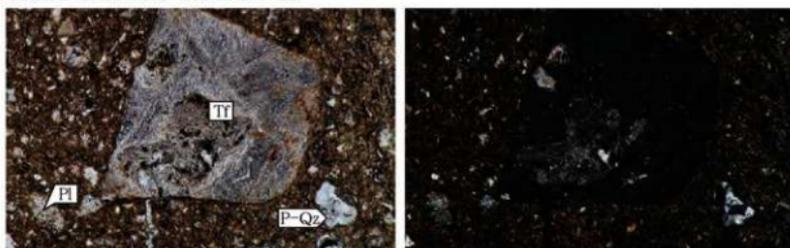
1. 試料番号1(2009174 報告番号9 壺)



2. 試料番号2(2013013 報告番号14 高坏)



3. 試料番号3(2013013 報告番号17 壺)

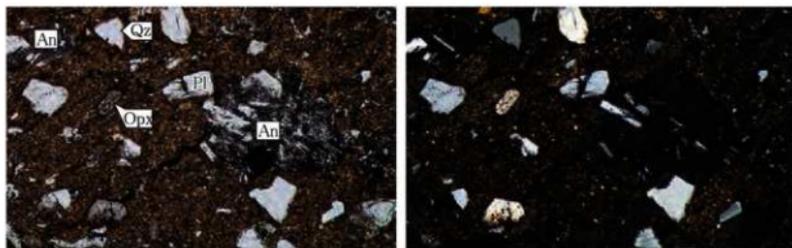


4. 試料番号4(2013013 報告番号35 甕)

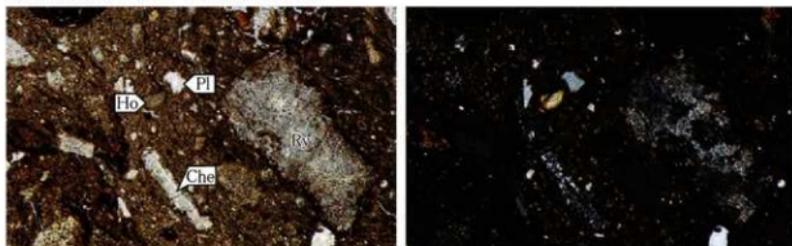
Qz: 石英, Kf: カリ長石, Pl: 斜長石, Ho: 角閃石, Ep: 緑レン石, Tf: 凝灰岩,
P-Qz: 多結晶石英.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm



5. 試料番号5(2013013 報告番号42 器台)



6. 試料番号6(2014006 報告番号23 鑿)

Qz:石英. Pl:斜長石. Opx:斜方輝石. Ho:角閃石. Che:チャート. Ry:流紋岩.

An:安山岩.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

第91図 胎土薄片(2)

第8章 まとめ

第1節 対田清水谷古墳群（墳墓群）について

1. 墳墓群及び古墳群について

墳丘平坦面について

対田清水谷墳墓群³¹・古墳群において検出した遺構は尾根稜線上に平坦面を確保するいわゆる「階段状の」墳墓群・古墳群で構成される。1号墳のみ円墳を志向した墳丘を持つとみられ、2～15号墳（墓）は木棺墓などの埋葬施設を設けるための平坦面を削り出し多くが溝で区画する台状墓（増田他1978など）、卓状墓（福島2003）と呼ばれる形態の墳墓や古墳である。このうち方形に近い墳丘平坦面を持つものが2・3・5・6・12・13号墓の6基、半月形ないしは三日月形に近い形状のものが8基認められる。

埋葬施設について

埋葬主体は、方形に近い墳丘平坦面では2号墓が単一埋葬であるほかはいずれも複数埋葬となる。半月形ないし三日月形状の墳丘平坦面では少なくとも7号墓と10号墳では複数埋葬となるが、単一埋葬が多いようである。複数埋葬となる場合では、埋葬主体が墳丘平坦面の中央付近を占有したり埋葬主体間に明確な墓壇規模の差を持つ状況は認められず、ほぼ同規模の複数墓壇による空間分有型の配置となる。例外的に中心埋葬として把握しうるのは5号墓第1主体部及び10号墳第1主体部の2例のみである³²。5号墓では先に墳丘平坦面北寄りの第4主体部墓壇が掘削された後に中央に第1主体部が設けられて先に埋葬され、第4主体部を切る状況となる。なお、5号墓第3主体のみ墳丘平坦面範囲外に存在する。

埋葬主体として確定しうる墓壇はいずれも木棺墓であり、28基を数える³³。他に土槨墓の可能性のあるものが1基、土器棺墓など墓となる可能性のある土坑が4基ある⁴¹。木棺墓のうち木棺痕跡から舟底状木棺と考えられるものが1例（3号墓第1主体部）、舟底状木棺ないしは割竹形木棺と考えられるものが1例（3号墓第2主体部）、H字形の組み合わせ木棺と考えられるものが2例（2号墓主体部・7号墓第3主体部）、その他は箱形木棺と考えられる方形の木棺痕跡範囲が認められている。

2. 出土土器について

土器の出土位置について

墓壇内で出土した土器には、器種や出土位置からそこに配置された意図や行為など背景にある事情を追究しようとされる。ここでは、墓壇内で棺を安置し遺体を納棺するまでの埋葬行為の前半段階と、棺蓋上に土を被せ埋め始めてから墓壇周囲の平坦面と同レベルまで埋め終えるまでの埋葬行為の後半段階に分けて、前者を墓壇内下半、後者を墓壇上部としてそれぞれから出土した土器を第92図及び第93図に示した。なお、後者には墓壇上の表土出土分のほか墓壇埋土層の木棺腐朽の際に落ち込んだとみられる層を含める。ちなみに本来棺蓋上に存在した土器は、棺蓋の痕跡が今回の調査成果で認められなかったため棺痕跡内に落ち込んだものとみなすが、棺上の埋め土の上半部と埋め終わった墓壇上に配置されたものについては一括し、旧表土内など詳細な状況が明らかなのは個別に取り上げることとする。

まず、墓壇内下半で土器を検出した埋葬主体は8基ですべて木棺墓である。古墳時代前期までの木棺墓が24基のうち、墓壇内破砕土器配置を伴う埋葬主体は33.3%となる。土器の種類別内訳は、壺1点、甕4点、高坏2点、器種不明3点であり、甕と高坏が目立つ。5号墓第1主体部の甕(23)が1/2強、7号墓第3主体部の甕(35)がほぼ1/2残存するほかは14号墓主体部の甕(46)は口縁が全周するものの体部はわずかで、3号墓第1主体部の高坏(14)は坏部の1/4、他は接合するかしないか程度の小片である。

墓壇上もしくは落ち込み土から土器の出土した埋葬主体は9基で、古墳時代前期までの木棺墓の37.5%である。土器の種類別点数は甕6点、高坏6点、器台が8点でそのうち7点が鼓形器台である。鼓形器台7点中5点は9号墓主体部墓壇内の旧表土落ち込みからの出土であり、他には3号墓第1・2主体部からそれぞれ1点ずつの出土でさほど目立たずむしろ限定的に伴うものであるかもしれない。なお、3号墓において甕(6)が第1主体部、甕(5・7)が第2主体部付近の表土から出土していることを考慮すれば墓壇上において甕の存在が突出し、高坏も次いで多く、壺が認められないことが特徴として挙げられよう。

但馬及び丹後を含めた北近畿地域の墓壇上と墓壇内に配置された土器について分析を進めている石井智大氏によれば、墓壇上では後期前半には高坏や器台が多く、吉備や播磨など瀬戸内側で高坏とともに多く認められる甕が当該地域にも影響して加わり、後期後半から庄内式併行期には壺を伴うことや土器量が増加し中心的な埋葬主体に突出する傾向があるとのことである(石井2003)。墓壇内破砕土器配置では肥後弘幸氏により甕及び水差しなどの煮沸器種が中心となることが挙げられており(肥後1994)、石井氏は甕に煮沸痕跡とみられる煤の付着に着目し葬送儀礼との関わりを想定している(石井2003)。

対田清水谷墳墓群において墓壇内では甕の比率が多く墓壇上では甕や高坏が多いことは北近畿地域での後期後葉から庄内式併行期にかけての様相によく合致する。しかしながら墓壇上で庄内式併行期にかけて増加するという壺が認められず、時期を通じて一定量みられる鼓形器台以外の器台が目立たない。また、墓壇内破砕土器配置において8号墓主体部棺底付近出土壺口縁(37)を除いては、甕を中心に北近畿地域の影響の下に製作されたと考えられる土器が多数を占める³¹。このことは墓壇内破砕土器配置の執り行われる地理的範囲の中心となる北近畿地方から、庄内式併行期後半段階に至っても葬送儀礼の情報が但馬西端部に発信され(あるいは但馬西端部で継承され)続けていることがうかがえる。墓壇上に配置される土器には外来系の要素を伴うものが多く認められることはすでに石井氏の指摘するところであるが(石井2003)、当墳墓群においても鼓形器台が3号墓や9号墓に特徴的に認められることや高坏や器台をはじめとする北近畿地域の影響の下に製作されたと考えられる土器が多数存在する。とりわけ因幡をはじめとする山陰地域のみ影響が看取される9号墓主体部の墓壇上の土器群のあり方と、山陰地域と北近畿地域の影響がともに認められる3号墓第1・2主体部の墓壇上の土器群のあり方は好対照をなす。

各墳墓及び古墳の時期について

各墓及び各墳の主な出土土器について概観しよう。なお、1号墳及び13号墓からの出土遺物はない。

2号墓は高坏の小片ばかりで時期比定には困難を伴うが、口縁の立ち上がる坏部(3)を碗状の高坏とした場合京都府京丹後市金谷1号墓例に近く、脚柱部のやや短めな脚部(1)とやや内湾気味に端部を肥厚させておさめる脚裾部(2)も京都府丹波野町西谷2号墓例に近く、高野編年西谷2式古段階か。

3号墓第2主体部の鼓形器台(16)は筒部がやや縮まり、後述する9号墓の新しい様相に近い。第1主体部の墓壇内と墓壇上の高坏(12・14)は口縁が大きく開き浅い坏部となり、京都府京丹後市大田4号墳下層土壇1から同市赤坂今井墳丘墓第1主体部の段階(西谷2式新段階)であろう。墳丘平坦面表土の甕口縁(5・6)は口縁上半を外顔させ下端付近をナデにより突出させ谷口編年因幡VI-2期頃の様相を呈

する。SK301の体部上半に穿孔される壺(17)と付近の表土出土の壺(9)はセットで土器棺の蓋・身となる可能性がある。いずれも頭部の屈曲が明瞭で細い突帯を持ちやや後出する要素か。

4号墳では調査区外で表土中から採集した須恵器甕(19)・提瓶(18)がMT15型式段階か。土師器高坏脚部(20)も朝来市柿坪遺跡においてMT15型式併行の池田編年柿坪13期に類例が認められる。

5号墓第1主体部の甕(23)や第3主体部の高坏(26)はそれぞれ短い口縁端部に擬凹線が施されず、第4主体部には幅広い口縁端部が筒状となる壺(27)が認められる。高野編年浅後谷南1～3式段階か。

6号墓墳丘平坦面表土の竹管状スタンプを施した鼓形器台(30)は鳥取県東部に見られ、筒部がしまらず松井編年東伯耆IX期か。第3主体部の高坏脚部部の肥厚する脚端部(31)は京都府野田川町西谷1号墓(西谷1式)などに類例が見られる。SK601出土の甕口縁(32)は内面中程に稜をもって外傾し端部先端が幅み出し気味におさめられるも全体的に分厚い。谷口編年因幡V-5期からVI-1期の様相か。

7号墓では、第3主体部墓椁内の甕(35)の口縁端部が薄く斜め上方へと拡張され擬凹線が浅く退化しており、底部接地面がわずかで自立できない特徴から少なくとも京都府峰山町金谷1号墓第12主体部の段階以降の様相(西谷2式新段階から西谷3式)を呈する。墳丘から出土した甕口縁(34)は外反しつつ外傾する口縁に櫛描で擬凹線を施し、谷口編年因幡V-5期からVI-1期とみられる。

8号墓主体部木棺底付近の甕口縁(37)は外反しつつ外傾して端部は先端を尖らせつつ細く延びるが擬凹線ははまだ健在で因幡V-5期からVI-1期。なお、墳丘平坦面表土から出土した高坏坏部(36)は脚部との接合部に軸の穿孔部があり、古墳時代中期前半以降の土師器が混入したものと考えられる。

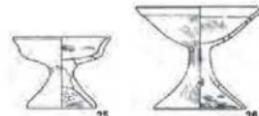
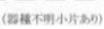
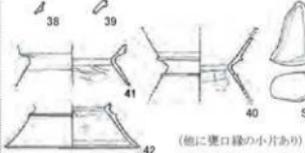
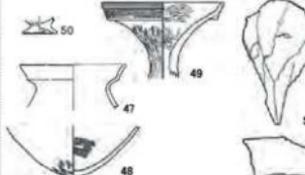
9号墓主体部出土の筒部のやや長めな鼓形器台(40・41)や甕口縁は擬凹線が消えナデとなる。筒部屈曲部内面に幅のやや広めの面を持つ鼓形器台は中川編年土師器I a期、甕口縁は谷口編年因幡VI-1期からVI-2期の様相を呈し、鼓形器台(42)は筒部がやや短く台部も低めで後出する(土師器I b期)か。

14号墓の甕(46)の口縁は7号墓の甕(35)ほど外傾して開かず、胴も振らない。浅い碗状の高坏(45)も丸みをおびた坏部に破断面から口縁が立ち上がるとみられ、西谷2式古段階までさかのぼるか。

15号墓では甕の底部(48)が尖り気味になるが、斜め上に開く甕口縁(47)がさほど薄くならないこと

墳墓	墓椁内下半	墓椁上部	墳丘平坦面・斜面・土坑など	
2号墓	(器種不明の小片あり)	(他に甕の破片あり)	1 2	9
3号墓	第1主体部	(他に標石S1あり)	5 6	SK301 17
	第2主体部		7 8	
	14	12 13		
		15 16		

第92図 対田清水谷古墳群 遺構別出土遺物(1)

墳墓		墓城内下半	墓壇上部	墳丘平坦面・斜面など
5号墓	第1主体部		第3主体部 	12号墓 
	第4	 (器種不明小片あり)		
7号墓	第3主体部		6号墓 第3主体部 	SK001 
	第4	 (器種不明小片あり)	第1  (甕口縁の破片あり)	
8号墓	主体部			
9号墓	主体部		 (他に甕口縁の小片あり)	 (甕体部片あり)
10号墳	主体部			
14号墓	主体部			
15号墓	主体部			 

遺物実測図：S-1/8

第93図 対田清水谷古墳群 遺構別出土遺物(2)

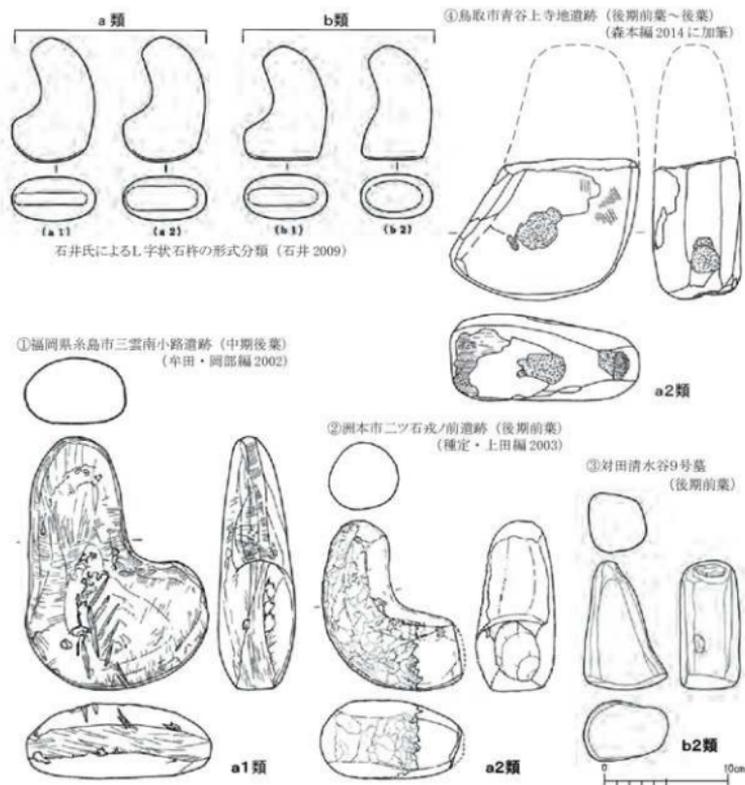
や口縁端面に波状文をもつ器台(49)の口縁の外傾度や受け部の立ち上がりか緩いことなどからやや古相の様相も看取され、高野編年浅後谷南1式～2式とみられる。

以上から、6～8・14号墓が概ね弥生時代後期後葉で6号墓にやや古相を呈する要素が伴う一方で7号墓は第3主体部ははじめ切り合いからすべての埋葬主体が庄内式併行期初頭に後出する可能性があり、2号墓は庄内式併行期初頭、3号墓・9号墓は庄内式併行期前半、5号墓・15号墓は庄内式併行期後半、10号墳は古墳時代中期前半、長頸蓋を持つ11号墳は古墳時代中期後半、4号墳は古墳時代後期前半と考えられる。

3. L字状石柁と標石について

L字状石柁について

9号墓主体部の旧表土落ち込みからL字状石柁(S3)が出土している(第94図③)。作業面(磨り面)のカーブ度(カーブする側面形の長さ÷側面形の幅)は7.26で、石井智大の分類(石井2009)によれば作業面の側面形が平坦なb2類に該当する⁹⁾。また石材の加工度ではハンドル部にほんのわずかに加工し



第94図 L字状石柁の形式分類と各時期の例

た可能性があるのみで加工度（微）となる。b2類のものには加工度の低いものが多く、b類全般に精美なL字形に加工しようという意識が低いものと思われると石井氏は認識する（石井2009）。

S3の作業面は前半部では前後運動に伴う長軸方向に近い細かい擦痕が、後半部では不整方向の擦痕や摩滅した敲打痕が認められ、ハンドル部との境界の稜線は後半部で曖昧になっている。石井氏は平坦面に認められる擦痕のうち作業面両端部付近の明瞭なものについて、作業面として機能する状態にするための前処理段階での整形によるものとしており（石井2009）、S3作業面前半部のはこれに該当すると思われる⁷⁾。後半部の痕跡については前半部に認められた研磨面を形成するための滑らかな研ぎは認められず、微細なものを押さえつづいたような細かい敲打もしくは押圧による摩擦や不整方向の擦痕は円運動での使用の結果生じた痕跡と考えたい⁸⁾。

ラマン分光分析によりS3の作業面には水銀朱が付着していることが明らかになった（第7章第1節）。S3は岸田川流域にも産出する流紋岩からデイスイトにかけての石材を用い、比重は2.551dである。同様に水銀朱の付着が確認された洲本市二ツ石戎ノ前遺跡のL字状石杵の比重が2.29dであり、微粉化する磨り石としての比重の点では選択石材は妥当なようである⁹⁾。これまで北近畿地域ではL字状石杵は出土しておらず、山陰地域では鳥取市青谷上寺地遺跡で1例が知られるのみである（第9図④・森本編2014）。青谷上寺地遺跡の中心域と周辺域を画するという弥生時代後期前葉から後葉にかけての溝から出土しており、カーブ度4.94でa2類に分類される。ハンドル部の上部を欠損するが、幅も13.1cmと大ぶりでS3に比べて規模やカーブ度の点で古い特徴を示す。

墓壇上に立っていたとみられる標石類について

墓壇上に標石とみられる石材を配置する状況は北陸地域から山陰地域にかけて認められ、砥石や石杵、敲打具、自然礪を用いている（大谷1994・1995、石井2010）。大谷晃二氏は1～2個の礪ないし石器を墓壇上に配置する主体部をC類と分類し、鳥根県安来市安養寺墳墓群例をモデルに石杵などの石器とともに祭祀に用いたとする甕・高坏・鼓形器台など複数器種の土器を伴う状況をイメージとして思い描いている（第96図⑦・大谷1995）。とりわけ鼓形器台や甕形土器を出雲地域通有のセットとして、瀬戸内地域における多数の礪を供献土器とともに積み上げたりかき集めたりする祭祀と対比しうる状況での出雲地域で共通した祭祀のあり方を想定している（大谷1994・1995）。

石井氏は墓壇上面に認められる石材のうち、石器と加工痕跡のない自然礪とに分けて考える必要性を指摘している（石井2010）。すなわち、墓壇上における石器の配置は山陰地域で後期後葉に始まり、磨り石・敲き石が多いことから本来配置される器種の基本形とみなし、石杵や砥石がその派生形態であったと考えるとしている。また、これらの状況が弥生時代終末期から古墳時代前期前半にかけて増加すること、地域において有力な墳墓及び中心的な埋葬施設に認められる傾向があることを挙げている。

これらの要素を踏まえて、対田清水谷墳墓群・古墳群における標石として礪や石器が配置された可能性のあるものを第10表に示した。この中で加工痕のない自然礪は2号墓主体部と3号墓第1主体部、15号墓主体部のものが該当し、8号墓と10号墳第1主体部には砥石が、9号墓主体部では先述したとおりL字状石杵が伴っている。なお、砥石が墓壇上で認められた例として兵庫県内では篠山市内場山墳丘墓SX10において水銀朱の付着した出土例がある（第95図④）。中川渉氏が報文中において、墓壇上に配置された土器に山陰から北陸にかけての系譜を引くものが含まれることや当該地域での「方形台状墓」墓制の共通性に触れた上で「被葬者胸部の鉛直上に赤色顔料の付着した石器を置く事例」として四隅突出型墳丘墓の西谷3号墓や福井市小羽山30号墓例との関わりを既に指摘している点はまさに卓見である（中川編1993）。

3号墓第1主体部の角礫(S1)は柱状のものとしては類をみない長さである(第95図①)。山陰地域のこれまでの出土例で管見に触れた最大の標石は長さ34cmの千年比丘1号墳中央主体の砥石であり、通常は長さ10~20cmのものが多いようである(第96図⑧)。なお、S1のような柱状の流紋岩石材は3~4km南西の新温泉町新市で採取可能である⁹⁰⁾。S1は木棺腐朽により落ち込みながらも立った状態で確認され周辺に掘り方は認められず⁹¹⁾、下端が舟底状木棺痕跡の直上付近に接している。石材の比較的風化の進む上端から45cm程の範囲が本来地表に露出していた可能性があり、木棺の腐朽により棺底レベル付近まで落ち込んだものと考えられる。墓壇上では鼓形器台の破片(13)と北近畿系有段口縁擬回線文高杯の破片(12)が、墓壇内破砕土器配置にはやはり北近畿系有段口縁擬回線文高杯の破片(14)が適用されている。

さて、9号墓で墓壇埋土上部に落ち込んだ旧表土中に含まれていたL字状石杵(S3)には鼓形器台5個体分(38~42)、甕口縁を伴っていた。墓壇上で標石とともに鼓形器台をはじめとする器台や甕などが伴う状況は、出雲地域を中心に因幡地域から石見地域にかけて見受けられる(第96図)。なお、墓壇上で出土する土器群が完形で配置された場合と、細かい破片が散らばり接合してもまともな形にならない分量で予め破砕された場合とが認められる(大谷1994・重松2007)。ただし、出雲地域で墓壇上に立てられたとみられるのは棒状の石杵や赤色顔料のついた円礫などであり、L字状石杵は用いられていない。

ところで山陰地域でも青谷上寺地遺跡例がそうであるように、ほとんどの場合が弥生時代の所産であるL字状石杵は基本的に集落域から出土する⁹²⁾。ところが、対田清水谷9号墓では墓壇に伴った状況で出土した。この現象をどのように考えたらよいであろうか。これまで山陰地域で赤色顔料の付着した杵状石器や礫が埋葬施設に伴って出土した例では、棺内に赤色顔料を施すなどの葬送儀礼に使用した後にそのまま墓壇上に配置されたと考えられている(船井・杉谷他1984、渡辺1993)。

石井氏は小羽山30号墓の杵形石器について、北陸地域で赤色顔料の微粉化に特化した杵状石器や両刃石斧の転用例が認められないことから、両刃石斧として使われ続けた石器を葬送儀礼の執行に際して石斧端部に作業面を製作したものとみている(石井2010)。本例について考えると、L字状石杵に関しては山陰地域で1例のみ集落域で出土しているほか北陸地方でも近年数例のみ出土例が報告されているが、少なくとも弥生時代後期以降に日本海側で普遍的に存在する石器ではないようである。では、葬送儀礼で使用するために製作されたものであるのか。

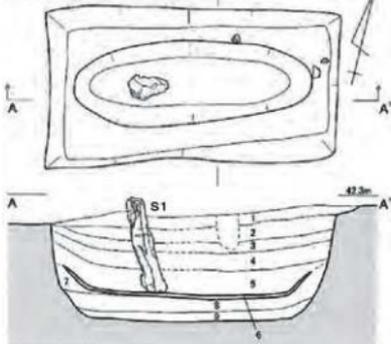
S3の作業面の観察では前半部が面の形成に伴う痕跡を留めているのに対し、後半部は使用により著しく摩耗し側面形は前半部から不自然に反っている。後半部は本来、前半部からのカーブがそのまま続く範囲までさらに4~5mm程の厚さがあつた可能性が考えられる。なお、正面側の平面形を見るとハンドル部上端部は厚みを若干減じさせながらやがて丸くおさまるのに対し、下端は作業面ハンドル付近に至っても厚みは一向に減らず石材本来の形状が作業面付近で丸くおさまっていたとは到底考えられない。作業面をはじめ全体形状の整形時に下端部をある程度は改変している可能性は十分に考えられる。であるにせよ、ハンドル部を握ると手のひらにちょうどおさまりそうでいて若干手に余り、小指の付け根が臼にあたって擦れてしまいそうでもある。もちろん石杵を扱う人の手の大きさにもよるが、石杵のライフサイクルにおいてその役割を終える時期にさしかかっていた可能性も考えられる。

実際に微粉化が十分に可能という比重を持つ石材であること、そして作業面から肉眼では全く観察されないほど微量の水銀朱の付着がラマン分光分析によって判明した点も含めて考慮すると、集落における祭祀の場で用いられ続けあるいは遂にその機能を失った時点において、例えばその祭祀を執行した者の埋葬される葬送儀礼の場に持ち込まれた状況も一つの可能性として提案しておきたい。

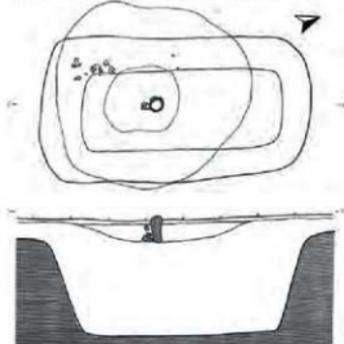
第10表 対田清水谷墳墓群・古墳群における標石の可能性のある出土石材

墳墓	埋葬主体	検出(出土)箇所など	出土層位	器種・形状	規模(長さ)	石材	遺物
2号墓	主体部	木棺痕跡西小口付近	2層中(4層上面)	扁平な菱角鏡	27.0cm	不明	—
3号墓	第1主体部	墓壇中央付近や西寄り	落ち込み土	柱状の角鏡	80.4cm	流紋岩	S1
8号墓	—	墳丘斜面(本来墳丘平坦面上か)	表土中	砥石	8.5cm	珪質粘板岩	S2
9号墓	主体部	墓壇中央付近や南西寄り	落ち込み土	L字状石片	10.6cm	流紋岩	S3
10号墳	第1主体部	木棺痕跡南西コーナー付近	表土中	砥石	13.2cm	流紋岩	S4
15号墓	主体部	墓壇内	落ち込み土	尖った菱角鏡	20.6cm	花崗岩質	S5

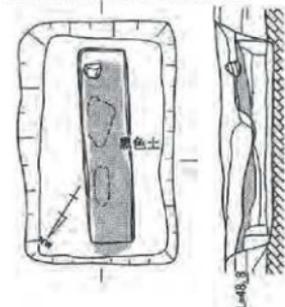
①対田清水谷3号墓第1主体部



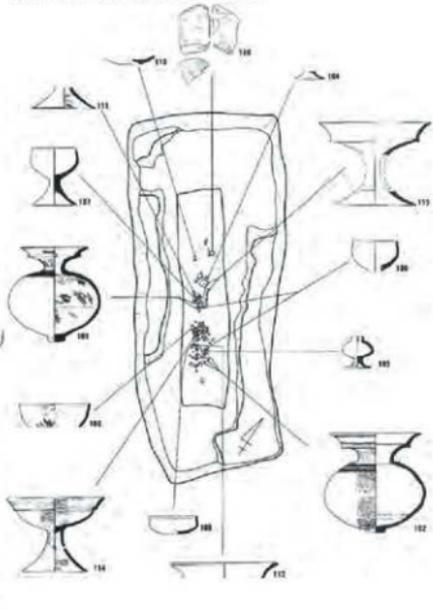
②福井市原山37号丘1号土壇(沼・橋本編1971)



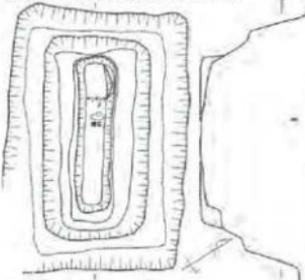
③京都府京丹後市奈具3号墓(河野1995)



④舞山市内場山墳墓SX-10(中川編1993)

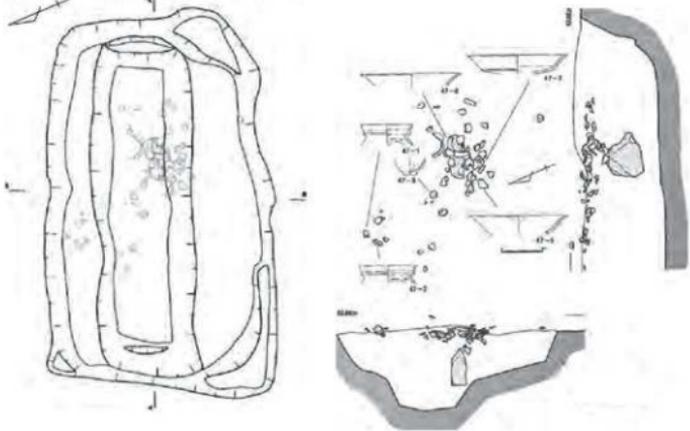


⑤豊岡市出持2号墓第2主体(松井2004)



第95図 墓壇内に標石を伴う埋葬主体の例(北陸・北近畿地域)

⑥島根県安来市島田黒谷Ⅲ遺跡SK01(池淵1994)



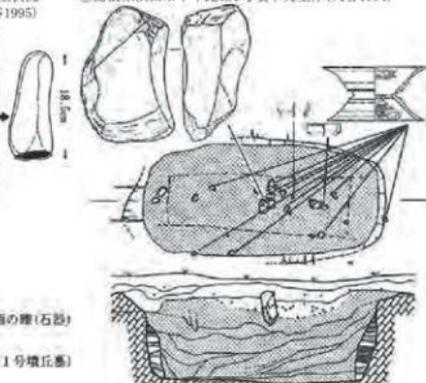
⑦島根県安来市安養寺1号墓第1主体土器・石件出土状況
(勝部1985・大谷1995)



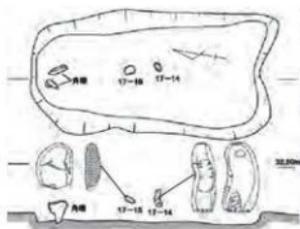
C類 一ないし二箇の埴(石器)
を置く
(モザル・安養寺1号墳圧墓)

大谷氏によるC類(大谷1995)

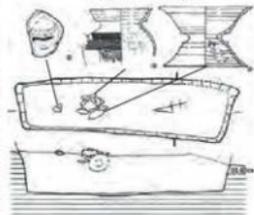
⑧島根県浜田市千年比丘1号墳中央主体(大谷1994)



⑨島根県松江市布志名大谷里遺跡 南区SK02(名越・綿田2001に加筆)



⑩島根県安来市長曾6号土墳墓
(永見1981に加筆)



第96図 墓境内に標石を伴う埋葬主体の例(山陰地域)

4. 対田清水谷墳墓群の性格について

3号墓では第1主体部で舟底状木棺、第2主体部でも舟底状木棺を埋葬施設とする可能性があり、前者においては墓壇上に柱状の標石のほか北近畿系高坏と鼓形器台、墓壇内破砕土器配置に北近畿系高坏、後者においては墓壇上に鼓形器台と山陰系の壘口縁片が認められた。また、9号墓主体部には墓壇上にL字状石柩と鼓形器台や山陰系壘口縁などが配置されたと考えられる。L字状石柩は北近畿地域及び山陰地域での出土は青谷上寺地遺跡跡に次いで2例目であり、瀬戸内側の集落遺跡に出土例が多く知られている。

山陰地域では、四隅突出型墳丘墓など地域の核となるクラスの埋葬施設で石柩などの標石を墓壇上に立てる状況が知られるが、決して通常の葬送儀礼ではないようである。岸田川水系の弥生時代後期から古墳時代初期にかけての墳墓や古墳の調査例はごく少数ながら、対田清水谷3号墓や9号墓は墳丘平面の形状や規模、埋葬主体の規模や空間占有状況から判断して地域の墳墓間におけるヒエラルキーで傑出した要素は見出しがたい。しかしながら石井氏の指摘するように弥生時代後期後葉から終末期にかけて墓壇上土器配置が墳墓において優位性を示す指標になるならば(石井2003)、標石をもつ3号墓第1主体部や9号墓主体部、15号墓主体部の墓壇上に配置された土器について山陰・北近畿の複数地域の影響や出土量の点から本墳墓群の中で相対的に優位な位置にあるのかもしれない。

このように複数の埋葬施設で日本海側の東西の隣接地域をはじめ瀬戸内側の地域とも交流をうかがわせる要素が認められ、岸田川流域において対外的交流を担った有力者が埋葬された可能性が看取される。

註

- 1) 筆者は著墓古墳の出現を古墳時代の開始の画期とする(福永2001)。ここでは前方後円墳成立期より前の埋葬施設を有する一定の空間を「墓」と呼称し、成立期以降の埋葬施設を伴う墳丘や墳丘平面について「墳」と呼び分ける。
- 2) なお、7号墓第3主体部は墳丘平面の中心的な位置にはないものの両隣の埋葬主体に切れ残り同一墳丘平面上の5基の埋葬主体のうちで最初に設けられ、後述するように多数の破砕片により墓壇内破砕土器配置が行われている。
- 3) ここで埋葬施設としての構造が不明な13号墓第2主体部も木棺墓の可能性もあるものとしてひとまずまとめておく。
- 4) 土器棺墓など埋葬主体の可能性が想定されるものにSK301・601・602・801がある。SK301では埋土から出土した壺(17)と確認調査の際に付近の表土中から出土した蓋(9)が棺身となる可能性も考えられる。SK601・602は6号墳において第1主体部及び第2主体部と各々の中心を基準とする点対称となる空間分有型配置を、SK801は8号墳において主体部と空間を分有しているともみることでもできるだろう。
- 5) すでに因幡では壘口縁などに施される擬凹線が消滅してナズなどの調整に変わっている段階である。
- 6) 作業面の形態からb2類とc類の両者の特徴を併せ持つ中間的なものと考えられるが、c型の側面形がL字形を指向することや平面及び側面いずれもカーブを描く特徴とは合致していない。
- 7) 石井氏はカーブ度の著しい作業面(a)において両端に残る擦痕に関して整形時のものとしているが、作業面(b)であるS3においても前半部のカーブ度と擦痕については同様の状況が考えられる。
- 8) 石井氏はb2類においてたつ市清水遺跡例でS3同様に側面形が一方へカーブするが全体的にカーブ方向と同方向の擦痕が認められ使用による痕跡と考えているが、S3後半部の不整方向の細かい擦痕についてはむしろ石井氏がc類において「円を描くような運動によって使用された痕跡」に近いと思われる。
- 9) 野村美術館桐山秀徳氏のご教示による。
- 10) 新温泉町山陰海岸ジオパーク館谷本勇氏のご教示による。氏が実際に採集された柱状節理の石材も見せて頂いた。
- 11) 島根県金城町千年比丘1号墳の報文中において大谷氏も墓壇中央付近の木棺腐朽により陥没・流入したと考えられる土層において直立した砥石について、流入土ゆえに掘り方は認められなかったのか墓壇埋戻し中に砥石を埋め立てたのかはわからなかったとしている。
- 12) 例外として伊都国最古の王墓とされる福岡県糸島市三雲南小路墳丘墓において周溝コーナー部分より出土している(第94図①、平田・岡部編2002)。なお、顕微鏡観察と蛍光X線分析により赤色顔料の付着は認められていない。

第2節 岸田川・久斗川流域の経塚概観

対田清水谷古墳群のSX501、タルガ山遺跡SX-1を経塚として報告した。また、その構造に類似した堅穴の土坑の一方に偏って石を積む遺構を対田清水谷古墳群のSX901として報告し、小坂谷1号墳墓竪上にも後世の集石が見られた。

1. 小横穴を有する堅穴土坑について

本遺跡群が所在する但馬地域や東隣の丹波・丹後地域において堅穴状に土坑を掘った後、その一方に小横穴を設ける遺構が丘陵・尾根上で見つかることがある。横穴の上部を失ったものや元々横穴を掘らないもの、堅穴が不明瞭なものもあるが、石組や閉塞石が明らかに堅穴土坑の一方に偏っており、横方向を意識した閉塞部前面に空間を有するものである。類例は管見に触れたものだけでも本例を含めて22遺跡53例ある。これらの多くは横穴内や堅穴内から出土する遺物から平安時代末から中世にかけての時期が想定される。この時期の北近畿特有の遺構といえる。小横穴を「埋納坑」、堅穴土坑を「主土坑」と呼ぶ場合もある。

堅穴土坑の壁際や横穴内には板石を組んだ横口式石室を設けるものから、素掘りのままのものまである。石室の構造も奥壁や底石を含めた5方向に板石をしっかりと組み、板石で閉塞するものもあるが、奥壁がないものは40例近くもあり2/3を占める。また、天井石のないものも34例と半数を超えている。底石のないものも半数近くあり、石室構造を全くもたない素掘りのものも14例ある。横穴の入り口は少し大型の板石で塞ぐことが多く、さらに隙間に石を置いて二重三重と丁寧に閉塞するものがあるが、礫を積んで閉塞した例も認められる。

横穴の中からは金属製や竹製の経筒が納められていた例が12例あることから、この種の遺構の一部が埋経のための経塚として構築されたことは明らかである。また、土製円筒が出土した例が26例ある。内4例が金属製経筒と共存しており、経筒の外容器として用いられた可能性も残す。複数の経筒が出土する例もあることから、土製円筒も同じく経筒として用いられた可能性が高いものと考えられる。但しこれを蔵骨器と考える意見も存在する。

但馬では横穴を有する土坑は11遺跡16例見られ、内8例から銅製経筒や土製円筒が出土している。その反面中世墓の可能性を示されたものも5例ある。その5例には越前埴杵や須恵器甕が横穴内に納められたものがあるが、木や竹などの有機質経筒や紙本製経筒も見つかっていないと同時に、蔵骨器として骨片などが入っていたという報告は見られない。これらの中世墓とされる遺構のほとんどが横穴に石室構造を伴わないものである。

対田清水谷経塚であるSX501では横穴を認識することはできなかったが、土坑の一方に偏った位置に奥壁を除く四方を板石で組んだ石室が造られ、板石を重ねて閉塞したものである。

タルガ山遺跡SX-1も横穴内に板石を組んでおり、明瞭な横口式石室ではないが空間を確保するための石組を構築している。

対田清水谷古墳群SX901は礫の入った土坑の一方が深くなり、下層まで礫が検出されている。石室構造は認められないが、堅穴の偏った部分が深くなり、礫によって閉塞されていたように見える。

2. 経塚の表装施設

経を埋納した後、塚を築き石塔を建てたことは「玉葉」などにも記される作法であるが、近世の一字一石経の石塔を除いては、経塚上に建てられた石塔が調査された例は県内ではない。多くは木製の塔であったか、後世に移動したものであろう。

塚を意識した例には、多くの経塚が古墳の墳丘を利用してその上に築いていることから知られるが、発掘調査では経典を埋納する土坑上に塚を築き上げた例はあまりなく、旧地表面に礫が集中する集石が認められることから表装施設が存在した可能性を知ることができる。その多くは下部土坑内から集石が続き、朝来市一乗寺経塚のように複数の経塚の表面を覆うように集石が配されている。

兵庫県の経塚が初めて正式な発掘調査で検出されたのは、豊岡市田多地経塚においてのことである。それは土取の崖面に小横口式石室と経筒が現れたことがきっかけであったが、2・3号経塚は表土掘削後にいきなり円形の竅穴土坑が検出されている。その後経塚の発掘調査の類例は多く見られるようになったが、古墳などの調査の際に検出されたものがほとんどであり、今回の対田清水谷経塚や一乗寺経塚のように発掘調査前に集石が確認され、その存在を推定できることは少ない。

対田清水谷経塚のような単独の経塚の地表面に集石が盛り上げられた例はあまりなく、例えば田多地経塚では地表面には全く表装施設は検知できず、花崗岩岩盤を掘り込んだ円形の土坑がいきなり検出された。複数の経塚が存在する場合、それらの中央に表装施設を設けたことも考えられる。

3. 遺物の出土状況

横穴を有する竅穴土坑では、横穴内からは経筒や土製円筒、陶磁器の壺・甕以外にはあまり遺物は出土しない。銅鏡は4例、土師器皿は3例、青白磁や鉄織が出土した例が1例ずつある。竅穴部からは銅鏡・銭貨・鉄刀類・鉄織・土師器・陶磁器・玉類・楡扇・砥石などが出土している。土師器皿は19例、銭貨は14例、鉄製武器類は13例、銅鏡は9例を数える。

対田清水谷経塚の石室内からは銅鏡・土師皿・円礫が出土し、閉塞部下から銭貨が出土した。

銅鏡

対田清水谷経塚では横口式石室内から銅鏡が出土しており、閉塞部に向かって鏡面を向けて立った状態で出土している。石室底石から浮いた状態での出土は、当初から石室内を土で埋めていたか、何か有機質のものに支えられて埋納されていたことを窺わせる。有機質経筒上に置かれていたものが腐朽と共に滑り落ちた可能性がある。

鏡面を閉塞方向へ向けることは、さらに奥にあるものを守る僻邪の力を求めたものであろう。松村3号墳上経塚では、石室内の奥壁に経筒を置き、その三方に銅鏡を立てるものである。さらにもう1点銅鏡を閉塞部に配している。

土師器皿

土師器小皿は石室内に納めてあり、灯明皿として用いられた痕跡は見られなかった。灯明を捧げる仏教儀式である供養八燈に用いられたとするよりも、十種供養の華や香を乗せたものであろうか。

円礫

地鎮の際に東密の作法では五色玉或いは五九石を使用することから、発掘調査で地鎮に伴う遺構から円

礎が出土することは多い。対田清水谷経塚から出土した円礎は2点であり、比較的大きなものである。愛媛県堂ヶ谷経塚では石室内から久安六(1150)年銘金銅製経筒と3～6字の墨書石経が出土している。同様の経石の可能性を考えたが、墨書は確認できず、ペンガラが付着していた可能性が想定されたに過ぎない。円礎の出土の例は山形県別所山経塚から保延六(1140)年銘陽鈔銅製経筒とともに卵形石が出土している。

銭貨

対田清水谷経塚では横口式石室閉塞石下から北宋銭が出土している。同様の出土状況を示すものに京丹後市の豊谷1号土坑がある。土製円筒と蓋を納めた石室の閉塞部から銅銭が出土している。但馬の横穴を有する土坑では銭貨の出土例は見当たらないが、丹波・丹後では12例ある。横穴内から出土する例は見られず、ほとんどが横穴前面の堅穴土坑内からの出土である。最も多く出土した例では京丹後市の佐坂経塚SX01の23点があり、こよりで綴じた緋銭を切ってばらまいたような状況で出土している。また、福知山市高田山経塚群の経塚1では土坑底から北宋銭9枚が出土しているが、経塚2では土坑を充填した礎の最上層から銭貨1枚が検出されている。

朝来市一乗寺2号経塚では土坑縁辺部の比較的浅いところから元豊通宝が出土している。同3号経塚も堅穴系の土坑内に須恵器甕が納められており、甕の流入土から天聖元宝と元豊通宝が出土している。また、加西市江ノ川1号経塚では外容器周囲の石室礎上から銭貨1点が出土している。堅穴系の石室を持つ経塚では礎や土によって土坑が埋め戻される際に撒かれたような状況で出土している。

石室を閉鎖する直前や作業の途中、或いは堅穴を埋め戻す直前や作業の途中に銭を撒くような行為がおこなわれたらしい。

4. 対田清水谷経塚の復元

隅丸方形の土坑を掘削し、その北西部に横穴を穿って内部の上下左右に板石を組んで横口式石室を構築する。奥壁は掘削した壁面をそのまま利用している。但し土坑を掘削した位置が墳墓の墓域内であったため、横穴は崩落したものあるいは当初から堅穴内の北西端部に石室を構築したものである。

石室内に書写した紙本経巻を納めた有機質製の経筒を置き、石室との隙間に円礎を入れ、横口式石室北寄りに土師器小皿を置く。おそらく小皿には有機質のもの、例えば香や穀物などが供えてあったのであろう。それは納経の作法である十種供養に用いられたものと思われる。銅鏡も経筒と天井石や閉塞石の隙間に鏡面を外側に向けて置かれている。鏡は經典を守る辟邪のために配されたものであろう。

經典埋納が完了し、横口部を閉鎖する直前に銭貨を撒き、閉塞石を立て掛ける。閉塞石の左右と上部の隙間を石材で間詰めし、さらに板石をもう1枚立て掛けて嚴重に閉塞する。この2枚目の閉塞石を置く前にも銭を撒く。この後、埋め戻すまでの儀礼は、遺物の出土が見られなかったことから不明であるが、豊岡市田多地経塚では閉塞石前面に短刀を石材にはめ込むように立て、堅穴土坑内部にも鉄鏝や土師器小皿が出土していることから、何らかの儀礼作法が行われたことが知られる。

土坑を埋め戻した後、地表面に礎を積んで表象施設とする。残存していないが石塔あるいは木製塔婆を立てていたものであろう。集石直下の浅い土坑状の落ち込みは、埋め戻した土坑の土が締まって落ち込んだものであろうか。浅い土坑の段階で作法に則って儀礼を行ったかは不明である。

5. 浜坂と経塚

今回報告できた対田清水谷経塚SX501やSX901、タルガ山遺跡SX-1の他にも浜坂には横穴を有する堅穴土坑が見つかっている。

久斗川や久谷川の南岸では、対田清水谷経塚から久斗川を挟んだ西対面に存在する高末引谷古墳上で見つかった集石土坑と埋納土器や、浅谷下山古墳群北東の井ノ谷2・3号中世墓などが調査されている。

高末引谷古墳では細長い土坑の一端に石を組んで内部に越前焼の壺を納めたものが検出された。土坑の中心に石室を設けない状況は横穴を有する堅穴の流れをくんでいるものと思われ、中世墓の可能性とともに経塚の可能性が認められる。壺は13世紀後半から14世紀初頭にかけてのものと思われる。

井ノ谷古墳群中で確認された2・3号中世墓は横穴に石室状の石積み有しており、すでに指摘されているように(森内2011)、中世墓とするよりは経塚として造られたものであろう。

更に久斗川北岸の松村3号墳・4号墳上の経塚は、その経筒、鏡とともによく知られているが、松村3号墳上の経塚は、これまで堅穴系の経塚として扱われてきた。しかしながら経塚の状況図では集石下の北に偏った位置に石室が存在することが見て取れる。また、石室の平面図・立面図(浜坂町役場1967)の状態から、二重に閉塞する南開口の横口式石室の可能性が高いものと考えられる。石室の奥に経筒が立てられ、三方を鏡が囲んでおり、南側の閉塞部隅にも鏡がある。石室内の銅鏡の状態や石室の状態は対田清水谷経塚のそれと共通するものがある。堅穴土坑の状況は不明であるが、上部の集石の範囲にあったものであろう。この経塚からは高さ22.2cm、直径9.6cmの銅製の経筒と合計5面の銅鏡が出土している。松村3号墳上の経塚から出土した経筒から1100年代の第4四半期頃のものとしており(森内2011)、対田清水谷経塚よりは古い。松村4号墳上の経塚の状況は不明であるが、経筒や鉄刀が出土している。

松村3号墳上経塚は岸田川流域の横穴を有する経塚では古い時期に位置付けられよう。その構造は石室を5面から板石で囲み、二重の閉塞石で塞いでいる。対田清水谷経塚の13世紀中頃までは石室を設けているが横穴や奥壁が省略化されている。尾根の頂上から一旦下がった位置に立地するタルガ山遺跡SX-1や対田清水谷古墳群SX901は後出するものと思われ、SX901は14世紀まで下るものとされる朝来市向山7号墳上須恵器埋納遺構の構造と類似している。石室を有さず裸によって閉塞する構造は、省略化或いは退化とも捉えられ後出するものである。

このように岸田川水系久斗川流域には多くの経塚や横穴を有する堅穴のような経塚関連遺跡が見つかっている。また時期・構造・性格も不明だが、タルガ山遺跡の集石や小坂谷1号墳上の集石土坑なども見晴らしの良い場所の中世頃に営まれた可能性が高い。久谷・久斗川の流域では主な尾根数本ごとに経塚やそれに類した遺構が見つかっていることになる。この地域の経塚は一か所に集中して営まれている状態ではなく、展望の開けた各丘陵上に点々と営まれているのが一つの特徴である。

対田清水谷経塚の石室閉塞方向からこの経塚に向かえば、その方向は経塚の築かれた位置からの眺望が開ける方向であり、河口の海に抜ける方位でもある。それは西方浄土の方角でもあるが、河口東にそびえる山上の観音山相応峰寺の方向でもある。

観音山相応峰寺(大峰寺)は天平九(737)年行基による創建とされる天台宗寺院で、当初、九品山極楽寺と称した。斉衡三(856)年慈覚大師の法弟作善上人が再興し、清和天皇から円通殿相応峰寺の勅額を賜ったとされる。織豊時代の兵火により衰退するまで当地の一つの宗教的中心であり、平安時代から中世にかけて岸田川・久斗川流域のみならず沿海部に影響を与えていたものと思われる。天台浄土思想が経塚と密接

な関係が想定されること（三宅1967）から、同寺が経塚造営に大きく関わっていた可能性がある。

福井県敦賀市では深山寺経塚・大塚神社経塚・舞崎経塚や金ヶ崎経塚・谷口経塚などの12世紀前半から13世紀代の経塚が集中しており、これらは経塚群の西に存在する氣比大社・神宮寺に関連した聖地に営まれ、同社が経塚造営の担い手としたことが考えられている（敦賀市立博物館2012）。

この横穴を有する竪穴土坑の形態の経塚は、円山川流域よりは遅れて出現するが、久斗川流域でも松村3号墳上経塚がこの形態であれば、遅くとも12世紀第4四半期には営まれたようである。そして13世紀後半までは簡略化しながらも造営され続けていたらしい。そこには共通する担い手が存在したことは明らかである。

第11表 但馬の横穴を有する竪穴土坑

遺跡名	所在	遺構名	竪穴の大きさ	横穴のレベル	横穴開口方向	石室石室			石室構造	横穴内遺物			土坑内遺物					文 献		
						扉石	瓦片石	敷石		石	経筒	他	土器	土器・陶磁器	銭	鏡	銅器		他	
																				石室
村田清水谷古墳群	美方郡 新温泉町	経塚 SN501	大	低	E	○	○	○	×	大	○								本書	
		SN901	大	低	E		×	×	×	○	漆									
タルガ山遺跡	美方郡 新温泉町	経塚 SN-1	ワ	低	N	△	○	○	○	○									本書	
高末引谷古墳	美方郡 新温泉町	中世遺構	小	低	NE	×	△	△	×	大	緑青土								高松町 教育委員会 1983	
井ノ谷古墳群	美方郡 新温泉町	2号 中世墓	大	低	W	×	△	×	×	大	黒土器(瓦 瓦)								基本踏査編 1986	
		3号 中世墓	大	低	NE	×	△	△	×	大	黒土器(瓦 瓦)									
松村3号墳上経塚	美方郡 新温泉町	経塚	大	ワ	S	○	○	○	○	大	○								高松町資 料館1967	
田多地経塚群	豊岡市 田石町	経塚1	大	低	E	○	○	○	○	大	○								田石町 教育委員会 1985	
		経塚2	大	低	W	○	○	○	○	大	○									
		経塚3	大	平	W	○	○	○	○	大	○									
カヤガ谷中世墓	豊岡市 田石町	中世墓	小	低	S	○	×	×	×	×	漆	緑青土							兵庫県 教育委員会 2003	
香住門谷19号墳	豊岡市	経塚遺構	大	平	NE	○	○	○	○	大	○								豊岡市 教育委員会 2003	
宮ノ谷古墳群	朝来市 山本町	経塚	小	低	E	△	△	×	×	大	漆	土製陶器・ 瓦							兵庫県 教育委員会 2013	
一乗寺経塚	朝来市 新山山町	1号経塚	大	平	E	×	△	△	×	○		土製陶器・ 瓦							兵庫県 教育委員会 1999	
		2号経塚 1層	大	平	NE	○	×	△	○	○	○		土製陶器	銅製						

第3節 総括

本報告書では、タルガ山遺跡・対田清水谷古墳群・小坂谷古墳群・浅谷下山古墳群の4遺跡6地区の発掘調査を実施し、弥生時代後期後半から古墳時代後期までの墳墓29基と中世の経塚や集石土坑、縄文時代の土坑などを検出した報告を掲載した。

墳墓の調査の内、古墳の調査では木棺直葬墳主体部から内行花文鏡や鉄刀・鉄鏃・玉類が出土した小坂谷1号墳、木棺直葬の棺下から珠文鏡・刀子・玉類・堅櫛・土師器高坏が出土した浅谷下山7号墳が特筆される。また、対田清水谷古墳群の弥生墓では墓壇内や上面から出土する土器片、墓壇上で検出されたL字状石杵や標石など墓制の一端を特徴づける事例が検出された。

経塚や集石土坑の検出例が、タルガ山遺跡SX-1、対田清水谷経塚SX501やSX901、小坂谷1号墳墓壇上集石土坑などが検出され、時期や性格の不明なものも含めて経塚や関連遺構が久斗川流域に多く分布することがわかった。

但馬を東西に分けて考えたとき、当地域を中心とした岸田川流域と、現豊岡市を中心とした円山川流域では、円山川流域の多くの発掘調査によって積み上げられた数々の史料に比べると、岸田川流域は発掘調査件数も著しく少なかったことから埋蔵文化財の内容もあまり知られていなかったのが現実である。そうした中で今回の発掘調査とそれまでに知られていた事例を加味すると、墳墓群の集中度やその内容、中世の経塚関連遺構の集中度は円山川流域と比べても左程遜色があるようには思われない。

但馬全体を考える上でも、より西の因幡、伯耆、出雲など他地域との交流を考える上でも、これまでに欠落していたデータを少しでも付け加えることができたと思われる。

参考文献

第1章

- ・福本晴夫編1988『井ノ谷古墳群』浜坂町文化財調査報告書2 浜坂町教育委員会
- ・桐井理輝2015「但馬・高末引谷墳墓の報告」『ひょうご考古』第12号 兵庫考古研究会
- ・大江奈穂2015「新温泉町与三谷古墳出土直刀・須恵器」『ひょうご考古』第12号 兵庫考古研究会
- ・谷本 進1991「但馬における前半期古墳の諸様相について」『但馬考古学』第6集 但馬考古学研究会
- ・浜坂町教育委員会1983『高末引谷古墳概要報告書』
- ・兵庫県教育委員会2006『旭町白川橋遺跡』兵庫県文化財調査報告第289冊
- ・兵庫県教育委員会2013『兵庫県道跡地図』

第2章

- ・竹内太郎2013「浜坂道路の事業段階における一工夫」『平成25年度近畿地方整備局研究発表論文集』国土交通省近畿地方整備局

第4章

- ・久保智康1998「中世・近世の鏡」『日本の美術3』No.394 至文堂
- ・網 伸也1996「和鏡類型の復元的考察」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所
- ・田村清一郎1996「出土遺物」『見蔵岡遺跡』竹野町文化財調査報告書第11集 竹野町教育委員会
- ・潮崎 誠2001「経塚・古墓からみた手づね系土師器皿の出現様相」『北近畿の考古学』両丹考古学研究会・但馬考古学研究会
- ・森内秀道2011「兵庫県但馬地方を中心とした経塚の概観」『経塚考古学論考』岩田書院
- ・竹野町教育委員会1996『見蔵岡遺跡』竹野町文化財調査報告書第11集
- ・兵庫県教育委員会2010『延吉遺跡』兵庫県文化財調査報告第374冊

第5章

- ・榎本誠一2002『兵庫県の出土古鏡』学生社
- ・大江奈穂2015「新温泉町与三谷古墳出土直刀・須恵器」『ひょうご考古』第12号 兵庫考古研究会

第6章

- ・森下章司1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第6号 史学研究会
- ・榎本誠一2002『兵庫県の出土古鏡』学生社
- ・川村雪絵1999「古墳時代の堅輪」『国家形成の考古学』大阪大学考古学研究室 真福社
- ・雪野山古墳発掘調査団編1996『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会
- ・兵庫県教育委員会1995『東武東道遺跡』兵庫県文化財調査報告第150冊
- ・兵庫県教育委員会2010『史跡 茶すり山古墳』兵庫県文化財調査報告第383冊

第8章 第1節

- ・石井智大2003「北近畿の弥生墳墓における二種の土器出土状況とその意義」『香任門谷道跡群』豊岡市文化財報告書第34集 豊岡市教育委員会
- ・石井智大2009「弥生時代L字状石片の歴史的意義」『古代』122
- ・石井智大2010a「耕地谷古墳群における墓竈内破砕土器配置」『耕地谷古墳群・耕地谷城跡』兵庫県文化財調査報告第377冊 兵庫県教育委員会
- ・石井智大2010b「小羽山30号墓出土の片形石器に関する一考察—小羽山30号墓と山陰地方との墓制における関係の再検証—」『小羽山墳墓群の研究』福井市立郷土歴史博物館報告 福井市立郷土歴史博物館・小羽山墳墓群研究会
- ・池田征弘1998「遺物について」『埴坪遺跡』兵庫県文化財調査報告第336冊 兵庫県教育委員会
- ・池田俊一1994「島田黒谷田遺跡」『明子谷道跡・島田黒谷II遺跡・島田黒谷田遺跡・須ノ谷道跡』建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
- ・大谷晃二1994「千年比丘古墳群」『波佐』金城町教育委員会
- ・大谷晃二1995「弥生墳墓における主体部上の祭祀の一形態」『矢薙山弥生墳墓』矢薙山弥生墳墓発掘調査団
- ・勝部 昭1985「安養寺墳墓群」『荒島墳墓群』古代の出雲を考える4 出雲考古学研究会
- ・河合章行2009「弥生時代後期から古墳時代前期初頭の變について」『青谷上寺地遺跡10』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告27 鳥取県埋蔵文化財センター
- ・河野一隆1995「奈良墳墓群・奈良古墳群」『京都府道跡調査概報』第65冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- ・桐井理輝2015「但馬・高末引谷墳墓の報告」『ひょうご考古』第12号 兵庫考古研究会
- ・松松辰治2007「山陰地方における墳丘墓出土土器の検討」『四隅型出雲墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財センター

- ・高野陽子2006『北近畿における弥生時代後期から古墳時代前期の土器様式』『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター
- ・谷口恭子・前田 均(編)1993『岩吉遺跡Ⅲ』鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団
- ・谷口恭子2000『因幡における弥生時代後期から庄内式併行期の土器について』『庄内式土器研究』XXII 庄内式土器研究会
- ・中川 寧2006『山陰地域一出雲一』『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター
- ・中川 渉(編)1993『内場山城跡』兵庫県文化財調査報告第126冊 兵庫県教育委員会
- ・永見 英1981『長曾土壇墓群』安来市教育委員会
- ・北越顕秀・細田剛志2001『布志名大谷田遺跡』国土交通省松江国道工事事務所・鳥根県教育委員会
- ・沼 弘・橋本幹雄(編)1971『原田遺跡37号丘差掘調査報告』福井県教育委員会
- ・野島 永・野々口陽子1999・2000『近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)・(2)』『京都府埋蔵文化財情報』第74・76号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- ・濱田竜彦2009『山陰地方の弥生集落像』『縄文・弥生集落遺跡の集成的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第149集 国立歴史民俗博物館
- ・肥後弘幸1994『墓壇内破砕土器供献—北近畿弥生墳墓土器供献の一樣相—』『みずほ』12・13号 大和弥生会
- ・福島孝行2003『卑状墓の展開』『京都府埋蔵文化財論集』第6集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- ・福永伸哉2001『邪馬台国から大和政権へ』大阪大学新世紀セミナー 大阪大学出版会
- ・船井武彦・杉谷美恵子(他)1984『桂見墳墓群』鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団
- ・古川 登(編)2010『小羽山墳墓群の研究』福井市立郷土歴史博物館報告 福井市立郷土歴史博物館・小羽山墳墓群研究会
- ・本間元樹2005『弥生時代の墓標』『考古論集—川越哲志先生退官記念論文集—』川越哲志先生退官記念事業会
- ・増田信武・田中光浩・林 和廣1978『カジヤ遺跡発掘調査報告書』京都府峰山町教育委員会文化財調査報告第5集 峰山町教育委員会
- ・松井 潔1997『東の土器、南の土器』『古代吉備』第19集 古代吉備研究会
- ・松井敬代2004『出持遺跡』竹野町文化財調査報告書第16集 竹野町教育委員会
- ・幸田華代子・岡部裕俊(編)2002『三雲・井原遺跡Ⅱ』前原市文化財調査報告書第78集 前原市教育委員会
- ・森本倫弘(編)2014『青谷上寺地遺跡13』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告59 鳥取県埋蔵文化財センター
- ・渡辺貞幸1993『弥生墳墓における墓上の祭儀』『鳥根考古学雑誌』第10集 鳥根考古学会

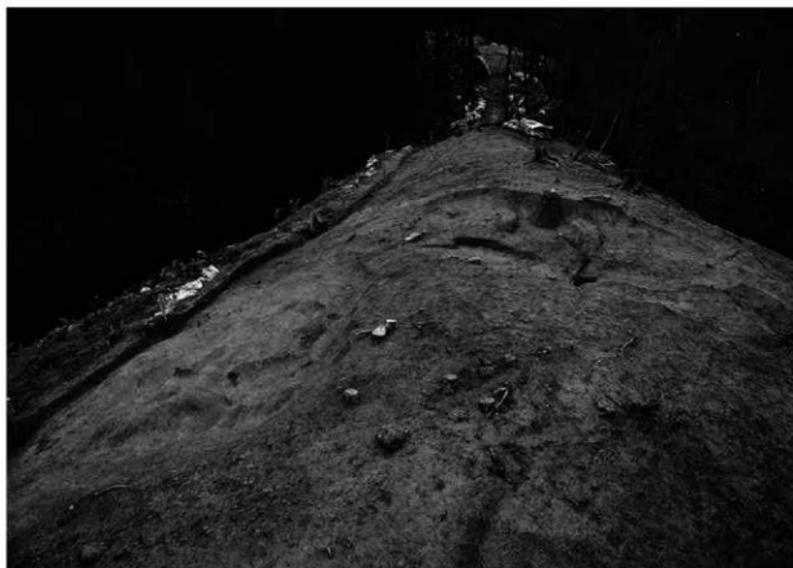
第8章 第2節

- ・三宅敏之1967『経塚』『日本の考古学Ⅷ』歴史時代下 河出書房新社
- ・森内秀造1992『経筒の形態からみた兵庫県の経塚』博物館普及資料第10集『兵庫の経塚』兵庫県立歴史博物館
- ・村木二郎1998『近畿の経塚』『史林』第81巻第2号 史学研究会
- ・井鍋誉之2011『教典理納の呪術的作法』『研究紀要1』静岡県埋蔵文化財センター
- ・久世康博1990『平安京の埋納遺構』『考古学論集』第3集 考古学を学ぶ会
- ・安藤信策2003『稲荷山経塚覚え書』京都府埋蔵文化財論集第6集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- ・村瀬勝樹1997『地鎮・鎮壇の考古学的研究』奈良大学大学院研究年報3号
- ・浜坂町役場1967『浜坂町史』
- ・福本晴夫編1988『井ノ谷古墳群』浜坂町文化財調査報告書2 浜坂町教育委員会
- ・浜坂町教育委員会1983『高末引谷古墳概要報告書』
- ・出石町教育委員会1985『田多地古墳群 田多地経塚群』出石町文化財調査報告書第2冊
- ・豊岡市教育委員会2003『香住門谷遺跡群』豊岡市文化財報告書第34集
- ・瀬戸内考古学研究所1988『播磨江ノ上経塚』
- ・教賀市立博物館2012『深山寺経塚とその周辺』『つるが文化財選集』
- ・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1992『高田山古墳群』京都府遺跡調査概報第49冊
- ・京都府教育委員会1992『豊谷遺跡埋蔵文化財発掘調査概報』
- ・大宮町教育委員会1998『左坂古墳群・磯坂経塚・磯坂城跡発掘調査概報』大宮町文化財調査報告書第12集
- ・兵庫県教育委員会1999『向山古墳群 市条寺古墳群 一乗寺経塚 矢別遺跡』兵庫県文化財調査報告第191冊
- ・兵庫県教育委員会2003『カヤ谷墳墓群・大谷墳墓群・坪井遺跡』兵庫県文化財調査報告第259冊
- ・兵庫県教育委員会2013『宮ノ谷古墳群Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第445冊

写 真 图 版



タルガ山遺跡遠景（北から）



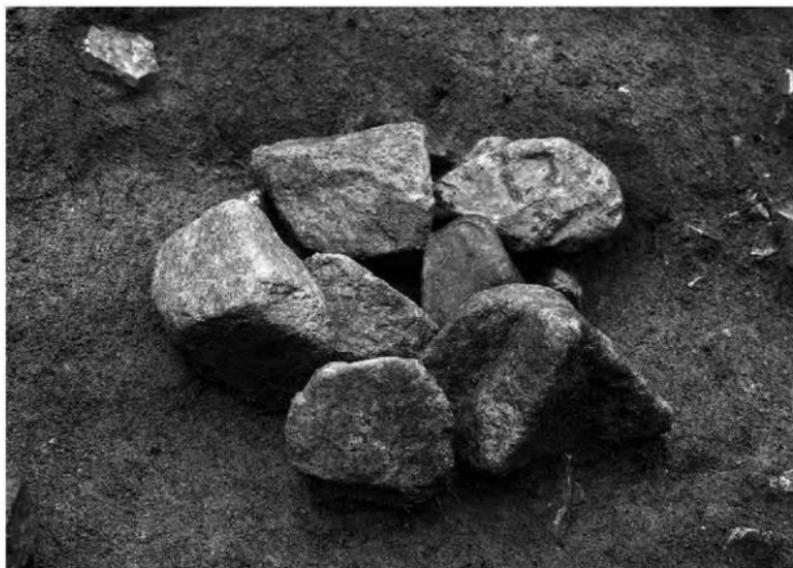
タルガ山遺跡 山頂西半部全景（東から）



タルガ山遺跡 山頂東半部全景（西から）



タルガ山遺跡 山頂北部の集石（北東から）



タルガ山遺跡 SX-1 石組上部 (北から)



タルガ山遺跡 SX-1 石組上部 (北東から)



タルガ山遺跡 SX-1石組 (北西から)



タルガ山遺跡 SX-1石組下部 (北東から)



タルガ山遺跡調査区全景（北西から）



調査前の山頂部（南西から）



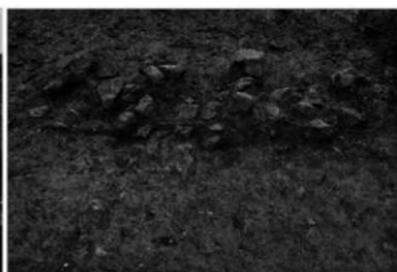
調査前の西側尾根部（北東から）



調査前の北尾根部（南東から）



山頂部掘削状況（南西から）



山頂北側集石断面（北東から）



尾根頂部落ち込み（南西から）



尾根頂部落ち込み（北から）



尾根頂部南東側の落ち込み（北から）



尾根頂部南東側落ち込み埋土土層断面（東から）



SX-1石組検出時の状況（北から）



SX-1石組上部（南東から）



SX-1石組詳細（南東から）



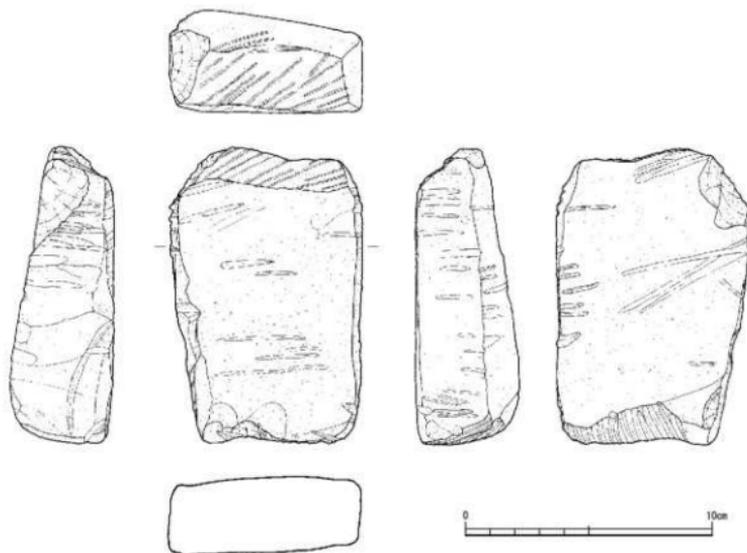
SX-1石組下部（北西から）



SX-1石組最下部（北西から）



SX-1精査状況（南東から）



タルガ山遺跡 出土砥石



対田清水谷古墳群遠景（北西から）



遺跡近景（北から）



1区全景（北西から）



2区全景（北西から）



調査区近景
(北西から)



1区近景
(北西から)



2区近景 (北西から)



2区近景 (西から)



調査区全景（北から）

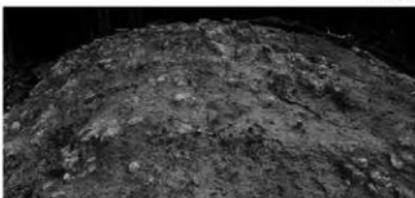


2区全景

1号墳



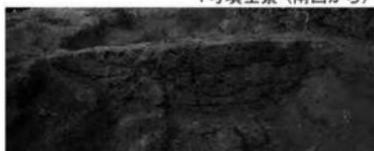
1号墳全景 (南西から)



全景 (北西から)



全景 (北西から)



主体部土層断面 (西から)



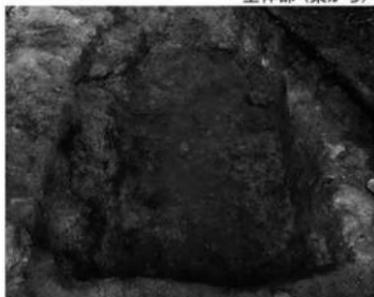
墳丘土層断面 (西から)



主体部 (東から)



主体部 (北から)



主体部掘り方 (西から)



主体部掘り方 (南から)

2・3号墳



2・3号墳
表土掘削状況（東から）



2・3号墳全景（東から）



2・3号墳墳丘（東から）

2号墳全景（東から）



主体部（南から）



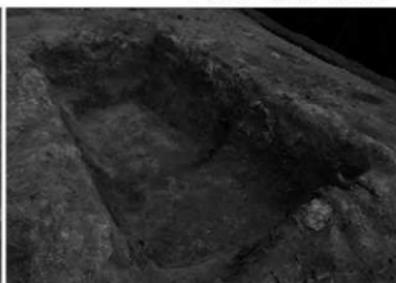
主体部土層断面（南東から）



主体部完掘状況（北から）



主体部完掘状況（西から）



主体部完掘状況（北西から）

3号墳



2・3号墳
(南西から)



3号墳全景
(西から)



区画溝 (南から)



区画溝土層断面 (北から)

第1主体部と標石
(南東から)



第1主体部と標石付近土層断面 (南から)



第1主体部標石 (東から)



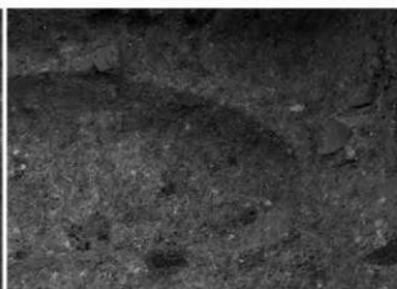
第1主体部舟底状木棺痕跡 (東から)



第1主体部舟底状木棺痕跡 (南から)



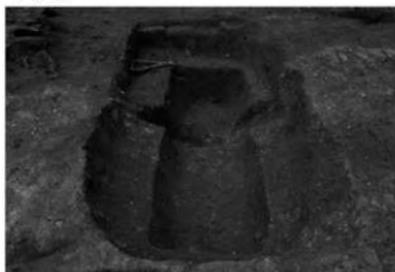
第1主体部墓境内土器出土状況 (西から)



第1主体部墓境内土器出土状況 (南から)

写真図版 17

3号墳



第2主体部（西から）



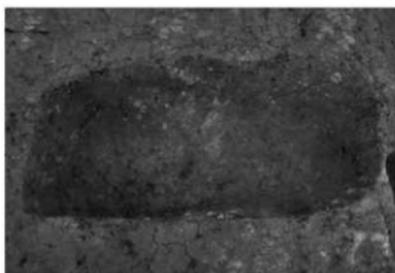
第2主体部土層断面（南東から）



第2主体部墓壙と土器出土状況（東から）



第2主体部墓壙と土器出土状況（南から）



第2主体部完掘状況（北から）



SK301土層断面と土器出土状況（東から）



第3主体部（西から）



第3主体部（北から）

4号墳全景（北東から）



土層断面（南東から）



須恵器露出状況（南から）



須恵器露出状況（南から）



須恵器出土状況（北東から）



須恵器出土状況（南から）

13号墳



13号墳全景（西から）



主体部（東から）



土層断面（北から）

第1主体部埋土の状況
(西から)



第1主体部完掘状況
(西から)



第2主体部 (北から)



12号墳



12号墳全景（西から）



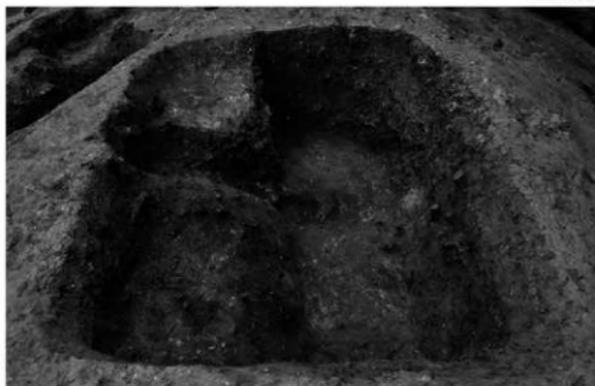
全景（東から）



5・12号墳間溝土層断面（北から）



5・12号墳間溝（北から）



第1主体部完掘状況
(西から)



第2主体部(東から)



第1主体部土層(東から)



第3主体部(南から)

5号墳



調査前の状況（西から）



5号墳墳丘全景（西から）



5号墳全景（西から）

第1・2・4主体部
(東から)



第2主体部土層断面
(南から)



第2主体部 (南から)



第2主体部完掘状況 (北から)

5号墳



第1主体部（東から）



第1主体部土器出土状況（西から）



第1主体部棺側出土土器（東から）



第1主体部から西を望む（東から）

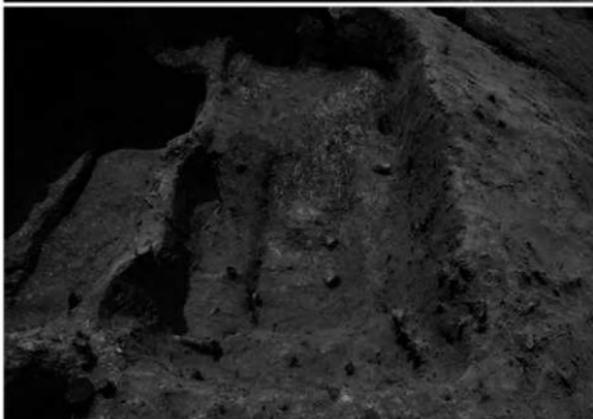


第1主体部完掘状況（北西から）

第4主体部棺痕跡検出
(東から)



第4主体部 (東から)



第4主体部完掘状況
(西から)



5号墳



第3主体部土層断面
(南東から)



第3主体部 (南東から)



第3主体部完掘状況
(南東から)

経塚 (SX501)



発見当初の経塚 (東から)



集石検出状況 (西から)



集石検出状況 (南から)



集石土坑の掘削 (北から)



経塚下層の状況 (南から)



小石室の検出 (西から)



小石室 (東から)



小石室 (南から)

経塚 (SX501)



小石室 (南東から)



小石室内部の状況
(西から)



小石室内遺物出土状況
(西から)

経塚 (SX501)



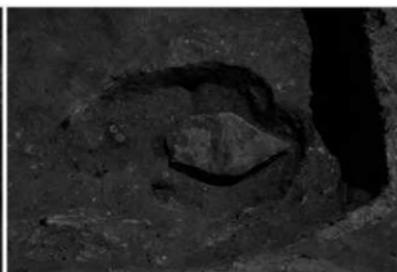
銅鏡出土状況 (西から)



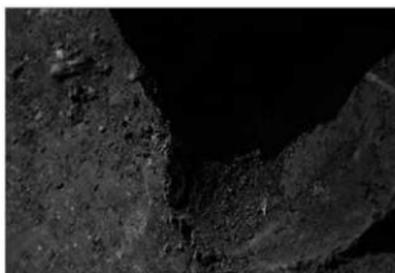
小石室内部 (北から)



閉塞石下出土銅鏡 (東から)



底石と掘り方 (北から)



閉塞石下出土銅鏡 (北から)



小石室 (南から)



銅鏡の取り上げ



小石室 (北から)

6号墳



6号墳全景（南西から）



6号墳全景（南東から）



平坦面及び
北側斜面土層断面
（西から）

6号墳



第1主体部 (南から)



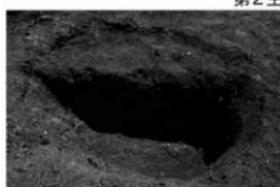
第1主体部 (南から)



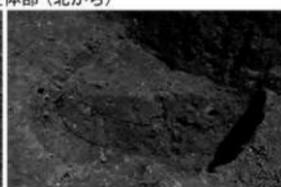
第2主体部 (北から)



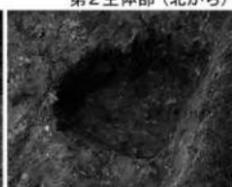
第2主体部 (北から)



SK601土層断面 (北西から)



SK602土層断面 (北西から)



SK602 (南西から)

7号墳



第1～3主体部 (南西から)



第1～4主体部 (南から)

7号墳



第1～4主体部検出状況
(南東から)



第1・2主体部検出状況
(東から)



第3・4主体部検出状況
(東から)



第3主体部検出状況
(南から)



第1主体部 (北西から)



第1主体部完掘状況 (南東から)



第1主体部土層断面 (南東から)



第2主体部 (西から)



第2主体部完掘状況 (西から)



第2主体部完掘状況 (南から)



第3主体部（西から）



第3主体部土層断面
（南西から）



第3主体部（南から）



第3主体部棺内土器出土状況（南から）



第3主体部墓室内土器
出土状況（西から）



第3主体部完掘状況（南から）



第3主体部棺内土器出土状況（北東から）



第3主体部棺内土器出土状況
（南から）



第4主体部（南から）



第4主体部土層断面（東から）



第4主体部完掘状況（南から）



第4主体部完掘状況（南西から）

8号墳



8号墳平坦面検出状況（南東から）



8～11号墳（南東から）

SK801（北西から）



主体部とSK801（南東から）



主体部土層断面（北西から）



主体部完掘状況（南東から）

9号墳全景（南東から）



主体部（南東から）



主体部検出状況
（北西から）



9号墳



実測状況（南西から）



主体部とSX901検出状況（南東から）



主体部L字状石柵（S3）出土土層（北東から）



主体部土層断面（南西から）



L字状石柵（S3）出土状況（北東から）



主体部土層断面（南西から）



主体部完掘状況（北西から）



SX901検出状況（北から）

10号墳全景 (南西から)



10号墳全景 (南東から)



第1主体部 (南東から)



写真図版 41

10号墳



10号墳平坦面検出状況（南東から）



第1主体部土層断面（北東から）



第1主体部完掘状況（北東から）



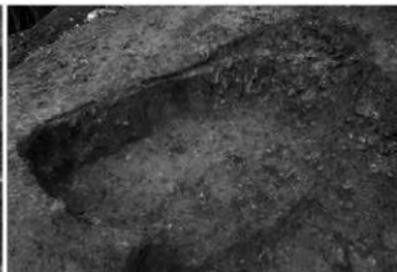
第2主体部（南西から）



第2主体部（北西から）



第2主体部土層断面（南西から）



第2主体部完掘状況（西から）

11号墳



11号墳全景（西から）



主体部（北西から）



主体部（南東から）



主体部（北から）



主体部とSK1101（南東から）



主体部とSK1101完掘状況（南東から）

14号墳



14号墳全景（北東から）



全景（北西から）



7号墳から見た14号墳（北東から）



全景（南東から）



主体部完掘状況
(拡張後北東から)



木棺と土器出土状況
(南西から)



平坦部周溝 (北西から)



棺側出土土器片 (南東から)



墳丘下層のSK1401
(北から)



墳丘下層のSK1401
(西から)



SK1401内石皿・磨石
出土状況(北から)

15号墳全景（北東から）



全景（北から）



主体部木棺（南から）





主体部土層断面
(北から)



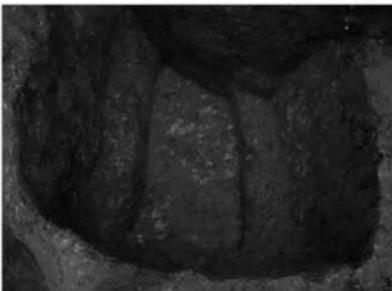
主体部と墳丘土層断面
(北西から)



墳丘上の土器と標石
(北から)



14号墳調査状況（北から）



14号墳主体部（北東から）



14号墳上の黒色土の堆積（南から）



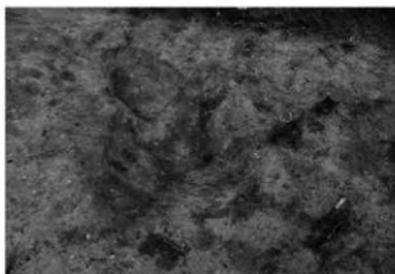
14号墳の調査（北東から）



15号墳上の黒色土（北から）



15号墳上の土器出土状況



15号墳上の黒色土除去後の状況（北から）



15号墳主体部土層断面の実測



2号墳出土遺物

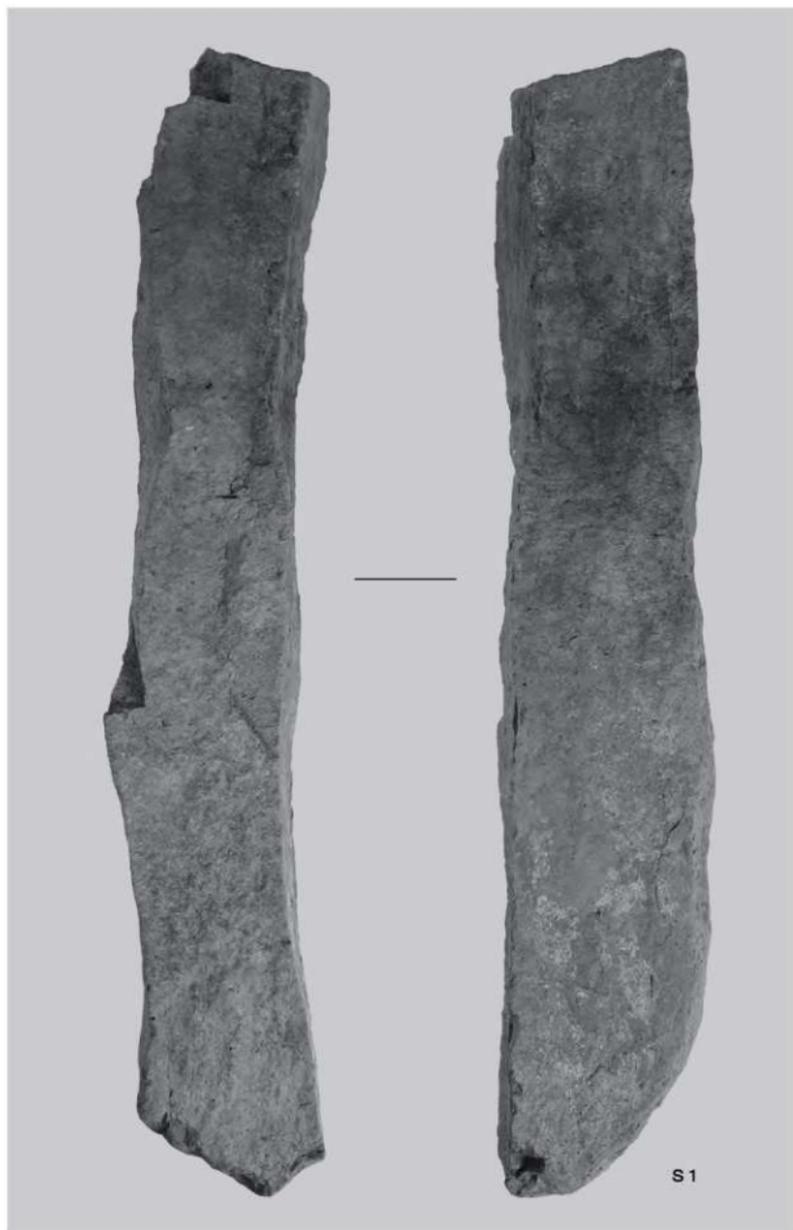


3号墳出土遺物

※ () 付番号の遺物は実測図なし 写真のみ掲載



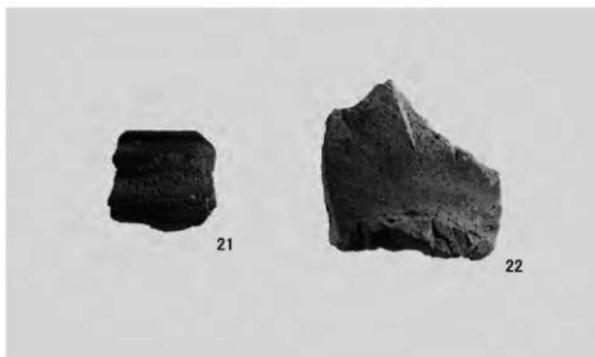
3号墳出土遺物



3号墳出土標石



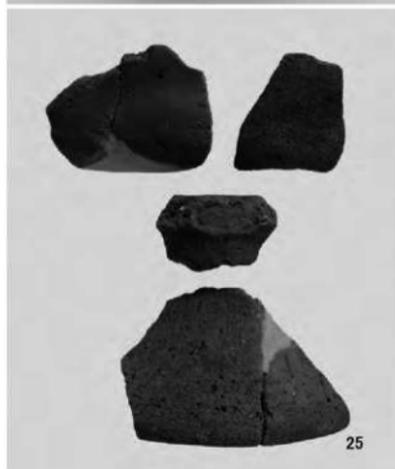
4号墳出土遺物



12号墳出土遺物



23



25

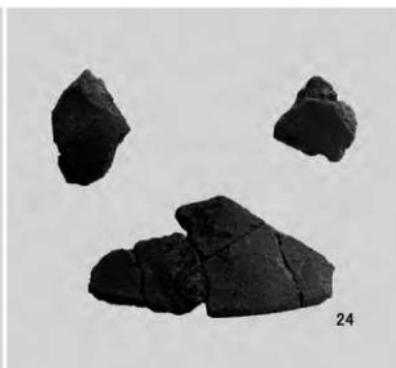


27

(28)

(29)

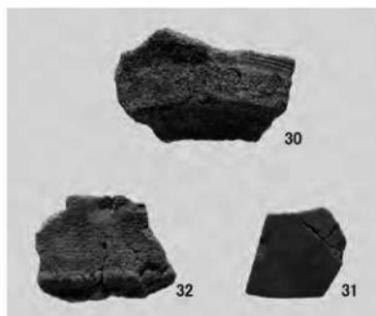
5号墳出土遺物



24



26

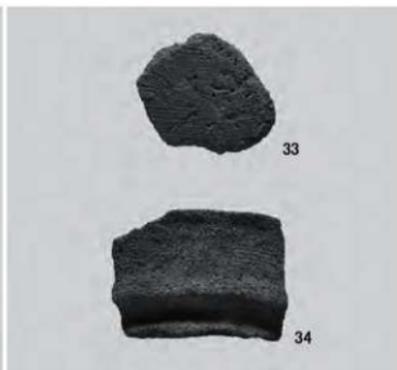


30

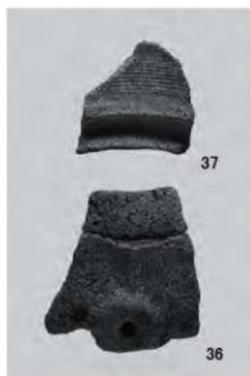
32

31

6号墳出土遺物



7号墳出土遺物



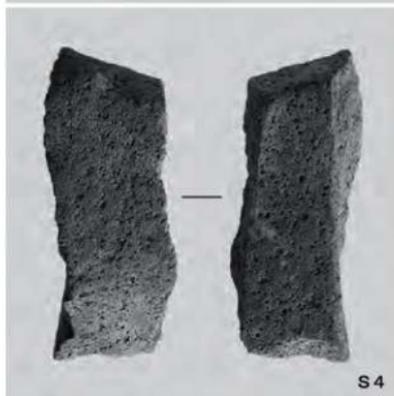
8号墳出土遺物



9号墳出土遺物



9号墳出土遺物



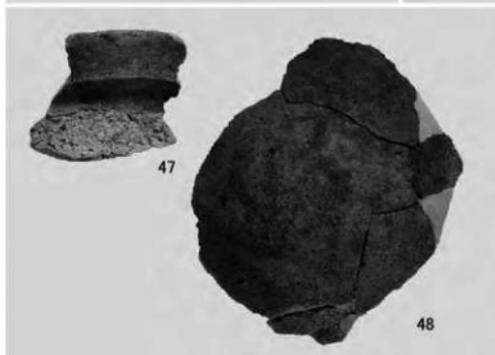
10号墳出土遺物



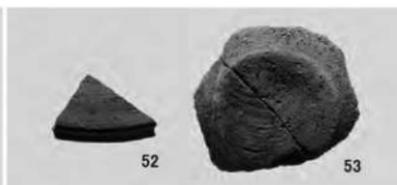
11号墳出土遺物



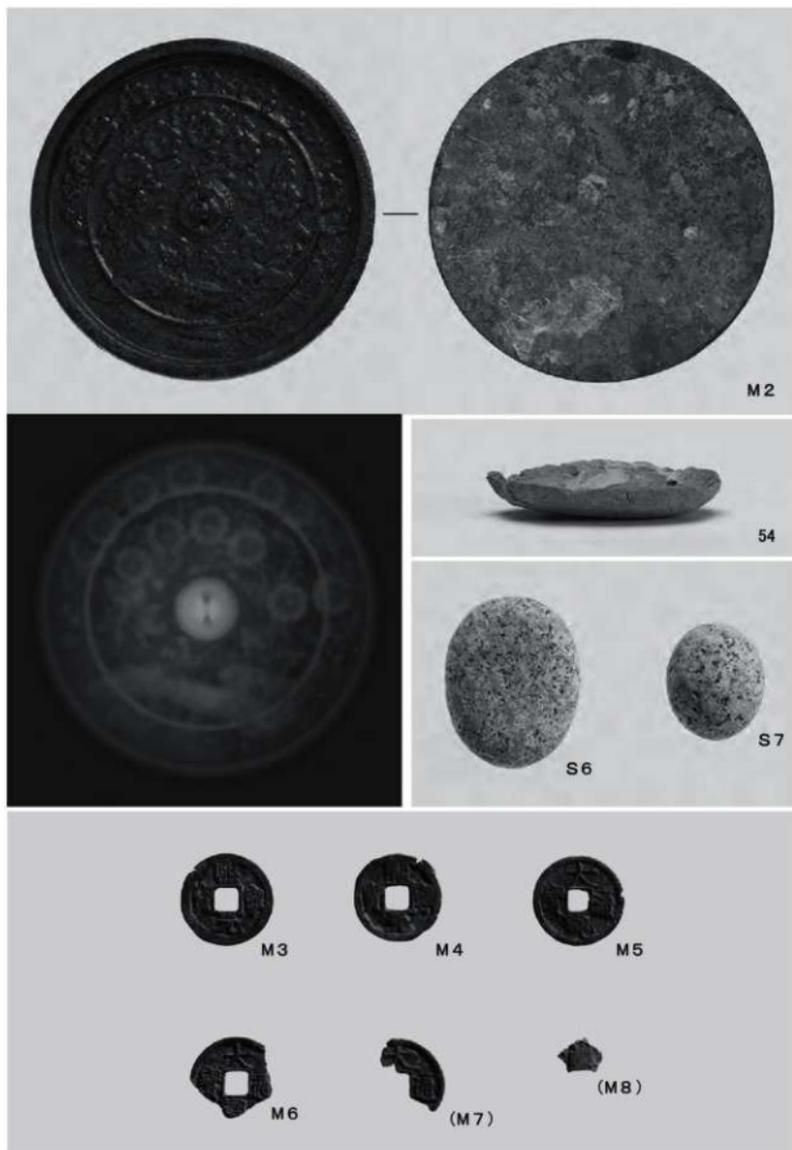
15号墳出土遺物



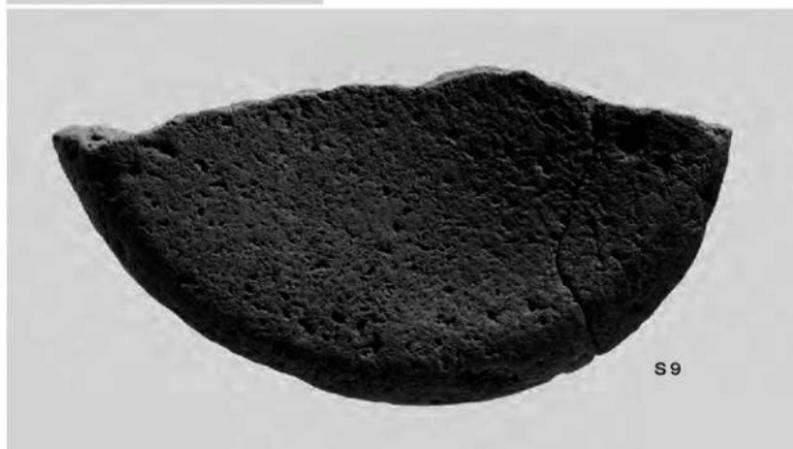
15号墳出土遺物



その他出土遺物



経塚 (SX501) 出土遺物



対田清水谷古墳群



小坂谷古墳群遠景（西から）



遠景（北から）



調査前近景（北から）



調査区全景（北から）



調査区全景（北から）



調査区全景（北東から）



調査区全景（真上から）

1号墳



1号墳 (南東から)



1号墳 (南東から)

1号墳



1号墳全景（北西から）



主体部集石・須恵器
出土状況（北西から）



主体部鉄器・鏡
出土状況（北西から）

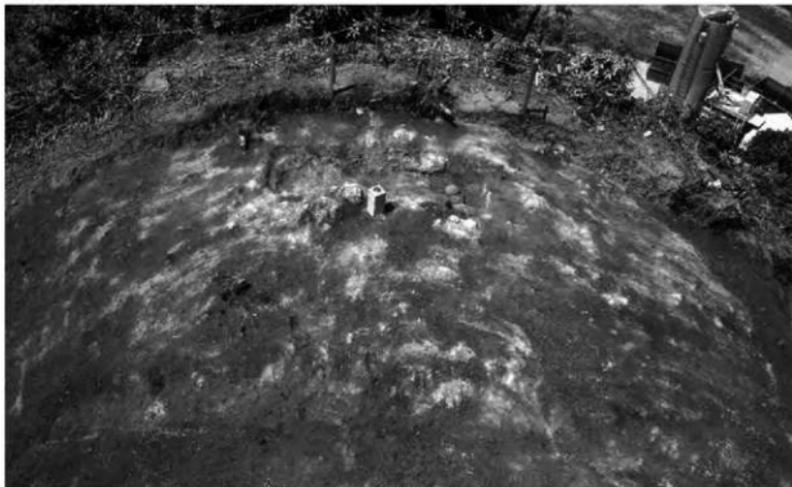


主体部鉄器・鏡出土状況（南西から）



主体部鉄器・鏡出土状況（北西から）

2号墳



2号墳全景（東から）



主体部（東から）



土器枕（東から）

3号墳全景 (南西から)



主体部土器枕 (北東から)



主体部土器枕 (東から)

3号墳



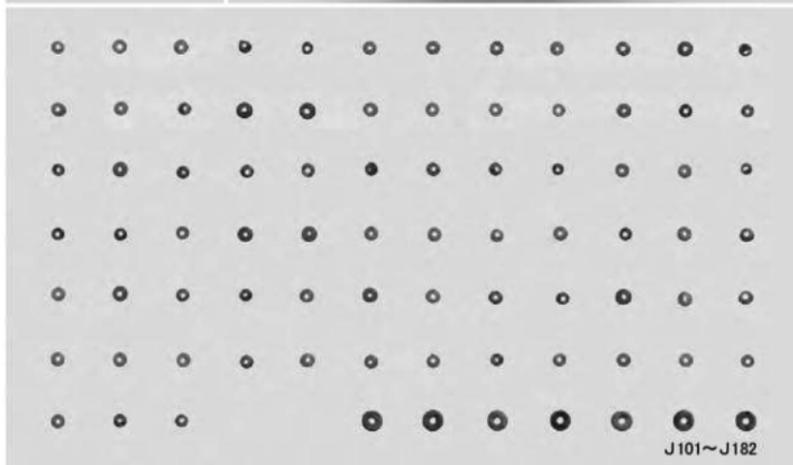
主体部土器枕（北西から）



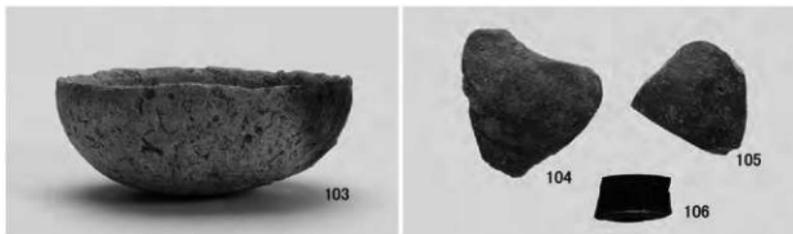
区画溝土層（北西から）



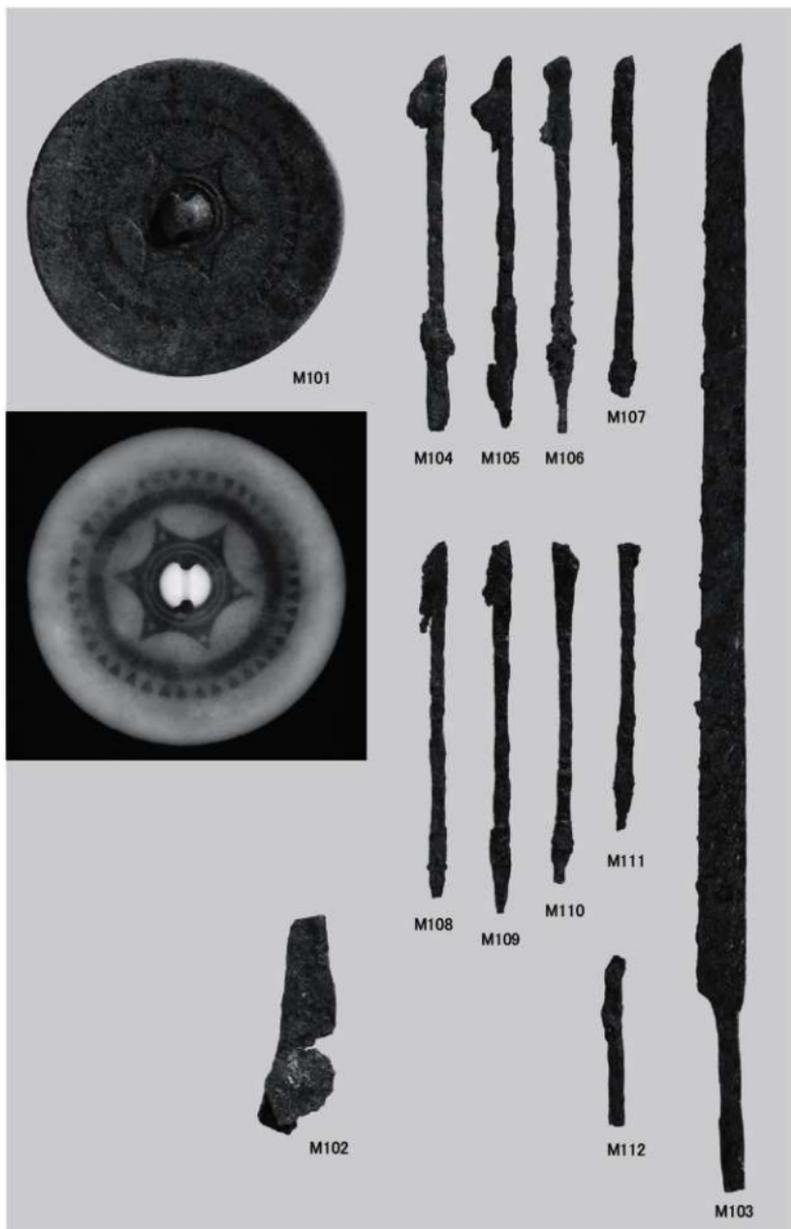
区画溝（南東から）



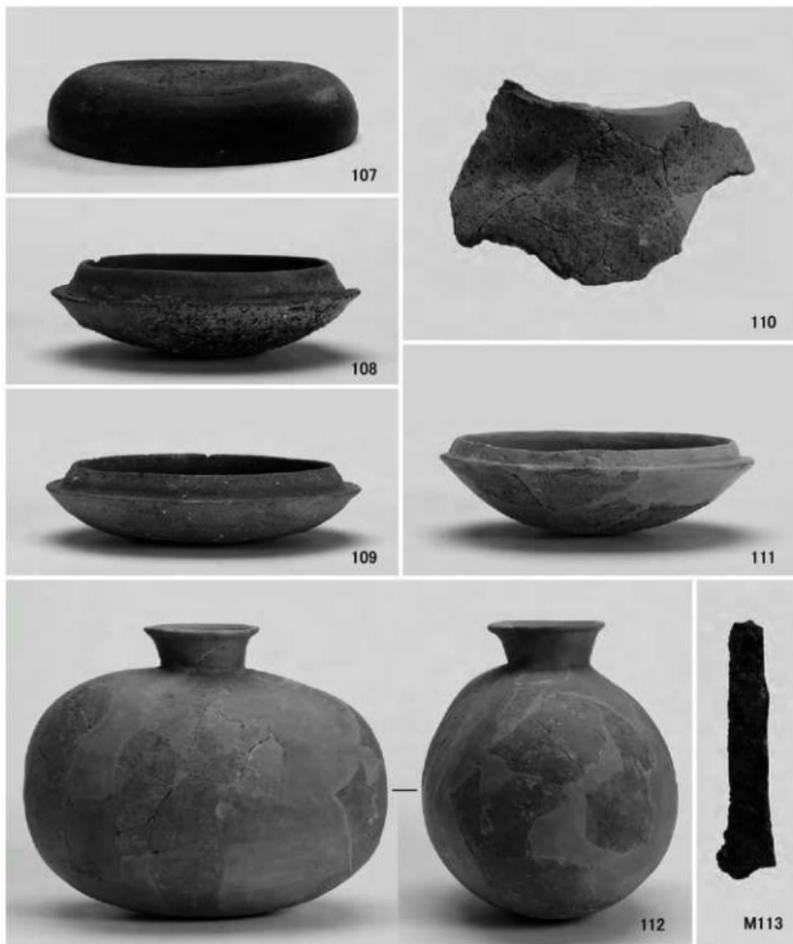
1号墳出土遺物



2号墳出土遺物

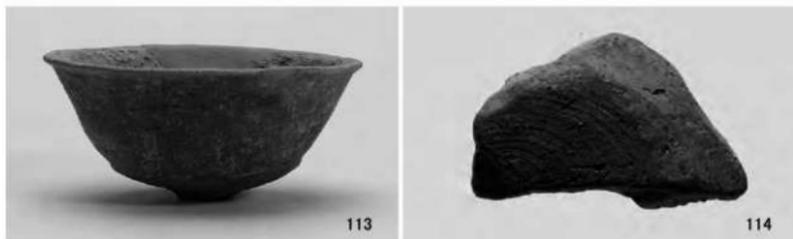


1号墳出土遺物



小坂谷古墳群

3号墳出土遺物



4号墳出土遺物

確認トレンチ出土遺物



遺跡の立地（南東から）



遺跡遠景（北西から）



遺跡全景（北から）



遺跡遠景（南西から）

調査地遠景 (南西から)



1区からの眺望 (南東から)



1区全景 (北西から)



7号墳



1区全景 (南東から)



7号墳全景 (北西から)



7号墳墳丘 (北から)

6・7号墳間溝（東から）



7号墳全景（南東から）

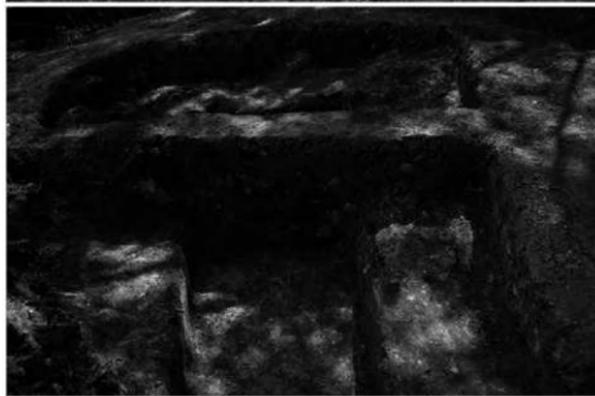


7号墳主体部（南から）





第1主体部（西から）



第1主体部埋土の状況
（西から）



第1主体部掘り方の状況
（西から）

第1主体部底土坑の土層
(南西から)



第1主体部底土坑
(南東から)



土坑内遺物出土状態
(北東から)



7号墳



土坑内銅鏡出土状態
(北東から)



墓壙と土坑 (北東から)



第1主体部墓壙
(南東から)

第2主体部土層
(南から)



第2主体部掘り方の状況
(南から)



第1・2主体部完掘状況
(北東から)



6号墳



6号墳全景（南東から）



全景（北西から）



墳頂部（南東から）



第1主体部全景 (南西から)



第1主体部遺物出土状態 (南東から)



第1主体部掘り方埋土の状況 (南西から)



第1主体部上層出土土器 (東から)

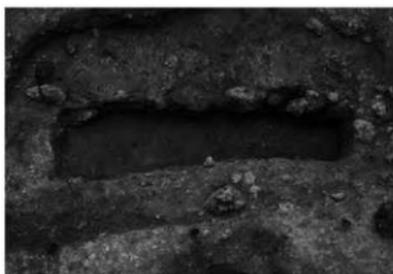


第1主体部上層出土土器 (北東から)

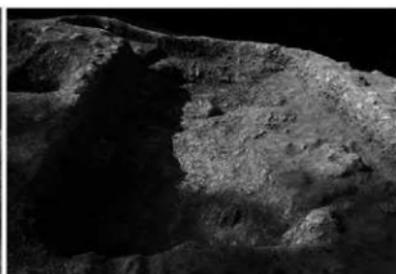
6号墳



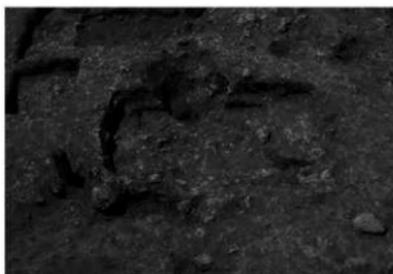
6号墳主体部（南西から）



第1主体部棺側の状況（南東から）



第1主体部完掘状況（北東から）



第2主体部（南東から）

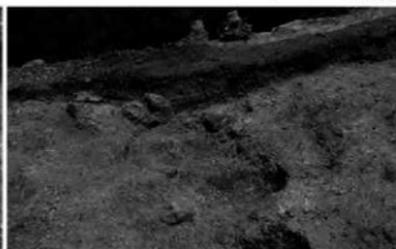


SK01（南東から）

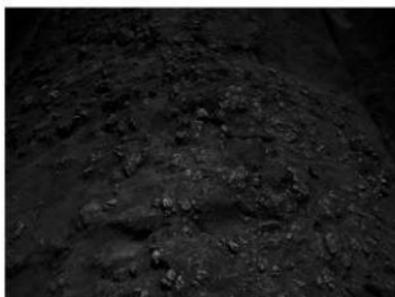
3・4・5号墳



5・6号墳間の溝 (南西から)



4・5号墳間の溝 (南西から)



5号墳 (北西から)



4・5号墳 (南東から)



2・3号墳 (南東から)



3号墳 (北西から)

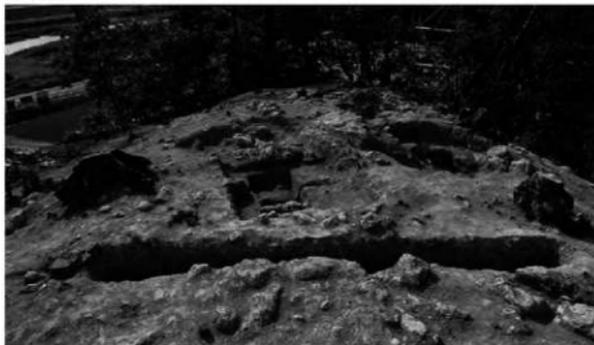


3号墳第1主体部 (南西から)



3号墳第2主体部 (北東から)

2号墳



2号墳全景（南東から）



全景（北西から）



墳頂部（東から）

1・2号墳



2号墳第1主体部（西から）



2号墳第2主体部（東から）



2・3号墳間溝（北東から）



1号墳主体部（南東から）



1・2号墳全景（北西から）



調査前の2区（西から）



1区から見た2区



2区全景（南西から）



2区全景（北西から）

2-1・3・4号墳

2-1・3・4号墳遠景
(北東から)



2-1・3・4号墳
(東から)



2-1・3・4号墳
(北西から)



2-1号墳



確認調査時検出の塊石群



2-1号墳全景
(北西から)



落ち込み埋土
(北西から)

2-3・4号墳全景
(南東から)



2-3号墳 (西から)



2-3号墳 (北西から)



2-3号墳



2-3号墳全景（東から）



羨道部（東から）



墳丘（北から）

2-4号墳全景
(北西から)



全景 (東から)



石材抜き取り痕 (南から)



2-4号墳



羨道部（南東から）



墳丘（北東から）



墳丘（北東から）

SD01



SD01全景 (南東から)



土層断面BB' (北西から)



土層断面CC' (北西から)

作業風景



調査前の1区1・2号墳付近（東から）



1区作業風景（2号墳）



1区作業風景



1区作業風景（7号墳）



1区作業風景（7号墳）



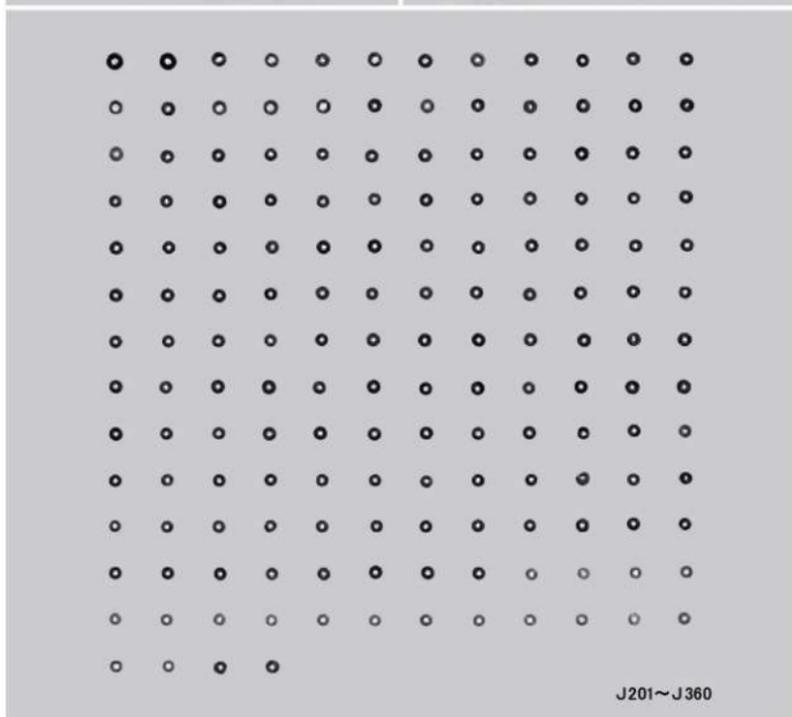
2区調査風景



2区作業風景

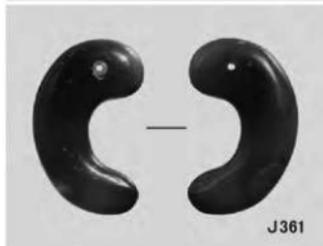
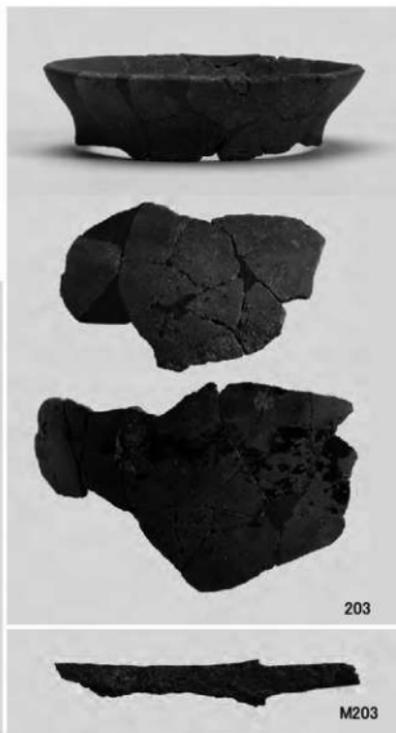


2区作業風景





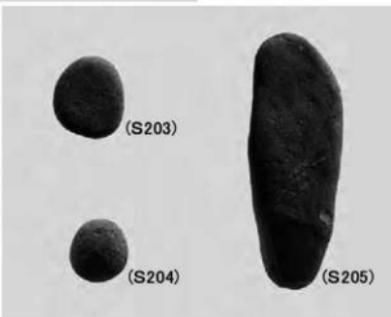
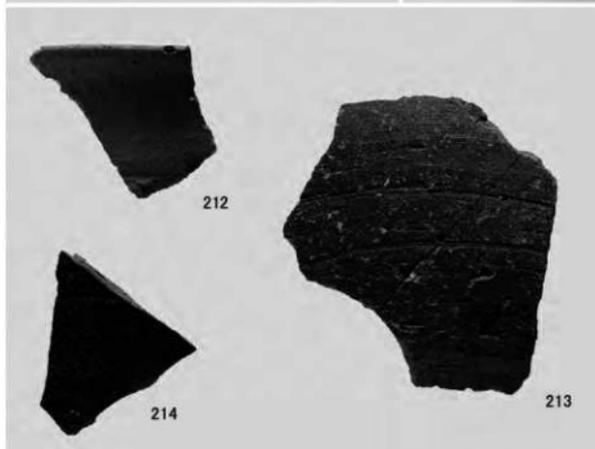
6・7号墳間溝出土遺物



6号墳出土遺物



4号墳出土遺物



浅谷下山古墳群

報告書抄録

ふりがな	たるがやまいせき・たいたしみずたにこふんぐん・おきかだにこふんぐん・あきたにしもやまこふんぐん
書名	タルガ山遺跡・対田清水谷古墳群・小坂谷古墳群・浅谷下山古墳群
副書名	(国) 178号浜坂道路地域連携推進(道路改築)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第490冊
編著者名	別府洋二 山上雅弘 上田健太郎 岸本一宏 志賀智史 バリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大甲1丁目1番1号(兵庫県立考古博物館内) ℡ 079-437-5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 ℡ 078-362-3784
発行年月日	平成29(2017)年3月24日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大甲1丁目1番1号 ℡ 079-437-5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
タルガ山遺跡	美方郡新温泉町久谷	28586	660416 ～ 660420	35° 37' 22"	134° 30' 36"	平成24年10月9日～12月2日 (2012092)	895	記録保存 調査
対田清水谷古墳群	美方郡新温泉町対田	28586	660425 ～ 660438	35° 37' 17"	134° 30' 8"	平成25年5月16日～9月30日 (2013013) 平成26年5月 15日～9月30日(2014006)	1503 220	記録保存 調査
小坂谷古墳群	美方郡新温泉町二田市	28586	660218 ～ 660220	35° 37' 12"	134° 29' 34"	平成25年5月16日～9月30日 (2013014)	614	記録保存 調査
浅谷下山古墳群	美方郡新温泉町二田市	28586	660136 ～ 660156	35° 36' 50"	134° 28' 33"	平成26年5月3日～9月30日 (2014005)	801	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
タルガ山遺跡	経塚	中世か	石組土坑	砥石		丘陵上の経塚か		
対田清水谷古墳群	墳墓 古墳	弥生時代後期	墳墓(木棺直葬)	弥生土器・標石・L字状石杵		墓壇内・墓壇上破砕土器		
	経塚	古墳時代	墳墓(木棺直葬)	土師器・須恵器		丘陵の木棺直葬墳		
		中世	経塚	和鏡・銅鏡・土師器小皿・円鏡		横口式石室をもつ経塚		
小坂谷古墳群	古墳	古墳時代後期(1号墳)	墳墓(木棺直葬)	内行花文鏡・鉄刀・鉄鏃・鉄鋸鋸先・ガラス小玉・滑石製白玉・須恵器甕		丘陵頂部の木棺直葬墳		
浅谷下山古墳群	古墳	古墳時代後期	墳墓(木棺直葬)	須恵器坏		須恵器杖		
		古墳時代前期(1区)	墳墓(木棺直葬)	珠文鏡・堅輪・小玉・勾玉・鉄鏃・刀子・土師器		木棺直葬葬底の土坑		
		古墳時代後期(2区)	墳墓	須恵器		破壊された横口式石室か		
要約	日本海に注ぐ岸田川水系久斗川南縁の丘陵上の遺跡群。弥生時代後期から古墳時代後期までの墳墓や中世に属すると思われる経塚などが検出された。タルガ山遺跡からは石材を組んで作られた経塚を検出した。対田清水谷古墳群では弥生時代後期から古墳時代後期の墳墓15基を調査。木棺直葬の墓壇内や墓壇上から破砕土器やL字状石杵、標石を検出した。小坂谷古墳群1号墳では木棺直葬墳から内行花文鏡や鉄製品・玉類などが出土した。浅谷下山古墳群では7号墳の木棺直葬の棺下土坑から珠文鏡・玉類・堅輪などが出土した。							

兵庫県文化財調査報告 第490冊

美方郡新温泉町

**タルガ山遺跡・対田清水谷古墳群
小坂谷古墳群・浅谷下山古墳群**

— (国) 178号浜坂道路地域連携推進(道路改築)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成29(2017)年3月24日発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：㈱ メディックス
〒676-0805 兵庫県高砂市米田町米田410-1
